



Informatica®
10.0

リリースガイド

本ソフトウェアおよびマニュアルには、Informatica LLC の所有権下にある情報が収められています。これらは使用および開示の制限等を定めた使用許諾契約のもとに提供され、著作権法により保護されています。本ソフトウェアのリバースエンジニアリングは禁じられています。本マニュアルのいかなる部分も、いかなる手段（電子的複製、写真複製、録音など）によっても、Informatica LLC の事前の承諾なしに複製または転載することは禁じられています。このソフトウェアは、米国および/または国際的な特許、およびその他の出願中の特許によって保護されています。

合衆国政府によるソフトウェアの使用、複製または開示は、DFARS 227.7202-1 (a) および 227.7702-3 (a) (1995 年)、DFARS 252.227-7013(C) (1) (ii) (1988 年 10 月)、FAR 12.212 (a) (1995 年)、FAR 52.227-19、または FAR 52.227-14 (ALT III) に記載されているとおり、当該ソフトウェア使用許諾契約に定められた制限によって規制されます。

本製品または本書の情報は、予告なしに変更されることがあります。お客様が本製品または本書内に問題を発見された場合は、書面に当社までお知らせください。

Informatica、Informatica Platform、Informatica Data Services、PowerCenter、PowerCenterRT、PowerCenter Connect、PowerCenter Data Analyzer、PowerExchange、PowerMart、Metadata Manager、Informatica Data Quality、Informatica Data Explorer、Informatica B2B Data Transformation、Informatica B2B Data Exchange、Informatica On Demand、Informatica Identity Resolution、Informatica Application Information Lifecycle Management、Informatica Complex Event Processing、Ultra Messaging、および Informatica Master Data Management は、Informatica LLC の米国および世界中の管轄地での商標または登録商標です。その他のすべての企業名および製品名は、それぞれの企業の商標または登録商標です。

本ソフトウェアまたはドキュメントの一部は、次のサードパーティが有する著作権に従います（ただし、これらに限定されません）。Copyright DataDirect Technologies.コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Sun Microsystems.コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) RSA Security Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Ordinal Technology Corp. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Aandacht c.v. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright Genivia, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright Isomorphic Software. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Meta Integration Technology, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Intalio. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Oracle. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Adobe Systems Incorporated. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) DataArt, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) ComponentSource. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Microsoft Corporation. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Rogue Wave Software, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Teradata Corporation. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Yahoo! Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Glyph & Cog, LLC. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Thinkmap, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Clearpace Software Limited. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Information Builders, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) OSS Nokalva, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright Edifecs, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright Cleo Communications, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) International Organization for Standardization 1986. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) ej-technologies GmbH. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Jaspersoft Corporation. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) International Business Machines Corporation. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) yWorks GmbH. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Lucent Technologies. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) University of Toronto. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Daniel Veillard. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Unicode, Inc. Copyright IBM Corp. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) MicroQuill Software Publishing, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) PassMark Software Pty Ltd. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) LogiXML, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) 2003-2010 Lorenzi Davide, コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Red Hat, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) The Board of Trustees of the Leland Stanford Junior University. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) EMC Corporation. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Flexera Software. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Jinfonet Software. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Apple Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Telerik Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) BEA Systems. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) PDFlib GmbH. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Orientation in Objects GmbH. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Tanuki Software, Ltd. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Ricebridge. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Sencha, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Scalable Systems, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) jQWidgets. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Tableau Software, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) MaxMind, Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) TMate Software s.r.o. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) MapR Technologies Inc. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Amazon Corporate LLC. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Highsoft. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) Python Software Foundation. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) BeOpen.com. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。Copyright (C) CNRI. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。

本製品には、Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>) によって開発されたソフトウェア、およびさまざまなバージョンの Apache License（まとめて「License」と呼んでいます）の下に許諾された他のソフトウェアが含まれます。これらのライセンスのコピーは、<http://www.apache.org/licenses/>で入手できます。適用法にて要求されないが書面に合意されない限り、ライセンスの下に配布されるソフトウェアは「現状のまま」で配布され、明示的あるいは黙示的かを問わず、いかなる種類の保証や条件も付帯することはありません。ライセンス下での許諾および制限を定める具体的文言については、ライセンスを参照してください。

本製品には、Mozilla (<http://www.mozilla.org/>) によって開発されたソフトウェア、ソフトウェア copyright The JBoss Group, LLC, コンテンツの無断複製・転載を禁じます、ソフトウェア copyright, Red Hat Middleware, LLC, コンテンツの無断複製・転載を禁じます、Copyright (C) 1999-2006 by Bruno Lowagie and Paulo Soares および GNU Lesser General Public License Agreement (<http://www.gnu.org/licenses/lgpl.html> を参照) に基づいて許諾されたその他のソフトウェアが含まれています。資料は、Informatica が無料で提供しており、一切の保証を伴わない「現状渡し」で提供されるものとし、Informatica Corporation は市場性および特定の目的の適合性の黙示の保証などを含めて、一切の明示的及び黙示的保証の責任を負いません。

製品には、ワシントン大学、カリフォルニア大学アーバイン校、およびバンダービルト大学の Douglas C.Schmidt および同氏のリサーチグループが著作権を持つ ACE (TM) および TAO (TM) ソフトウェアが含まれています。Copyright (C) 1993-2006, コンテンツの無断複製・転載を禁じます。

本製品には、OpenSSL Toolkit を使用するために OpenSSL Project が開発したソフトウェア（copyright The OpenSSL Project.コンテンツの無断複製・転載を禁じます）が含まれています。また、このソフトウェアの再配布は、<http://www.openssl.org> および <http://www.openssl.org/source/license.html> にある使用条件に従います。

本製品には、Curl ソフトウェア Copyright 1996-2013, Daniel Stenberg, <daniel@haxx.se>が含まれます。コンテンツの無断複製・転載を禁じます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://curl.haxx.se/docs/copyright.html> にある使用条件に従います。すべてのコピーに上記の著作権情報とこの許諾情報が記載されている場合、目的に応じて、本ソフトウェアの使用、コピー、変更、ならびに配布が有償または無償で許可されます。

本製品には、ソフトウェア copyright 2001-2005 (C) MetaStuff, Ltd. コンテンツの無断複製・転載を禁じます。が含まれます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://www.dom4j.org/license.html> にある使用条件に従います。

製品には、ソフトウェア copyright (C) 2004-2007, The Dojo Foundation が含まれます。コンテンツの無断複製・転載を禁じます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://dojotoolkit.org/license> にある使用条件に従います。

本製品には、ICU ソフトウェア copyright International Business Machines Corporation および他のソフトウェアが含まれます。コンテンツの無断複製・転載を禁じます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://source.icu-project.org/repos/icu/icu/trunk/license.html> にある使用条件に従います。

本製品には、ソフトウェア copyright (C) 1996-2006 Per Bothner が含まれます。コンテンツの無断複製・転載を禁じます。お客様がこのようなソフトウェアを使用するための権利は、ライセンスで規定されています。<http://www.gnu.org/software/kawa/Software-License.html> を参照してください。

本製品には、OSSP UUID ソフトウェア Copyright (C) 2002 Ralf S. Engelschall, Copyright (C) 2002 The OSSP Project Copyright (C) 2002 Cable & Wireless Deutschland が含まれます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://www.opensource.org/licenses/mit-license.php> にある使用条件に従います。

本製品には、Boost (<http://www.boost.org/>) によって開発されたソフトウェア、または Boost ソフトウェアライセンスの下で開発されたソフトウェアが含まれます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、http://www.boost.org/LICENSE_1_0.txt にある使用条件に従います。

本製品には、ソフトウェア copyright (C) 1997-2007 University of Cambridge が含まれます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://www.pcre.org/license.txt> にある使用条件に従います。

本製品には、ソフトウェア copyright (C) 2007 The Eclipse Foundation が含まれます。コンテンツの無断複写・転載を禁じます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://www.eclipse.org/org/documents/epl-v10.php> および <http://www.eclipse.org/org/documents/edl-v10.php> にある使用条件に従います。

本製品には、<http://www.tcl.tk/software/tcltk/license.html>、<http://www.bosrup.com/web/overlib/?License>、<http://www.stlport.org/doc/license.html>、<http://www.asm.ow2.org/license.html>、<http://www.cryptix.org/LICENSE.TXT>、<http://hsqldb.org/web/hsqldbLicense.html>、<http://httpunit.sourceforge.net/doc/license.html>、<http://jung.sourceforge.net/license.txt>、http://www.zip.org/zlib/zlib_license.html、<http://www.openldap.org/software/release/license.html>、<http://www.libssh2.org>、<http://slf4j.org/license.html>、<http://www.sente.ch/software/OpenSourceLicense.html>、<http://fusesource.com/downloads/license-agreements/fuse-message-broker-v-5-3-license-agreement>、<http://antlr.org/license.html>、<http://aopalliance.sourceforge.net/>、<http://www.bouncycastle.org/license.html>、<http://www.jgraph.com/jgraphdownload.html>、<http://www.jcraft.com/jsch/LICENSE.txt>、http://jotm.objectweb.org/bsd_license.html に基づいて許諾されたソフトウェアが含まれています。<http://www.w3.org/Consortium/Legal/2002/copyright-software-20021231>、<http://www.slf4j.org/license.html>、<http://nanoxml.sourceforge.net/orig/copyright.html>、<http://www.json.org/license.html>、<http://forge.ow2.org/projects/jaservice/>、<http://www.postgresql.org/about/license.html>、<http://www.sqlite.org/copyright.html>、<http://www.tcl.tk/software/tcltk/license.html>、<http://www.jaxen.org/faq.html>、<http://www.jdom.org/docs/faq.html>、<http://www.slf4j.org/license.html>、<http://www.iodbc.org/dataspace/iodbc/wiki/iODBC/License>、<http://www.keplerproject.org/md5/license.html>、<http://www.toedter.com/en/jcalendar/license.html>、<http://www.edankert.com/bounce/index.html>、<http://www.net-snmp.org/about/license.html>、<http://www.openmdx.org/#FAQ>、http://www.php.net/license/3_01.txt、<http://srp.stanford.edu/license.txt>、<http://www.schneier.com/blowfish.html>、<http://www.jmock.org/license.html>、<http://xsom.java.net>、<http://benalman.com/about/license/>、<https://github.com/CreateJS/EaselJS/blob/master/src/easeljs/display/Bitmap.js>、<http://www.h2database.com/html/license.html#summary>、<http://jsoncpp.sourceforge.net/LICENSE>、<http://jdbc.postgresql.org/license.html>、<http://protobuf.googlecode.com/svn/trunk/src/google/protobuf/descriptor.proto>、<https://github.com/rantav/hector/blob/master/LICENSE>、<http://web.mit.edu/Kerberos/krb5-current/doc/mitK5license.html>、<http://jibx.sourceforge.net/jibx-license.html>、<https://github.com/lyokato/libgeohash/blob/master/LICENSE>、<https://github.com/hjiang/jsonxx/blob/master/LICENSE>、<https://code.google.com/p/lz4/>、<https://github.com/jedisct1/libsodium/blob/master/LICENSE>、<http://one-jar.sourceforge.net/index.php?page=documents&file=license>、<https://github.com/EsotericSoftware/kryo/blob/master/license.txt>、<http://www.scala-lang.org/license.html>、<https://github.com/tinkerpop/blueprints/blob/master/LICENSE.txt>、<http://gee.cs.oswego.edu/dl/classes/EDU/oswego/cs/dl/util/concurrent/intro.html>、<https://aws.amazon.com/asl/>、<https://github.com/twbs/bootstrap/blob/master/LICENSE>、および <https://sourceforge.net/p/xmlunit/code/HEAD/tree/trunk/LICENSE.txt>。

本製品には、Academic Free License (<http://www.opensource.org/licenses/afl-3.0.php>)、Common Development and Distribution License (<http://www.opensource.org/licenses/cddl1.php>)、Common Public License (<http://www.opensource.org/licenses/cpl1.0.php>)、Sun Binary Code License Agreement Supplemental License Terms、BSD License (<http://www.opensource.org/licenses/bsd-license.php>)、BSD License (<http://opensource.org/licenses/BSD-3-Clause>)、MIT License (<http://www.opensource.org/licenses/mit-license.php>)、Artistic License (<http://www.opensource.org/licenses/artistic-license-1.0>)、Initial Developer's Public License Version 1.0 (<http://www.firebirdsql.org/en/initial-developer-s-public-license-version-1-0/>) に基づいて許諾されたソフトウェアが含まれています。

本製品には、ソフトウェア copyright (C) 2003-2006 Joe Walnes, 2006-2007 XStream Committers が含まれています。コンテンツの無断複写・転載を禁じます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、<http://j.org/license.html> にある使用条件に従います。本製品には、Indiana University Extreme! Lab によって開発されたソフトウェアが含まれています。詳細については、<http://www.extreme.indiana.edu/> を参照してください。

本製品には、ソフトウェア Copyright (C) 2013 Frank Balluffi and Markus Moeller が含まれています。コンテンツの無断複写・転載を禁じます。本ソフトウェアに関する許諾および制限は、MIT ライセンスの使用条件に従います。

特許については、<https://www.informatica.com/legal/patents.html> を参照してください。

免責: 本文書は、一切の保証を伴わない「現状渡し」で提供されるものとし、Informatica LLC は他社の権利の非侵害、市場性および特定の目的への適合性の黙示の保証などを含めて、一切の明示的および黙示的保証の責任を負いません。Informatica LLC では、本ソフトウェアまたはドキュメントに誤りのないことを保証していません。本ソフトウェアまたはドキュメントに記載されている情報には、技術的に不正確な記述や誤植が含まれる場合があります。本ソフトウェアまたはドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。

NOTICES

この Informatica 製品（以下「ソフトウェア」）には、Progress Software Corporation（以下「DataDirect」）の事業子会社である DataDirect Technologies からの特定のドライバ（以下「DataDirect ドライバ」）が含まれています。DataDirect ドライバには、次の用語および条件が適用されます。

1. DataDirect ドライバは、特定物として現存するままの状態を提供され、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けます。
2. DataDirect または第三者は、予見の有無を問わず発生した ODBC ドライバの使用に関するいかなる直接的、間接的、偶発的、特別、あるいは結果的損害に対して責任を負わないものとします。本制限事項は、すべての訴訟原因に適用されます。訴訟原因には、契約違反、保証違反、過失、厳格責任、詐称、その他の不法行為を含みますが、これらに限るものではありません。

発行日: 2018-10-25

目次

序文	13
Informatica のリソース.....	13
Informatica マイサポートポータル.....	13
Informatica マニュアル.....	13
Informatica 製品可用性マトリックス.....	13
Informatica の Web サイト.....	14
Informatica How-To ライブラリ.....	14
Informatica ナレッジベース.....	14
Informatica サポートの YouTube チャンネル.....	14
Informatica Marketplace.....	14
Informatica Velocity.....	14
Informatica グローバルカスタマサポート.....	14
 第 I 部 : バージョン 10.0	16
 第 1 章 : 新機能 (10.0)	17
アプリケーションサービス.....	17
アプリケーションサービスの無効化とリサイクル.....	18
データ統合サービス.....	18
モデルリポジトリサービス.....	19
システムサービス.....	20
Big Data.....	21
Big Data Management 設定ユーティリティ.....	21
Hadoop 接続.....	21
Hadoop エコシステム.....	21
Big Data のパラメータ.....	22
ランタイムおよび検証環境.....	22
Business Glossary.....	23
承認ワークフロー.....	23
用語集アセットの添付ファイル.....	23
Long String データ型.....	24
リッチテキストのサポート.....	24
インポートとエクスポートの機能拡張.....	24
電子メール通知.....	24
リレーションビュー図の改良点.....	24
Analyst ツール特権.....	25
ビジネス用語のリンク.....	25
用語集のセキュリティ.....	25
アセットビュー.....	25
デフォルトの承認者.....	26

コマンドラインプログラム.	26
接続性.	34
PowerCenter の接続性.	34
接続の切り替え.	34
データ型.	35
Informatica のデータ型.	35
マニュアル.	36
ドメイン.	37
ノード.	37
Informatica Administrator.	38
[管理] タブ.	38
依存関係グラフ.	40
監視.	40
Informatica Analyst.	43
アセットのバージョン管理.	43
プロファイル.	43
Informatica Developer.	44
DDL の生成と実行.	44
実行時のリレーショナルメタデータおよびフラットファイルメタデータの生成.	44
PowerCenter からのインポート.	45
Monitoring ツール.	45
オブジェクトのバージョン管理.	46
アプリケーションの物理データオブジェクト.	47
プロファイル.	47
Informatica Development Platform.	48
マッピング.	49
Informatica マッピング.	49
Metadata Manager.	54
Tableau リソース.	55
データリネージュの改良点.	55
メタデータカタログビュー.	56
Cloudera Navigator リソースの Impala クエリ.	56
Informatica Platform リソースのパラメータ.	56
最近の履歴.	56
関連するカタログオブジェクトおよび影響のサマリのフィルタおよびソート.	56
影響のサマリ内のセッションタスクインスタンス.	56
アプリケーションおよびデータリネージュプロパティ.	57
PowerCenter.	57
PowerExchange アダプタ.	58
PowerExchange Adapters for Informatica.	58
参照データ.	60
ルール仕様.	61

セキュリティ.....	63
グループ.....	63
特権.....	63
ロール.....	63
トランスフォーメーション言語関数.....	63
Informatica 関数.....	63
トランスフォーメーション.....	64
Informatica トランスフォーメーション.....	64
ワークフロー.....	69
Informatica ワークフロー.....	69
第 2 章 : 変更内容 (10.0)	71
インストール.....	71
サポートの終了.....	72
アプリケーションサービス.....	72
アナリストサービス.....	72
データ統合サービス.....	72
モデルリポジトリサービス.....	76
SAP BW サービス.....	76
Big Data.....	78
Business Glossary.....	78
リレーションビュー.....	78
アセットのフェーズ.....	78
[ライブラリ] ワークスペース.....	79
インポートおよびエクスポート.....	79
ドメイン.....	79
ログ.....	79
Informatica Administrator.....	80
[ドメイン] タブ.....	80
監視.....	81
Informatica Analyst.....	82
プロフィール.....	82
スコアカード.....	84
Informatica Developer.....	84
アプリケーションデプロイメントの変更内容.....	84
フラットファイルデータオブジェクト.....	84
Microsoft SQL Server の変更内容.....	85
論理データオブジェクトの編集.....	85
ODBC のソースとターゲットに対するプッシュダウンの最適化.....	86
マッピング.....	86
パラメータファイル.....	86
パーティション化されたマッピング.....	86
プッシュダウンの最適化.....	88

ランタイムプロパティ.....	88
Metadata Manager.....	88
Informix リソースの ODBC 接続.....	88
Microsoft SQL Server リソースの ODBC 接続.....	88
PowerCenter オブジェクトの影響のサマリ.....	89
最大同時リソースロード.....	89
検索.....	90
Metadata Manager ログファイルの変更内容.....	90
Business Glossary モデル.....	90
プロファイリング.....	90
PowerCenter.....	91
Informix ネイティブ接続.....	91
pmrep の変更.....	91
PowerCenter データプロファイリング.....	91
PowerExchange アダプタ.....	91
PowerExchange Adapters for Informatica.....	92
参照データ.....	93
ルール仕様.....	94
セキュリティ.....	94
認証.....	94
ソースおよびターゲット.....	94
PowerCenter のソースとターゲット.....	95
トランスフォーメーション.....	95
Informatica トランスフォーメーション.....	95
ワークフロー.....	98
Informatica ワークフロー.....	98
第 3 章: リリースタスク (10.0)	100
マッピング.....	100
パラメータの精度.....	100
第 II 部: バージョン 9.6.1.....	101
第 4 章: 新機能、変更、リリースタスク (9.6.1 HotFix 3)	102
新機能 (9.6.1 HotFix 3)	102
Business Glossary.....	102
Informatica Data Services.....	103
Informatica トランスフォーメーション.....	103
Metadata Manager.....	104
PowerExchange Adapters for PowerCenter.....	105
変更内容 (9.6.1 HotFix 3)	106
Business Glossary.....	106
Informatica トランスフォーメーション.....	107

Metadata Manager.	107
セキュリティ.	109
リリースタスク (9.6.1 HotFix 3)	109
Metadata Manager.	109

第 5 章 : 新機能、変更、リリースタスク (9.6.1 HotFix 2) 111

新機能 (9.6.1 HotFix 2)	111
Big Data.	111
Business Glossary.	113
コマンドラインプログラム.	114
Data Quality アクセラレータ.	114
Informatica Developer.	114
Informatica ドメイン.	114
Informatica トランスフォーメーション.	115
Metadata Manager.	117
PowerCenter.	118
PowerExchange	119
PowerExchange アダプタ.	119
ワークフロー.	122
変更内容 (9.6.1 HotFix 2)	122
接続性.	122
Informatica Analyst.	123
Informatica トランスフォーメーション.	123
Metadata Manager.	124
PowerExchange アダプタ.	127
リリースタスク (9.6.1 HotFix 2)	127
Metadata Manager.	127

第 6 章 : 新機能、変更、およびリリースタスク (9.6.1 HotFix 1) 128

新機能 (9.6.1 HotFix 1)	128
Big Data.	128
Business Glossary.	129
コマンドラインプログラム.	130
接続性.	130
Data Quality アクセラレータ.	130
マニュアル.	131
Informatica Developer.	131
Informatica ドメイン.	132
Informatica トランスフォーメーション.	132
マッピング.	132
Metadata Manager.	133
PowerCenter.	133
PowerExchange アダプタ.	134

参照データ	135
ルール仕様	136
変更内容 (9.6.1 HotFix 1)	136
アプリケーションサービス	136
Business Glossary	136
Informatica トランスフォーメーション	137
Metadata Manager	137
PowerCenter トランスフォーメーション	138
PowerExchange	138
PowerExchange アダプタ	138
参照データ	139
リリースタスク (9.6.1 HotFix 1)	139
PowerExchange アダプタ	139
Informatica Web クライアントアプリケーション	140
第 7 章 : 新機能 (9.6.1)	141
アプリケーションサービス	141
コンテンツ管理サービス	141
Big Data	142
Business Glossary	143
コマンドラインプログラム	144
マニュアル	147
Informatica Administrator	148
Informatica Development Platform	148
Informatica トランスフォーメーション	149
アドレスバリデータトランスフォーメーション	149
データプロセッサトランスフォーメーション	151
一致トランスフォーメーション	151
SQL トランスフォーメーション	152
インストーラ	152
マッピング	152
Informatica マッピング	152
Metadata Manager	153
PowerExchange	155
リスナサービス	155
infacmd pwx コマンド	155
PowerExchange アダプタ	155
Informatica アダプタ	155
PowerCenter アダプタ	156
プロファイルおよびスコアカード	157
参照データ	158
ルール仕様	158
ソースおよびターゲット	158

Informatica ソースおよびターゲット.	159
PowerCenter のソースとターゲット.	159
トランスフォーメーション言語関数.	159
Informatica 関数.	159
第 8 章 : 変更内容 (9.6.1)	160
Big Data.	160
ドメイン.	160
Informatica トランスフォーメーション.	161
アドレスバリデータトランスフォーメーション.	161
データマスキングトランスフォーメーション.	161
データプロセッサトランスフォーメーション.	161
マッピング.	162
Informatica マッピング.	162
Metadata Manager.	162
PowerCenter トランスフォーメーション.	163
データマスキングトランスフォーメーション.	163
PowerExchange アダプタ.	164
PowerExchange Adapters for PowerCenter.	164
プロファイルおよびスコアカード.	165
ルール仕様.	165
セキュリティ.	165
第 III 部 : バージョン 9.6.0.	167
第 9 章 : 新機能と改良点 (9.6.0)	168
バージョン 9.6.0.	168
Informatica Analyst.	168
Informatica インストーラ.	169
Informatica Data Explorer.	170
Informatica Data Quality.	171
Informatica Data Services.	175
Informatica Data Transformation.	178
Informatica Developer.	179
Informatica Development Platform.	180
Informatica ドメイン.	181
Informatica ドメインのセキュリティ.	182
コマンドラインプログラム.	184
PowerCenter.	188
PowerCenter Big Data Edition.	188
PowerCenter Advanced Edition.	189
Metadata Manager.	189
PowerCenter 用 PowerExchange アダプタ.	190

Informatica 用 PowerExchange アダプタ	192
Informatica のマニュアル	193
第 10 章 : Informatica Data Explorer (9.6.0) の変更内容	196
エンタープライズ検出	196
プロファイル結果の確認	196
ルール	197
スコアカード	197
第 11 章 : Informatica Data Quality (9.6.0) の変更内容	198
アドレスバリデータトランスフォーメーション	198
例外レコード管理	198
Informatica Data Director for Data Quality	199
Java トランスフォーメーション	199
マッピングパラメータ	199
一致トランスフォーメーション	200
Microsoft SQL Server へのネイティブ接続	200
ポート対ポートのデータ変換	200
プロファイル結果の確認	200
参照テーブル	201
ルール	201
スコアカード	201
第 12 章 : Informatica Data Services (9.6.0) の変更内容	202
Java トランスフォーメーション	202
Microsoft SQL Server へのネイティブ接続	202
ポート対ポートのデータ変換	203
プロファイル結果の確認	203
ルール	203
スコアカード	203
第 13 章 : Informatica Data Transformation (9.6.0) の変更内容	204
PowerCenter へのマッピングのエクスポート	204
無効な CMConfig ファイル	204
第 14 章 : Informatica ドメイン (9.6.0) の変更内容	205
Informatica サービス	205
アナリストサービス	206
コンテンツ管理サービス	206
データ統合サービス	206
データディレクタサービス	206
Test Data Manager サービス	207
モデルリポジトリサービス特権	207

ドメインセキュリティ	207
サポートされているプラットフォームに変更	208
第 15 章 : PowerCenter (9.6.0) の変更内容	209
Microsoft SQL Server へのネイティブ接続	209
ODBC のソースとターゲットに対するプッシュダウンの最適化	209
リポジトリ接続ファイルのデフォルトの場所	209
リポジトリ接続ファイル	210
オペレーティングシステムのプロファイル用の umask の設定	210
第 16 章 : PowerCenter Big Data Edition (9.6.0) の変更内容	211
Hadoop 環境プロパティファイル	211
ネイティブ環境でのマッピング	211
第 17 章 : Metadata Manager (9.6.0) の変更内容	212
ブラウザサポート	212
Metadata Manager Agent	212
Metadata Manager ビジネス用語集	213
Metadata Manager ドキュメント	213
mmcmd の変更内容	213
Microsoft SQL Server へのネイティブ接続	214
リソースのパスワード変更	215
第 18 章 : Adapters for PowerCenter (9.6.0) の変更内容	216
PowerExchange for Facebook	216
PowerExchange for Hadoop	216
PowerExchange for LinkedIn	217
PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM	217
PowerExchange for SAP NetWeaver	217
PowerExchange for Twitter	218
PowerExchange for Web Services	219
第 19 章 : Adapters for Informatica (9.6.0) の変更内容	220
PowerExchange for DataSift	220
PowerExchange for Facebook	220
PowerExchange for LinkedIn	221
PowerExchange for Salesforce	221
PowerExchange for SAP NetWeaver	221
PowerExchange for Twitter	221
PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst	221

序文

『Informatica リリースガイド』では、新機能と拡張機能、バージョン間での動作の変更、および以前のバージョンからアップグレードした後に実行する必要があるタスクについて説明します。『Informatica リリースガイド』は新機能と変更された動作に関心を持つすべてのユーザーを対象として書かれています。このガイドは、読者が使用する機能について知識があることを前提としています。

Informatica のリソース

Informatica マイサポートポータル

Informatica のユーザーは、最初に Informatica マイサポートポータル (<https://mysupport.informatica.com>) から Informatica にアクセスします。マイサポートポータルは、大規模なオンラインデータ統合コラボレーションプラットフォームであり、全世界で 10 万人を超える Informatica の顧客およびパートナーが利用しています。

メンバーは以下の操作を行うことができます。

- 1 つの場所からすべての Informatica のリソースにアクセスできます。
- 自分のサポート事例を確認できます。
- ナレッジベースや製品マニュアルを検索したり、入門ドキュメントを参照したり、サポートビデオを視聴したりできます。
- 最寄りの Informatica ユーザーグループネットワークを検索して、他のユーザーと共同作業を行えます。

Informatica マニュアル

Informatica マニュアルチームは、正確で役に立つマニュアルの作成に努めています。このマニュアルに関する質問、コメント、ご意見の電子メールの送付先は、Informatica マニュアルチーム (infa_documentation@informatica.com) です。お客様のフィードバックは、マニュアルの改良に利用させていただきます。コメントに返信をご希望のお客様は、その旨をお知らせください。

マニュアルチームは、必要に応じてマニュアルを更新します。製品の最新のマニュアルを入手するには、<https://mysupport.informatica.com> から製品マニュアルにアクセスします。

Informatica 製品可用性マトリックス

製品可用性マトリックス (PAM) には、製品リリースでサポートされるオペレーティングシステム、データベースなどのデータソースおよびターゲットが示されています。PAM は、Informatica My Support ポータル (<https://mysupport.informatica.com>) でアクセスできます。

Informatica の Web サイト

Informatica 社の Web サイトは、<https://www.informatica.com> からアクセスできます。このサイトでは、Informatica 社の概要と沿革、今後のイベント、営業拠点などの情報を提供しています。また、製品情報やパートナー情報も提供しています。サービス関連のページには、テクニカルサポート、トレーニングと教育、および実装に関するサービスの重要な情報を掲載しています。

Informatica How-To ライブラリ

Informatica のユーザーとして、Informatica How-To ライブラリ (<https://mysupport.informatica.com>) にアクセスできます。How-To Library は、Informatica の製品および機能についての詳細を確認できるリソースのコレクションです。一般的な問題に対するソリューションを提供したり、機能や動作を比較したり、特定の実際のタスクを実行するための方法を示したりする記事やインタラクティブなデモンストレーションが含まれています。

Informatica ナレッジベース

Informatica のユーザーとして、Informatica ナレッジベース (<https://mysupport.informatica.com>) にアクセスできます。この Knowledge Base を利用して、Informatica 製品に関する既知の技術的問題の解決策を検索することができます。また、FAQ（よくある質問）の答え、技術的ホワイトペーパー、技術的なヒントも得られます。Knowledge Base に関する質問、コメント、ご意見の電子メールの送付先は、Informatica ナレッジベースチーム (KB_Feedback@informatica.com) です。

Informatica サポートの YouTube チャンネル

<http://www.youtube.com/user/INFASupport> で Informatica サポートの YouTube チャンネルにアクセスできます。Informatica サポートの YouTube チャンネルでは、特定のタスクを実行するソリューションについてのビデオを用意しています。Informatica サポートの YouTube チャンネルに関する質問、コメント、またはアイデアがある場合は、サポート YouTube チームに電子メール (supportvideos@informatica.com) を送信するか、または@INFASupport でツイートしてください。

Informatica Marketplace

情報マーケットプレイスは、開発者とパートナーがデータ統合実装を増幅、拡張、強化するソリューションを共有するためのフォーラムです。マーケットプレイスにある何百ものソリューションを利用して、プロジェクトで実装にかかる時間を短縮したり、生産性を向上させたりできます。Informatica Marketplace には、<http://www.informaticamarketplace.com> からアクセスできます。

Informatica Velocity

<https://mysupport.informatica.com> で Informatica Velocity にアクセスできます。数多くのデータ管理プロジェクトの実世界での経験から開発された Informatica Velocity は、世界中の組織と協力して優れたデータ管理ソリューションの計画、開発、展開、および維持を行ってきた弊社コンサルタントの知識の集合体を表しています。Informatica Velocity についての質問、コメント、またはアイデアがある場合は、ips@informatica.com から Informatica プロフェッショナルサービスにお問い合わせください。

Informatica グローバルカスタマサポート

電話またはオンラインサポートからカスタマサポートセンターに連絡できます。

オンラインサポートのご利用には、ユーザー名とパスワードが必要です。<http://mysupport.informatica.com> から、ユーザー名とパスワードが入手できます。

Informatica グローバルカスタマサポートの電話番号は、Informatica の Web サイト <http://www.informatica.com/us/services-and-training/support-services/global-support-centers/>に掲載されています。

パート I: バージョン 10.0

この部には、以下の章があります。

- [新機能 \(10.0\) , 17](#) ページ
- [変更内容 \(10.0\) , 71](#) ページ
- [リリースタスク \(10.0\) , 100](#) ページ

第 1 章

新機能（10.0）

この章では、以下の項目について説明します。

- [アプリケーションサービス, 17](#) ページ
- [Big Data, 21](#) ページ
- [Business Glossary, 23](#) ページ
- [コマンドラインプログラム, 26](#) ページ
- [接続性, 34](#) ページ
- [データ型, 35](#) ページ
- [マニュアル, 36](#) ページ
- [ドメイン, 37](#) ページ
- [Informatica Administrator, 38](#) ページ
- [Informatica Analyst, 43](#) ページ
- [Informatica Developer, 44](#) ページ
- [Informatica Development Platform, 48](#) ページ
- [マッピング, 49](#) ページ
- [Metadata Manager, 54](#) ページ
- [PowerCenter, 57](#) ページ
- [PowerExchange アダプタ, 58](#) ページ
- [参照データ, 60](#) ページ
- [ルール仕様, 61](#) ページ
- [セキュリティ, 63](#) ページ
- [トランスフォーメーション言語関数, 63](#) ページ
- [トランスフォーメーション, 64](#) ページ
- [ワークフロー, 69](#) ページ

アプリケーションサービス

ここでは、バージョン 10.0 の新しいアプリケーションサービスについて説明します。

アプリケーションサービスの無効化とリサイクル

バージョン 10.0 では、アプリケーションサービスの無効化とリサイクルに次の新機能が追加されました。

計画済みおよび未計画のメモ

Administrator ツールからアプリケーションサービスを無効化またはリサイクルするときに、アクションを計画済みにするか未計画にするかを指定できます。計画済みまたは未計画のメモは、**【管理】** タブの **【ドメイン】** ビューにある **【コマンド履歴】** パネルと **【イベント】** パネルに表示されます。

コメント

Administrator ツールからアプリケーションサービスを無効化またはリサイクルするときに、必要に応じて、アクションに関するコメントを入力できます。コメントは、**【管理】** タブの **【ドメイン】** ビューにある **【コマンド履歴】** パネルと **【イベント】** パネルに表示されます。

詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。

データ統合サービス

ここでは、バージョン 10.0 の新しいデータ統合サービス機能について説明します。

アーキテクチャ

バージョン 10.0 では、データ統合サービスには、次のタイプのコンポーネントが含まれます。

サービスコンポーネント

サービスコンポーネントには、クライアントツールからの要求を管理するモジュール、ジョブを最適化してコンパイルする論理 Data Transformation マネージャ (LDTM)、およびアプリケーションのデプロイメントとキャッシュを管理するマネージャが含まれます。サービスコンポーネントは、データ統合サービスプロセス内で実行されます。データ統合サービスプロセスは、サービスロールのあるノードで実行する必要があります。

計算コンポーネント

データ統合サービスの計算コンポーネントは、実行 Data Transformation マネージャ (DTM) です。DTM は、データの抽出、変換、およびロードを行って、データトランスフォーメーションジョブを完了します。DTM は、計算ロールのあるノードで実行する必要があります。

単一ノードでデータ統合サービスを実行する場合、データ統合サービスのサービスコンポーネントと計算コンポーネントは同じノードで実行されます。ノードには、サービスロールと計算ロールの両方が必要です。

グリッド上でデータ統合サービスを実行する場合、データ統合サービスのサービスコンポーネントと計算コンポーネントは、グリッドおよびノードロールの設定方法に基づいて同じノードまたは異なるノードで実行されます。個別のリモートプロセスでジョブを実行するようにデータ統合サービスのグリッドを設定した場合、グリッド内のノードでは、サービスのみのロール、計算のみのロール、およびサービスと計算の両方のロールを組み合わせることができます。グリッド内の一部のノードをサービスプロセスの実行専用とし、別のノードをマッピングの実行専用とします。

データ統合サービスのコンポーネントの詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「データ統合サービスアーキテクチャ」を参照してください。

DTM リソース割り当てポリシー

バージョン 10.0 では、Data Transformation マネージャのリソース割り当てポリシーによって、タスクに CPU リソースを割り当てる方法が決定されます。DTM は、オンデマンドのリソース割り当てポリシーを使用して、CPU リソースを割り当てます。

DTM リソース割り当てポリシーの詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「データ統合サービスアーキテクチャ」を参照してください。

ASCII データ移動モード

バージョン 10.0 では、フラットファイルまたはリレーショナルソースから読み取るマッピングで ASCII データ移動モードを使用するか、Unicode データ移動モードを使用するかが、データ統合サービスの論理 Data Transformation マネージャ (LDTM) のコンポーネントによって決定されます。LDTM は、マッピングによって処理される文字セットに基づいて、データ移動モードを決定します。マッピングによって処理されるのがすべて ASCII データの場合、LDTM は ASCII モードを選択します。ASCII モードの場合、データ統合サービスは各文字の格納に 1 バイトを使用するため、マッピングのパフォーマンスが最適化されます。Unicode モードの場合は、各文字の格納に 2 バイトが使用されます。

データ移動モードの詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「データ統合サービスアーキテクチャ」を参照してください。

プロファイルの並行処理の最大化

バージョン 10.0 では、パーティション化が可能な場合、データ統合サービスでカラムプロファイルとデータドメイン検出を実行するときに、並行処理を最大化することができます。並行処理を最大化した場合、データ統合サービスは、プロファイリングデータを複数のパーティションに動的に分割し、複数のスレッドを使用してパーティションを同時に処理します。データ統合サービスは、追加のスレッドを使用するときに、プロファイリングのパフォーマンスを最適化できます。

並行処理の最大化の詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「データ統合サービス管理」を参照してください。

複数のキャッシュ、ターゲット、および一時ディレクトリ

バージョン 10.0 では、次のデータ統合サービスのプロパティに対して複数のディレクトリを設定できます。

キャッシュディレクトリ

複数のキャッシュディレクトリを設定し、アグリゲータ、ジョイナ、またはランクトランスフォーメーションのキャッシュのパーティション化時のパフォーマンスを最適化します。

ターゲットディレクトリ

複数のターゲットディレクトリを設定し、複数のパーティションでフラットファイルターゲットに書き込むときのパフォーマンスを最適化します。

一時ディレクトリ

複数の一時ディレクトリを設定し、ソータランスフォーメーションのキャッシュのパーティション化時のパフォーマンスを最適化します。

パーティション化時のキャッシュとターゲットディレクトリの最適化の詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「データ統合サービス管理」を参照してください。

モデルリポジトリサービス

ここでは、バージョン 10.0 の新しいモデルリポジトリサービス機能について説明します。

バージョン管理システムサポート

バージョン 10.0 では、サポートされているバージョン管理システムとモデルリポジトリを統合できます。モデルリポジトリがバージョン管理システムと統合されていると、バージョン管理システムによって、開発チームの他のメンバによる上書きからオブジェクトが保護されます。オブジェクトのチェックアウトとチェックイン、オブジェクトのバージョン履歴の表示と取得、チェックアウトの取り消し、チェックアウトされたオブジェクトの他ユーザーへの再割り当てなどのアクションを実行できます。

モデルリポジトリは、次のバージョン管理システムと統合できます。

- Perforce

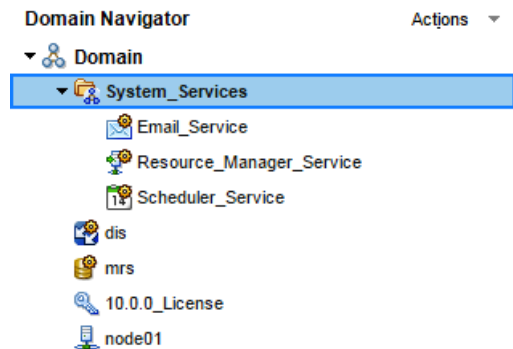
- Subversion

詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「モデルリポジトリサービス」を参照してください。

システムサービス

バージョン 10.0 では、ドメインにシステムサービスが含まれます。システムサービスは、ドメイン内で単一のインスタンスを持つことができるアプリケーションサービスです。システムサービスは、ドメインを作成またはアップグレードするときに自動作成されます。システムサービスを有効化、無効化、および設定する操作が可能です。

以下の画像はドメインナビゲータ内のシステムサービスフォルダを示しています。



ドメインには以下のシステムサービスが含まれます。

電子メールサービス

電子メールサービスでは、ビジネス用語集およびワークフロー関連の通知をメール送信します。電子メールサービスを有効にすると、ユーザーが電子メール通知を設定できます。

電子メールサービスは以下の通知を送信します。

- ビジネス用語集通知
- ワークフロー通知ワークフロー通知には、データ統合サービスが実行するワークフローのヒューマンタスクおよび通知タスクからのメールが含まれます。

リソースマネージャサービス

リソースマネージャサービスは、ドメイン内の計算リソースを管理し、ジョブをディスパッチすることで最適なパフォーマンスと拡張性を達成します。リソースマネージャサービスは、計算ロールが指定されたノードに関する情報を収集します。このサービスは、ジョブ要件をリソースの可用性と突き合わせ、そのジョブの実行に最適な計算ノードを特定します。

データ統合サービスグリッドが個別のリモートプロセスでジョブを実行するように設定するときに、リソースマネージャサービスを有効にします。

スケジューラサービス

スケジューラサービスは、ドメイン内のデプロイされたマッピングおよびワークフロージョブのスケジュールを管理します。

スケジュールを作成してジョブを割り当て、スケジュールされたジョブが実行されるように設定するときに、スケジューラサービスを有効にします。

システムサービスについての詳細は、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「システムサービス」を参照してください。

Big Data

ここでは、バージョン 10.0 の新しい Big Data 機能について説明します。

Big Data Management 設定ユーティリティ

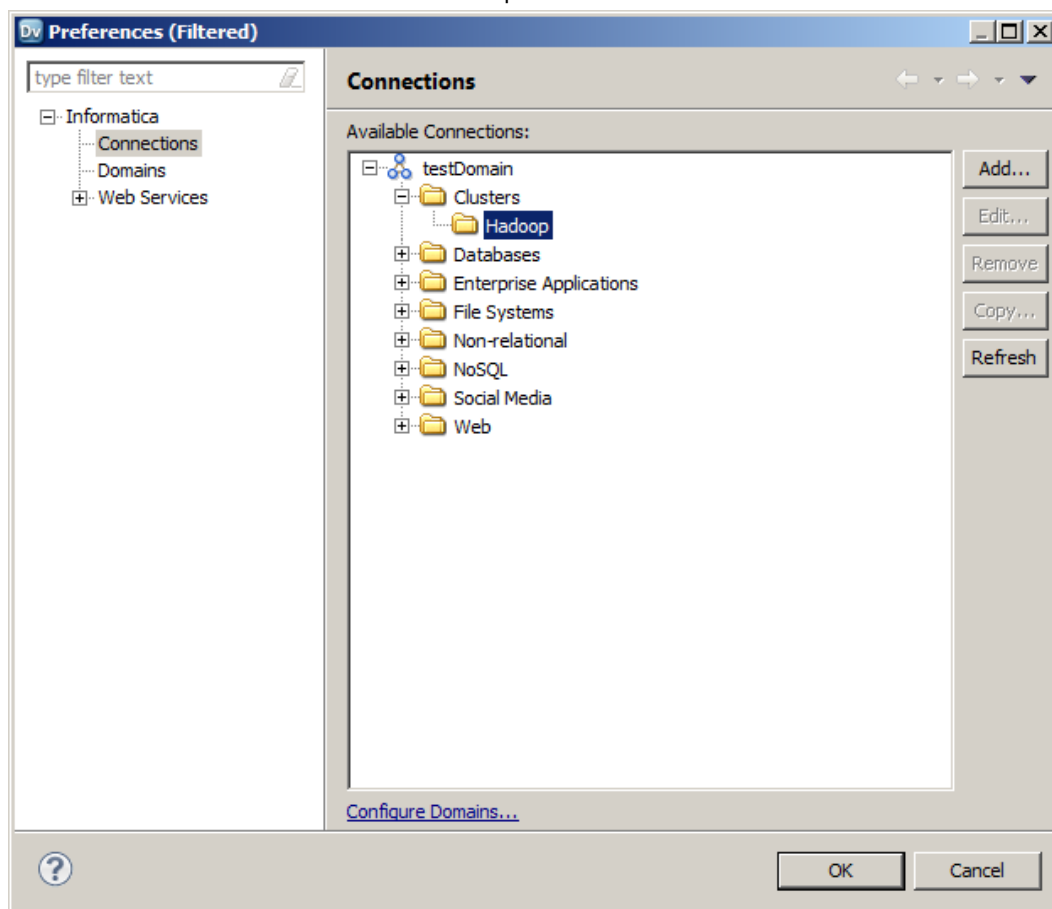
バージョン 10.0 では、Big Data Management 設定ユーティリティを使用して、Big Data Management の環境設定プロセスを部分的に自動化できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Big Data Management インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

Hadoop 接続

バージョン 10.0 では、Hadoop 環境でマッピングを実行する場合、Hadoop 接続を設定する必要があります。Hadoop 接続を編集して、Hadoop 環境にランタイムプロパティを設定できます。ランタイムプロパティには、Hive エンジンおよび Blaze エンジンのプロパティが含まれます。

次の図は、クラスタタイプの接続として Hadoop 接続を示しています。



詳細については、『*Informatica 10.0 Big Data 管理ユーザーガイド*』の「接続」を参照してください。

Hadoop エコシステム

バージョン 10.0 では、Hadoop エコシステムの次の Big Data 機能と機能拡張がサポートされています。

Amazon EC2 での Hadoop クラスタ

Amazon EC2 にデプロイされている Hortonworks HDP クラスタに対して、データの読み取りおよび読み書きを行うことができます。

Hadoop 分布

次の Hadoop 分布を実行する Hadoop クラスタに接続できます。

- Cloudera CDH 5.4
- MapReduce 1 および MapReduce 2 を含む MapR 4.0.2

Hive on Tez

Hortonworks HDP を実行する Hadoop クラスタの実行エンジンとして、Hive on Tez を使用できます。

Kerberos 認証

Cloudera CDH クラスタおよび Hortonworks HDP Hadoop クラスタの Key Distribution Center として、Microsoft Active Directory を使用できます。

Big Data のパラメータ

バージョン 10.0 では、パラメータを使用して、次に示す Big Data の追加プロパティを指定できます。

- 複合ファイルソースおよびターゲット
- HDFS 上の複合ファイルソースおよびターゲット
- HDFS 上のフラットファイルソースおよびターゲット
- HBase ソースおよびターゲット
- Hive ソース
- Hadoop 環境の Hive ターゲット
- ランタイム環境

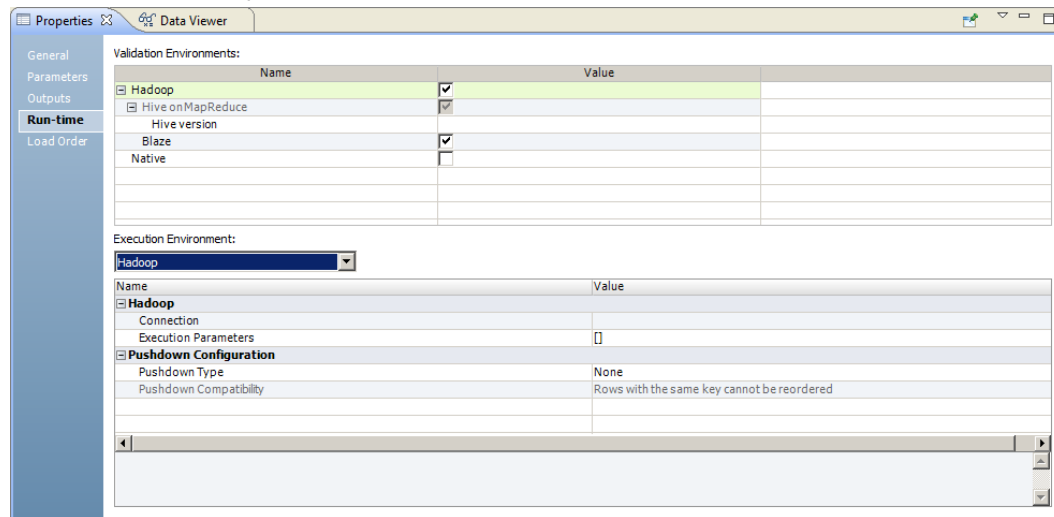
詳細については、『*Informatica 10.0 Big Data 管理ユーザーガイド*』の章「Hadoop 環境でのマッピング」を参照してください。

ランタイムおよび検証環境

バージョン 10.0 では、Hadoop 環境を選択して、Hadoop クラスタでマッピングを実行できます。Hadoop 環境を選択するとき、Hive または Blaze エンジンを選択して、マッピングロジックを Hadoop クラスタにプッシュします。Blaze エンジンは、Hadoop 上の分散処理に用いる、Informatica 独自のエンジンです。

Hadoop 環境でマッピングを実行するとき、マッピングの Hadoop 接続を設定する必要があります。マッピングを検証して、マッピングロジックを Hadoop にプッシュできることを確認します。Hadoop 環境に対するマッピングの検証が終了すると、マッピングを実行できます。

以下の画像は、Hadoop ランタイムおよび検証環境を示しています。



詳細については、『*Informatica 10.0 Big Data 管理ユーザーガイド*』の章「Hadoop 環境でのマッピング」を参照してください。

Business Glossary

ここでは、バージョン 10.0 の新しい Business Glossary 機能について説明します。

承認ワークフロー

バージョン 10.0 では、投票プロセスの後にデータスチュワードが用語集アセットをパブリッシュできます。用語集管理者が用語集の承認ワークフローを設定した後で、データスチュワードは投票プロセスによって、用語集のすべてのアセットをパブリッシュまたは拒否する必要があります。用語集管理者は、2つのレベルまで承認を設定できます。承認者は、アセットの変更を承認または拒否するか、投票を棄権することができます。データスチュワードは、投票結果に基づいてアセットをパブリッシュまたは拒否します。

承認ワークフローを経てパブリッシュされた用語集アセットには、監査証跡に【投票履歴】という新しいタブが追加されます。このタブには、承認ワークフローの詳細が表示されます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』の「承認ワークフロー」を参照してください。

用語集アセットの添付ファイル

バージョン 10.0 では、用語集アセットに添付ファイルを追加できます。参照ユーザーは、【用語集】ワークスペースで用語集アセットを開いたときに、添付ファイルを表示できます。

アセットの添付ファイルの詳細については、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』の「用語集のコンテンツ管理」を参照してください。添付ファイルディレクトリの設定の詳細については、『*Informatica アプリケーションサービス*』の「アナリストサービス」を参照してください。

Long String データ型

バージョン 10.0 では、Long String データ型のカスタムプロパティを作成できます。コンテンツ管理者がフィールドにコンテンツを追加するとき、Long String データ型では文字数に制限がありません。

Long String データ型の詳細については、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』の「用語集のコンテンツ管理」を参照してください。

リッチテキストのサポート

バージョン 10.0 では、**説明**、**使用コンテキスト**、および**例**などのデフォルトのアセットプロパティを設定するとき、データスチュワードはリッチテキストのコンテンツに書式を設定できます。Long String データ型を持つカスタムプロパティもリッチテキストをサポートしています。

データスチュワードは以下の方法でテキストの書式を設定できます。

- テキストを太字や斜体にするか、下線を引く。
- フォントおよびフォントの色を変更する。
- 順序付けしたリストまたは順序付けしていないリストを追加する。
- 定義済みスタイルを使用する。
- 内部および外部リンクをテキストに挿入する。

リッチテキストについての詳細は、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』の「用語集のコンテンツ管理」を参照してください。

インポートとエクスポートの機能拡張

バージョン 10.0 では、他の用語集、添付ファイル、監査履歴のリンクされたアセットを含めて/含めずに、ビジネス用語集をインポートまたはエクスポートできます。

必要に応じて、バックグラウンドでインポートタスクを実行できます。Analyst ツールがバックグラウンドで用語集をインポートしている間に、ユーザーは他のタスクを実行できます。インポートが完了すると、Analyst ツールから通知が送信されます。

インポートウィザードの最後のステップで、Analyst ツールには、拡張されたサマリと競合解決のオプションが表示されます。

インポートとエクスポートの機能拡張の詳細については、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』の「用語集の管理」を参照してください。

電子メール通知

バージョン 10.0 では、電子メールでの通知の受信を選択できます。Analyst ツールでも、引き続き通知を受信できます。**[用語集の設定]** ワークスペースで、電子メール通知を設定できます。

電子メール通知の詳細については、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』の「用語集コンテンツの検索」を参照してください。

リレーションビュー図の改良点

バージョン 10.0 では、リレーションビュー図に以下の改良点があります。

完全なアセット名の表示

リレーションビュー図に、完全なアセット名およびリレーション名を表示するオプションが追加されました。デフォルトでは、200 文字を超えるアセット名およびリレーション名は Analyst ツールによって切り詰められます。

アセットの検索

リレーションビュー図に表示されるアセットを検索できます。

ノードの展開と折りたたみ

ノードの展開または折りたたみを行って、ノード内のアセットを表示または非表示できます。

キャンバスのパン

リレーションビューキャンバスをクリック&ドラッグでキャンバス全域にわたってパンし、アセットを表示できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』の「用語集コンテンツの検索」を参照してください。

Analyst ツール特権

バージョン 10.0 では、Administrator ツールで、パブリッシュされている用語集アセットの表示特権をユーザーに割り当てることができます。Administrator ツールで**用語集の表示特権**を与えることは、Analyst ツールで**【用語集のセキュリティ】**ワークスペース内にある用語集およびパブリッシュされている用語集アセットの読み取り権限を与えることと同じです。

詳細については、『*Informatica 10.0 セキュリティガイド*』を参照してください。

ビジネス用語のリンク

バージョン 10.0 では、プロファイルをビジネス用語にリンクできます。Analyst ツールに、リンクされているテクニカルアセットおよびデータオブジェクトへのハイパーリンクが表示されます。ハイパーリンクをクリックすると、データオブジェクトがそれぞれのワークスペースで開きます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

用語集のセキュリティ

バージョン 10.0 では、Analyst ツールの用語集のセキュリティに次の拡張機能が追加されています。

用語集のセキュリティのユーザーインタフェース

【用語集のセキュリティ】ワークスペースビューに、ロール、ユーザー、およびグループの数が表示されます。

権限と特権ウィザード

【用語集のセキュリティ】ワークスペースで、ウィザードを使用してユーザーに権限または特権を追加するとき、カテゴリまたはタイプに基づいて用語集アセットをソートできます。また、ユーザーのすべてのアセットに対して、読み取りおよび書き込み権限を一括割り当てできるようになりました。

アセットビュー

バージョン 10.0 では、アセットビューに添付ファイルの数およびアセットを含む用語集の名前も表示されます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』の「Business Glossary について」を参照してください。

デフォルトの承認者

バージョン 10.0 では、サービス管理者は、用語集のデフォルトの承認者を設定できます。サービス管理者が指定するデフォルトの承認者だけが、通常の承認プロセス中に通知を受信したり、進められた承認ワークフロー中にレベル 1 の投票に参加したりできます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』の「用語集の管理」を参照してください。

コマンドラインプログラム

ここでは、バージョン 10.0 の新規および変更されたコマンドについて説明します。

infacmd bg コマンド

以下の表に、新しい infacmd bg コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
upgradeRepository	モデルリポジトリ内の Business Glossary データをアップグレードします。ドメインをアップグレードした後にこのコマンドを実行します。

infacmd dis コマンド

以下の表に、新しい infacmd dis コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
addParameterSetEntries	アプリケーションとしてデプロイされたマッピングまたはワークフローのパラメータセットにエンTRIESを追加します。
deleteParameterSetEntries	アプリケーションとしてデプロイされたマッピングまたはワークフローのパラメータセットからエンTRIESを削除します。特定のパラメータセットエンTRIESまたはすべてのパラメータセットエンTRIESを削除することができます。
listApplicationObjects	アプリケーションに含まれるオブジェクトを一覧表示します。
listComputeOptions	計算ロールのあるノードに対するデータ統合サービスのプロパティを一覧表示します。
listParameterSetEntries	パラメータセット内のエンTRIESを一覧表示します。
listParameterSets	アプリケーション内のパラメータセットを一覧表示します。
updateComputeOptions	計算ロールのあるノードに対するデータ統合サービスのプロパティを更新します。特定の計算ノードに対するデータ統合サービスのプロパティをオーバーライドするコマンドを使用してください。
updateParameterSetEntries	アプリケーション内のマッピングまたはワークフローに対するパラメータセットに含まれるエンTRIESを更新します。更新するパラメータの名前と値のペアをスペースで区切って入力します。
stopBlazeService	Blaze エンジンのコンポーネントの作動を停止します。

以下の表に、infacmd dis コマンドオプションの変更内容を示します。

コマンド	説明
UpdateServiceOptions	<p>次のオプションが、メモリ割り当て用に追加されました。</p> <ul style="list-style-type: none"> - MappingServiceOptions.MaxMemPerRequest - ProfilingServiceOptions.MaxMemPerRequest - SQLServiceOptions.MaxMemPerRequest - WSServiceOptions.MaxMemPerRequest <p>これらのオプションを使用して、データ統合サービスがマッピング、プロファイル、SQL サービス、または Web サービス要求に割り当てるメモリの最大量をバイト単位で指定します。</p> <p>次のオプションが、ワークフロー操作用に追加されました。</p> <ul style="list-style-type: none"> - Modules.WorkflowOrchestrationService <p>このオプションを使用して、ワークフローを実行するモジュールを有効または無効にします。</p> <ul style="list-style-type: none"> - WorkflowOrchestrationServiceOptions.DBName <p>このオプションを使用して、ワークフローのランタイムメタデータを保存するデータベースの接続名を指定します。</p> <p>ExecutionOptions.OutOfProcessExecution オプションは次の値に設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> - IN_PROCESS。データ統合サービスプロセスでジョブを実行します。 - OUT_OF_PROCESS。ローカルノードの個別の DTM プロセス内でジョブを実行します。 - OUT_OF_PROCESS_REMOTE。リモートノードの個別の DTM プロセス内でジョブを実行します。 <p>以前は、このオプションを true (IN_PROCESS) または false (OUT_OF_PROCESS) に設定していました。</p> <p>次のオプションは、UpdateServiceProcessOptions コマンドから UpdateServiceOptions コマンドに移動しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> - ExecutionOptions.MaxExecutionPoolSize - ExecutionOptions.MaxMemorySize - ExecutionOptions.MaxMappingParallelism - ExecutionOptions.DisHadoopPrincipal - ExecutionOptions.DisHadoopKeytab - ExecutionOptions.TemporaryDirectories - ExecutionOptions.DisHomeDirectory - ExecutionOptions.CacheDirectory - ExecutionOptions.SourceDirectory - ExecutionOptions.TargetDirectory - ExecutionOptions.RejectFilesDirectory - ExecutionOptions.HadoopInfaHomeDir - ExecutionOptions.HadoopDistributionDir - ExecutionOptions.DisHadoopDistributionDir <p>次の電子メールサーバーオプションは、スコアカード通知に対して isp UpdateSMTPOptions に移動しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> - EmailServerOptions.SMTPServerHost - EmailServerOptions.SMTPServerPort - EmailServerOptions.SMTPServerUser - EmailServerOptions.SMTPServerPassword - EmailServerOptions.SenderEmailId <p>次の電子メールサーバーオプションは、スコアカード通知に対して削除されました。</p> <ul style="list-style-type: none"> - EmailServerOptions.SMTPSwitchAuthenticationOn - EmailServerOptions.SMTPSwitchTLSOn - EmailServerOptions.SMTPSwitchSSLOn <p>次の電子メールサーバーオプションは、ワークフロー通知に対して es UpdateSMTPOptions コマンドに移動しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> - EmailServerOptions.SMTPServerHost

コマンド	説明
	<ul style="list-style-type: none"> - EmailServerOptions.SMTPServerPort - EmailServerOptions.SMTPServerUser - EmailServerOptions.SMTPServerPassword - EmailServerOptions.SMTPSwitchAuthenticationOn - EmailServerOptions.SenderEmailId - EmailServerOptions.SMTPSwitchTLSOn - EmailServerOptions.SMTPSwitchSSLOn <p>次の電子メールサーバーオプションは削除されました。</p> <ul style="list-style-type: none"> - EmailServerOptions.SMTPServerConnectionTimeout - EmailServerOptions.SMTPServerCommunicationTimeout <p>次のオプションは、ワークフロー操作に対して削除されました。</p> <ul style="list-style-type: none"> - HumanTaskServiceOptions.HTConnectionName - Modules.HumanTaskService - Modules.WorkflowService - WorkflowServiceOptions.HTDataIntegrationServiceName
UpdateServiceProcessOptions	ExecutionOptions.MaxSessionSize オプションは廃止されています。残りの実行オプションは UpdateServiceOptions に移動しました。

infacmd es コマンド

新しい infacmd es プログラムでは電子メールサービスを管理します。

以下の表に、新しい infacmd es コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
ListServiceOptions	電子メールサービスに対して設定されたプロパティの一覧を返します。
UpdateServiceOptions	電子メールサービスのプロパティを更新します。
UpdateSMTPOptions	電子メールサービスの電子メールサーバープロパティを更新します。

infacmd hts コマンド

いずれの infacmd hts コマンドも現在は使われていません。

以下の表に、現在使われていない `infacmd hts` コマンドの説明、およびバージョン 10.0 で同様のアクションを実行するときに使用するコマンドを示します。

コマンド	説明
CreateDB	ヒューマンタスクのランタイムメタデータを保存するデータベーステーブルを作成します。 バージョン 10.0 では、ワークフローに対するすべてのランタイムメタデータが共通のテーブルのセットに保存されます。ワークフローメタデータテーブルを作成するには <code>infacmd wfs CreateTables</code> を使用します。
DropDB	ヒューマンタスクのランタイムメタデータを保存するデータベーステーブルをドロップします。 バージョン 10.0 では、ワークフローに対するすべてのランタイムメタデータが共通のテーブルのセットに保存されます。ワークフローメタデータテーブルをドロップするには <code>infacmd wfs DropTables</code> を使用します。
終了	ヒューマンタスクを停止し、タスクに関連付けられているレコードをワークフローの次のステージに渡します。 ヒューマンタスクを停止し、タスクに関連付けられているレコードをワークフローの次のステージに渡すには <code>infacmd wfs BulkComplete</code> を使用します。

infacmd isp コマンド

以下の表に、新しい `infacmd isp` コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
GetSystemLogDirectory	システムログディレクトリを印刷します。
ListNodeRoles	ドメイン内のノードのすべてのロールを一覧表示します。
UpdateNodeRole	ドメイン内のノードのロールを更新します。ノードのサービスロールまたは計算ロールを有効または無効にすることができます。

以下の表に、`infacmd isp` コマンドオプションの変更内容を示します。

コマンド	説明
AddDomainNode	次のオプションが追加されました。 - EnableServiceRole - EnableComputeRole これらのオプションを使用して、ノードをドメインに追加したときに、ノード上にあるサービスロールまたは計算ロールを有効にします。
AddNodeResource	次のオプションが追加されました。 - ResourceCategory。このオプションを使用して、リソースが PowerCenter 統合サービス用であることを指定します。 - ResourceValue。このオプションは、将来使用するために予約されています。
CreateConnection	Hadoop 接続の接続オプションが追加されました。

コマンド	説明
DisableNodeResource、 EnableNodeResource、 ListNodeResources、 RemoveNodeResource	ResourceCategory オプションが追加されました。このオプションを使用して、リソースが PowerCenter 統合サービス用であることを指定します。
GetLog	次のサービスタイプが ServiceType オプションに追加されました。 - ES。電子メールサービス - SCH。スケジューラサービス - RMS。リソースマネージャサービス
GetNodeName	Outputfile オプションが追加されました。このオプションをファイル名およびパスと使用して、ノード名をファイルに印刷します。
ListNodes	NodeRole オプションが追加されました。このオプションを使用して、特定のロールが設定されたノードを一覧表示します。
ListServices	次のサービスタイプが ServiceType オプションに追加されました。 - ES。電子メールサービス - SCH。スケジューラサービス - RMS。リソースマネージャサービス
PurgeMonitoring	NumDaysToRetainDetailedStat オプションが追加されました。このオプションを使用して、データ統合サービスが統計をパージするときに、詳細な履歴データがモデルリポジトリ内に保持される日数を設定します。
UpdateMonitoringOptions	DetailedStatisticsExpiryTime オプションが追加されました。このオプションを使用して、データ統合サービスがモデルリポジトリから詳細な統計をいつパージするかを指定します。 valid StatisticsExpiryTime の値が変更されました。最小値は 0 です。最大値は 366 です。デフォルトは 180 です。

infacmd mrs コマンド

以下の表に、新しい infacmd mrs コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CheckInObject	チェックアウトされている 1 つのオブジェクトをチェックインします。オブジェクトがモデルリポジトリにチェックインされます。
CreateFolder	モデルリポジトリでプロジェクト内にフォルダを作成します。
CreateProject	デフォルトのモデルリポジトリにプロジェクトを作成します。
DeleteFolder	モデルリポジトリ内のプロジェクトからフォルダを削除します。
DeleteProject	モデルリポジトリのプロジェクトを削除します。
ListCheckedOutObjects	ユーザーがチェックアウトしたオブジェクトを一覧表示します。
ListFolders	指定したプロジェクトフォルダパス内に含まれている、すべてのフォルダの名前を一覧表示します。
ListLockedObjects	ユーザーがロックしたオブジェクトのリストを表示します。

コマンド	説明
PopulateVCS	モデルリポジトリをバージョン管理システムと同期します。
ReassignCheckedOutObject	チェックアウトされたオブジェクトの所有権を別のユーザーに再割り当てします。
RenameFolder	プロジェクト内のフォルダの名前を変更します。
UndoCheckout	モデルリポジトリオブジェクトのチェックアウトを元に戻します。
UnlockObject	ユーザーがロックしたモデルリポジトリオブジェクトをロック解除します。

以下の表に、infacmd mrs コマンドオプションの変更内容を示します。

コマンド	説明
UpdateServiceOptions	次のオプションが追加されました。 <ul style="list-style-type: none"> - VCS.Host - VCS.Port - VCS.User - VCS.Password - VCS.Type - VCS.MRSPath これらのオプションを使用して、モデルリポジトリのバージョン管理を設定します。

infacmd ms コマンド

以下の表に、新しい infacmd ms コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
GetRequestLog	マッピングログを指定されたファイルに書き込みます。
UpgradeMappingParameterFile	Informatica の以前のバージョンで作成したパラメータファイルを、Informatica バージョン 10.0 で有効なパラメータファイルの形式に変換します。

以下の表に、更新された infacmd ms コマンドオプションの説明を示します。

コマンド	説明
RunMapping	次のオプションが追加されました。 <ul style="list-style-type: none"> - OptimizationLevel。データ統合サービスがマッピングに適用する最適化方式を制御します。 - PushdownType。データ統合サービスがマッピングに適用するプッシュダウンタイプを制御します。 - CustomProperties。Informatica グローバルスターサポートの要求により、マッピングにカスタムプロパティを定義します。

infacmd rms コマンド

新しい infacmd rms プログラムではリソースマネージャサービスを管理します。

以下の表に、新しい infacmd rms コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
ListComputeNodeAttributes	指定されたノードまたはすべてのノードに対する、オーバーライドされた計算ノード属性を一覧表示します。
ListServiceOptions	リソースマネージャサービスのプロパティを一覧表示します。
SetComputeNodeAttributes	指定したノードの計算ノード属性をオーバーライドします。
UpdateServiceOptions	リソースマネージャサービスのプロパティを更新します。

infacmd sch コマンド

新しい infacmd sch プログラムではスケジューラサービスを管理します。

以下の表に、新しい infacmd sch コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CreateSchedule	1 つ以上のデプロイされたマッピングまたはワークフローオブジェクトに対するスケジュールを作成します。
DeleteSchedule	1 つ以上のスケジュールを削除します。
ListSchedule	スケジュールどおりに実行されているジョブのリストを返します。
ListServiceOptions	スケジューラサービスに設定されているプロパティのリストを返します。
ListServiceProcessOptions	スケジューラサービスプロセスに設定されているプロパティのリストを返します。
PauseAll	すべてのスケジュールを一時停止します。
PauseSchedule	1 つのスケジュールを一時停止します。
ResumeAll	すべてのスケジュールを再開します。
ResumeSchedule	スケジュールを再開します。
UpdateSchedule	1 つのスケジュール設定を更新します。
UpdateServiceOptions	スケジューラサービスのプロパティを更新します。
UpdateServiceProcessOptions	スケジューラサービスプロセスのプロパティを更新します。
アップグレード	スケジューラサービス設定をアップグレードします。

infacmd wfs コマンド

以下の表に、新しい infacmd wfs コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
BulkComplete	ヒューマンタスクの操作を停止し、タスクに関連付けられているレコードをワークフローの次のステージに渡します。
CreateTables	ワークフローのランタイムメタデータを保存するデータベーステーブルを作成します。
DropTables	ワークフローのランタイムメタデータを保存しているデータベーステーブルをドロップします。
ListMappingPersistedOutputs	コマンドで指定されたマッピングタスクインスタンスについて、保持されている各マッピング出力の状態を一覧表示します。
SetMappingPersistedOutputs	指定したマッピングインスタンスについて、保持されている各マッピング出力を更新するか、保持されているマッピング出力に NULL 値を設定します。
UpgradeParameterFile	パラメータファイルをアップグレードして、ファイル内のパラメータ値が最新リリースで有効であることを確認します。コマンド実行時に、更新するパラメータファイルを特定し、有効なパラメータ値を含むターゲットファイルを指定します。

以下の表に、更新された infacmd wfs コマンドオプションの説明を示します。

コマンド	説明
abortWorkflow	RuntimeInstanceID オプションの名前が InstanceId に変更されました。このオプションは、強制終了するワークフローインスタンスを特定します。 Wait オプションは削除されました。
cancelWorkflow	RuntimeInstanceID オプションの名前が InstanceId に変更されました。このオプションは、キャンセルするワークフローインスタンスを特定します。 Wait オプションは削除されました。
recoverWorkflow	RuntimeInstanceID オプションの名前が InstanceId に変更されました。このオプションはリカバリするワークフローインスタンスを特定します。 Wait オプションは削除されました。
startWorkflow	ParameterSet オプションが追加されました。 このオプションで、ワークフローでランタイムに使用されるパラメータセットの名前を指定します。

infasetup コマンド

以下の表に、新しい SystemLogDirectory オプションの説明を示します。

コマンド	説明
DefineDomain DefineGatewayNode DefineWorkerNode UpdateGatewayNode UpdateWorkerNode	SystemLogDirectory オプションが追加されました。このオプションを使用して、ログのカスタムの場所を指定します。

詳細については、『*Informatica 10.0 コマンドリファレンス*』を参照してください。

接続性

ここでは、バージョン 10.0 の新しい接続機能について説明します。

PowerCenter の接続性

ここでは、バージョン 10.0 の新しい接続機能について説明します。

Microsoft SQL Server へのネイティブ接続

バージョン 10.0 では、Microsoft SQL Server の DataDirect ODBC ドライバを使用して、UNIX マシンからの Microsoft SQL Server データベースへのネイティブ接続を設定できます。

Microsoft SQL Server データベースへの接続に使用する接続プロバイダを選択できます。選択できる接続タイプは、ODBC または OLE DB です。統合サービスを有効にすれば、データソース名 (DSN) を使用して接続することもできます。また、NTLM 認証を使用して、Microsoft SQL Server に接続するユーザーを認証することもできます。

ネイティブ接続の設定の詳細については、『*Informatica 10.0 インストール&環境設定ガイド*』の付録「UNIX からのデータベースへの接続」を参照してください。

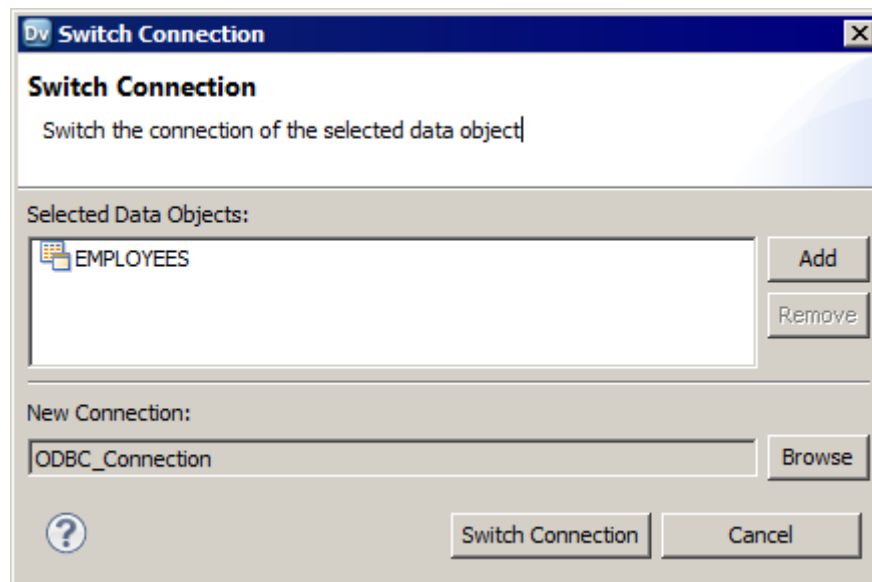
接続の切り替え

バージョン 10.0 では、Developer tool で、リレーショナルデータオブジェクトまたはカスタマイズデータオブジェクトの接続を切り替えて、別のリレーショナルデータベース接続を使用できます。接続を切り替えると、Developer tool により、データオブジェクトに基づくすべての読み取り、書き込み、およびルックアップトランスフォーメーションで、データオブジェクトの接続の詳細が更新されます。データベースを別のデータベースに移行するときに接続を切り替えたり、新しい接続を使用するために既存のマッピングを同時に更新したりできます。

接続は、次の接続タイプのいずれかに切り替えることができます。

- IBM DB2
- Microsoft SQL Server
- ODBC
- Oracle

次の図は、接続の切り替えに使用するダイアログボックスを示しています。



詳細については、『Informatica 10.0 Developer tool ガイド』の「接続」を参照してください。

データ型

ここでは、バージョン 10.0 の新しいデータ型機能について説明します。

Informatica のデータ型

ここでは、Developer tool での新しいデータ型について説明します。

Decimal データ型

バージョン 10.0 では、一部のトランスフォーメーションは、最大 38 桁の精度を持つ Decimal データ型をサポートします。Decimal データ型の精度は 1~38 桁で、位取りは 0~38 です。その他のトランスフォーメーションは、最大 28 桁の精度を持つ Decimal データ型をサポートします。

最大 38 桁精度の Decimal データ型をサポートするトランスフォーメーションでは、ターゲットに 38 桁を上回る精度が含まれ、高精度が有効になっている場合、データ統合サービスが結果を倍精度浮動小数点数として保存します。

詳細については、『Informatica 10.0 Developer tool ガイド』の付録「データ型リファレンス」を参照してください。

Decimal 38 データ型のマッピング

バージョン 10.0 では、28 桁より大きく 38 桁以下の精度を持つ、高精度モードのフィールドを含むマッピングを実行する場合、データ統合サービスは最大 38 桁の精度を処理します。アップグレード後、精度が 38 桁よりも大きい場合も、動作に変更はありません。

次の表で、適用可能な精度に基づくアップグレード後の動作について説明します。

精度	旧バージョン	10.0
28 より大きく 38 以下	Double	Decimal
38 より大きい	Double	Double

例えば、次のようなソースデータがあります。12345678901234567890123456789012345678

旧バージョンでは、ターゲットに次のデータが含まれます。1234567890123450000000000000000000000000

10.0 では、ターゲットに次のデータが含まれます。12345678901234567890123456789012345678

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer tool ガイド*』の付録「データ型リファレンス」を参照してください。

Timestamp with Time Zone

バージョン 10.0 では、ほとんどのトランスフォーメーションが Timestamp with Time Zone データ型をサポートします。Timestamp with Time Zone は、タイムゾーンのオフセットまたはタイムゾーンのリージョン名が含まれる、Timestamp データ型のバリエーションです。

Timestamp with Time Zone データ型を Developer tool にインポートすると、関連付けられたトランスフォーメーションデータ型は timestampWithTZ になります。timestampWithTZ の精度は 36 で、位取りは 9 です。Timestamp with Time Zone の置換値の範囲は、-12:00 < UTC < +14:00 です。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer Tool ガイド*』の付録「データ型リファレンス」を参照してください。

Timestamp with Local Time Zone

バージョン 10.0 では、Timestamp with Local Time Zone データ型は、タイムスタンプデータの別のバリエーションです。このデータ型では、タイムゾーンデータがデータベースのタイムゾーンに正規化されます。

Timestamp with Local Time Zone データ型を Developer tool にインポートすると、関連付けられたトランスフォーメーションのデータ型が date/time になります。Timestamp with Local Time Zone データ型は Timestamp に相当するため、このデータ型はほとんどのトランスフォーメーションで暗黙的にサポートされます。

Timestamp (6) with Local Time Zone の精度は 26、位取りは 6 です。これは、date/time (29,9) トランスフォーメーションデータ型にマップされます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer tool ガイド*』の付録「データ型リファレンス」を参照してください。

マニュアル

ここでは、バージョン 10.0 の Informatica のマニュアルで追加または更新されたガイドについて説明します。Informatica のマニュアルには次の新しいガイドが付属しています。

Informatica アクセシビリティガイド

バージョン 10.0 では、『*Informatica アクセシビリティガイド*』に、Informatica Administrator、Informatica Analyst、Informatica Developer のアクセシビリティ情報とキーボードショートカットが記載されています。『*Informatica アクセシビリティガイド*』は、Administrator ツール、Analyst ツール、および Developer tool のオンラインヘルプに含まれています。

詳細については、『*Informatica 10.0 アクセシビリティガイド*』を参照してください。

Informatica Big Data 管理セキュリティガイド

バージョン 10.0 では、『*Informatica Big Data 管理セキュリティガイド*』に、Big Data 管理と Hadoop のセキュリティ情報が記載されています。

以前は、Big Data と Hadoop のセキュリティ情報は、『*Informatica Big Data Edition ユーザーガイド*』に記載されていました。

次のガイドは、PowerCenter のマニュアルから削除されています。

PowerCenter データプロファイリングガイド

バージョン 10.0 では、『*PowerCenter データプロファイリングガイド*』は PowerCenter のマニュアルから削除されています。

Informatica におけるプロファイリングと検出の詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

Informatica Big Data Edition ユーザーガイド

バージョン 10.0 では、『*Informatica Big Data Edition ユーザーガイド*』は PowerCenter のマニュアルから削除されています。

Informatica における Big Data の詳細については、『*Informatica 10.0 Big Data 管理ユーザーガイド*』を参照してください。

Informatica Big Data Edition インストール&環境設定ガイド

バージョン 10.0 では、『*Informatica Big Data Edition インストール&環境設定ガイド*』は PowerCenter のマニュアルから削除されています。

Informatica における Big Data のインストールと環境設定の詳細については、『*Informatica 10.0 Big Data 管理のインストール&環境設定ガイド*』を参照してください。

ドメイン

ここでは、バージョン 10.0 の新しいドメイン機能について説明します。

ノード

バージョン 10.0 では、各ノードに、ノードの目的を定義するロールがあります。

ノードは次のロールを持つことができます。

サービスロール

サービスロールが指定されたノードは、アプリケーションサービスを実行できます。ノードでサービスロールを有効にすると、サービスマネージャはそのノードで実行されるように設定されたアプリケーションサービスをサポートします。

計算ロール

計算ロールが指定されたノードは、リモートアプリケーションサービスが要求する計算を実行できます。ノードで計算ロールを有効にすると、サービスマネージャはそのノードでコンテナを管理します。コンテナとは、メモリリソースと CPU リソースの割り当てのことです。アプリケーションサービスは、コンテナを使用して、ノード上でリモートで計算を実行します。例えば、データ統合サービスグリッドに、サービスロールが指定されたノード 1 と計算ロールが指定されたノード 2 が含まれているとします。ノード 1 で実行されるデータ統合サービスプロセスは、ノード 2 上のコンテナ内でマッピングを実行します。

サービスロールと計算ロール

両方のロールが指定されたノードは、アプリケーションサービスを実行できるほか、それらのサービスの計算をローカルに実行できます。

デフォルトでは、各ゲートウェイと作業ノードはサービスロールと計算ロールの両方が有効になります。ジョブを計算ロールが指定されたリモートノードで実行するように設定されているデータ統合サービスグリッドにノードが割り当てられている場合は、ノードロールを更新できます。ノードをデータ統合サービスプロセスの実行専用にするには、サービスロールだけを有効にします。ノードをデータ統合サービスマッピングの実行専用にするには、計算ロールだけを有効にします。

ノードロールの詳細については、『*Informatica 10.0 Administrator ガイド*』の章「ノード」を参照してください。

Informatica Administrator

ここでは、バージョン 10.0 の新しい Administrator 機能について説明します。

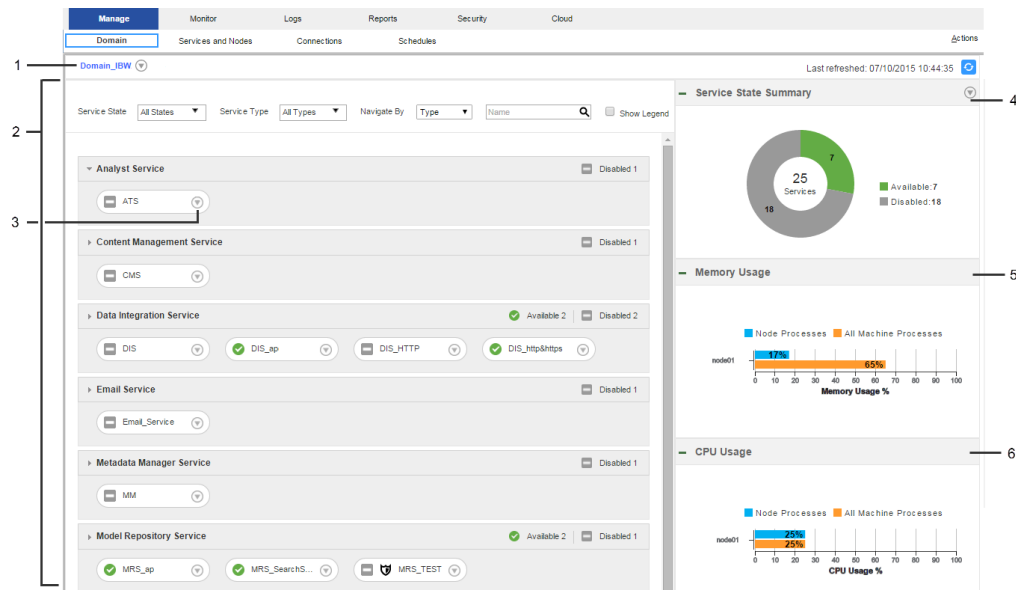
[管理] タブ

バージョン 10.0 では、[管理] タブに次の新機能が含まれます。

[ドメイン] ビュー

[ドメイン] ビューには、ドメインのステータスの概要が示されます。ドメインに関する情報の表示、ドメインに関する履歴情報の表示、一般的なアクションの実行ができます。

次の図は【管理】タブ上の【ドメイン】ビューを示しています。



1. 【ドメインアクション】メニュー
2. 【コンテンツ】パネル
3. 【オブジェクトアクション】メニュー
4. サービスの状態の概要
5. メモリ使用状況インジケータ
6. CPU 使用量インジケータ

【ドメイン】ビューには、次の情報が含まれます。

- ドメイン。ドメインのプロパティ、ログ、および過去のイベントを表示できます。ドメインをシャットダウンすることもできます。
- 【コンテンツ】パネル。ドメイン内のサービス、ノード、およびグリッドを表示します。オブジェクトのプロパティ、イベント、ログ、および依存性を表示できます。サービスの有効化、無効化、およびリサイクル、ならびにノードのシャットダウンもできます。
- フィルタ。ドメインのコンテンツを状態またはサービスタイプでフィルタリングできます。ドメインオブジェクトを検索したり、タイプ、グリッド、またはフォルダ別にドメインオブジェクトを参照することもできます。
- サービスの状態の概要。ドメイン内のサービスの数と状態を表示するドーナツグラフ。
- リソース使用状況パネル。ドメイン内のオブジェクトのメモリおよび CPU の使用量を、マシン上のすべてのプロセスのメモリおよび CPU の使用量と比較する棒グラフ。
- コマンド履歴。Administrator ツールから送信されたサービスライフサイクルコマンドが表示されます。ライフサイクルコマンドには、有効化、無効化、およびリサイクルなどがあります。
- 【履歴】ビュー。選択した時間範囲における履歴ステータス、リソースの使用状況、およびドメイン内のイベントを表示します。
- 【イベント】パネル。ドメイン内のサービスおよびノードのイベントを表示します。

ナビゲータ

ドメインナビゲータの【サービスとノード】ビューで、ノード、アプリケーションサービス、およびグリッドの検索とフィルタリングができます。オブジェクトを名前前で検索できます。また、ナビゲータに表示するオブジェクトのリストをオブジェクトタイプでフィルタリングすることもできます。

【スケジュール】ビュー

スケジュールの表示および管理は【スケジュール】ビューで実行できます。

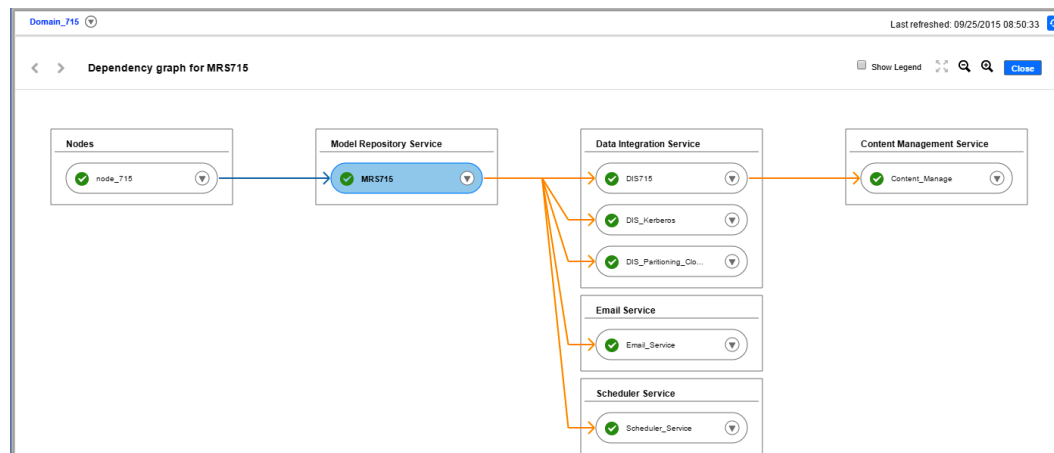
詳細については、『*Informatica 10.0 管理者ガイド*』を参照してください。

依存関係グラフ

バージョン 10.0 では、**依存関係グラフ**には、[管理] タブの【ドメイン】ビューからアクセスします。以前は、**依存関係グラフ**には、【ドメイン】タブの【サービスとノード】ビューからアクセスしていました。

依存関係グラフには、新しいユーザーインターフェースと追加機能があります。

次の図は、新しい**依存関係グラフ**を示しています。



依存関係グラフでは、次のタスクを実行できます。

- サービス、ノード、またはグリッドのプロパティを表示する。
- サービスのログを表示する。
- ノードをシャットダウンする。
- サービスを有効化または無効化する。
- サービスをリサイクルする。
- サービスのダウンストリーム依存性を無効化する。サービスに依存する 1 つ以上のサービスを無効化できます。ダウンストリームプロセスが強制終了モードで無効化されます。
- サービスのダウンストリーム依存性をリサイクルする。サービスに依存する 1 つ以上のサービスをリサイクルできます。ダウンストリームプロセスが強制終了モードでリサイクルされます。

詳細については、『*Informatica 10.0 管理者ガイド*』を参照してください。

監視

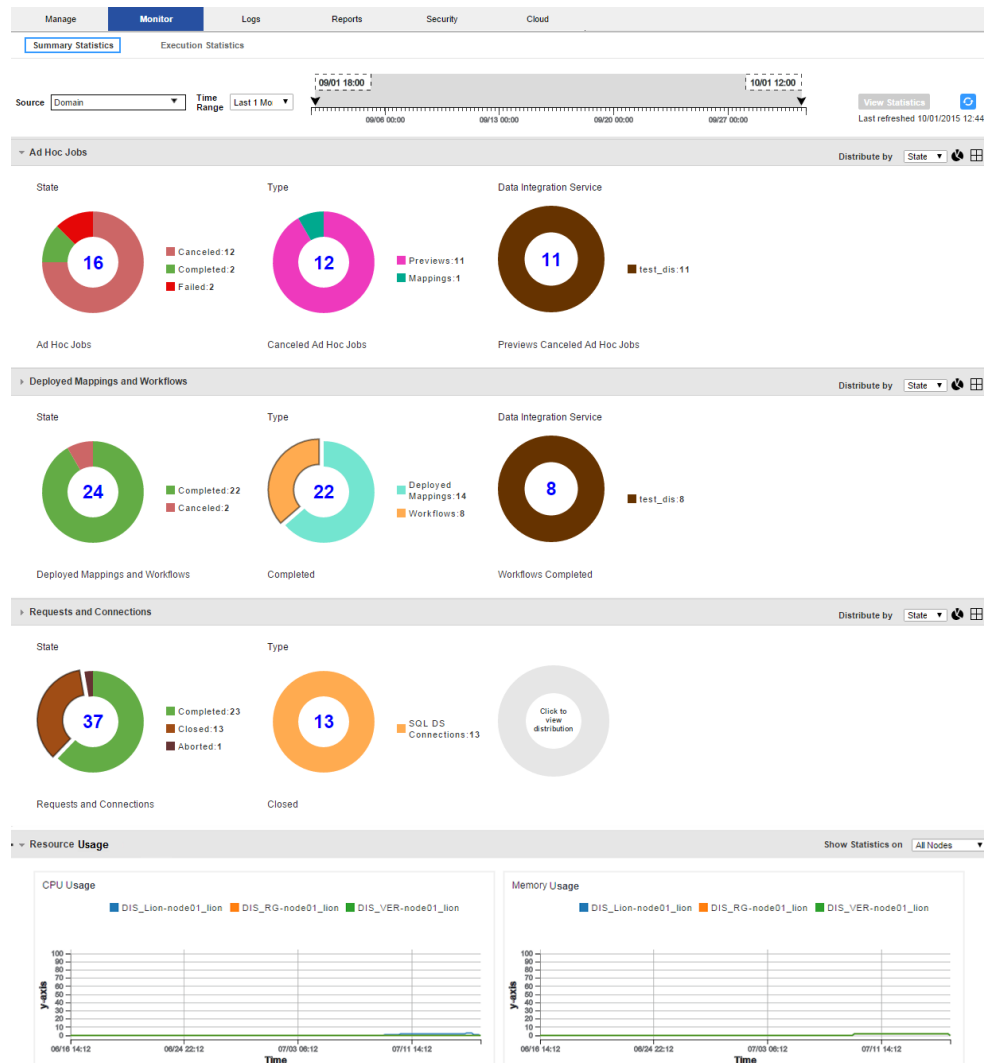
バージョン 10.0 では、Administrator ツールの【監視】タブが【モニタ】タブという名前に変更されました。

【モニタ】タブには、次の新機能があります。

【モニタ】タブのビュー

【モニタ】タブには、次のビューが含まれています。

- **【サマリ統計】** ビュー。選択した時間範囲のリソースの使用状況、オブジェクトの配布、およびオブジェクトの状態が表示されます。
次の図は、**【サマリ統計】** ビューを示しています。



- **【実行統計】** ビュー。以前のバージョンの【監視】タブにあったナビゲータとビューが含まれています。

【実行統計】ビューのビュー

ワークフローのアドホックマッピングジョブ、デプロイ済みのマッピングジョブ、およびマッピングオブジェクトに関する統計を表示できます。

[コンテンツ] パネルでこれらのオブジェクトのいずれかを選択すると、[詳細] パネルに次の新しいビューが表示されます。

- **[サマリ統計]** ビュー。ソースおよびターゲットのスループットとリソースの使用状況に関する情報が表示されます。
次の図は、マッピングジョブの **[サマリ統計]** ビューを示しています。

MappingLookup

Properties

Summary Statistics

Detailed Statistics

▼ Throughput

Source	Rows	Average Rows/Sec	Bytes	Average Bytes/Sec	First Row Accessed	Dropped Rows
Read_CUSTOMER_DE...	4001	4001	392098	392098	09/04/2015 12:30:17	0

Target	Rows	Average Rows/Sec	Bytes	Average Bytes/Sec	Rejected Rows
Write_CUSTOMER_DETAILS...	4001	4001	424106	424106	0
Write_Flat_File_Data_Object	4001	4001	16004	16004	0

▼ Resource Usage

Executing Node	node_715
Average CPU Usage	0 %
Average Memory Usage	53 MB

- **[詳細統計]** ビュー。個別のローカルプロセスで実行されるジョブのうち、その実行期間が 1 分を超えるものについて表示されます。ソースおよびターゲットのスループットとリソースの使用状況のグラフが表示されます。
次の図は、ワークフローのマッピングジョブの **[詳細統計]** ビューを示しています。



設定

[監視設定] (旧称: [グローバル設定]) には、[詳細履歴データの保持] という新しいオプションがあります。このオプションは、分単位の統計が期限切れになった場合、その統計をいつモデルリポジトリからパージするのかを設定するために使用します。デフォルトは 14 です。最小値は 1 です。最大値は 14 です。

詳細については、『*Informatica 10.0 管理者ガイド*』の「監視」を参照してください。

Informatica Analyst

ここでは、バージョン 10.0 の新しい Analyst ツール機能について説明します。

アセットのバージョン管理

バージョン 10.0 では、モデルリポジトリがバージョン管理システムと統合されていると、バージョン管理システムによって、開発チームの他のメンバによる上書きからアセットが保護されます。アセットのチェックアウトとチェックイン、アセットのチェックアウトの取り消しなどを実行できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Analyst ツールガイド*』の「モデルリポジトリ」を参照してください。

プロファイル

ここでは、プロファイルとプロファイル結果用の新しい Analyst ツール機能について説明します。

カラムプロファイル

バージョン 10.0 では、[ライブラリ] ワークスペースのデータオブジェクトを右クリックして、カラムプロファイルを作成できます。データオブジェクトとフォルダのオプションは、プロファイルウィザードで自動的に更新されます。

カラムプロファイルの詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst のカラムプロファイル」の章を参照してください。

カラムプロファイル結果

バージョン 10.0 では、カラムプロファイル結果に次の新しい機能と拡張機能が含まれます。

- サマリビューと詳細ビューにプロファイル結果が表示されます。サマリビューには、プロファイル結果の概要がグリッド形式で表示されます。詳細ビューには、カラム固有の情報が詳細に表示されます。
- プロファイル結果のサマリビューと詳細ビューに異常値が表示されます。異常値とは、期待される値の範囲に収まらないカラムのパターン、値、頻度のことです。
- 最新のプロファイル実行、履歴プロファイル実行、統合済みプロファイル実行のプロファイル結果を表示します。履歴プロファイル実行のプロファイル結果を表示できます。統合済みプロファイル実行を実行すると、プロファイルのカラムごとに最新の結果を表示できます。
- 2つのプロファイル実行のプロファイル結果を比較し、サマリビューおよび詳細ビューでプロファイル結果を表示します。
- JSON または XML データソースを使用したプロファイルのプロファイル結果が表示されます。
- プロファイルおよびプロファイルのカラムに、ビジネス用語、タグ、およびコメントが追加されます。

カラムプロファイル結果の詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst のカラムプロファイル結果」の章を参照してください。

Decimal データ型

バージョン 10.0 では、最大 38 桁の精度を持つ Decimal データ型のカラムのあるプロファイルを作成できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

JDBC 接続

バージョン 10.0 では、IBM DB2 UDB、Microsoft SQL Server、および Oracle データ型に対するプロファイリングウェアハウス接続として JDBC 接続を指定できます。プロファイリングウェアハウス接続として JDBC 接続を使用し、カラムプロファイル、ルールプロファイル、ドメイン検出、およびスコアカードを作成できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

オブジェクトのバージョン管理

バージョン 10.0 では、モデルリポジトリがバージョン管理システムと統合されると、バージョン管理システムは、オブジェクトが開発チームの他のメンバーによって上書きされないように保護します。プロファイルのチェックアウトとチェックイン、プロファイルのチェックアウトの取り消し、およびプロファイルの履歴バージョンの表示と復元を行うことができます。

オブジェクトのバージョン管理の詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst のカラムプロファイル」の章を参照してください。

ルールとフィルタ

バージョン 10.0 では、カラムプロファイルの作成時に、ルールとフィルタを追加または編集できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

スコアカードフィルタ

バージョン 10.0 では、スコアカードのメトリックに対してフィルタを作成および適用できます。

スコアカードフィルタの詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst のスコアカード」の章を参照してください。

Informatica Developer

ここでは、バージョン 10.0 の新しい Informatica Developer 機能について説明します。

DDL の生成と実行

Informatica 10.0 では、DDL スクリプトを生成、実行して、データベース内にテーブルを作成できます。Developer tool を使用すると、モデルリポジトリ内の 1 つ以上のリレーショナルデータオブジェクトに対して DDL スクリプトを生成し、その DDL スクリプトを実行して、ターゲットデータベースでテーブルを作成または置換できます。データベースにターゲットがすでに存在する場合は、そのターゲットを削除して再作成できます。

詳細については、『*Informatica Developer tool ガイド*』の「物理データオブジェクト」を参照してください。

実行時のリレーショナルメタデータおよびフラットファイルメタデータの生成

バージョン 10.0 では、データソースに対するメタデータ変更を許可する、動的なソースとターゲットを含むマッピングを作成できます。ソースまたはターゲットが動的になるように設定すると、データ統合サービスは、リレーショナルデータソースおよびフラットファイルデータソースに対するメタデータ変更を実行時に解釈できます。

データ統合サービスは、次の機能を実行できます。

- カラムの順序が物理データオブジェクトのカラムの順序とは異なるソースから、データを読み取ります。
- 物理データオブジェクトに存在しないソース内の追加カラムからデータを読み取ります。
- ソースには存在しないが物理データオブジェクトには存在するカラムのデータを無視します。

リレーショナルデータソースの場合、データ統合サービスはデータベーススキーマから直接メタデータ変更を取得します。

フラットファイルデータソースの場合、データ統合サービスが、データファイルヘッダ、コントロールファイルからメタデータ変更を取得するように、またはデータソース内のカラムからメタデータ変更を自動的に取得するように、フラットファイルデータオブジェクトを設定する必要があります。フラットファイルデータオブジェクトの【詳細】タブで、**ランタイムカラム名の生成** プロパティを設定します。

マッピングを開発するときは、実行時にデータソースから直接データオブジェクトカラムを取得するように、読み取りおよび書き込みトランスフォーメーションを設定します。ルックアップソースから直接データオブジェクトカラムを取得するように、ルックアップトランスフォーメーションを設定することもできます。トランスフォーメーションの【データオブジェクト】タブで、**実行時に、データソースからデータオブジェクトのカラムを取得します** を選択します。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer マッピングガイド*』の「動的マッピング」を参照してください。

PowerCenter からのインポート

バージョン 10.0 では、次の PowerCenter トランスフォーメーションを Developer tool にインポートできません。

- ノーマライザトランスフォーメーション
- シーケンスジェネレータトランスフォーメーション
- アップデートストラテジトランスフォーメーション

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer マッピングガイド*』を参照してください。

Monitoring ツール

バージョン 10.0 では、Monitoring ツールに次の新機能があります。

【実行統計】ビュー

バージョン 9.6.1 の Monitoring ツールにあったナビゲータとビューが含まれています。

【サマリ統計】ビュー

選択した時間範囲のリソースの使用状況、オブジェクトの配布、およびオブジェクトの状態が表示されます。

【実行統計】ビューのビュー

【実行統計】ビューでは、ワークフローのアドホックマッピングジョブ、デプロイ済みのマッピングジョブ、およびマッピングオブジェクトに関する詳細な情報を確認できます。[コンテンツ] パネルでこれらのオブジェクトのいずれかを選択すると、[詳細] パネルに次の新しいビューが表示されます。

- **【サマリ統計】ビュー。**ソースおよびターゲットのスループットとリソースの使用状況に関する情報が表示されます。

次の図は、マッピングジョブの【サマリ統計】ビューを示しています。

MappingLookup						
Properties						
Summary Statistics						
Detailed Statistics						
▼ Throughput						
Source	Rows	Average Rows/Sec	Bytes	Average Bytes/Sec	First Row Accessed	Dropped Rows
Read_CUSTOMER_DE...	4001	4001	392098	392098	09/04/2015 12:30:17	0
Target						
Write_CUSTOMER_DETAILS...	Rows	Average Rows/Sec	Bytes	Average Bytes/Sec	Rejected Rows	
Write_CUSTOMER_DETAILS...	4001	4001	424106	424106	0	
Write_Flat_File_Data_Object	4001	4001	16004	16004	0	
▼ Resource Usage						
Executing Node			node_715			
Average CPU Usage			0 %			
Average Memory Usage			53 MB			

- **【詳細統計】ビュー。**ソースおよびターゲットのスループットとリソースの使用状況のグラフが表示されます。個別のローカルプロセスで実行されるジョブのうち、その実行期間が1分を超えるものについて表示されます。

次の図は、ワークフローのマッピングジョブの【詳細統計】ビューを示しています。



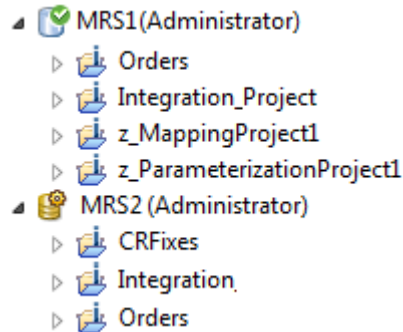
詳細については、『*Informatica 10.0 Developer tool ガイド*』の章「データの表示」を参照してください。

オブジェクトのバージョン管理

バージョン 10.0 では、モデルリポジトリをバージョン管理システムに統合すると、開発チームの他のメンバがオブジェクトを上書きすることを防止できます。オブジェクトのチェックアウトとチェックイン、オブジェクトのチェックアウトの取り消し、およびオブジェクトの履歴バージョンの表示とリストアップが可能です。

Developer tool では、バージョン管理されたモデルリポジトリは、緑色のチェックマークがついた白色のアイコンで示されます。

次の図は、バージョン管理システムと統合された MRS1 と、統合されていない MRS2 の、2 つの接続されたリポジトリを示しています。



詳細については、『*Informatica 10.0 Developer tool ガイド*』の章「モデルリポジトリ」を参照してください。

アプリケーションの物理データオブジェクト

バージョン 10.0 では、アプリケーションに物理データオブジェクトを追加できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer tool ガイド*』の章「アプリケーションデプロイメント」を参照してください。

プロファイル

ここでは、プロファイルとプロファイル結果用の新しい Developer tool 機能について説明します。

JSON および XML データソースを使用したカラムプロファイル

バージョン 10.0 では、次の方法で、JSON および XML データソースを使用したカラムプロファイルを作成できます。

- フラットファイル。この方法では、テキストファイルを作成して、JSON または XML ファイルのソースの場所をファイルに追加する必要があります。テキストファイルを使用してフラットファイルデータオブジェクトを作成します。フラットファイルデータオブジェクトにカラムプロファイルを作成します。
- 複合ファイルリーダー。この方法では、JSON または XML ソースファイルに複合ファイルデータオブジェクトを作成し、その複合ファイルデータオブジェクトを使用してカラムプロファイルを作成します。
- HDFS 内の JSON または XML ファイル。この方法では、HDFS との接続を作成して、HDFS 内の JSON または XML ファイルに複合ファイルデータオブジェクトを作成する必要があります。その複合ファイルデータオブジェクトを使用してカラムプロファイルを作成できます。
- フォルダ内の JSON または XML ファイル。この方法では、すべての JSON または XML ファイルをフォルダに統合する必要があります。HDFS との接続を作成し、フォルダを使用して複合ファイルデータオブジェクトを作成します。複合ファイルデータオブジェクトにカラムプロファイルを作成できます。

JSON または XML データソースを使用したカラムプロファイルの詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「データオブジェクトプロファイル」の章を参照してください。

Decimal データ型

バージョン 10.0 では、最大 38 桁の精度を持つ Decimal データ型のカラムのあるプロファイルを作成できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

外部キーのキューレーション

バージョン 10.0 では、推測されたカラムリレーションを拒否すると、関連するすべてのリレーションも拒否されます。

キューレーションの詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「エンタープライズ検出結果」を参照してください。

JDBC 接続

バージョン 10.0 では、IBM DB2 UDB、Microsoft SQL Server、および Oracle データ型に対するプロファイリングウェアハウス接続として JDBC 接続を指定できます。JDBC 接続を使用して、カラムプロファイル、ルールプロファイル、ドメイン検出、スコアカードを作成できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

オブジェクトのバージョン管理

バージョン 10.0 では、モデルリポジトリがバージョン管理システムと統合されると、バージョン管理システムは、オブジェクトが開発チームの他のメンバーによって上書きされないように保護します。プロファイルのチェックアウトとチェックイン、プロファイルのチェックアウトの取り消し、およびプロファイルの履歴バージョンの表示と復元を行うことができます。

オブジェクトのバージョン管理の詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「Informatica Developer のプロファイル」の章を参照してください。

Informatica Development Platform

ここでは、Informatica Development Platform の新機能および機能拡張について説明します。

Informatica コネクタツールキット

バージョン 10.0 では、Informatica コネクタツールキットで次の機能を使用できます。

Java データ型

ネイティブデータ型を Java データ型にマップできます。ネイティブデータ型をマップするとき、データソースからの読み取りに最適な Java データ型を選択し、ターゲットデータベースまたはアプリケーションへの書き込みに最適なネイティブデータ型を選択してください。

複数のネイティブメタデータオブジェクト

1 つのアダプタに、複数のネイティブメタデータ定義を定義できます。例えば、リレーショナルデータソース内のテーブル、ビュー、およびシノニムに対して、さまざまなネイティブメタデータオブジェクトを作成できます。

ソートおよび選択

データソースから特定の順序でデータを取得するために、アダプタに対して Sort 文のサポートを定義できます。データソースからの読み取り時に、アダプタが Select 文をサポートするかどうかも定義できます。Informatica コネクタツールキットを使用して、アダプタに対して次の Select 文を定義できます。

- すべて選択
- 任意選択
- 個別選択
- 最初の行の選択
- 最後の行の選択

パーティション

パーティションタイプを指定して、アダプタがデータの読み書きを行うときに使用するパーティションロジックを実装できます。

アダプタに対して、次のいずれかまたはすべてのパーティションタイプを指定できます。

- 動的。データ統合サービスは、データソースからのパーティション情報に基づいて、実行時にパーティション数を決定します。
- 静的。データ統合サービスは、ユーザーが指定したパーティション情報（パーティション数、キー範囲パーティション化など）に基づいて、パーティション化ロジックを決定します。

パラメータ化

ネイティブメタデータオブジェクトの読み取りおよび書き込み機能の属性でサポートされるのは、「すべてパラメータ化」なのか「部分的にパラメータ化」なのかを指定できます。ネイティブメタデータオブジェクトの読み取りおよび書き込み機能の属性には、実行時に、値またはパラメータを割り当てることができます。

データ操作の前/後

読み取り/書き込み操作の前または後に実行できる、実行前タスクおよび実行後タスクを実装できます。例えば、書き込み操作の前にターゲットテーブルを切り詰める機能を実装できます。

メッセージ

アダプタの設計時または実行時に発生する例外を処理するメッセージを作成できます。メッセージウィザードを使用して、メッセージを追加、編集、または削除できます。必要に応じて、メッセージファイルをローカライズできます。

C 実行時

アダプタのランタイム動作を C で実装できます。データソースに対してアダプタが読み書きを実行する方法を定義するコードを C で記述できます。

拒否ファイル

ターゲットによって拒否されたデータを処理するために、拒否ファイルのサポートを実装できます。

詳細については、『*Informatica Development Platform 10.0 Informatica コネクタツールキット Developer ガイド*』を参照してください。

マッピング

ここでは、バージョン 10.0 の新しいマッピング機能について説明します。

Informatica マッピング

ここでは、バージョン 10.0 の新しいマッピング機能について説明します。

動的マッピング

バージョン 10.0 では、ソース、ターゲット、トランスフォーメーションロジックを、定義したパラメータおよびルールに基づいて実行時に変更するように、動的マッピングを設定できます。トランスフォーメーションが受信するポート、トランスフォーメーションロジックで使用するポート、トランスフォーメーショングループ間で確立するリンクを設定できます。動的マッピングにより、データソースに対する頻繁なメタデータの変更を管理したり、スキーマが異なる各データソースのマッピングロジックを再利用したりすることができます。

動的マッピングには、設定可能な次の機能が含まれています。

- 動的ソースを使用すると、実行時にフラットファイルおよびリレーショナルソース内のメタデータを変更できます。フラットファイルまたはリレーショナルソース内のメタデータが変更されると、読み取りおよびルックアップトランスフォーメーションは、実行時に、データオブジェクトのカラムを動的ソースから直接取得できます。
- トランスフォーメーションには、定義したルールに基づいて変更可能なカラムを受信する動的ポートを含めることができます。動的ポートで、カラムを含めるルールまたは除外するルールを定義できます。次のトランスフォーメーションには動的ポートを含めることができます。
 - アグリゲータ
 - 式
 - フィルタ
 - ジョイナ
 - ルックアップ
 - ランク
 - ルータ
 - シーケンスジェネレータ
 - ソータ
 - アップデートストラテジ
- ジョイナトランスフォーメーション、ルックアップトランスフォーメーション、および式トランスフォーメーションでポートセレクトを定義できます。ポートセレクトは、トランスフォーメーションロジックで参照できる、ポートの順序リストです。トランスフォーメーションに移動するポートをフィルタリングして、結合条件、ルックアップ条件、または動的式でポートを参照するように、ポートセレクトを設定します。
- 動的式は、式トランスフォーメーションで定義できます。動的式は、結果を動的出力ポートに返します。動的式で、ポートセレクトまたは動的ポートを参照できます。動的ポートまたはポートセレクトを参照すると、動的ポートまたはポートセレクトの各ポートで 1 回、動的式が実行されます。式トランスフォーメーションは、式インスタンスごとに個別の出力ポートを生成します。
- 動的ターゲットを使用すると、実行時に、フラットファイルおよびリレーショナルターゲットのカラムを定義できます。書き込みトランスフォーメーションは、関連付けられたデータオブジェクトまたはマッピングフローに基づいて、実行時にターゲットのカラムを生成できます。リレーショナルターゲットである書き込みトランスフォーメーションは、実行時にテーブルの作成や置換を行うこともできます。
- トランスフォーメーションは、実行時に接続するポートをポリシーまたはパラメータに基づいて決定する、グループ間のリンクを持つことができます。
- ソースとターゲット、ポートのルール、およびトランスフォーメーションプロパティは、パラメータに基づいて実行時に変更できます。

動的マッピングの詳細については、『*Informatica 10.0 Developer マッピングガイド*』の「動的マッピング」を参照してください。

マッピング出力

バージョン 10.0 では、マッピングの実行から集計値を返すマッピング出力を作成できます。マッピング出力は、マッピングで処理される各行のフィールド値または式の集計結果です。

例えば、トランスフォーメーションが受け取るソース行から注文フィールドの合計金額を集計するマッピング出力を設定できます。マッピング出力の値をレジスタで保持することができます。保持されているマッピング出力の値は、マッピングタスクの入力パラメータに割り当てることができます。また、マッピング出力をワークフロー変数に割り当てることができます。

マッピング出力はマッピングの【出力】ビューで作成します。マッピングの式トランスフォーメーションで集計の式を定義します。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer マッピングガイド*』を参照してください。

マッピングタスクの入力

バージョン 10.0 では、保持されているマッピング出力を、同じマッピングタスクの入力パラメータに割り当てることができます。保持されているマッピング出力とは、データ統合サービスが前のワークフロー実行からリポジトリに保存した値です。例えば、前のワークフロー実行から最後の注文の日付を保持することができます。マッピングタスクの【入力】ビューでは、保持されている値を入力パラメータに割り当てることができます。入力パラメータをフィルタ式に含めると、最後の日付以前の行がスキップされます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer ワークフローガイド*』の「マッピングタスク」を参照してください。

マッピングタスクの出力

バージョン 10.0 では、マッピング出力をワークフロー変数に割り当てることができます。現在のユーザー定義のマッピング出力およびユーザー定義の永続的なマッピング出力をワークフロー変数に割り当てます。現在の値は、実行中のワークフローでマッピングタスクによって生成された値です。保持されているマッピング出力は、前の実行からリポジトリに保持された値です。また、システム定義のマッピング出力をワークフロー変数に割り当てることも可能です。マッピングタスクの【出力】ビューでマッピング出力をワークフロー変数に割り当てます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer ワークフローガイド*』の「マッピングタスク」を参照してください。

最適化方式

Informatica バージョン 10.0 では、最適化方式に関して次の新機能が利用できます。

グローバル述部最適化方式

データ統合サービスでは、グローバル述部最適化方式を適用できます。グローバル述部最適化方式を適用する場合、データ統合サービスは、マッピングのフィルタを分割、移動、削除、または簡素化します。データ統合サービスにより、パイプライン内のソースに可能な限り近くなるようにデータがフィルタリングされます。また、マッピングで生成される述部式の推論も行います。

詳細については、『*Informatica 10.0 パフォーマンス調整ガイド*』の章「マッピングの最適化」を参照してください。

プッシュダウンの最適化方式

ソースデータベースにトランスフォーメーションロジックをプッシュするには、プッシュダウンタイプを選択する必要があります。ソースデータベースに対して、トランスフォーメーションロジックをプッシュダウンしない、その一部をプッシュダウンする、またはそのすべてをプッシュダウンすることを選択できます。プッシュダウンタイプのマッピング最適化プランを確認することもできます。

マッピングに更新方式トランスフォーメーションが含まれている場合は、プッシュダウンの最適化を設定する前に、マッピングのプッシュダウン互換性を確認する必要があります。

詳細については、『*Informatica 10.0 開発者マッピングガイド*』の章「プッシュダウンの最適化」を参照してください。

データシップ結合最適化方式

異なるデータベース内にある 2 つの異なるサイズのテーブルのデータをマッピングで結合する必要がある場合、データ統合サービスはデータシップ結合最適化方式を適用できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 パフォーマンス調整ガイド*』の章「マッピングの最適化」を参照してください。

マッピング最適化プラン

マッピング最適化プランでは、最適化方式がマッピングのパフォーマンスに与える影響を確認できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 パフォーマンス調整ガイド*』の「マッピングの最適化」の章を参照してください。

パラメータ

Informatica バージョン 10.0 では、パラメータに関して次の新機能が利用できます。

パラメータの使用

パラメータを使用して、接続、SQL ステートメント、Sort By および Group By ポートリスト、式変数、ランタイム環境などのプロパティを追加で指定できます。

パラメータタイプ

動的マッピングにおいて、式、入力リンクセット、ポート、ポートリスト、リソース、およびソートリストの各パラメータタイプを使用できます。

マッピング、マップレットおよびトランスフォーメーション間でのパラメータのバインド

【**パラメータ**】 タブの 【**インスタンス値**】 カラムで、マッピングパラメータをマップレットパラメータまたはトランスフォーメーションパラメータにバインドできます。また、マップレットパラメータをトランスフォーメーションパラメータにバインドすることも可能です。

パラメータを別のパラメータにバインドすると、実行時、そのパラメータにより別のパラメーターがオーバーライドされます。既存のパラメータからマッピングまたはマップレットパラメータを作成し、それらのパラメーターをバインドする操作は、1 回の手順で行えます。オーバーライドするパラメータの 【**マッピングパラメータとして公開**】 オプションまたは 【**マップレットパラメータとして公開**】 オプションをクリックします。

マッピングからのパラメータを、読み取りまたは書き込み論理データオブジェクトマッピングのパラメータにバインドすることが可能です。

パラメータセット

ワークフローまたはマッピング用のパラメータセットを定義できます。パラメータセットとは、一連のパラメータとその値を含んだモデルリポジトリ内のオブジェクトで、実行時に使用します。パラメータセットは、マッピング、マッピングタスク、またはワークフローで使用します。アプリケーションをデプロイする場合、アプリケーションに 1 つ以上のパラメータセットを追加できます。複数のアプリケーションに 1 つのパラメータセットを追加し、デプロイすることができます。

ランタイム環境パラメータ

パラメータを使用してランタイム環境を設定できます。文字列パラメータをマッピングレベルで設定します。デフォルト値は 【**ネイティブ**】 または 【**Hadoop**】 に設定します。マッピング用のランタイム環境を選択するときには、【**パラメータの割り当て**】 をクリックし、設定したパラメータを選択します。

パラメータの詳細については、『*Informatica 10.0 開発者マッピングガイド*』の章「マッピングパラメータ」を参照してください。

パーティション化されたマッピング

Informatica バージョン 10.0 では、パーティション化されたマッピングに関して、次の新機能が利用できません。

パーティション化されたトランスフォーメーション

追加のトランスフォーメーションでパーティション化がサポートされます。パーティション化に対応したマッピングに次のトランスフォーメーションが含まれている場合、データ統合サービスは、複数のスレッドを使用してデータを変換できます。

- アドレスバリデータ
- 大文字小文字変換プログラム
- 分類子
- 比較
- データマスキング
- データプロセッサ
- ディシジョン
- キージェネレータ
- ラベラ
- 一致（識別子の一致分析に対応するように設定されている場合）
- マージ
- ノーマライザ
- パーサー
- シーケンスジェネレータ
- ソータ
- 標準化
- 加重平均

キャッシュのパーティション化

アグリゲータ、ジョイナ、またはランクトランスフォーメーションの場合、トランスフォーメーションのキャッシュパーティション化中のパフォーマンスが最適化されるように複数のキャッシュディレクトリを設定できます。管理者がデータ統合サービス用に複数のキャッシュディレクトリを設定している場合は、CacheDir システムパラメータのデフォルト値を使用できます。CacheDir システムパラメータのデフォルト値をオーバーライドし、トランスフォーメーションに固有の複数のキャッシュディレクトリを設定することもできます。

ソータトランスフォーメーションの場合、トランスフォーメーションのキャッシュパーティション化中のパフォーマンスが最適化されるように複数の作業ディレクトリを設定できます。管理者がデータ統合サービス用に複数の一時ディレクトリを設定した場合は、TempDir システムパラメータのデフォルト値を使用できます。TempDir システムパラメータのデフォルト値をオーバーライドし、トランスフォーメーションに固有の複数のディレクトリを設定することもできます。

マッピングでのデータのソート

データ統合サービスは、ソート順を設定するマッピング用のパーティションを作成できます。ソート済みフラットファイルソース、ソート済みリレーショナルソース、またはソータトランスフォーメーションを使用したマッピングでのソート順を設定できます。データ統合サービスがマッピングにパーティションポイントを追加すると、データが再配布され、マッピング内ですでに設定されている順序が失われることがあります。パーティション化されたマッピングで順序を保持するには、トランスフォーメーションの詳細

細プロパティで、式、Java、シーケンスジェネレータ、SQL、および書き込みトランスフォーメーションが行の順序を保持することを指定する必要があります。

パーティション化されたフラットファイルターゲット

フラットファイルターゲットに複数のスレッドが書き込むときのパフォーマンスを最適化するには、フラットファイルデータオブジェクト用に複数の出力ファイルディレクトリを設定します。管理者がデータ統合サービス用に複数のターゲットディレクトリを設定した場合は、TargetDir システムパラメータのデフォルト値を使用できます。TargetDir システムパラメータのデフォルト値をオーバーライドし、フラットファイルデータオブジェクトに固有の複数の出力ファイルディレクトリを設定することもできます。

トランスフォーメーションの推奨並行処理値

マッピングの最大並行処理値をオーバーライドする場合、特定のトランスフォーメーションの推奨並行処理値を定義できます。データ統合サービスは、トランスフォーメーションをパーティション化できる場合、そのトランスフォーメーションパイプラインステージのスレッド数として、推奨並行処理値を使用します。ユーザーは、マッピングまたはデータ統合サービス用に定義された最大並行処理値より小さい推奨並行処理値を定義できます。多数のポートが含まれるトランスフォーメーションや複雑な計算を実行するトランスフォーメーションでは、パフォーマンスを最適化するために推奨並行処理値を定義することができます。

パーティション化されたマッピングの詳細については、『*Informatica 10.0 開発者マッピングガイド*』の章「パーティション化されたマッピング」を参照してください。

ランタイムプロパティ

バージョン 10.0 では、以下のランタイムプロパティをマッピングに対して設定できます。

エラー時の停止

リーダー、ライタ、またはトランスフォーメーションのスレッドで致命的でないエラーが発生した場合にマッピングを停止します。デフォルトでは無効になっています。

ターゲットコミット間隔

コミットの基本になる行数です。データ統合サービスは、処理するターゲット行の数およびターゲットテーブルの制約に基づいてデータをコミットします。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer マッピングガイド*』を参照してください。

ターゲットロード順序の制約

バージョン 10.0 では、行がロードされてマッピング内のターゲットインスタンス全体にコミットされる順序を制御する制約を設定できます。マッピングの【プロパティ】ビューに表示される【ロード順序】タブで制約を定義します。各制約は、ロード順序を制限するプライマリターゲット名およびセカンダリターゲット名で構成されています。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer マッピングガイド*』を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 10.0 の新しい Metadata Manager 機能について説明します。

Tableau リソース

バージョン 10.0 では、Tableau リソースを作成し、Tableau Server からメタデータを抽出するように Tableau リソースを設定できます。

Tableau リソースの作成および設定についての詳細は、『*Informatica 10.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』の「Business Intelligence リソース」を参照してください。

サポートされているメタデータソースバージョンの詳細については、Informatica My Support ポータルの *PCAE Metadata Manager XConnect Support* 製品可用性マトリックスを参照してください：
<https://mysupport.informatica.com/community/my-support/product-availability-matrices>

データリネージュの改良点

バージョン 10.0 では、データリネージュ図に次の改良点が含まれます。

PowerCenter マッピングのサマリリネージュ

PowerCenter マッピングが含まれるデータリネージュ図を表示した場合、Metadata Manager はデフォルトでマッピングのサマリビューを表示します。サマリビューには、データリネージュ図内のマッピングの入力と出力が表示されますが、トランスフォーメーションロジックは表示されません。サマリビューでは、データリネージュ図の複雑さが軽減されます。また、Metadata Manager でのデータリネージュ図の生成時間が短縮されます。

マッピング内のすべてのトランスフォーメーションロジックを表示するには、データリネージュ図のツールバーで「**詳細に切り替え**」をクリックします。次の図は、「**詳細に切り替え**」ボタンを示しています。



詳細ビューからサマリビューに戻るには、図を更新します。

オブジェクトのフィルタリング

データリネージュ図に表示するオブジェクトをフィルタリングできます。個々のオブジェクト、または特定のクラスのすべてのオブジェクトをフィルタリングできます。例えば、データリネージュ図からすべてのビジネス用語を除外することができます。適用した任意のフィルタを削除できます。

パフォーマンスの向上

Metadata Manager は、ファイルベースのグラフデータベースを使用して、データリネージュのリンク情報をソートして取得します。結果として、Metadata Manager は以前のバージョンよりも短時間でデータリネージュ図を生成します。

バージョン 10.0 にアップグレードすると、グラフデータベースが作成され、データリネージュのリンク情報が Metadata Manager リポジトリからグラフデータベースにコピーされます。グラフデータベースファイルの格納に使用する場所を設定できます。

図の作成のキャンセル

データリネージュ図の生成に長い時間がかかっている場合、図の作成をキャンセルできます。

データリネージュ図の詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager ユーザーガイド*』の「データリネージュに関する作業」を参照してください。Metadata Manager リネージュグラフの位置の設定の詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「Metadata Manager サービス」を参照してください。

メタデータカタログビュー

バージョン 10.0 では、メタデータカタログに、メタデータを参照するための 2 つの異なるビュー（リストビューとツリービュー）が含まれます。リストビューを使用して、リソース、論理グループ、メタデータオブジェクトを個別にドリルダウンします。ツリービューを使用して、メタデータオブジェクトを階層的に表示します。

メタデータカタログビューの詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager ユーザーガイド*』を参照してください。

Cloudera Navigator リソースの Impala クエリ

バージョン 10.0 では、Metadata Manager は、Cloudera Hadoop クラスタから Impala クエリテンプレートとクエリ実行を抽出できます。

Cloudera Navigator リソースの Impala クエリの詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』の「データベース管理リソース」を参照してください。

Informatica Platform リソースのパラメータ

バージョン 10.0 では、Informatica Platform リソースで、マッピングパラメータを使用するマッピングのメタデータを抽出できます。

Informatica Platform 10.x アプリケーションにパラメータを使用したマッピングが含まれている場合、パラメータセットからのパラメータ値を使用するように Metadata Manager を設定できます。Informatica Platform リソースの作成時に、パラメータセットをマッピングに割り当てます。Metadata Manager は、パラメータ値を使用して、マッピングオブジェクトおよびデータリネージュを表示します。

Informatica Platform リソースの詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』の章「データ統合リソース」を参照してください。

最近の履歴

バージョン 10.0 では、Metadata Manager で、メタデータカタログに表示するオブジェクトの履歴が保持されます。最近の履歴を使用して、以前表示したオブジェクトにすばやく戻ります。ログアウトすると、最近の履歴が消去されます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager ユーザーガイド*』の「メタデータの表示」の章を参照してください。

関連するカタログオブジェクトおよび影響のサマリのフィルタおよびソート

バージョン 10.0 では、メタデータオブジェクトまたはビジネス用語の詳細を表示する場合、関連するカタログオブジェクトおよび影響のサマリのフィルタとソートができます。オブジェクトクラス、オブジェクト名、またはパスを使用して、フィルタリングとソートができます。また、メタデータソースタイプを使用して、影響のサマ리를フィルタリングできます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager ユーザーガイド*』の「メタデータの表示」の章を参照してください。

影響のサマリ内のセッションタスクインスタンス

バージョン 10.0 では、影響のサマリに、PowerCenter セッションタスクインスタンスのリストが表示されます。PowerCenter マッピングに影響を与える、または PowerCenter マッピングの影響を受けるオブジェクトのメタデータの詳細を表示すると、影響のサマリにセッションタスクインスタンスのリストが表示されます。

メタデータオブジェクトをエクスポートし、影響のサマリを含めた場合、エクスポートファイルの影響のサマリセクションに、関連付けられたセッションタスクインスタンスもリストされます。

セッションタスクインスタンスがデータフローに影響する可能性があるため、影響のサマリにセッションタスクインスタンスのリストが表示されます。セッションタスクインスタンスは、ソースまたはターゲットの接続情報をオーバーライドできます。また、ソースからのデータの抽出に使用するデフォルトのクエリを上書きする SQL クエリをセッションタスクインスタンスに含めることもできます。

影響のサマリの詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager ユーザーガイド*』の「メタデータの表示」を参照してください。

アプリケーションおよびデータリネージュプロパティ

バージョン 10.0 では、新しいアプリケーションおよびデータリネージュプロパティを Metadata Manager imm.properties ファイルで設定できます。

以下の表に、imm.properties に含まれている新しい Metadata Manager アプリケーションプロパティを示します。

プロパティ	説明
xconnect.custom.failLoadOnErrorCount	カスタムリソースのロード時に Metadata Manager サービスで許容される最大エラー数。この数を超えるエラーが発生すると、リソースのロードに失敗します。
xconnect.io.print.batch.errors	カスタムリソースのロード時に Metadata Manager サービスが 1 回のバッチでメモリキャッシュおよび mm.log ファイルに書き込むエラーの数。

以下の表に、imm.properties に含まれる新しいデータリネージュプロパティを示します。

プロパティ	説明
Lineage.PreCompute.ElementsInSingleTransaction	Metadata Manager サービスがリネージュグラフの作成中に単一トランザクション内で処理できるグラフ要素（辺や頂点など）の最大数。
Lineage.PreCompute.FetchBlockSize	Metadata Manager サービスが、Metadata Manager ウェアハウスからデータリネージュリンク情報を取得してグラフデータベースにデータを追加するときに、1 つのブロックで処理するレコード数。

imm.properties ファイルの詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』の付録「Metadata Manager のプロパティファイル」を参照してください。

PowerCenter

ここでは、バージョン 10.0 の新しい PowerCenter 機能について説明します。

高可用性

バージョン 10.0 では、PowerCenter 統合サービスおよび PowerCenter Client により、可用性の高い NameNode を使用する Hadoop クラスタに対して、読み取りと書き込みが可能です。

詳細については、『*Informatica 10.0 PowerExchange for Hadoop PowerCenter 用ユーザーガイド*』の章「Hadoop 構成での PowerExchange」を参照してください。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.0 の新しい PowerExchange アダプタ機能について説明します。

PowerExchange Adapters for Informatica

ここでは、バージョン 10.0 の新しい Informatica アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for DataSift

バージョン 10.0 では、DataSift データオブジェクトの読み取り操作プロパティをパラメータ化できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for DataSift 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Facebook

バージョン 10.0 では、Facebook データオブジェクトの読み取り操作プロパティをパラメータ化できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Facebook 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Greenplum

バージョン 10.0 では、PowerExchange for Greenplum で次のタスクを実行できます。

- Greenplum データオブジェクトに対して動的パーティションを設定する。パーティション情報を設定することにより、実行時に作成されるパーティションの数がデータ統合サービスで確認できるようになります。
- Greenplum データオブジェクトの操作プロパティをパラメータ化し、実行時、書き込みデータオブジェクトの操作プロパティをオーバーライドする。
- Max_Line_Length 整数を使用して、gpload に渡される XML トランスフォーメーションデータの行の最大長を指定する。

詳細について『*Informatica PowerExchange for Greenplum 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for HBase

バージョン 10.0 では、HBase データオブジェクトの読み取りおよび書き込み操作プロパティをパラメータ化できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for HBase 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for HDFS

バージョン 10.0 では、複合ファイルデータオブジェクトの読み取りおよび書き込み操作プロパティをパラメータ化できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for HDFS 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for JD Edwards EnterpriseOne

バージョン 10.0 では、PowerExchange for JD Edwards EnterpriseOne を使用して、JD Edwards EnterpriseOne ソースからデータを抽出し、JD Edwards EnterpriseOne ターゲットにデータを書き込みます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for JD Edwards EnterpriseOne 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for LDAP

バージョン 10.0 では、PowerExchange for LDAP を使用して、LDAP ディレクトリサーバーのデータの読み取りおよび書き込みを行えます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for LDAP 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for LinkedIn

バージョン 10.0 では、LinkedIn データオブジェクトの読み取り操作プロパティをパラメータ化できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for LinkedIn 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM

バージョン 10.0 では、PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM を使用して、Microsoft Dynamics CRM のデータの読み取りおよび書き込みを行えます。Microsoft Dynamics CRM ビジネスエンティティを読み取りおよび書き込みデータオブジェクトとしてインポートし、マッピングを作成および実行することにより、Microsoft Dynamics CRM エンティティのデータの抽出やロードを行えます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Netezza

バージョン 10.0 では、PowerExchange for Netezza で次のタスクを実行できます。

- PowerExchange for Netezza を使用して、Netezza データベースのデータの読み取りおよび書き込みを行う。大量のデータを処理するには、PowerExchange for Netezza を使用します。
- Secure Sockets Layer (SSL) プロトコルを使用して、Netezza クライアントと Netezza サーバー間のセキュア接続を設定する。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Netezza 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for OData

バージョン 10.0 では、PowerExchange for OData を使用して、OData サービスを介してデータを公開する OData プロバイダからデータを読み取ることができます。OData データオブジェクトに対してプロファイルを実行することもできます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for OData 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for SAP NetWeaver

バージョン 10.0 の場合、PowerExchange for SAP NetWeaver で次のタスクを実行できます。

- Developer tool を使用して、SAP テーブルデータオブジェクト、およびデータオブジェクトの読み取り操作を作成する。マッピングで読み取り操作をソースまたはルックアップとして追加した後、そのマッピングを実行し、SAP テーブルのデータの読み取りまたはルックアップを行えます。
- SAP テーブルからデータを読み取るときに、キー範囲パーティション化を設定する。パラメータを使用して、実行時に接続およびテーブルデータオブジェクトの読み取り操作プロパティを変更することもできます。
- SAP テーブルデータオブジェクトに対してプロファイルを実行できます。
- SQL データサービスを作成するときに、SAP テーブルデータオブジェクトの読み取り操作を仮想テーブルとして追加する。
- オープンハブ宛先または InfoSpoke 経由で、SAP BW システムからデータを読み取ることができます。
- SAP BW システムからデータを読み取るときに、動的または固定のパーティション化を設定する。パラメータを使用して、実行時に接続および BW OHS 抽出データオブジェクトの読み取り操作プロパティを変更することもできます。

- SAP BW システムにデータを書き込む。3.x または 7.x のデータソースを使用して、SAP BW システムにデータを書き込むことができます。
- SAP BW システムにデータを書き込むときに、動的パーティション化を設定する。パラメータを使用して、実行時に接続および BW ロードデータオブジェクトの書き込み操作プロパティを変更することもできます。
- Administrator ツールで SAP 接続を作成する。
- Developer tool を使用して SAP BW のデータを読み取りまたは書き込みするときに、Administrator ツールで SAP BW サービスを作成する。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for SAP NetWeaver 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API

バージョン 10.0 では、PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API で次のタスクを実行できます。

- PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API を使用して、Teradata テーブルから大量のデータを読み取ることができます。
- 更新システムオペレータを使用して、Teradata データベーステーブルに対し、挿入、更新、更新/挿入、および削除の各操作を実行する。
- Secure Sockets Layer (SSL) プロトコルを使用して、Developer tool と Teradata データベース間のセキュア接続を設定する。
- Teradata Parallel Transporter API データオブジェクトに対して動的パーティション化を設定する。パーティション情報を設定することにより、実行時に作成されるパーティションの数がデータ統合サービスで確認できるようになります。
- Teradata データオブジェクトの操作プロパティをパラメータ化し、実行時に読み取りおよび書き込みデータオブジェクトの操作プロパティをオーバーライドする。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Twitter

バージョン 10.0 では、Twitter および Twitter ストリーミングデータオブジェクトの読み取り操作プロパティをパラメータ化できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Twitter 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst

バージョン 10.0 では、Web コンテンツ-Kapow Katalyst データオブジェクトの読み取り操作プロパティをパラメータ化できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

参照データ

ここでは、バージョン 10.0 の新しい参照データ機能について説明します。

分類子モデル

バージョン 10.0 では、Developer tool で、分類子モデルの次のアクションを実行できます。

- 参照データ値とラベル値をデータソースから分類子モデルにインポートする。

- 分類子モデルで、設定可能なオプションをリボンから選択する。例えば、[ラベルの管理] オプションを選択し、分類子モデルでラベル値を追加、削除、または更新するためのオプションにアクセスします。
- 分類子モデルの検索フィルタでワイルドカード文字を使用する。
- 1 行のデータを分類子モデルに追加する。
- 1 回の操作で、複数行の分類子モデルデータにラベル値を適用する。

詳細については、『*Informatica 10.0 参照データガイド*』の「分類子モデル」の章を参照してください。

確率モデル

バージョン 10.0 では、Developer tool で、確率モデルの次のアクションを実行できます。

- 1 回の操作で、複数の参照データ値にラベルを割り当てる。
- ラベル値と参照データ値をデータソースから確率モデルにインポートする。
- 選択したラベルを使用する参照データ値の現在の数を表示する。

バージョン 10.0 では、Developer tool の 1 つ以上のページに確率モデルのデータ行が表示されます。ページには、100 の参照データ行が含まれます。モデル内で前のページまたは次のページに移動できます。また、指定したページ番号に移動できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 参照データガイド*』の「確率モデル」の章を参照してください。

ルール仕様

ここでは、バージョン 10.0 のルール仕様に関する新機能について説明します。

リンクされたアセット

バージョン 10.0 では、Analyst ツールの設計ワークスペースには、ルール仕様にリンクしたアセットへのハイパーリンクが表示されます。例えば、ルール仕様内で別のルールアセットを使用した場合、ワークスペースにそのルールアセットへのリンクが表示されます。また、[デザイン] ワークスペースには、ルール仕様から生成したすべてのルールへのハイパーリンクが表示されます。

ルール仕様のプロパティで、[アセット] の下にハイパーリンクが表示されます。

詳細については、『*Informatica 10.0 ルール仕様ガイド*』の「ルール仕様の設定」を参照してください。

マップレットルール

バージョン 10.0 では、マップレットルールを以下の方法で使用できます。

- 指定する期間中に有効なルール仕様を設定できます。この期間の開始と終了を示す日付と時刻を指定します。ルール仕様からコンパイルしたマップレットルールにもこの期間が適用されます。この期間以外でマップレットルールを読み取るマッピングを実行すると、マッピングは失敗します。

詳細については、『*Informatica 10.0 ルール仕様ガイド*』の「ルール仕様の設定」を参照してください。

- マップレットルールを、ルール文内の条件およびアクションに追加できます。ルール仕様からの入力をマップレットルールの入力ポートに接続します。または、定数値をマップレットルールの入力として使用します。マップレットルールからの出力ポートを、条件またはアクションからの出力として選択します。

詳細については、『*Informatica 10.0 ルール仕様ガイド*』の「ルール仕様の設定」を参照してください。

ルール文

バージョン 10.0 では、ルール文で次の操作を実行できます。

- ルールセット内でのルール文の移動またはコピー、ルール文の別のルールセットへの移動またはコピー。ルール文を別のルール仕様内のルールセットに移動またはコピーできます。別のルール仕様にルール文を移動またはコピーする場合、ルール文で使用している入力移動またはコピーされます。また、この操作では、ルール文をテストするために入力および保存されたすべてのテストデータが移動またはコピーされます。
- ルール仕様内の別の場所、および別のルール仕様へのルールセットの移動またはコピー。別のルール仕様にルールセットを移動またはコピーする場合、ルールセットで使用している入力とテストデータが移動またはコピーされます。
- あるルール仕様から別のルール仕様へのテストデータの移動またはコピー。
- ルール文内で条件を設定する場合に、CONTAINS 演算子を選択する。この演算子を使用して、入力カラムのデータ値に関する次の情報を確認します。
 - 入力したデータ値が入力カラムに含まれているかどうかを確認します。
 - 別の入力カラムの同じ行に含まれているデータ値が入力カラムに含まれているかどうかを確認します。
- 入力した値リスト内の入力値を検索するようにルール文を設定する。
- ルールセットには、定義済みルール文が含まれます。これは、前のルール文でデータが生成されなかった場合に実行するアクションを指定するものです。デフォルトでは、ルールセットがアクションを実行しないようにルール文で指定されています。ルール文内のアクションは、更新できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 ルール仕様ガイド*』の「ルール文の設定」を参照してください。

ユーザーインタフェースの改良点

バージョン 10.0 では、設計ワークスペースに、ルール仕様のユーザーインタフェースに関する次の改良点が含まれます。

- ルールセットの入力ビューを選択した場合、ルールセットに含まれない入力はワークスペースに表示されなくなります。
- ワークスペースキャンバス内でルール仕様をドラッグできます。
- マウスホイールを使用して、ルール仕様のズームインとズームアウトができます。
- ルール仕様のツリー構造を展開するまたは折りたたむことで、ルール仕様のさまざまな部分を表示したり、非表示にしたりできます。
- テキストの説明を入力に追加できます。
- 子ルールセットの出力を読み取るルールセットでは、入力リストに子ルールセット名が表示されます。
- 無効なルールセットは、有効なルールセットとは異なる色で表示されます。
- 一部の設定可能なオプションに新しい名前が付けられています。

詳細については、『*Informatica 10.0 ルール仕様ガイド*』を参照してください。

バージョン管理

バージョン 10.0 では、バージョン管理されたモデルリポジトリ内でルール仕様を使用できます。バージョン管理を使用するモデルリポジトリからルール仕様を開いた場合、Analyst ツールは、バージョン管理プロパティをルール仕様に適用します。設計ワークスペースの【編集】オプションを使用して、リポジトリからルール仕様をチェックアウトします。設計ワークスペースの【保存して完了】オプションを使用して、ルール仕様をチェックインします。チェックアウト操作を取り消すこともできます。

以前のバージョンのルール仕様を参照し、編集モードおよび読み取り専用モードで前のバージョンに戻すことができます。古いバージョンのルール仕様を読み取り専用モードで参照するとき、最新バージョンにのルール仕様に適用されるすべての読み取り専用操作を実行できます。読み取り専用モードでルール仕様を参照および

検証できます。ルール仕様にテストデータが含まれる場合、ルール仕様を読み取り専用モードでテストできます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Analyst ガイド*』の「モデルリポジトリ」を参照してください。

セキュリティ

ここでは、バージョン 10.0 の新しいセキュリティ機能について説明します。

グループ

バージョン 10.0 では、Informatica に Operator というデフォルトグループが追加されています。Operator グループを使用して、Operator ロールが割り当てられている複数のユーザーを管理します。

詳細については、『*Informatica 10.0 セキュリティガイド*』を参照してください。

特権

バージョン 10.0 では、次の新しい特権が含まれています。

モデルリポジトリサービス特権

【**チームベース開発の管理**】 特権を使用すると、モデルリポジトリ管理者は、オブジェクトロックの管理とバージョン管理されたオブジェクトの管理に関連するアクションを実行できます。

スケジューラサービス特権

【**スケジューラ**】 特権グループでは、スケジュールとスケジュール済みのジョブに対してユーザーが実行できるアクションを決定します。

詳細については、『*Informatica 10.0 セキュリティガイド*』の付録「コマンドラインの特権および権限」を参照してください。

ロール

バージョン 10.0 では、Informatica にオペレータというカスタムロールが含まれます。オペレータロールには、アプリケーションサービスを管理、スケジュール、および監視する特権が含まれます。

詳細については、『*Informatica 10.0 セキュリティガイド*』を参照してください。

トランスフォーメーション言語関数

ここでは、バージョン 10.0 のトランスフォーメーション言語関数の新機能について説明します。

Informatica 関数

ここでは、バージョン 10.0 における Informatica 関数の新しい機能について説明します。

CaseFlag

バージョン 10.0 では、CaseFlag オプションで、GREATEST、LEAST、IN、および INDEXOF 関数の NULL 値がサポートされていません。

以前は、CaseFlag オプションで NULL 値がサポートされていました。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーション言語リファレンス*』の「関数」を参照してください。

TO_DECIMAL38 関数

バージョン 10.0 では、TO_DECIMAL38 関数を使用して、文字列値または数値を 10 進型の値に変換できます。この関数は、0 から 38 の精度と位取りを持つ 10 進型の値を返します。

詳細については、『*Informatica 10.0 トランスフォーメーション言語リファレンス*』を参照してください。

トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.0 の新しいトランスフォーメーション機能について説明します。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.0 の Informatica トランスフォーメーションの新しい機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、次のトランスフォーメーションプロパティを設定するようにパラメータを定義できます。

- Geocode データ型
- グローバル最大フィールド長
- 最大結果カウント
- 最適化レベル
- 無効なアドレスの標準化

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』の「アドレスバリデータトランスフォーメーション」を参照してください。

不良レコードの例外トランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、パラメータを使用して、トランスフォーメーションで不良レコードを特定するために使用する上方しきい値と下方しきい値を指定できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer マッピングガイド*』の「マッピングパラメータ」を参照してください。

データプロセッサトランスフォーメーション

ここでは、新しいデータプロセッサトランスフォーメーションの機能について説明します。

Data Transformation ライブラリ

Data Transformation ライブラリには、幅広い業界メッセージング標準に対応する事前定義されたトランスフォーメーションコンポーネントが含まれています。データプロセッサトランスフォーメーションはライブラリオブジェクトを使用して、業界標準のメッセージングタイプを XML 出力ドキュメントなどの別の書式に変換したり、XML 入力を業界メッセージ出力に変換したりします。

ライブラリオブジェクトには、パーサー、シリアライザ、および業界標準の入力および特定のアプリケーションメッセージを XML またはその他の出力に変換するように事前設定された XML スキーマなどの、数多くのオブジェクトやコンポーネントが含まれています。一部のライブラリには、メッセージの検証、承認、および診断表示のための追加オブジェクトが含まれています。ライブラリオブジェクトのプロパティや検証設定はカスタマイズすることもできます。

DTCC-NTCC、EDIFACT、EDI-X12、HIPAA、HL7、および SWIFT の各ライブラリのライブラリオブジェクトを作成できます。

詳細については、『*Informatica Data Transformation 10.0 ユーザーガイド*』および『*Informatica Data Transformation 10.0 ライブラリガイド*』を参照してください。

ストリーマのない複合ファイルリーダー

入力を受信するデータプロセッサトランスフォーメーションで、ストリーマのない複合ファイルリーダーをスタートアップコンポーネントとして使用できます。

詳細については、『*Informatica Data Transformation 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

カスタムデータ型のパススルーポート

データプロセッサトランスフォーメーションには、カスタムデータ型のパススルーポートを含めることができます。

カスタムデータ型の詳細については、『*Informatica Developer 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

XMap の RunMapplet 文

データプロセッサトランスフォーメーションの XMap からマップレットを呼び出す、RunMapplet マッピング文を定義できます。RunMapplet 文の下に 1 つ以上の MappletInput 文および MappletOutput 文をネストできます。値は、MappletInput 文に表示されるのと同じ順序でマップレット入力ポートにマップされます。マップレット出力ポート内の値は、マップレットポートに表示されるのと同じ順序で MappletOutput 文にマップされます。

詳細については、『*Informatica Data Transformation 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

スクリプトモードの編集

外部エディタを使用して、データプロセッサトランスフォーメーションのスクリプトを編集できます。例えば、外部エディタを使用して、グローバルな検索と置換操作を実行できます。

詳細については、『*Informatica Data Transformation 10.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

ディシジョントランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、パラメータを使用して、ディシジョントランスフォーメーションスクリプトの入力値を指定できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer マッピングガイド*』の「マッピングパラメータ」を参照してください。

重複レコードの例外トランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、パラメータを使用して、トランスフォーメーションで重複レコードを特定するために使用する上方しきい値と下方しきい値を指定できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer マッピングガイド*』の「マッピングパラメータ」を参照してください。

式トランスフォーメーション

ここでは、式トランスフォーメーションの新機能について説明します。

動的式

バージョン 10.0 では、動的出力ポートで式を作成できます。動的ポートで式を作成すると、式は動的式になります。動的式にポートセレクトまたは動的ポートが含まれていると、複数の出力ポートが生成される場合があります。動的式を複数のポートに対して実行すると、ポートごとに出力値が返されます。

動的式の詳細については、『*Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』の「式トランスフォーメーション」を参照してください。

マッピング出力

バージョン 10.0 では、マッピング出力を設定できます。マッピング出力は、マッピングで処理する各行のフィールドまたは式を集計した結果である単一値です。例えば、マッピング出力では、トランスフォーメーションが受け取るすべてのソース行から注文フィールドの合計金額を集計することができます。マッピング出力式は、式トランスフォーメーションが受信する行の集計対象のフィールド値または式です。式トランスフォーメーションで対応する式を作成するには、マッピングの【プロパティ】ビューでマッピング出力を定義する必要があります。

マッピング出力の詳細については、『*Informatica 10.0 Developer マッピングガイド*』の「マッピング出力」を参照してください。

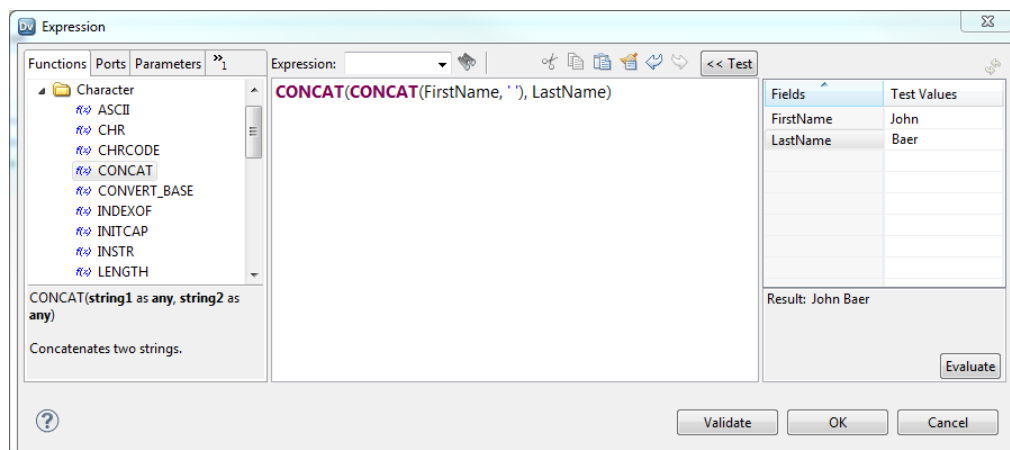
テスト式

バージョン 10.0 では、式エディタで設定した式をテストできます。式をテストするときは、サンプルデータを入力してから式を評価します。

次の方法で式を設定すると、式をテストできます。

- 式トランスフォーメーション内の出力ポートまたは変数ポート内
- トランスフォーメーションをマッピングに追加した後の、式トランスフォーメーションの【マッピング出力】ビュー内

次の図は、サンプルの名と姓を連結する式の結果を示しています。



式のテストの詳細については、『*Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』の「式 トランスフォーメーション」を参照してください。

階層型からリレーショナルへのトランスフォーメーション

ここでは、Developer tool で作成する階層型からリレーショナルへのトランスフォーメーションについて説明します。

階層型からリレーショナルへのトランスフォーメーションは、バージョン 10.0 で導入された最適化済みのトランスフォーメーションで、階層入力をリレーショナル出力に変換します。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

一致トランスフォーメーション

ID 照合分析の照合タイプオプション

バージョン 10.0 では、ID インデックスデータの永続ストアを読み取るように一致トランスフォーメーションを設定する場合、次のオプションを選択できます。

データベースから ID を削除する

行がシーケンス識別子をマッピングソースデータの行と共有している場合、トランスフォーメーションはその行をインデックステーブルから削除します。このオプションを選択した場合は、トランスフォーメーションは照合分析を実行しません。

データベースの現在の ID を更新する

行がシーケンス識別子を共有するときは、トランスフォーメーションがインデックステーブルの行をマッピングソースデータの行に置換します。トランスフォーメーションは行をインデックスに追加しません。トランスフォーメーションは、照合分析に追加しない行を含めることができます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』の「ID 分析での一致トランスフォーメーション」を参照してください。

ID 照合分析における一致プロセスのオプション

バージョン 10.0 では、ID インデックスデータの永続ストアを更新するようにトランスフォーメーションを設定する場合、照合分析を有効または無効にすることができます。照合分析を有効または無効にするには、**[一致プロセス]** オプションを使用します。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』の「ID 分析での一致トランスフォーメーション」を参照してください。

永続インデックスストアでの ID 分析のステータスコード

バージョン 10.0 では、一致トランスフォーメーションで次のステータスコードを生成することで、永続インデックスデータストアの照合分析の結果を示すことができます。

不完全

インデックスデータストアに現在のレコードのデータが含まれていません。

不正

トランスフォーメーションで現在のレコードを分析できません。例えば、[照合タイプ] タブのキーフィールドがレコードデータと互換性がないため、トランスフォーメーションがレコードのインデックスデータを生成できません。

削除済み

トランスフォーメーションが、レコードのインデックスデータをインデックスデータストアから削除します。

更新済み

トランスフォーメーションがトランスフォーメーション入力レコードのインデックスデータに基づいて永続データストアの行を更新します。トランスフォーメーションの入力データと永続インデックスデータは共通のシーケンス識別子を持ちます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』の「一致トランスフォーメーション」を参照してください。

パラメータの使用

バージョン 10.0 では、パラメータを使用して、一致トランスフォーメーションに関する次のオプションを設定できます。

- マッチ率のしきい値。
- トランスフォーメーションが各照合ストラテジからのスコアに適用する相対的なウェイト。
- トランスフォーメーションが ID 照合分析で永続インデックスデータストアに適用する永続方法。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer マッピングガイド*』の「マッピングパラメータ」を参照してください。

シーケンス ID ポート

バージョン 10.0 では、永続インデックスストアを読み取るようにトランスフォーメーションを設定した場合、一致トランスフォーメーションの出力ポートにシーケンス ID ポートが含まれます。トランスフォーメーションは、シーケンス識別子の値を使用して、照合分析の各段階を通じてインデックスデータを追跡します。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』の「一致トランスフォーメーション」を参照してください。

SQL トランスフォーメーション

ここでは、SQL トランスフォーメーションの新しい機能について説明します。

バージョン 10.0 では、SQL トランスフォーメーションの接続をパラメータ化できます。パラメータをマッピングで定義します。次に、パラメータを SQL トランスフォーメーションのランタイムプロパティで接続名に割り当てます。

詳細については、『*Informatica 10.0 トランスフォーメーションガイド*』の「SQL トランスフォーメーション」を参照してください。

動的マッピングのトランスフォーメーション

ここでは、動的マッピングのトランスフォーメーションの新しい機能について説明します。

バージョン 10.0 では、動的ポートを追加できるトランスフォーメーションがいくつかあります。アップストリームトランスフォーメーションからのポートにリンクする出力ポートをパラメータ化することもできます。ポートセレクタが、トランスフォーメーションロジックの複数のポートを参照するように設定できます。

トランスフォーメーションの【プロパティ】ビューには以下の新しいタブが含まれます。

グループ別

アグリゲータトランスフォーメーション、リンクトランスフォーメーション、およびソータートランスフォーメーションに対してポートグループを設定する必要があります。グループを【グループ別】タブで設定できるようになりました。ポートを選択してグループを定義するか、ポートリストを含むパラメータを設定することができます。【グループ別】タブでは、生成されたポートを持つトランスフォーメーションを柔軟に設定できます。

ポートセレクトタ

トランスフォーメーションロジックで複数のポートを参照できます。ポートの順序付けリストであるポートセレクトタを定義します。参照ポートセレクトタは、動的式、結合条件、またはルックアップ条件で使用できます。ポートセレクトタを定義するとき、ポート名、ポートタイプ、またはテキスト文字のパターンに基づいてトランスフォーメーションポートを含める、または除外することができます。

ランタイムリンク

トランスフォーメーションを動的マッピング内で設定するとき、トランスフォーメーション間でリンクするポートを指定するパラメータまたはリンクポリシーを設定します。動的ポートを静的ポートにリンクするランタイムリンクを設定します。ポートを名前でリンクするリンクポリシーを設定できます。InputLinkSet パラメータを設定して、ランタイムにリンクするポートの名前を指定できます。

詳細については、『*Informatica 10.0 トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

ワークフロー

このセクションでは、バージョン 10.0 の新しいワークフロー機能について説明します。

Informatica ワークフロー

ここでは、バージョン 10.0 の Informatica ワークフローの新しい機能について説明します。

マッピングタスク

バージョン 10.0 では、マッピングタスクに以下の新しい機能が追加されています。

マッピングタスクログファイルディレクトリ

データ統合サービスがマッピングタスクログを書き込むディレクトリを設定できます。デフォルトでは、データ統合サービスは、システムパラメータである LogDir によって定義されたディレクトリにマッピングタスクログファイルを書き込みます。マッピングタスクの【詳細】プロパティで、マッピングタスクログファイルに別のディレクトリを設定できます。ログファイルディレクトリをパラメータ化できます。

マッピングタスクログファイル名

マッピングタスクログファイルのファイル名を設定できます。データ統合サービスは、ファイル名を「マスキングタスクログファイルディレクトリ」フィールドの情報に追加します。ログファイルの保存に関して選択する方法に応じて、ログファイル名が UID およびタイムスタンプに、またはマッピング実行番号に追加されます。ログファイル名をパラメータ化できます。マッピングタスクの【詳細】プロパティでログファイル名を設定します。

マッピングタスクログ保存タイプ

タイムスタンプまたはマッピングタスクの実行数でマッピングタスクログファイルを保存できます。マッピングタスクログファイル名のサフィックスには、選択したオプションが反映されます。保存するログファイルの数を設定できます。

Java クラスパス

データ統合サービスがマッピングタスクを実行するときに、システムクラスパスの先頭に追加するクラスパスを入力できます。Java トランスフォーメーションでサードパーティ製の Java パッケージ、ビルトイン Java パッケージ、またはカスタム Java パッケージを使用する場合は、【詳細】プロパティに Java クラスパスを入力します。

マッピングタスクのパラメータの使用

バージョン 10.0 では、マッピング内で特定のパラメータを使用するオブジェクトを表示できます。マッピングタスクの【入力】タブで【パラメータの使用】をクリックします。

カスタムプロパティ

マッピングタスクのカスタムプロパティを定義し、プロパティの値を設定できます。カスタムプロパティをパラメータ化することもできます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer ワークフローガイド*』を参照してください。

第 2 章

変更内容（10.0）

この章では、以下の項目について説明します。

- [インストール, 71](#) ページ
- [アプリケーションサービス, 72](#) ページ
- [Big Data, 78](#) ページ
- [Business Glossary, 78](#) ページ
- [ドメイン, 79](#) ページ
- [Informatica Administrator, 80](#) ページ
- [Informatica Analyst, 82](#) ページ
- [Informatica Developer, 84](#) ページ
- [マッピング, 86](#) ページ
- [Metadata Manager, 88](#) ページ
- [PowerCenter, 91](#) ページ
- [PowerExchange アダプタ, 91](#) ページ
- [参照データ, 93](#) ページ
- [ルール仕様, 94](#) ページ
- [セキュリティ, 94](#) ページ
- [ソースおよびターゲット, 94](#) ページ
- [トランスフォーメーション, 95](#) ページ
- [ワークフロー, 98](#) ページ

インストール

ここでは、バージョン 10.0 の Informatica インストールへの変更内容について説明します。

サポートの終了

バージョン 10.0 では、32 ビット版 Windows 上の Informatica サービスおよび Informatica Developer (Developer tool) のサポートは終了しました。32 ビット版 Windows オペレーティングシステムが作動するマシン上に Informatica サービスまたは Developer tool をインストールすることはできません。

製品の要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、Informatica マイサポートポータル の Product Availability Matrix を参照してください。

<https://mysupport.informatica.com/community/my-support/product-availability-matrices>

アプリケーションサービス

ここでは、バージョン 10.0 のアプリケーションサービスの変更内容について説明します。

アナリストサービス

ここでは、バージョン 10.0 のアナリストサービス機能の変更内容について説明します。

STOP モード

バージョン 10.0 では、アナリストサービスに、アナリストサービスを無効にする COMPLETE モード、ABORT モード、STOP モードがあります。STOP モードを選択すると、すべてのジョブが停止してから、アナリストサービスが無効になります。

以前は、サービスを無効にするために使用できるのは、COMPLETE モードと ABORT モードのみでした。

詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「アナリストサービス」を参照してください。

データ統合サービス

このセクションでは、バージョン 10.0 におけるデータ統合サービスの変更点について説明します。

電子メールサーバー

バージョン 10.0 では、データ統合サービス用の電子メールサーバーを設定することができなくなりました。データ統合サービス用の電子メールサーバーのプロパティは削除されています。スコアカード通知では、ドメイン用に設定された電子メールサーバーが使用されます。ワークフロー通知では、電子メールサービス用に設定された電子メールサーバーが使用されます。ワークフロー通知には、ワークフローのヒューマンタスクおよび通知タスクから送られる電子メールが含まれます。

これまで、スコアカード通知とワークフロー通知には、データ統合サービス用に設定された電子メールサーバーが使用されていました。

アップグレード後は、次の通知タイプに基づいて使用する電子メールサーバーが決定されます。

スコアカード通知

スコアカード通知では、ドメイン用に設定された電子メールサーバーが使用されます。以前のバージョンでドメインの SMTP を設定しなかった場合、アップグレード後のドメインは、アップグレード中に最初に検出されたデータ統合サービス用に設定された電子メールサーバーを使用します。以前のバージョンでドメインの SMTP を設定していた場合は、アップグレード後のドメインでも引き続きその電子メールサーバーが使用されます。

以前のバージョンでデータ統合サービスに設定できた次の電子メールサーバープロパティは、ドメインでは使用できません。以下のプロパティはスコアカード通知には設定できなくなりました。

- SMTP サーバーの接続タイムアウト
- SMTP サーバーの通信タイムアウト
- SMTP 認証の有効化
- TLS セキュリティの使用
- SSL セキュリティの使用

バージョン 10.0 でスコアカード通知を送信する前に、ドメインに対して SMTP が正しく設定されているかを確認してください。以前のバージョンでデータ統合サービスに設定していた電子メールサーバーを使用するには、アップグレードする前にデータ統合サービスで使用していた値を記録しておいてください。

ワークフロー通知

ワークフロー通知では、電子メールサービス用に設定された電子メールサーバーが使用されます。

以前のバージョンのデータ統合サービスで設定可能だった次の電子メールサーバープロパティは、電子メールサービスでは設定できません。ワークフロー通知では、次のプロパティが設定できなくなりました。

- SMTP サーバーの接続タイムアウト
- SMTP サーバーの通信タイムアウト

バージョン 10.0 でワークフロー通知を送信する前に、電子メールサービス用の電子メールサーバーを設定し、その後で電子メールサービスを有効にしてください。以前のバージョンでデータ統合サービスに設定していた電子メールサーバーを使用するには、アップグレードする前にデータ統合サービスで使用していた値を記録しておいてください。

ドメインに対する SMTP 設定の詳細については、『*Informatica 10.0 管理者ガイド*』の「ドメイン管理」の章を参照してください。

電子メールサービスの詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「システムサービス」の章を参照してください。

実行オプション

バージョン 10.0 では、データ統合サービスの [プロパティ] ビューで、次の実行オプションを設定します。

- 最大実行プールサイズ
- 最大メモリサイズ
- 最大並行処理
- Hadoop Kerberos サービスプリンシパル名
- Hadoop Kerberos キータブ
- 一時ディレクトリ
- ホームディレクトリ
- キャッシュディレクトリ
- ソースディレクトリ
- ターゲットディレクトリ
- 拒否されたファイルディレクトリ
- Hadoop 上の Informatica Home ディレクトリ
- Hadoop ディストリビューションディレクトリ

- データ統合サービスの Hadoop ディストリビューションディレクトリ

データ統合サービスがプライマリおよびバックアップノード、またはグリッド上で実行されるように設定されている場合、一部の実行オプションをオーバーライドし、計算ロールが割り当てられた各ノードに別々の値を定義することができます。DTM は、その計算ノードでジョブを実行するときにオーバーライドされた値を使用します。データ統合サービスの [計算] ビューでは、次のオプションをオーバーライドすることができます。

- ホームディレクトリ
- 一時ディレクトリ
- キャッシュディレクトリ
- ソースディレクトリ
- ターゲットディレクトリ
- 拒否されたファイルディレクトリ

実行オプションはこれまでデータ統合サービスの [プロセス] ビューで設定していました。サービスプロセスが実行される各ノードに、異なる実行オプションを設定することができました。

以前のバージョンで各サービスプロセスに異なる実行オプションを設定していた場合、アップグレード後は次に示す状況に応じてバージョン 10.0 の値が決定します。

計算オーバーライドのないオプション

オプションで最大の整数値が定義されている場合は、すべてのプロセスに定義されている値のうち最も大きい値が、[プロパティ] ビューのデータ統合サービスの値として使用されます。オプションで文字列値が定義されている場合は、アップグレード中に最初に検出されたノードに定義されている値が、[プロパティ] ビューのデータ統合サービスの値として使用されます。

計算オーバーライドがあるオプション

あるノードに対して [プロセス] ビューで定義されている値が、同じノードに対する [計算] ビューの計算オーバーライドとして使用されます。アップグレード中に最初に検出されたノードに定義されている値が、[プロパティ] ビューのデータ統合サービスの値として使用されます。

実行オプションの詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「データ統合サービス」の章を参照してください。

最大セッションサイズ

バージョン 10.0 では、データ統合サービスプロセスの [最大セッションサイズ] プロパティの名前が [要求ごとの最大メモリ] に変更されました。以下のデータ統合サービスモジュールに対して [要求ごとの最大メモリ] プロパティを設定します。

- マッピングサービスモジュール。デフォルトは 536,870,912 バイトです。
- プロファイリングサービスモジュール。デフォルトは 536,870,912 バイトです。
- SQL サービスモジュール。デフォルトは 50,000,000 バイトです。
- Web サービスモジュール。デフォルトは 50,000,000 バイトです。

以前は、データ統合サービスのそれぞれのプロセスに対して [最大セッションサイズ] を設定していました。データ統合サービスのすべてのモジュールで同じ値を使用しおり、デフォルトは 50,000,000 バイトでした。

アップグレードされたサービスでは、各モジュールにバージョン 10.0 のデフォルト値が使用されます。以前のバージョンで [最大セッションサイズ] のデフォルト値を変更していた場合は、アップグレード後に [要求ごとの最大メモリ] の値を変更する必要があります。

[要求ごとの最大メモリ] の詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「データ統合サービス」の章を参照してください。

個別のプロセスでのジョブの実行

バージョン 10.0 では、[個別のプロセスとしてジョブを開始] プロパティは、[ジョブの開始オプション] プロパティという名前に変更されました。[ジョブの開始オプション] プロパティには次のいずれかの値を設定できます。

サービスプロセスで

データ統合サービスプロセス内でジョブを実行します。単一ノード、または各ノードにサービスロールと計算ロールの両方があるグリッド上で SQL データサービスおよび Web サービスジョブを実行するタイミングを設定します。データ統合サービスがサービスプロセスでジョブを実行する場合、SQL データサービスジョブと Web サービスジョブは通常、良好なパフォーマンスが得られます。

個別のローカルプロセスで

ローカルノードの個別の DTM プロセス内でジョブを実行します。単一ノード、または各ノードにサービスロールと計算ロールの両方があるグリッド上でマッピング、プロファイル、およびワークフロージョブを実行するタイミングを設定します。データ統合サービスが個別のローカルプロセスでジョブを実行すると、1 つのジョブが予期せず中断されても、他のすべてのジョブには影響しないため、安定性が増します。

個別のリモートプロセスで

リモートノードの個別の DTM プロセス内でジョブを実行します。各ノードに異なるロールの組み合わせが設定されたグリッド上でマッピング、プロファイル、およびワークフロージョブを実行するタイミングを設定します。

データ統合サービスが個別のリモートプロセスでジョブを実行すると、1 つのジョブが予期せず中断されても、他のすべてのジョブには影響しないため、安定性が増します。また、グリッドの各ノードで使用可能なリソースを効率的に活用できます。データ統合サービスグリッドのノードに計算ロールのみがある場合、そのノードはサービスプロセスを実行する必要がなくなります。そのマシンは、使用可能なすべての処理能力をマッピングの実行に使用します。

以前は、データ統合サービスでジョブを実行するには [個別のプロセスとしてジョブを開始] プロパティを有効にし、ローカルノードの個別の DTM プロセス内でジョブを実行するには、このプロパティを無効にしていました。

個別のプロセスでのジョブの実行に関する詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「データ統合サービス管理」の章を参照してください。

ワークフローとヒューマンタスクの設定

バージョン 10.0 では、データ統合サービスの次のオプションが変更されました。

ワークフローサービスモジュールから Workflow Orchestration サービスモジュールに変更

バージョン 10.0 では、データ統合サービスでワークフローを実行できるようにするには、Workflow Orchestration サービスモジュールを選択します。

以前は、ワークフローサービスモジュールを選択してワークフローを実行していました。

ヒューマンタスクサービスモジュールの廃止

バージョン 10.0 では、Workflow Orchestration サービスモジュールでワークフローのすべてのタスクを実行します。

以前は、ワークフローサービスモジュールでヒューマンタスク以外のすべてのワークフロータスクを実行し、ヒューマンタスクサービスモジュールでワークフロー内のすべてのヒューマンタスクを実行していました。

ワークフローのメタデータストアとして、モデルリポジトリとヒューマンタスクデータベースの代わりにワークフローデータベースを使用

バージョン 10.0 では、ヒューマンタスクインスタンスのメタデータを含むすべてのワークフロー用のランタイムメタデータを 1 つのデータベースに格納します。データ統合サービスでワークフローデータベース接続を選択してください。

以前は、データ統合サービスでヒューマンタスクのメタデータを格納するためのデータベースを選択し、ワークフローの他のすべてのランタイムメタデータはモデルリポジトリに格納していました。

ワークフローとヒューマンタスクの設定に関する詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「データ統合サービス管理」、および「アナリストサービス」の章を参照してください。

モデルリポジトリサービス

このセクションでは、バージョン 10.0 におけるモデルリポジトリサービス機能の変更点について説明します。

リポジトリオブジェクトのロックとバージョン

バージョン 10.0 では、別のユーザーによってロックされているオブジェクトを編集しようとすると、そのオブジェクトが別のユーザーによってロックされていることを示す通知が表示されます。その場合、オブジェクトを読み取り専用モードで確認するか、または別の名前で作成することができます。

以前は、複数のユーザーがオブジェクトを開いて編集することが許可されていました。オブジェクトを最後に保存しようとしたユーザーのみが、そのオブジェクトが別のユーザーによって変更されたことを示す通知を受け取っていました。

モデルリポジトリがバージョン管理システムと統合されている場合は、編集する前にオブジェクトをチェックアウトする必要があります。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer tool ガイド*』の「モデルリポジトリ」の章を参照してください。

モデルリポジトリのパス

バージョン 10.0 では、モデルリポジトリのパスを指定する際に、スラッシュ (/) を使用します。たとえば、フォルダの指定には次のパスを使用します。

ModelRepository_name/Project_name/Folder_name

以前は、パスの区切り文字として別の文字を使用できました。たとえば、一部のインスタンスでは、モデルリポジトリ名の後にはコロンを使用していました。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer tool ガイド*』の「モデルリポジトリ」の章を参照してください。

SAP BW サービス

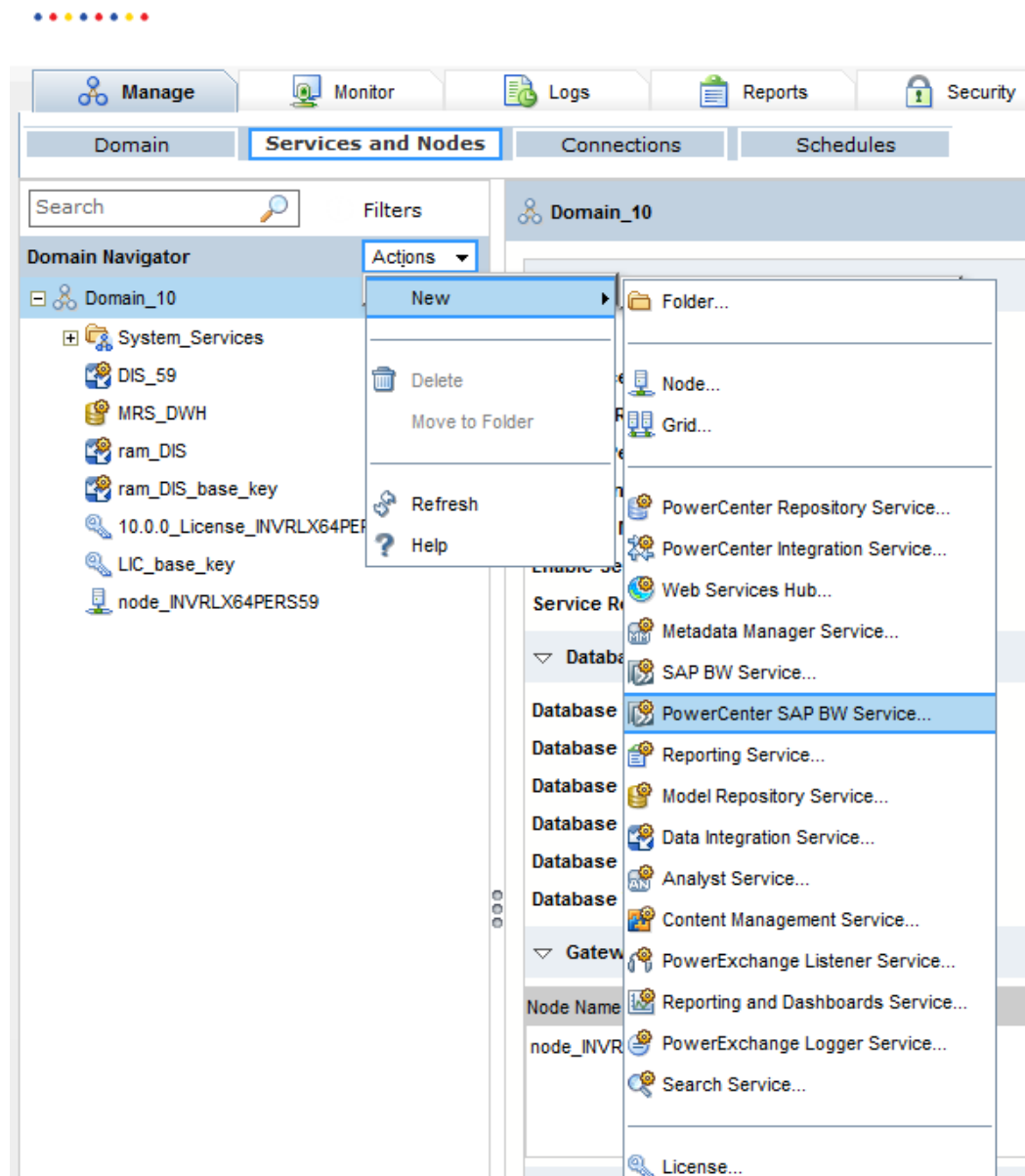
ここでは、バージョン 10.0 における SAP BW サービスの変更内容について説明します。

PowerCenter 用 SAP BW サービス

バージョン 10.0 では、Administrator ツールで PowerCenter 用 SAP BW サービスの作成に使用するユーザーインターフェイスオプションに変更があります。

PowerCenter 用 SAP BW サービスを作成するには、Informatica Administrator にログインします。**ドメインナビゲータ**でドメインを右クリックし、**[アクション] > [新規] > [PowerCenter SAP BW サービス]** をクリックします。

以下の画像は、Administrator ツールで PowerCenter 用 SAP BW サービスの作成に使用するユーザーインターフェイスのオプションを示しています。



以前のバージョンでは、[アクション] > [新規] > [SAP BW サービス] をクリックして PowerCenter 用 SAP BW サービスを作成していました。

注: バージョン 10.0 では、[SAP BW サービス] オプションは Developer tool 用 SAP BW サービスの作成オプションとして確保されています。

詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「SAP BW サービス」を参照してください。

Big Data

このセクションでは、Big Data 機能の変更点について説明します。

Hive 環境

バージョン 10.0 では、Developer tool のユーザーインターフェースに、ランタイム環境または検証環境として Hive 環境が表示されなくなりました。Hive 環境は、Hadoop テクノロジーを使用して MapReduce や Tez などのバッチデータを処理する Hive エンジンに変更されました。

詳細については、『*Informatica 10.0 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

Kerberos 認証

バージョン 10.0 では、Hadoop クラスタが MIT キー配布センター (KDC) のみを使用した Kerberos 認証ができなくなりました。Microsoft Active Directory KDC、または一方向のクロス realm 認証で Active Directory に接続された MIT KDC を使用できます。

Business Glossary

ここでは、バージョン 10.0 の Business Glossary への変更内容について説明します。

リレーションビュー

バージョン 10.0 では、リレーションビューに次の変更点があります。

アセットの出現の強調表示

アセットをクリックすると、アセットの出現が強調表示されます。以前は、アセットの出現を強調表示するには、アセットを右クリックする必要がありました。

アセットの詳細の表示

アセット名の上にカーソルを置くと、アセットの詳細が表示されます。以前は、アセットの詳細を表示するには、Analyst ツールでアセット名をクリックする必要がありました。

詳細については、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』の「用語集コンテンツの検索」を参照してください。

アセットのフェーズ

バージョン 10.0 では、アセットのフェーズに次の変更が加えられました。

公開保留フェーズ

アセットをエクスポートするときに関連のビジネスイニシアティブがない場合、Analyst ツールはエクスポートファイルでアセットのフェーズを**公開保留**から**公開済み**に変更します。

確認中フェーズ

確認中フェーズのアセットは変更できません。

詳細については、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

[ライブラリ] ワークスペース

バージョン 10.0 では、[ライブラリ] ワークスペース次の変更が加えられました。

アセットのソート

アセットをアセットのタイプ別に表示するとき、[ライブラリ] ワークスペースで用語集アセットをステータスおよびフェーズでソートできます。以前のバージョンでは、アセットのステータスおよびフェーズでソートできませんでした。

検索オプション

アセットを用語集でルックアップするとき、フィルタパネルに検索文字列を入力するオプションは使用できなくなりました。以前のバージョンでは、アセットを用語集でルックアップする場合にアセットの検索が可能でした。

デフォルトのアセットリスト

アセットタイプまたは用語集別にアセットを参照するとき、デフォルトで Analyst ツールによってフィルタが適用され、非アクティブまたは拒否済みアセットが非表示になります。以前のバージョンでは、デフォルトで Analyst ツールの非アクティブまたは拒否済みアセットへのフィルタ適用はありませんでした。

詳細については、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

インポートおよびエクスポート

バージョン 10.0 では、用語集アセットとは無関係に、用語集テンプレートをインポートおよびエクスポートできます。以前は、Analyst ツールには、用語集テンプレートをインポートまたはエクスポートする固有のメニューオプションはありませんでした。

用語集をエクスポートするときは、添付ファイルおよび監査履歴を含めることもできます。用語集アセットとともに監査履歴または添付ファイルをエクスポートするときは、.zip ファイルが生成されます。

詳細については、『*Informatica 10.0 Business Glossary ガイド*』の「用語集の管理」を参照してください。

ドメイン

ここでは、バージョン 10.0 のドメインへの変更内容について説明します。

ログ

バージョン 10.0 では、システムログのデフォルトの場所が<Informatica インストールディレクトリ>/logs/<ノード名>/に変更されました。

ドメインは、アプリケーションサービスログとシステムログをこのデフォルトの場所に格納します。ログのデフォルトのディレクトリパスは、システムログディレクトリオプションを使用して変更できます。このオプションは、以下に示すコマンドのいずれにも使用できます。

- infasetup DefineDomain
- infasetup DefineGatewayNode
- infasetup DefineWorkerNode
- infasetup UpdateGatewayNode
- infasetup UpdateWorkerNode

以前は、ドメインはアプリケーションサービスログとシステムログを異なる場所に格納していました。システムログのデフォルトのディレクトリは<Informatica インストールディレクトリ>/tomcat/logs/でした。

詳細については、『*Informatica 10.0 管理者ガイド*』の「ログ管理」を参照してください。

ログ形式

バージョン 10.0 では、デフォルトですべてのログに以下の情報が常に含まれます。

- スレッド名。
- タイムスタンプ（ミリ秒単位）。

以前は、この情報はログ内で一貫していませんでした。例えば、タイムスタンプ情報が含まれていないログと含まれているログがあったり、タイムスタンプ形式に一貫性がなかったりということがありました。

詳細については、『*Informatica 10.0 管理者ガイド*』の「ログ管理」を参照してください。

ジョブのログイベント

ワークフロー内のマッピングタスクが DTM インスタンスを開始してマッピングを実行すると、DTM によってマッピングのログイベントが生成されます。DTM は、このログファイルをデータ統合サービスプロセスに対して指定されたログディレクトリの mappingtask という名前のフォルダに格納します。

以前は、DTM はログファイルを builtinhandlers というフォルダに格納していました。

Informatica Administrator

ここでは、バージョン 10.0 の Administrator ツールへの変更内容について説明します。

【ドメイン】 タブ

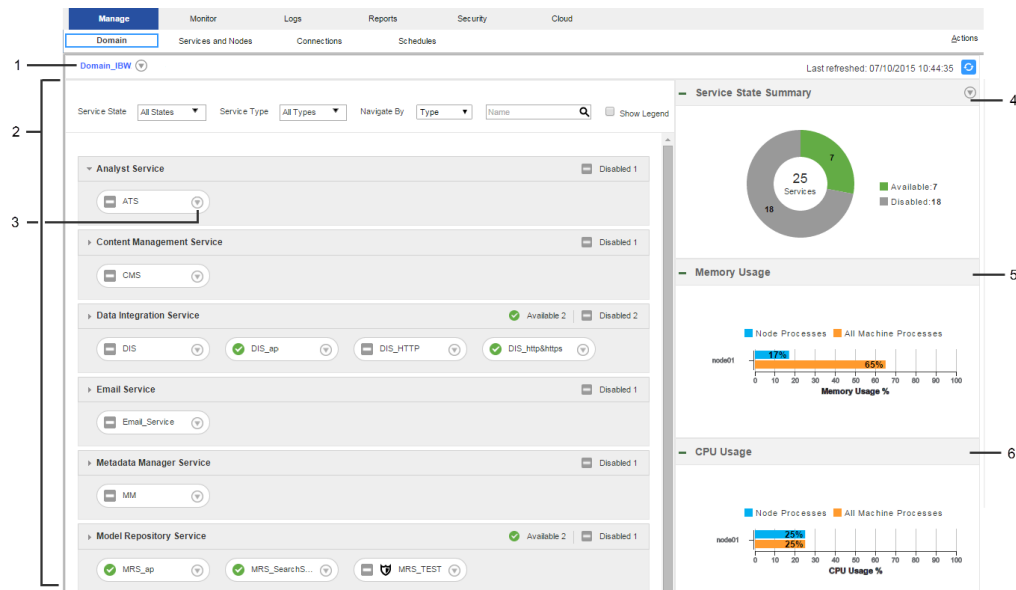
バージョン 10.0 では、【ドメイン】 タブが【管理】 タブに名称変更されました。

【管理】 タブに次の変更が加えられました。

【管理】 タブのビュー

【管理】 タブには【ドメイン】 ビューと【スケジュール】 ビューが含まれます。【ドメイン】 ビューを使用して、ドメインのステータスおよびリソース使用状況の表示と管理を行います。【スケジュール】 ビューを使用して、デプロイ済みのマッピングおよびワークフロー用の再利用可能なスケジュールを作成して管理します。

次の図は【管理】タブ上の【ドメイン】ビューを示しています。



1. [ドメインアクション] メニュー
2. [コンテンツ] パネル
3. [オブジェクトアクション] メニュー
4. サービスの状態の概要
5. メモリ使用状況インジケータ
6. CPU 使用量インジケータ

依存関係グラフ

依存関係グラフが【サービスとノード】ビューから【ドメイン】ビューに移動しました。依存関係グラフにアクセスするには、ドメイン、サービス、またはノードの【アクション】メニューをクリックして、[依存関係の表示] を選択します。

グローバル設定

グローバル設定が【モニタ】タブ（以前の【モニタリング】タブ）から【サービスとノード】ビューに移動しました。グローバル設定が【監視設定】に名前変更され、【サービスとノード】ビュー内の 1 つのビューになりました。

【概要】ビュー

【サービスとノード】ビューで、ドメインおよびフォルダの【概要】ビューが削除されました。これらは、【管理】タブの【ドメイン】ビューで置き換えられます。

詳細については、『*Informatica 10.0 管理者ガイド*』を参照してください。

監視

バージョン 10.0 では、Administrator ツールでの監視に次の変更が加えられました。

グローバル設定

グローバル設定には次の変更があります。

- グローバル設定は、【モニタ】タブの【アクション】メニューから【管理】タブに移動しました。グローバル設定は、【サービスとノード】ビューの【監視設定】ビューで設定します。
- 【履歴データの保持日数】 オプションの名前は【サマリ履歴データの保持日数】に変更されました。最小値は 0 です。最大値は 366 です。デフォルトは 180 です。

- **【日時フィールド】** オプションの名前は **【日時フィールドにミリ秒を表示】** に変更されました。

Jobs

ユーザーが Developer tool および Analyst ツールからデプロイするジョブはアドホックジョブと呼ばれています。アドホックジョブには、プレビュー、マッピング、参照テーブル、エンタープライズ検出プロファイル、プロファイル、およびスコアカードが含まれます。以前のバージョンでは、アドホックジョブはジョブと呼ばれていました。

ナビゲーション

【監視】 タブの名前が **【モニタ】** タブに変更されました。オブジェクトの監視は **【実行統計】** ビューに移動しました。

設定

【モニタ】 タブの **【アクション】** メニューにある **【設定】** の名前が、**【レポート設定と統計設定】** に変更されました。

詳細については、『*Informatica 10.0 管理者ガイド*』の「監視」を参照してください。

Informatica Analyst

ここでは、バージョン 10.0 の Analyst ツールへの変更内容について説明します。

プロファイル

バージョン 10.0 では、Analyst ツールのプロファイルに次の変更点があります。

カラムプロファイル

バージョン 10.0 では、プロファイルウィザードの **【全般プロパティの指定】**、**【ソースの選択】**、**【設定の指定】**、**【ルールとフィルタの指定】** の手順で、カラムプロファイルを作成できます。

以前は、プロファイルウィザードの **【ステップ 1/6】** から **【ステップ 6/6】** の手順で、カラムプロファイルを作成していました。

カラムプロファイルの詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst のカラムプロファイル」の章を参照してください。

カラムプロファイル結果

バージョン 10.0 では、サマリビューでプロファイルのカラムとルールをすべて確認し、詳細ビューでカラムまたはルールの詳細なプロパティを確認できます。

以前は、プロファイル結果は、**【カラムプロファイリング】** ビュー、**【プロパティ】** ビュー、および **【データプレビュー】** ビューに表示されました。

カラムプロファイル結果の詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst のカラムプロファイル結果」の章を参照してください。

カラムプロファイルの編集

バージョン 10.0 では、プロファイルウィザードでカラムプロファイルを編集できます。

以前は、**【アクション】** > **【編集】** をクリックし、オプションの 1 つを選択して編集できました。

カラムプロファイルの詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst のカラムプロファイル」の章を参照してください。

検出ワークスペース

バージョン 10.0 では、[検出ワークスペース] > [プロファイル] をクリックして、プロファイルウィザードで単一のソースプロファイルまたはエンタープライズ検出プロファイルを作成できます。

以前は、単一のプロファイルを作成する場合は、[検出ワークスペース] > [データオブジェクトプロファイル] をクリックし、エンタープライズ検出プロファイルを作成する場合は、[検出ワークスペース] > [エンタープライズ検出プロファイル] をクリックする必要がありました。

カラムプロファイルの詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst のカラムプロファイル」の章を参照してください。

[新規] オプション

バージョン 10.0 では、ヘッダ領域で [新規] > [プロファイル] をクリックして、プロファイルウィザードで単一のソースプロファイルまたはエンタープライズ検出プロファイルを作成できます。

以前は、単一のプロファイルを作成する場合は、[新規] > [データオブジェクトプロファイル] をクリックし、エンタープライズ検出プロファイルを作成する場合は、[新規] > [エンタープライズ検出プロファイル] をクリックする必要がありました。

カラムプロファイルの詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst のカラムプロファイル」の章を参照してください。

ルールの作成

バージョン 10.0 では、プロファイルウィザードでプロファイルのルールを作成、追加、または削除できます。

以前は、プロファイルのルールを追加、削除、または作成するときは、[アクション] > [編集] > [カラムプロファイリングルール] をクリックする必要がありました。

ルールの詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst のルール」の章を参照してください。

[ライブラリ] ワークスペースでのデータオブジェクトに基づくカラムプロファイルの作成

バージョン 10.0 では、[ライブラリ] ワークスペースのデータオブジェクトを右クリックして、カラムプロファイルを作成できます。

以前は、このオプションを利用できませんでした。

カラムプロファイルの詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst のカラムプロファイル」の章を参照してください。

フィルタ

バージョン 10.0 では、プロファイル用に作成したすべてのフィルタをプロファイル内のカラムとデータドメインすべてに適用でき、プロファイルで作成したスコアカードで再利用できます。

以前は、プロファイル用のフィルタを作成できませんでした。

フィルタの詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst のフィルタ」の章を参照してください。

サンプリングのオプション

バージョン 10.0 では、サンプリングオプションをカラムプロファイルとデータドメイン検出の両方に適用できます。

以前は、カラムプロファイルとデータドメイン検出に対して別々のサンプリングオプションを選択できました。

フィルタの詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』の「Informatica Analyst のフィルタ」の章を参照してください。

スコアカード

ここでは、Analyst ツールのスコアカードの変更内容について説明します。

通知

バージョン 10.0 では、ドメインの SMTP 設定プロパティの電子メールサーバーの設定を使って、スコアカードから通知が送信されます。

以前のバージョンでは、データ統合サービスプロパティの電子メールサーバー設定が使用されていました。

Informatica Developer

ここでは、バージョン 10.0 の Developer tool への変更内容について説明します。

アプリケーションデプロイメントの変更内容

ここでは、バージョン 10.0 のアプリケーションデプロイメントの変更内容について説明します。

〔状態情報を保持する〕 チェックボックス

Informatica 10.0 では、アプリケーションを再デプロイするときに、〔状態情報を保持する〕チェックボックスにより、デプロイされたアプリケーションに属するランタイムオブジェクトの現在の状態を保持するかどうかを選択できます。状態は、マッピングプロパティと、シーケンスジェネレータートランスフォーメーションなどのランタイムオブジェクトのプロパティを参照します。

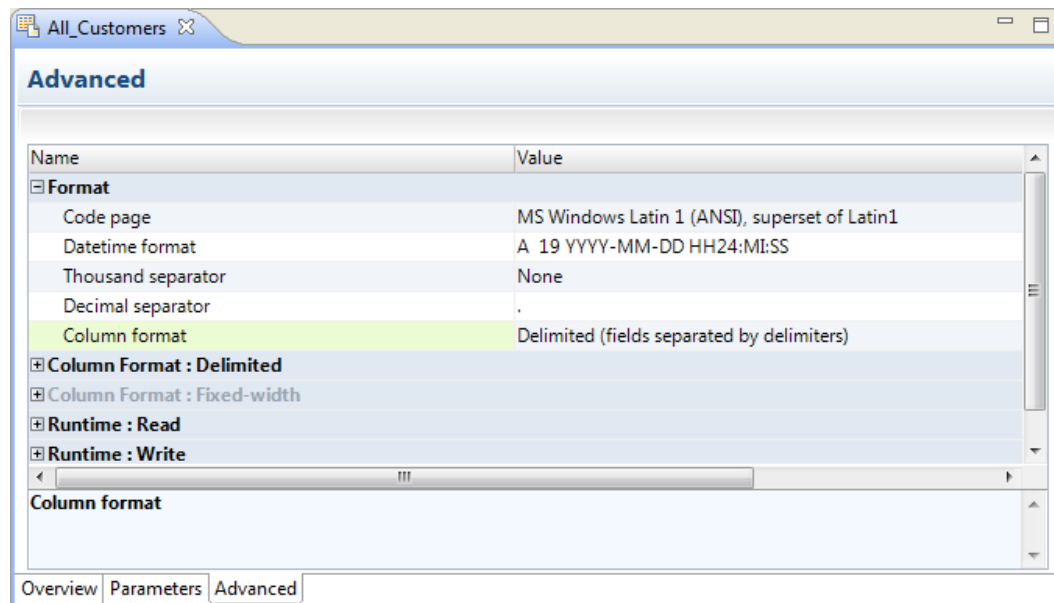
以前は、〔デプロイ〕ダイアログボックスで、〔更新〕または〔置換〕を選択しました。〔更新〕チェックボックスに代わって〔状態情報を保持する〕チェックボックスとなり、このチェックボックスがデフォルトで選択されています。

〔状態情報を保持する〕が選択されると、デプロイしたアプリケーションでランタイム設定とプロパティが保持されます。〔状態情報を保持する〕が選択解除されると、デプロイしたアプリケーションでこれらの設定およびプロパティの状態が破棄されます。

フラットファイルデータオブジェクト

バージョン 10.0 では、〔詳細〕ビューで、フラットファイルデータオブジェクトの形式およびランタイムのプロパティをすべて設定します。〔詳細〕ビューには、折りたたみと展開が可能なプロパティセクションがあります。表示されるカラム形式セクションは、設定するのが区切りカラム形式か固定幅カラム形式かによって変わります。

次の図は、[詳細] ビューのプロパティセクションを示しています。



以前は、[読み取り] ビューおよび[書き込み] ビューで、フラットファイルデータオブジェクトの形式およびランタイムのプロパティを設定していました。[読み取り] ビューでは、ソーストランスフォーメーションを選択して、形式のプロパティを設定していました。ランタイムのプロパティを設定する場合は、出力トランスフォーメーションを選択しました。[書き込み] ビューでは、入力トランスフォーメーションを選択して、ランタイムのプロパティを設定していました。形式のプロパティを設定する場合は、ターゲットトランスフォーメーションを選択しました。

Microsoft SQL Server の変更内容

Informatica バージョン 10.0 では、Microsoft SQL Server に次の変更が加えられました。

- ODBC 接続タイプを使用して Microsoft SQL Server に接続できます。
- pmrep および infacmd コマンドを使用して、既存の接続をアップグレードできます。アップグレードコマンドを実行するとき、すべての既存の接続がアップグレードの対象になります。
- 既存の Microsoft SQL Server 接続は廃止され、次のメジャーリリースでサポートを停止する予定です。既存のマッピングは手動で更新せずに実行できます。SSL 接続を使用している場合は、接続でプロバイダタイプを ODBC として選択し、SSL を DSN で設定する必要があります。

論理データオブジェクトの編集

ここでは、バージョン 10.0 の Developer tool で論理データオブジェクトを編集する方法の変更内容について説明します。

論理データオブジェクトおよび論理データオブジェクトモデルエディタ

Informatica 10.0 では、論理データオブジェクトと論理データオブジェクトモデルは異なるエディタで編集します。

以前のバージョンでは、論理データオブジェクトと論理データオブジェクトモデルを同じエディタで編集していました。

詳細については、『Informatica 10.0 Developer tool ガイド』の「データの論理ビュー」を参照してください。

論理データオブジェクトマッピング

Informatica 10.0 では、論理データオブジェクトマッピングは論理データオブジェクトエディタから作成します。**[追加]** ボタンをクリックして、論理データオブジェクトの読み取りマッピングまたは書き込みマッピングを追加します。

以前のバージョンでは、**[ファイル]** > **[新規]** をクリックして論理データオブジェクトマッピングを作成していました。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer tool ガイド*』の「データの論理ビュー」を参照してください。

ODBC のソースとターゲットに対するプッシュダウンの最適化

バージョン 10.0 では、ODBC のソースとターゲットに対するプッシュダウンの最適化のサポートは廃止されました。

マッピング

ここでは、バージョン 10.0 のマッピングへの変更内容について説明します。

パラメータファイル

バージョン 10.0 では、パラメータファイルの形式が変更されました。パラメータファイルにトランスフォーメーションパラメータが含まれなくなりました。

以前のバージョンのパラメータファイルを使用して、マッピングとワークフローを実行できます。以前のバージョンのパラメータファイルを使用してマッピングまたはワークフローを実行した場合、データ統合サービスは、パラメータファイルを Informatica 10.0 バージョンに変換します。

infacmd listMappingParams コマンドでパラメータファイルを作成すると、データ統合サービスでは、トランスフォーメーションパラメータを含まないマッピングパラメータファイルが作成されます。infacmd listWorkflowParams コマンドでは、トランスフォーメーションパラメータを含まないワークフローパラメータファイルが作成されます。

以前のバージョンでは、パラメータファイルを作成すると、そのパラメータファイルにトランスフォーメーションパラメータが含まれていました。

パラメータファイルの詳細については、『*Informatica Developer マッピングガイド*』の章「マッピングパラメータ」を参照してください。

パーティション化されたマッピング

ここでは、バージョン 10.0 のパーティション化されたマッピングの変更点について説明します。

並行処理値の計算

バージョン 10.0 では、データ統合サービスは、マッピングパイプラインステージごとに異なる数のスレッドを作成できます。このサービスは、各パイプラインステージの最適なスレッド数を判断します。1 つのパイプラインステージに作成されるスレッドの数は、最大並行処理値を超えることはできません。

以前、データ統合サービスは、実際の 1 つの並行処理値を計算し、各マッピングパイプラインステージについて同じ値を使用していました。このサービスでは、最大並行処理値、およびマッピングで準備済みのすべてのフラットファイル、IBM DB2 for LUW、または Oracle の各ソースの最大パーティション数に基づいて実際の並行処理値が計算されていました。

パーティション化されたディシジョンおよび SQL トランスフォーメーション

バージョン 10.0 の場合、ディシジョンまたは SQL トランスフォーメーションのパーティション化を無効にするには、このトランスフォーメーションの **【パーティション化可能】** 詳細プロパティをクリアします。データ統合サービスは、1 つのスレッドを使用してトランスフォーメーションを処理します。また、複数のスレッドを使用すると、残りのマッピングパイプラインステージを処理できます。これらのトランスフォーメーションは、複数のスレッドで処理された場合、マッピングを実行するたびに異なる結果を返す場合があります。このため、これらのトランスフォーメーションのパーティション化を無効にする場合があります。

以前は、ディシジョントランスフォーメーションでは、パーティション化がサポートされていませんでした。マッピングにディシジョントランスフォーメーションが含まれる場合、データ統合サービスでは、マッピング全体のパーティションは作成されませんでした。SQL トランスフォーメーションでは、パーティション化がサポートされていました。このトランスフォーメーションを 1 つのスレッドで処理する必要があるときは、マッピング全体のパーティション化を無効にしました。

パーティション化されたターゲット

バージョン 10.0 では、ソート済みリレーショナルソースまたはソータートランスフォーメーションを使用してマッピングで順序を設定した場合、データ統合サービスは、複数のスレッドを使用してマッピングを実行できます。パーティション化されたマッピングの順序を保持するには、書き込みトランスフォーメーションの詳細プロパティで、ターゲットが行順序を保持することを指定する必要があります。行順序を保持するように書き込みトランスフォーメーションを設定すると、データ統合サービスは、1 つのスレッドを使用してターゲットに書き込みます。

以前は、マッピングにソート済みリレーショナルソースが含まれる場合、データ統合サービスは、1 つのスレッドを使用して、各マッピングパイプラインステージを処理しました。マッピングにソータートランスフォーメーションが含まれる場合、データ統合サービスは、1 つのスレッドを使用して、ソータートランスフォーメーションとすべてのダウンストリームマッピングパイプラインステージを処理しました。

以前のバージョンからアップグレードする場合、既存のすべての書き込みトランスフォーメーションは、行順序を保持するように設定されます。データ統合サービスは、1 つのスレッドを使用してターゲットに書き込み、マッピングで設定されたすべての順序が確実に保持されるようにします。アップグレードされたマッピングで順序が設定されない場合、書き込みトランスフォーメーションの詳細プロパティで **【行順序を保持】** プロパティをクリアすれば、データ統合サービスは、複数のスレッドを使用して、ターゲットに書き込むことができます。

パーティション化された Java トランスフォーメーション

バージョン 10.0 の場合、Java トランスフォーメーションのパーティション化を無効にするには、このトランスフォーメーションの **【パーティション化可能】** 詳細プロパティをクリアします。データ統合サービスは、1 つのスレッドを使用してトランスフォーメーションを処理します。また、複数のスレッドを使用すると、残りのマッピングパイプラインステージを処理できます。Java コードで Java トランスフォーメーションを 1 つのスレッドで処理する必要がある場合、Java トランスフォーメーションのパーティション化を無効にできます。

入力データの行順序を保持するように Java トランスフォーメーションを設定するには、このトランスフォーメーションの **【ステートレス】** 詳細プロパティを選択します。

以前は、Java トランスフォーメーションを 1 つのスレッドで処理する必要があった場合、**【ステートレス】** プロパティを選択解除しました。ステートレスプロパティが選択解除された場合、データ統合サービスは、マッピング全体のパーティションを作成しませんでした。

パーティション化をサポートしないトランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、パーティション化をサポートしないトランスフォーメーションがマッピングに含まれていた場合、データ統合サービスは、1 つのスレッドを使用して、トランスフォーメーションを処理します。このサービスは、複数のスレッドを使用して、残りのマッピングパイプラインステージを処理します。

以前は、パーティション化をサポートしないトランスフォーメーションがマッピングに含まれる場合、データ統合サービスは、マッピング用のパーティションを作成しませんでした。このサービスは、1 つのスレッドを使用して、各マッピングパイプラインステージを処理しました。

パーティション化されたマッピングの詳細については、『*Informatica 10.0 開発者マッピングガイド*』の章「パーティション化されたマッピング」を参照してください。

プッシュダウンの最適化

バージョン 10.0 では、マッピングの最適化レベルからプッシュダウンの最適化が削除されています。プッシュダウンの最適化に対応するようにマッピングを設定するには、マッピングランタイムプロパティでプッシュダウンタイプを選択する必要があります。

以前は、データ統合サービスが、デフォルトで、ノーマル最適化レベルまたは完全最適化レベルを使用して、プッシュダウンの最適化を適用しました。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

ランタイムプロパティ

バージョン 10.0 では、**【ランタイム】** タブで**検証環境**を設定します。マッピングの**【プロパティ】** ビューから**【詳細】** プロパティタブが削除されました。

以前のバージョンでは、**【詳細】** プロパティタブで**検証環境**を設定していました。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer マッピングガイド*』を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 10.0 の Metadata Manager への変更内容について説明します。

Informix リソースの ODBC 接続

バージョン 10.0 では、ユーザーが Informix リソースをロードするときは、PowerCenter 統合サービスが ODBC を使用して Informix データベースに接続します。したがって、Informix リソースの作成およびロードは、Informatica ドメインの実行環境が Windows と UNIX のどちらであっても行えます。Informix に接続するには、Informix データベースに対する ODBC 接続を設定する必要があります。

以前、PowerCenter 統合サービスは、ネイティブ接続を使用して Informix データベースに接続していました。Informix リソースの作成およびロードは、Informatica ドメインの実行環境が 32 ビット Windows の場合にのみ行うことができました。

Informix リソースの設定の詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』の章「データベース管理リソース」を参照してください。

Microsoft SQL Server リソースの ODBC 接続

バージョン 10.0 では、Microsoft SQL Server リソースをロードするとき、PowerCenter 統合サービスは ODBC を使用してデータベースに接続します。PowerCenter 統合サービスが接続文字列からサーバー名とデータベース名を取り出し、インストール済みの ODBC ドライバを使用してデータソースを作成します。

したがって、Microsoft SQL Server リソースの設定時、次のタスクを実行する必要はなくなりました。

- Windows に Microsoft SQL Server Native Client をインストールする必要はありません。
- UNIX の `odbc.ini` ファイルで、Microsoft SQL Server データベースのデータソースを作成する必要はありません。

注: 以前に `odbc.ini` ファイルでデータソースを作成している場合は、データソース名を接続文字列として入力すれば、そのデータソースを引き続き使用できます。

- Administrator ツールで、Metadata Manager サービスの **[ODBC 接続モード]** プロパティを設定する必要はありません。Microsoft SQL Server の接続モードは常に ODBC であるため、このプロパティは削除されました。

以前、PowerCenter 統合サービスは、Windows の場合はネイティブ接続、UNIX の場合は ODBC 接続を使用していました。

Microsoft SQL Server リソースの設定の詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』の章「データベース管理リソース」を参照してください。

PowerCenter オブジェクトの影響のサマリ

バージョン 10.0 では、PowerCenter オブジェクトのメタデータ詳細を表示すると、影響のサマリにさまざまな情報が表示されます。

影響のサマリでは、次の動作が変更されています。

- セッションタスクインスタンスのメタデータ詳細を表示すると、Metadata Manager は、セッションタスクインスタンスが実行するマッピングを、関連するカタログオブジェクトとして表示しますが、影響のサマリには表示しません。

以前は、マッピングを関連するカタログオブジェクトとして、アップストリームおよびダウンストリームの影響のサマリに表示しました。

- ソース定義を含むマプレットインスタンスのメタデータ詳細を表示すると、Metadata Manager は影響のサマリに親マッピングを表示しません。

以前は、ダウンストリームの影響のサマリに親マッピングを表示しました。

- ソースを含まないマプレットインスタンスのメタデータ詳細を表示すると、Metadata Manager は影響のサマリを表示しません。

以前は、ソースを含まないマプレットインスタンスの影響のサマリを表示しました。

- マプレットの入力または出力トランスフォーメーションインスタンスのメタデータ詳細を表示すると、Metadata Manager は影響のサマリを表示しません。

以前は、マプレットの入力および出力トランスフォーメーションインスタンスの影響のサマリを表示しました。

- ソース定義を含むマプレットのソース修飾子インスタンスのメタデータ詳細を表示すると、Metadata Manager は影響のサマリに親マッピングを表示しません。

以前は、影響のサマリに親マッピングを表示しました。

影響のサマリの詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager ユーザーガイド*』の「メタデータの表示」を参照してください。

最大同時リソースロード

バージョン 10.0 では、Metadata Manager サービスに対する **[最大同時リソースロード]** プロパティの最大値は 10 です。つまり、最大 10 のリソースを同時にロードできます。

以前のバージョンでは、このプロパティの最大値は 5 でした。

[最大同時リソースロード] プロパティの詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』の「Metadata Manager サービス」を参照してください。

検索

バージョン 10.0 では、Metadata Manager の [参照] タブで一番下に表示される [検索結果] パネルに、詳細検索の条件および検索結果が表示されます。[検索結果] パネルでは、メタデータカタログ、ビジネス用語集、ショートカット、またはデータリネージュの図などを検索実行中に参照できます。[検索結果] パネルは、サイズ変更、最小化、およびリストアできます。

以前のバージョンでは、詳細検索の条件と検索結果は個別のタブに表示されていました。

検索についての詳細は、『*Informatica 10.0 Metadata Manager ユーザーガイド*』の「メタデータの検索」を参照してください。

Metadata Manager ログファイルの変更内容

バージョン 10.0 では、Metadata Manager ログファイルの場所について変更があり、1 つのディレクトリにすべてのログファイルが保存されるようになりました。

以下の Metadata Manager ログファイルは、<Informatica インストールディレクトリ>\logs\<ノード名>\services\<MetadataManagerService>\<Metadata Manager サービス名>ディレクトリに格納されます。

- Load details log
- mm_agent.log
- mm.log
- resourcemigration.log
- mmrepocmd.log

注: mmrepocmd.log は、Metadata Manager サービスが mmRepoCmd を呼び出すときに新しいログファイルディレクトリに格納されます。コマンドラインから mmRepoCmd を実行すると、ユーティリティによりログファイルが mmRepoCmd と同じディレクトリに作成されます。

Metadata Manager の以前のバージョンでは、これらのログファイルは別々のディレクトリに配置されていました。Metadata Manager をバージョン 10.0 にアップグレードした後は、既存のログファイルは新しい場所に移動されません。

Metadata Manager ログファイルの詳細については、『*Informatica 10.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

Business Glossary モデル

バージョン 10.0 では、Business Glossary モデルをエクスポートまたはインポートできません。また、属性やリレーションの設定によって Business Glossary モデルをカスタマイズすることもできません。

ビジネス用語集アセットやテンプレートをエクスポートまたはインポートする、あるいはビジネス用語集をカスタマイズするには Analyst ツールを使用します。

プロファイリング

バージョン 10.0 では、Metadata Manager はリレーショナルメタデータソースからプロファイリング情報を抽出しません。

プロファイリングは、Analyst ツールおよび Developer tool で利用できます。

PowerCenter

ここでは、バージョン 10.0 の PowerCenter の変更内容について説明します。

Informix ネイティブ接続

バージョン 10.0 では、Informix ネイティブ接続は廃止されています。Informatica では、Informix ネイティブ接続のサポートは終了しました。

Informix データベースに接続するには ODBC 接続を作成します。

詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。

pmrep の変更

ここでは、pmrep コマンドの変更点について説明します。

PurgeVersion コマンド

- バージョン 10.0 では、pmrep purgeVersion -c を使用するとき、-p オプションを指定することも、指定しないことも可能。
 - c オプションとともに-p オプションを指定した場合、出力には、パージされるオブジェクトバージョンと、デプロイメントグループに含まれるオブジェクトバージョンが一覧表示されます。
 - c オプションを指定して-p オプションを指定しない場合、コマンドは、デプロイメントグループに含まれるバージョンをパージしません。以前は、-c オプションを指定するときは、-p オプションも指定する必要がありました。
- バージョン 10.0 では、オブジェクトバージョンがデプロイメントグループのメンバである場合、バージョンはパージされない。

pmrep purgeVersion を使用するとき-k オプションを指定した場合、結果には、パージされないすべてのバージョンと、バージョンがパージされない理由が表示されます。

バージョンがデプロイメントグループに含まれるためパージされない場合、理由には、オブジェクトがパージされない原因である最初のデプロイメントグループのみが一覧表示されます。

以前は、デプロイメントグループにバージョンが含まれていても、バージョンがパージされるかどうかには影響がありませんでした。

詳細については、『*Informatica 10.0 コマンドリファレンス*』を参照してください。

PowerCenter データプロファイリング

バージョン 10.0 では、PowerCenter データプロファイリングはサポートされなくなりました。

プロファイリングおよび検出を実行するには、Informatica Analyst または Informatica Developer を使用します。

詳細については、『*Informatica 10.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 10.0 の PowerExchange アダプタの変更内容について説明します。

PowerExchange Adapters for Informatica

ここでは、バージョン 10.0 の Informatica アダプタの変更内容について説明します。

PowerExchange for SAP NetWeaver

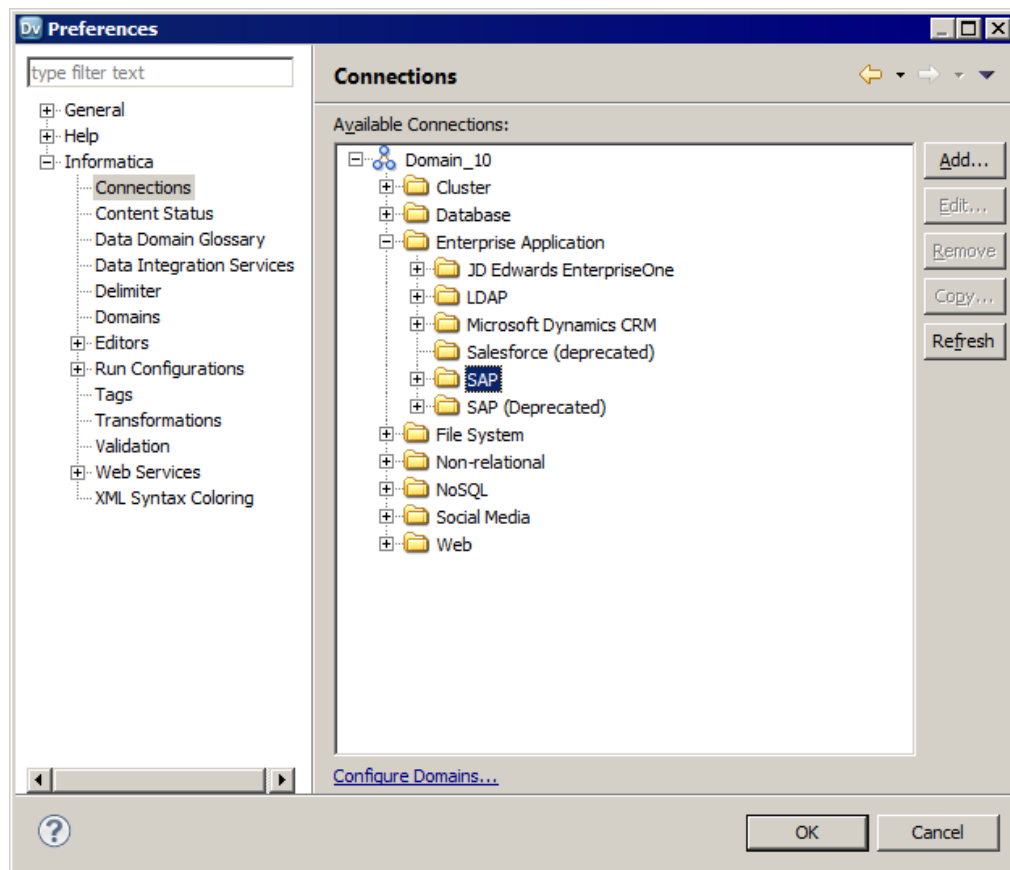
バージョン 10.0 では、PowerExchange for SAP NetWeaver に次の変更点があります。

SAP 接続

10.0 より前のバージョンで作成された SAP 接続は廃止されます。廃止された接続カテゴリは、**【エンタープライズアプリケーション】**の下に**【SAP（廃止）】**という名前で表示されます。

廃止された接続は、将来のリリースでサポートされなくなります。廃止された接続を使用してマッピングを実行したり、廃止された接続を新しく作成したりすることができます。ただし、**【エンタープライズアプリケーション】**の**【SAP】**カテゴリを使用して、新しい SAP 接続を作成することをお勧めします。

次の図に、廃止された SAP 接続カテゴリと、使用する必要のある新しい SAP 接続カテゴリを示します。

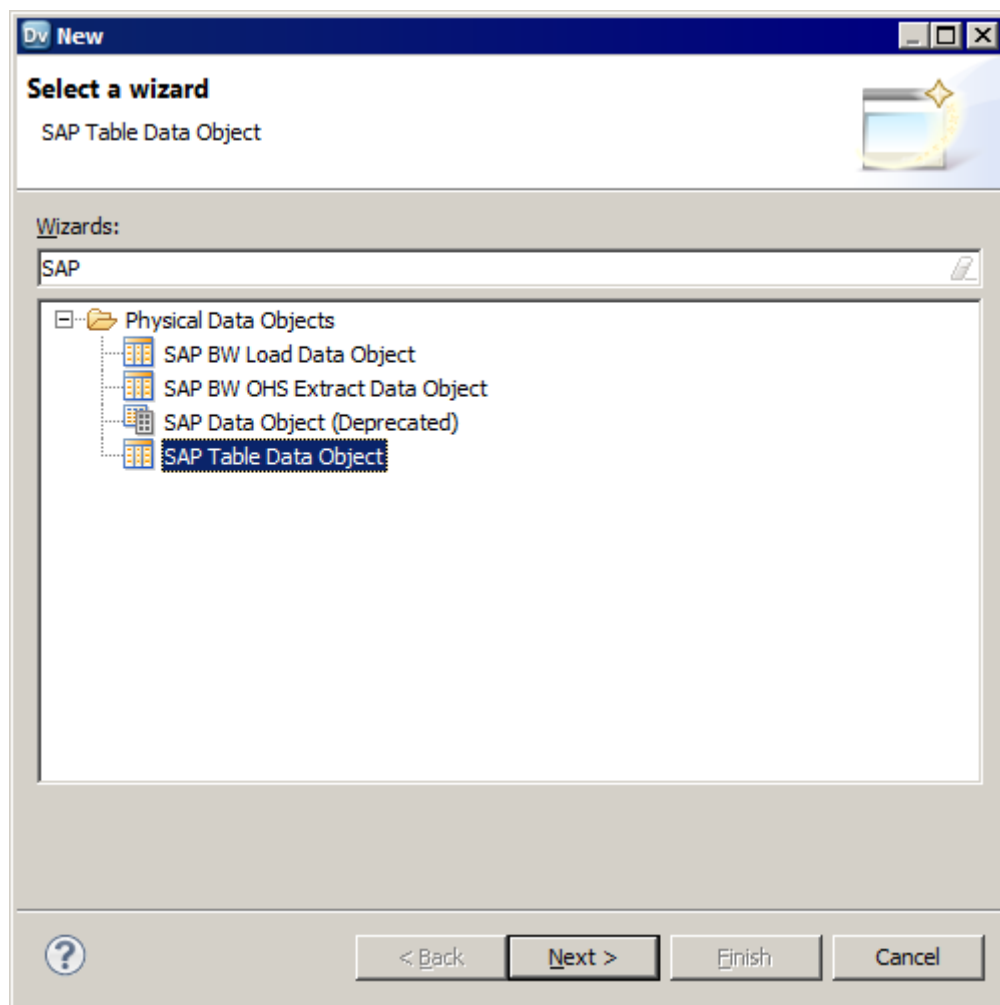


SAP データオブジェクト

10.0 より前のバージョンで作成された SAP データオブジェクトは廃止されます。廃止されたデータオブジェクトタイプは、**【SAP データオブジェクト（廃止）】**という名前で表示されます。

廃止されたデータオブジェクトは、将来のリリースでサポートされなくなります。既存のデータオブジェクトを使用してマッピングを実行したり、廃止されたデータオブジェクトを新しく作成したりすることもできます。ただし、SAP テーブルからデータを読み取るときは、**【SAP テーブルデータオブジェクト】**タイプの新しいデータオブジェクトを作成することをお勧めします。

次の図に、廃止された SAP データオブジェクトと、使用する必要のある新しい SAP テーブルデータオブジェクトを示します。



詳細については、『*Informatica 10.0 PowerExchange for SAP NetWeaver ユーザーガイド*』を参照してください。

参照データ

ここでは、バージョン 10.0 での参照データ操作の変更内容について説明します。

分類子モデル

バージョン 10.0 で有効。Developer tool の単一ビューで、分類子モデルのデータを表示し、管理します。

以前は、分類子モデルのオプションをすべて確認する場合、Developer tool の 2 つのビューを切り替えていました。

詳細については、『*Informatica 10.0 参照データガイド*』を参照してください。

ルール仕様

ここでは、バージョン 10.0 のルール仕様に関する変更内容について説明します。

- バージョン 10.0 で有効。[グローバル入力の管理] ダイアログボックスで、入力を作成し、入力プロパティを更新します。

以前は、入力を読み取るルールセット内で入力の作成と更新を行っていました。

- バージョン 10.0 で有効。ルールセットでテキストインジケータを使用してシーケンスを記述すると、データはそのシーケンスに従ってルール文内を移動します。

以前は、ルールセットで数字を使用してシーケンスを示していました。

- バージョン 10.0 では、Analyst ツールの [デザイン] ワークスペースで、ルール仕様からマップレットルールを作成する操作を「生成」という用語で表現します。

以前のバージョンでは、この操作を「コンパイル」と呼んでいました。

- バージョン 10.0 で有効。未使用の入力が含まれるルール仕様の検証と生成ができます。

以前は、未使用の入力が含まれるルール仕様は無効でした。

- バージョン 10.0 で有効。1 回の操作で、ルール仕様を作成し、ルール仕様に基づいて作業を開始できます。

以前は、別々の操作で、ルール仕様を作成し、開いていました。

詳細については、『*Informatica 10.0 ルール仕様ガイド*』を参照してください。

セキュリティ

ここでは、Informatica バージョン 10.0 のセキュリティの変更内容について説明します。

認証

このセクションでは、Informatica ドメインに対する認証の変更点について説明します。

Informatica 10.0 では、Informatica ドメインに対する Kerberos 認証を使用しないシングルサインオンで、次の点が変更されました。

Developer tool でのシングルサインオン

Developer tool から Web アプリケーションクライアントを開く際に、Web アプリケーションにログインする必要があります。

以前は、Web アプリケーションにログイン情報を入力する必要はありませんでした。

Web アプリケーションクライアントからのログアウト

Administrator ツールを使用して Web アプリケーションクライアントを開いた場合、それぞれの Web アプリケーションクライアントから個別にログアウトする必要があります。たとえば、Administrator ツールを使用して Analyst ツールを開いた場合、Administrator ツールと Analyst ツールのそれぞれから個別にログアウトする必要があります。

ソースおよびターゲット

ここでは、バージョン 10.0 のソースおよびターゲットの変更内容について説明します。

PowerCenter のソースとターゲット

バージョン 10.0 では、Data Transformation のソースおよびターゲットのサポートは終了しました。Data Transformation のソースとターゲットの代わりに、関連ファイルをポイントするフラットファイルソースとフラットファイルターゲットを使用できます。

詳細については、『*Informatica PowerCenter 10.0 Designer ガイド*』を参照してください。

トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.0 で変更されたトランスフォーメーションの動作について説明します。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.0 の Informatica トランスフォーメーションの変更内容について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

Informatica 10.0 では、デフォルトの国の詳細プロパティで国名をパラメータ値として使用することはできません。デフォルトの国を指定するパラメータを定義するには、3 文字の ISO 国名コードをパラメータ値として入力します。

以前のバージョンでは、国名または 3 文字の ISO 国名コードをパラメータ値として入力していました。

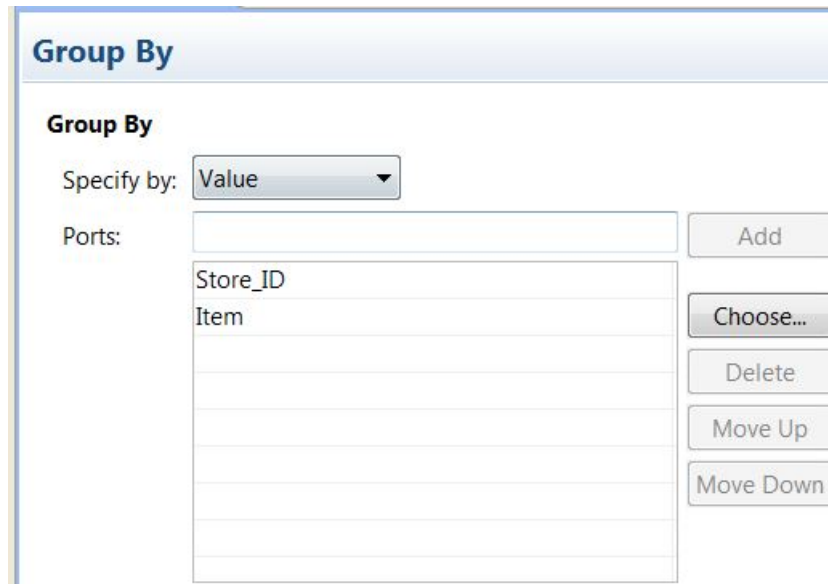
アグリゲータトランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、グループ別ポートの定義をアグリゲータトランスフォーメーションの**プロパティビュー**の**【グループ別】**タブで行います。

アグリゲータのグループに追加するポートをポートリストパラメータでパラメータ化できます。動的ポートをアグリゲータトランスフォーメーションに含めることができます。

以前のバージョンでは、グループ別ポートをトランスフォーメーションの**プロパティビュー**の**【ポート】**タブで選択していました。

次の図は、アグリゲータトランスフォーメーションの「グループ別」タブを示しています。



アグリゲータトランスフォーメーションの詳細については、『*Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』の「アグリゲータトランスフォーメーション」を参照してください。

データプロセッサトランスフォーメーション

ここでは、データプロセッサトランスフォーメーションの変更内容について説明します。

リレーショナルから階層型へのトランスフォーメーション用の追加の出力ポート

バージョン 10.0 では、リレーショナル入力と階層出力のあるデータプロセッサトランスフォーメーションで、追加の出力ポートを使用できます。例えば、トランスフォーメーションで、メイン出力に加えて、検証レポートを生成するサービスを利用できます。以前は、追加の出力ポートは使用できませんでした。

複数の JSON 入力

バージョン 10.0 では、複数の JSON メッセージを含む入力ファイルのある Developer で、ウィザードを使用してデータプロセッサトランスフォーメーションを作成できます。トランスフォーメーションは、最大 1 M の JSON メッセージを処理できます。以前は、トランスフォーメーションで処理できる JSON メッセージは 1 つでした。

リレーショナルから階層型へのトランスフォーメーション用のパススルーポート

バージョン 10.0 では、リレーショナル入力と階層出力のあるデータプロセッサトランスフォーメーションでパススルーポートを使用できます。リレーショナル構造のルートグループにパススルーポートを追加できます。以前は、パススルーポートは使用できませんでした。

一致トランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、一致トランスフォーメーションの動作に次の変更が加えられました。

- バージョン 10.0 では、一致トランスフォーメーションは一意的クラスタ ID 値を同一プロセス内のすべてのスレッドに対して生成します。
以前のバージョンでは、各スレッドで個別にクラスタ ID 値が生成されていました。
- バージョン 10.0 では、以下のオプションを選択して、一致トランスフォーメーションを ID インデックスデータの永続ストアに接続します。

永続的なレコード ID での ID 照合

以前のバージョンでは、[レコード ID を保持] オプションを選択していました。

- バージョン 10.0 では、あらゆるタイプの ID 照合分析で【クラスタ - 最良の一致】出力オプションを選択できます。

以前のバージョンでは、単一ソースの ID 照合分析で【クラスタ - 最良の一致】オプションを選択していました。

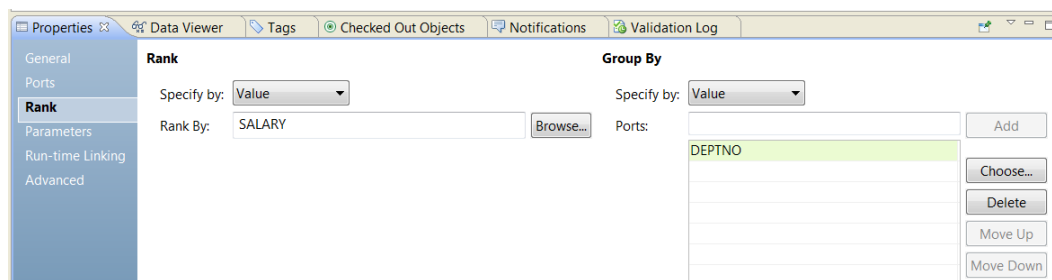
ランクトランスフォーメーション

バージョン 10.0 では、トランスフォーメーションの【プロパティ】ビューの【ランク】タブで、ランクポートまたはグループ別ポートを定義します。

ポートパラメータを使用して、ランクポートをパラメータ化できます。ポートリストパラメータを使用して、グループ別ポートをパラメータ化できます。動的ポートをランクトランスフォーメーションに含めることができます。

以前は、トランスフォーメーションの【プロパティ】ビューの【ポート】タブで、ランクポートまたはグループ別ポートを選択しました。

次の図に、[ランク] タブを示します。



ランクトランスフォーメーションの詳細については、『Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド』を参照してください。

ソータートランスフォーメーション

ここでは、バージョン 10.0 のソータートランスフォーメーションの変更内容について説明します。

キャッシュサイズ

バージョン 10.0 では、ソータートランスフォーメーションによってディスクにページ分割されるキャッシュファイルの数が少なくなったため、パフォーマンスが向上しています。設定されたキャッシュサイズがソータートランスフォーメーションに対して小さすぎる場合は、データ統合サービスがメモリ内の一部のデータを処理し、オーバーフローデータのみをキャッシュファイルに格納します。

以前のバージョンでは、キャッシュサイズが小さすぎる場合は、データ統合サービスがすべてのキャッシュファイルをディスクにページ分割していました。

ソートキーおよび重複しない行

バージョン 10.0 では、ソータートランスフォーメーションの【プロパティ】ビューに表示される【ソート】タブでソートキーを定義します。【ソート】タブで重複しない行を作成することもできます。

ソートキーに含めるポートを、ソートリストパラメータでパラメータ化できます。動的ポートをソータートランスフォーメーションに含めることができます。

以前のバージョンでは、トランスフォーメーションの【プロパティ】ビューに表示される【ポート】タブでソートキーのポートを選択していました。重複しない行の作成は【詳細】タブで選択していました。

次の画像は「ソート」タブを示しています。

Sort

Output: ☒ All rows ☐ Distinct rows only

Sort Keys

Specify by: Value

Ports:

Ports	Sort Keys
Department	Ascending (A)
Employee	Ascending (A)

Add

Choose...

Delete

Move Up

Move Down

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

ワークフロー

このセクションでは、バージョン 10.0 で変更されたワークフローの動作について説明します。

Informatica ワークフロー

このセクションでは、バージョン 10.0 における Informatica ワークフロー動作の変更点について説明します。

ランタイムメタデータ

バージョン 10.0 のデータ統合サービスでは、ワークフローのすべてのランタイムメタデータを 1 つのデータベースの一連のテーブルに格納します。データ統合サービスでデータベース接続を Workflow Orchestration サービスプロパティとして選択します。

以前は、データ統合サービスはワークフロー用のランタイムメタデータをモデルリポジトリに格納し、すべてのヒューマンタスクメタデータをヒューマンタスクデータベースに格納していました。ヒューマンタスクデータベースはバージョン 10.0 で廃止されます。

注: ワークフローを実行する前にワークフローデータベースのコンテンツを作成する必要があります。コンテンツを作成するには、Administrator ツールで、データ統合サービスの「アクション」メニューオプションを使用します。

詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。

データ統合サービスのオプション

バージョン 10.0 では、ワークフローを実行するデータ統合サービスを 1 つ設定します。

以前は、ヒューマンタスクの実行とワークフロー内の他のステージの実行に、異なるデータ統合サービスを設定する場合があります。

バージョン 10.0 では、データ統合サービスの Workflow Orchestration サービスモジュールがワークフロー内のすべてのステージを実行します。

以前は、ワークフローサービスモジュールがワークフロー内のヒューマンタスク以外のすべてのステージを実行し、データ統合サービスのヒューマンタスクサービスモジュールがワークフロー内のヒューマンタスクを実行していました。バージョン 10.0 では、Workflow Orchestration サービスモジュールがワークフローサービスモジュールとヒューマンタスクサービスモジュールを置き換えます。

注: バージョン 10.0 にアップグレードする前に、以前のバージョンの Informatica で実行するすべてのヒューマンタスクを完了してください。

詳細については、『*Informatica 10.0 アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。

ワークフローリカバリ

バージョン 10.0 のデータ統合サービスでは、ワークフローをリカバリする際の試行回数の制限はなくなりました。

以前は、Developer tool でリカバリの最大試行回数を設定していました。

バージョン 10.0 では、中止されたワークフローはリカバリできなくなりました。

以前は、中止されたワークフローはリカバリ可能でした。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer ワークフローガイド*』を参照してください。

ヒューマンタスク

バージョン 10.0 では、ヒューマンタスクの exceptionLoadCount の入力値が 1 未満であっても、ワークフローが停止することはなくなりました。exceptionLoadCount の入力値が 1 未満の場合、ヒューマンタスクは完了しますが、Analyst tool ユーザー用のデータは生成されません。

以前は、ヒューマンタスクの exceptionLoadCount の入力値が 1 未満の場合、はワークフローが停止していました。

バージョン 10.0 では、ヒューマンタスクからの通知は、電子メールサービスプロパティの電子メールサーバー設定を使用して送信されます。

以前は、データ統合サービスプロパティの電子メールサーバー設定が使用されていました。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer ワークフローガイド*』を参照してください。

マッピングタスク

バージョン 10.0 では、データ統合サービスは、ワークフローインスタンスで実行されるマッピングタスクの各インスタンスに対してログファイルを作成します。ワークフローの実行が中断した後でマッピングタスクが再開した場合、再開したタスクのログファイルが作成されます。

以前は、ワークフローインスタンスで実行されるすべてのマッピングタスクのインスタンスに対して、1 つのファイルにログデータが格納されていました。

詳細については、『*Informatica 10.0 管理者ガイド*』を参照してください。

通知タスク

バージョン 10.0 では、通知タスクは電子メールサービスプロパティの電子メールサーバー設定を使用して通知を送信します。

以前は、データ統合サービスプロパティの電子メールサーバー設定を使用して送信していました。

詳細については、『*Informatica 10.0 Developer ワークフローガイド*』を参照してください。

第 3 章

リリースタスク (10.0)

- [マッピング, 100](#) ページ

マッピング

このセクションでは、バージョン 10.0 のマッピングのリリースタスクについて説明します。

パラメータの精度

バージョン 10.0 では、パラメータのデフォルト値のサイズは、そのパラメータに指定された精度以下にする必要があります。以前のバージョンでは、パラメータのデフォルト値がその精度のサイズより大きい場合は、データ統合サービスがパラメータのデフォルト値を切り詰めることにより、マッピングが正常に実行されました。

10.0 へのアップグレードが完了した後、各パラメータのデフォルト値のサイズが、そのパラメータに指定された精度以下であることを確認する必要があります。パラメータのデフォルト値がその精度より大きい場合は、デフォルト値を更新するか、精度を変更します。その後に、マッピングを再デプロイします。

バージョン 10.0 では、パラメータのデフォルト値のサイズがその精度よりも大きい場合は、マッピングが失敗し、次のエラーが表示されます。

パラメータ[my_parameter]には、この精度以下の長さのデフォルト値が指定されている必要があります。

パート II: バージョン 9.6.1

この部には、以下の章があります。

- [新機能、変更、リリースタスク \(9.6.1 HotFix 3\) , 102](#) ページ
- [新機能、変更、リリースタスク \(9.6.1 HotFix 2\) , 111](#) ページ
- [新機能、変更、およびリリースタスク \(9.6.1 HotFix 1\) , 128](#) ページ
- [新機能 \(9.6.1\) , 141](#) ページ
- [変更内容 \(9.6.1\) , 160](#) ページ

第 4 章

新機能、変更、リリースタスク (9.6.1 HotFix 3)

この章では、以下の項目について説明します。

- [新機能 \(9.6.1 HotFix 3\) , 102 ページ](#)
- [変更内容 \(9.6.1 HotFix 3\) , 106 ページ](#)
- [リリースタスク \(9.6.1 HotFix 3\) , 109 ページ](#)

新機能 (9.6.1 HotFix 3)

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の新しい機能について説明します。

Business Glossary

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の新しい Business Glossary 機能について説明します。

ドラフトアセットの削除

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ドラフトアセットを初めて公開する前に削除できます。レビュー中、公開済み、または拒否済みのアセットは削除できません。公開済みまたは拒否済みのアセットを改訂した後にドラフトを削除することはできません。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

用語集間のリレーション

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、任意の用語集のアセット間のリレーションを作成できます。用語集間でビジネス用語をリンクできます。任意の用語集のポリシーをビジネス用語にリンクできます。リレーションビュー図で複数の用語集のアセットを表示できます。用語集をインポートまたはエクスポートするときに、他の用語集からリンクされたアセットのインポートまたはエクスポートを選択できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

URL からのハイパーリンクの作成

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ビジネス用語の [説明]、[使用コンテキスト]、[例]、および [参照テーブル URL] プロパティに URL を挿入するときに、ハイパーリンクを作成できます。任意の用語集のアセットにリンクできます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

Informatica Data Services

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の新しい Informatica Data Services 機能について説明します。

Microsoft Access の日時データのクエリ

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、Microsoft Access の日時データを含む SQL データサービスをクエリできます。Informatica Data Services ODBC ドライバを設定するときに、[**Informatica Data Services へのデータソースの設定**] ダイアログボックスの [オプションのパラメータ] フィールドに次のパラメータを入力します。

APPLICATION=ACCESS

このパラメータで ODBC を設定すると、データ統合サービスは Microsoft Access の日付データに日付/時刻データ型を使用します。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の新しい Informatica トランスフォーメーション機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

ここでは、新しいアドレスバリデータトランスフォーメーションの機能について説明します。

ベルギーの住所で市区町村および近隣地域 ID コードをサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ベルギーの住所を含む近隣地域を一意に識別するコードを返すようにアドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。このコードを返すには、[NIS コード] 出力ポートを選択します。このポートは [BE 補足] ポートグループにあります。

[NIS コード] ポートは、市区町村を識別する 5 桁の NIS コード、および市区町村内の近隣地域を識別する 4 文字のコードを返します。このコードはベルギーの国家統計局により定義されています。

[NIS コード] ポートでデータを返すために、アドレスバリデータトランスフォーメーションはベルギーの補足アドレス参照データを読み込みます。アドレスバリデータトランスフォーメーションが補足データを読み込めることを確認するには、トランスフォーメーションに [補足 BE ステータス] 出力ポートを追加します。[NIS コード] ポート、[補足 BE ステータス] ポート、および [BE 補足] ポートグループはバージョン 9.6.1 HotFix 3 で追加されました。

ロシア連邦の住所を識別する FIAS (Federal Information Addressing System) ID をサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ロシア連邦の FIAS ID を返すようにアドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。この ID を返すには、[FIAS ID] 出力ポートを選択します。このポートは [RU 補足] ポートグループにあります。

[FIAS ID] ポートは、最大で 36 文字を返します。この識別子データはロシア連邦の連邦国家統計局により管理されます。

[FIAS ID] ポートでデータを返すために、アドレスバリデータトランスフォーメーションはロシア連邦の補足アドレス参照データを読み込みます。アドレスバリデータトランスフォーメーションが補足データを読み込めることを確認するには、トランスフォーメーションに [補足 RU ステータス] 出力ポートを追加

します。[FIAS ID] ポート、[補足 RU ステータス] ポート、および [RU 補足] ポートグループはバージョン 9.6.1 HotFix 3 で追加されました。

英国の住所の UPRN (Unique Property Reference Number) をサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、英国の住所の UPRN を返すようにアドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。この番号は、英国の住所を含む土地を一意に識別します。UPRN を返すには、[UPRN] 出力ポートを選択します。このポートは [UK 補足] ポートグループにあります。

UPRN は 12 桁です。UPRN は英国の陸地測量局により管理されます。

[UPRN] ポートでデータを返すために、アドレスバリデータトランスフォーメーションは英国の補足アドレス参照データを読み込みます。アドレスバリデータトランスフォーメーションが補足データを読み込むことを確認するには、トランスフォーメーションに [補足 UK ステータス] 出力ポートを追加します。[UPRN] ポートはバージョン 9.6.1 HotFix 3 で追加されました。

中国と日本の住所から都道府県と市区町村の記述子を削除可能

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、中国と日本の住所から都道府県と市区町村の記述子を削除するようにアドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。例えば、アドレスバリデータトランスフォーメーションは中国の住所で「朝陽区」の代わりに「朝陽」、「北京市」の代わりに「北京」を返すことができます。

記述子を削除するには、トランスフォーメーションで [優先される言語] プロパティと [優先されるスクリプト] を設定します。

キリル語スクリプトでブルガリアの住所を検証可能

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、キリル語スクリプトでブルガリアの住所を検証できます。デフォルトでは、アドレスバリデータトランスフォーメーションはキリル語スクリプトで結果を返します。

ラテン語スクリプトで結果を受け取るには、トランスフォーメーションで [優先されるスクリプト] プロパティを構成します。

町名の略式表記を含むスロバキアの住所を検証可能

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、主要な町名の略式表記を含むスロバキアの住所を検証できます。

有効な住所出力では、トランスフォーメーションによって略式表記が郵政局指定の名前に置き換えられます。

都道府県の ISO コードをバッチ、対話型、および高速完了モードで取得可能

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションによる ISO 3166-2 都道府県コードのサポートが以下の国に拡張されます。

- カナダ
- フランス
- 米国

例えば、トランスフォーメーションは次の住所に対してノースカロライナを表す都道府県コード NC を返します。

15501 WESTON PKWY STE 150
CARY 27513
USA

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 アドレスバリデータポートリファレンス*』と『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の新しい Metadata Manager 機能について説明します。

メタデータソースバージョン

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、一部のメタデータソースに新しいサポート対象バージョンがあります。

以下のメタデータソースに新しいサポート対象バージョンがあります。

- Cloudera Navigator
- ERwin
- Informix

サポートされているメタデータソースバージョンの詳細については、Informatica My Support ポータルの *PCAE Metadata Manager XConnect Support* 製品可用性マトリックスを参照してください:

<https://mysupport.informatica.com/community/my-support/product-availability-matrices>

Cloudera Navigator リソース

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、増分ロードを有効にして検索クエリを作成し、Metadata Manager による Cloudera Navigator リソースのロード時間を短縮できます。

Cloudera Navigator リソースを作成または編集するときに、以下のプロパティを設定できます。

増分ロードを有効にする

最初のリソースロードが成功した後に、Cloudera Navigator リソースの増分ロードを有効にします。このオプションを有効にすると、Metadata Manager は完全なメタデータをロードする代わりに、メタデータへの最近の変更をロードします。

増分ロード中、Metadata Manager は以下のエンティティのみを抽出します。

- 前回のリソースロード後に作成または変更された HDFS エンティティ
- すべての Hive テーブル、ビュー、およびパーティション
- 前回のリソースロード後に作成された操作実行
- 新しい操作実行に関連するすべてのテンプレート

検索クエリ

Metadata Manager が抽出する HDFS エンティティを制限するクエリ。デフォルトでは、Metadata Manager は、canary ファイル、ログファイル、履歴ファイル、削除されたファイルのみを含むディレクトリからは HDFS エンティティを抽出しません。Metadata Manager がその他の HDFS エンティティを抽出することを防ぐように、デフォルトの検索クエリを更新できます。入力するクエリでは有効な Cloudera Navigator 検索構文を使用する必要があります。

Cloudera Navigator リソースの詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

Microsoft SQL Server リソース

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、Metadata Manager は Microsoft SQL Server のテーブルおよびビューカラムの MS_Description 拡張プロパティの値を抽出します。

Microsoft SQL Server リソースの拡張プロパティの抽出の詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

PowerExchange Adapters for PowerCenter

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の新しい PowerCenter アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for SAP Netweaver

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、AddQuotesForCachedLookup カスタムセッションプロパティを Yes に設定できます。これにより、キャッシュを使用するルックアップで特殊文字、記号、または小文字が含まれる HANA テーブルメタデータを使用するときに、セッションが失敗しなくなります。

PowerExchange for Greenplum

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、データをカラムにロードするときに、セッションプロパティで MAX_LINE_LENGTH 属性を設定できます。これにより、104857600 の精度でデータをカラムにロードできます。

変更内容 (9.6.1 HotFix 3)

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の変更内容について説明します。

Business Glossary

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の Business Glossary の変更内容について説明します。

Business Glossary エクスポートファイル

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、Business Glossary エクスポートファイルのワークシートの順序が変更されました。Microsoft Excel での変更が推奨されないワークシートは非表示になります。最初のワークシートはホームページで、エクスポートファイルのその他のワークシートの簡単が説明が含まれています。

以前は、エクスポートファイルには非表示のワークシートもホームページもありませんでした。

Business Glossary のセキュリティ

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、特定の用語集に対して Analyst ツールで**用語集の管理**特権が割り当てられたユーザーは、その他の用語集のユーザーおよびロール管理を実行できません。

以前は、Analyst ツールで**グロッサリの管理**特権が割り当てられたユーザーは、任意の用語集でユーザーの権限と特権を変更できました。

用語集のインポート

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、Business Glossary に存在しない用語集をインポートすると、Analyst ツールによってインポート中にその用語集が作成されます。用語集をインポートするときに、Analyst ツールによって用語集に存在するカスタムプロパティにエクスポートファイルの値が自動的に取り込まれます。また、インポートプロセスの前にカスタムプロパティがテンプレートに関連付けられていない場合でも、関連テンプレートにカスタムプロパティが関連付けられます。

以前は、Business Glossary に存在しない用語集をインポートする場合は、エクスポートファイルから用語集コンテンツをインポートする前に、Analyst ツールで用語集を作成する必要がありました。Analyst ツールは、カスタムプロパティがテンプレートに関連付けられていない場合は、カスタムプロパティにエクスポートファイルの情報を取り込みませんでした。

シノニム

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ビジネス用語のシノニムの動作は以下のように変更されています。

- [シノニム] プロパティで設定した【リタイア日】を削除または変更できます。
- 【作成日】および【リタイア日】の設定に日付選択画面を使用する必要はありません。手動で日付を設定できますが、インストールのロケールによって決定される形式である必要があります。
- ビジネス用語を開くときに、シノニムの【作成日】が表示されます。

以前は、リタイア日の削除または変更を行うことはできませんでした。日付の設定に使用できるのは日付選択画面のみでした。ビジネス用語の作成日は表示されませんでした。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の Informatica トランスフォーメーションの変更内容について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

ここでは、アドレスバリデータトランスフォーメーションの変更内容について説明します。

- バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションでバージョン 5.7.0 の Informatica Address Doctor ソフトウェアエンジンを使用します。このエンジンによって、バージョン 9.6.1 HotFix 3 のアドレスバリデータトランスフォーメーションに追加された機能が有効になります。

以前は、トランスフォーメーションで Informatica Address Doctor ソフトウェアエンジンのバージョン 5.6.0 を使用していました。

- バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、フランス語、ドイツ語、またはイタリア語でスイスの住所の市区町村情報を返すようにアドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。言語を設定するには、[優先される言語] プロパティを使用します。

以前は、アドレスバリデータトランスフォーメーションはスイスの住所のすべての情報をその住所が属している地域の主要言語で返していました。

- バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションは住居番号または建物番号を含まない英国の住所のルーフトップレベルのジオコードを返します。

以前は、トランスフォーメーションは住居番号または建物番号を含む英国の住所のルーフトップレベルのジオコードを返していました。

データプロセッサトランスフォーメーション

ここでは、データプロセッサトランスフォーメーションの変更内容について説明します。

テンプレートを使用した XmlToXlsx

XmlToXlsx ドキュメントプロセッサは、XML ドキュメントを Microsoft Excel .xlsx 形式に変換します。バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、**XmlToXlsx** ドキュメントプロセッサが必要に応じて XML ドキュメントに .xlsx テンプレートを使用し、.xlsx ドキュメントを生成できます。

以前は、XML ドキュメントに基づいて .xlsx ドキュメントを生成できました。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の Metadata Manager の変更内容について説明します。

Business Glossary リソース

バージョン 9.6.1 HotFix3 では、Business Glossary リソースの動作が変更されました。

Business Glossary リソースの以下の動作が変更されました。

Business Glossary リソースをロードするために必要な特権

9.6.1 HotFix 3 では、Business Glossary リソースをロードするには、リソースのロード、リソースの管理、およびモデルの表示特権が必要です。

以前は、Business Glossary リソースをロードするには、Metadata Manager サービスのリソースのロードおよびモデルの管理特権が必要でした。

アップグレード後の関連するカタログオブジェクトの移行

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、バージョン 9.5.x からのビジネス用語集のアップグレード後に mmcmd migrateBGLinks コマンドを実行する必要はありません。migrateBGLinks コマンドは、アップグレードしたビジネス用語集の関連するカタログオブジェクトをリストアップします。このコマンドは、アップグレード後に初めて Business Glossary リソースをロードするときに自動的に実行されます。

以前は、ビジネス用語集のアップグレードプロセスの最後のステップとして migrateBGLinks コマンドを実行する必要がありました。

カテゴリの関連するカタログオブジェクト

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、カテゴリの関連するカタログオブジェクトは作成できません。ビジネス用語の関連するカタログオブジェクトは引き続き作成できます。

以前は、Metadata Manager でカテゴリを他のカテゴリやビジネス用語集に関連付けることができましたが、カテゴリを他のメタデータオブジェクトに関連付けることはできませんでした。Metadata Manager でカテゴリ対カテゴリまたはカテゴリ対用語集のリレーションを作成した場合、Metadata Manager は Analyst ツールのビジネス用語集でこれらのリレーションを更新しませんでした。

用語対用語、用語対カテゴリ、カテゴリ対用語、またはカテゴリ対カテゴリのリレーションを作成するには、Analyst ツールを使用します。

特殊文字を含むプロパティ名

9.6.1 HotFix 3 では、名前に特殊文字が使用されたカスタムプロパティが含まれる Business Glossary リソースを Metadata Manager でロードできます。ただし、Metadata Manager は名前に特殊文字が使用されたカスタムプロパティを抽出しません。

具体的には、Metadata Manager では名前に次のいずれかの特殊文字が使用されたカスタムプロパティが抽出されません。

~ ' & * () [] | \ : ; " ' < > , ? /

以前は、名前にこのいずれかの特殊文字が使用されたカスタムプロパティが含まれる Business Glossary リソースをロードしようとすると、ロードは失敗していました。

Microsoft SQL Server 統合サービスリソース

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、トランスフォーメーションとして使用されるスクリプトコンポーネントのリネージュを Metadata Manager で表示する方法を制御するプロパティ名が、**【トランスフォーメーションスクリプトの非表示】**に変更されました。

以前は、このプロパティ名は **【トランスフォーメーションスクリプト】** でした。

SAP PowerDesigner リソース

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、Sybase PowerDesigner リソースは SAP PowerDesigner リソースと呼ばれます。

権限

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ユーザーが【ロード】タブおよび【参照】タブでアクセスできるリソースを権限で制御します。ユーザーがリソースに対してアクションを実行するには、そのリソースに対する適切な特権と権限の両方が必要です。

例えば、ユーザーが【ロード】タブでリソースを表示するには、そのリソースに対するリソースの表示特権と読み取り権限が必要です。ユーザーがリソースをロードするには、そのリソースに対するリソースのロード特権と書き込み権限が必要です。ユーザーがリソースを編集するには、そのリソースに対するリソースの管理特権と書き込み権限が必要です。

この変更により、【ロード】タブでユーザーに表示されるリソースは【参照】タブでユーザーに表示されるリソースと同じになります。ユーザーがすべてのリソースに対して少なくとも読み取り権限を持っている場合にのみ、【ロード】タブにすべてのリソースが表示されます。

以前は、【参照】タブでユーザーがアクセスできるリソースおよびメタデータオブジェクトは権限によって決定されていましたが、【ロード】タブは権限には影響されませんでした。【参照】タブに対する権限は変更されていません。

Metadata Manager レポート

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ドメインを再起動するときに、Metadata Manager サービスを再起動して【レポートの表示】ボタンを有効にする必要がなくなりました。ドメインにレポートおよびダッシュボードサービスが含まれている場合、【レポートの表示】ボタンは常に有効です。

以前は、ドメインを再起動するときに、Metadata Manager サービスを再起動して【レポートの表示】ボタンを有効にする必要がありました。

セキュリティ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 のセキュリティの変更内容について説明します。

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、RSA 暗号化を使用している場合、512 ビット未満の SSL キーのサポートが廃止されました。この変更は、Informatica ドメイン内の安全な通信、および Web アプリケーションサービスへの安全な接続に影響します。

SSL キーがこの変更の影響を受ける場合は、512 ビット以上の RSA 暗号化ベースの SSL キーを生成するか、別の暗号化アルゴリズムを使用する必要があります。その後、新しいキーを使用して、ドメイン内の安全な通信または Web アプリケーションサービスへの安全な接続に必要なファイルを作成します。Informatica ドメイン内の安全な通信または安全な接続に必要なファイルの詳細については、『*Informatica セキュリティガイド*』を参照してください。

以前は、512 ビット未満を使用する RSA 暗号化ベースの SSL キーがサポートされていました。

リリースタスク (9.6.1 HotFix 3)

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 のリリースタスクについて説明します。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 3 の Metadata Manager のリリースタスクについて説明します。

ロード特権に関連付けられた権限

バージョン 9.6.1 HotFix 3 では、ユーザーが【ロード】タブおよび【参照】タブでアクセスできるリソースを権限で制御します。ロード特権グループ内の特権を持つユーザーは、特定のリソースに対してアクションを実行する権限が必要です。例えば、ユーザーがリソースをロードするには、リソースのロード特権とリソースに対する書き込み権限が必要です。

9.6.1 HotFix 3 にアップグレードする場合、または 9.6.1 HotFix 3 を適用する場合には、ロード特権グループ内の特権を持つ各ユーザーの権限を確認する必要があります。リソースに対する適切な権限を持っていないユーザーは、リソースを表示、ロード、または管理できません。

以下の表に、Metadata Manager ウェアハウス内のリソースのインスタンスの管理に必要な特権および権限の一覧を示します。

の特権	含まれる特権	権限	説明
リソースの表示	-	読み取り	ユーザーは、以下のアクションを実行できます。 <ul style="list-style-type: none">- Metadata Manager ウェアハウス内のリソースおよびリソースプロパティの表示。- リソース設定をエクスポートする。- Metadata Manager エージェントインストーラをダウンロードする。
リソースのロード	リソースの表示	書き込み	ユーザーは、以下のアクションを実行できます。 <ul style="list-style-type: none">- Metadata Manager ウェアハウスへのリソースのメタデータのロード。*- データリネージュのために接続されたリソース内のオブジェクト間のリンクの作成。- リソースに対する検索インデックス処理の設定。- リソース設定をインポートする。
スケジュールの管理	リソースの表示	書き込み	ユーザーは、以下のアクションを実行できます。 <ul style="list-style-type: none">- スケジュールを作成し編集する。- リソースにスケジュールを追加する。
メタデータのページ	リソースの表示	書き込み	ユーザーは、Metadata Manager ウェアハウスからリソースのメタデータを削除できます。
リソースの管理	<ul style="list-style-type: none">- メタデータのページ- リソースの表示	書き込み	ユーザーは、リソースを作成、編集、および削除できます。
* Business Glossary リソースのメタデータをロードするには、リソースのロード、リソースの管理、およびモデルの表示特権が必要です。			

Metadata Manager アプリケーションの【セキュリティ】タブで権限を設定します。権限の設定の詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 3 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

第 5 章

新機能、変更、リリースタスク (9.6.1 HotFix 2)

この章では、以下の項目について説明します。

- [新機能 \(9.6.1 HotFix 2\)](#) , 111 ページ
- [変更内容 \(9.6.1 HotFix 2\)](#) , 122 ページ
- [リリースタスク \(9.6.1 HotFix 2\)](#) , 127 ページ

新機能 (9.6.1 HotFix 2)

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい機能について説明します。

Big Data

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Big Data 機能について説明します。

Informatica Analyst

Big Data Edition には次のような Analyst ツールの新機能と拡張機能があります。

Analyst ツールと Hadoop の統合

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Analyst ツールを有効にして、特定の Hadoop 配布の Hadoop クラスターと通信できます。アナリストサービスの JVM コマンドラインオプションを構成する必要があります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。

Analyst ツールの接続

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Analyst ツールを使用し、Hive または HDFS のソースとターゲットに接続できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Analyst ユーザーガイド*』をご覧ください。

データウェアハウジング

Big Data Edition にはデータウェアハウジングの新機能と改良点があります。

バイナリデータ型

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Hive 環境のマッピングでは、バイナリデータを使用する式関数を処理できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

タイムスタンプデータ型と日付データ型

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、PowerExchange for Hive はタイムスタンプデータ型と日付データ型をサポートします。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

ファイル形式

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、データプロセッサトランスフォーメーションを使用し、Parquet の入力または出力を読み取ることができます。

Apache Parquet は、Hadoop 環境で処理可能な列型ストレージフォーマットです。Parquet が実装され、複雑な入れ子型のデータ構造にアドレス指定します。Parquet はレコードの分断と組み立てのアルゴリズムを利用します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Data Transformation ユーザーガイド*』を参照してください。

データリネージュ

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Big Data のソースとターゲットでデータリネージュ分析を実行できます。Cloudera ナビゲーターリソースを作成し、Big Data のソースとターゲットのメタデータを抽出し、そのメタデータでデータリネージュ分析を実行できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

Hadoop エコシステム

Big Data Edition には Hadoop エコシステムの新機能と改良点があります。

Hadoop 分布

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Big Data Edition では、次の Hadoop ディストリビューションのサポートが追加されました。

- Cloudera CDH 5.2
- Hortonworks HDP 2.2
- IBM BigInsights 3.0.0.0
- Pivotal HD 2.1

Big Data Edition では、次の Hadoop 配布のサポートを廃止しました。

- Cloudera CDH 5.0
- Cloudera CDH 5.1
- Hortonworks HDP 2.1
- Pivotal HD 1.1

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Big Data Edition インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Big Data Edition は Amazon EC2 の Cloudera CDH クラスタをサポートします。

Kerberos 認証

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、ネイティブ環境のユーザー偽装を構成できます。ユーザー偽装を構成すると、複数のユーザーがマッピングを実行したり、Kerberos 認証を使用する Big Data のソースとターゲットに接続したりできます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

パフォーマンス最適化

Big Data Edition はパフォーマンス最適化に関して次の新機能を備えています。

一時的なステージングテーブルでデータを圧縮する

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、一時的なステージングテーブルでデータ圧縮を有効にして、Hive 環境でマッピングを実行するときのパフォーマンスを最適化できます。一時的なステージングテーブルでデータ圧縮を有効にすると、マッピングパフォーマンスが改善されることがあります。

一時的なステージングテーブルでデータ圧縮を有効にするには、Hadoop クラスタが使用するコーデッククラス名を使用するように Hive 接続を構成する必要があります。一時的なステージングテーブルでデータ圧縮を有効にするように Hadoop クラスタを構成する必要もあります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

並列ソート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、マッピングでソータトランスフォーメーションを使用すると、Hadoop クラスタにマッピングロジックをプッシュするとき、データ統合サービスではデフォルトで並列ソートが有効になります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

Informatica Analyst の Hadoop ソースでプロファイル実行

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Analyst ツールで、Hive ソースと HDFS ソースを対象に、カラムプロファイル、ルールプロファイル、データドメイン検出を作成し、実行できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

Business Glossary

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Business Glossary 機能について説明します。

アセットの更新

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Glossary ワークスペースのアセットを更新できます。アセットを更新すると、アセットを開いた後にコンテンツマネージャーが行ったプロパティ変更が表示されます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

重複するアセット名を警告

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、用語集にすでに存在する名前で作成しようとすると、Analyst ツールに警告が表示されるようになりました。この警告は無視し、重複する名前で作成できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

Business Glossary デスクトップの LDAP 認証

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、サーバー設定を構成し、アナリストサービスをホストするマシンでビジネス用語集を参照するように Business Glossary デスクトップを有効にするとき、LDAP 認証を使用できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Business Glossary* デスクトップのインストール&環境設定ガイド』を参照してください。

コマンドラインプログラム

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の Informatica コマンドラインプログラムの新規および更新されたコマンドとオプションについて説明します。

isp コマンド

次の表はバージョン 9.6.1 HotFix 2 で更新された isp コマンドの説明をまとめたものです。

コマンド	説明
UpdateGrid	<p>以下の新しいオプションが含まれます。</p> <p>-ul。オプション。グリッドに前に割り当てられたノードのリストを置換する代わりに、「-nl」オプションの値で現在のノードリストを更新します。「true」の場合、infacmd は、「-nl」オプションで指定されたノードリストと前にグリッドに割り当てられたノードでノードリストを更新します。「false」の場合、infacmd はノードリストを「-nl」オプションで指定されたノードリストで置換します。デフォルトは false です。</p> <p>以下の更新されたオプションが含まれます。</p> <p>-nl。必須。グリッドに割り当てるノードの名前。このノードリストは、定義されている「-nl」オプションに基づいてグリッドに前に割り当てられたノードリストを置換または更新します。</p> <p>「-ul」オプションを指定した場合、「-nl」は、グリッドに前に割り当てられたノードリストを更新します。「-ul」オプションを指定しない場合、「-nl」は、グリッドに前に割り当てられたノードリストを置換します。</p>

Data Quality アクセラレータ

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しいアクセラレータ機能について説明します。

更新された参照データセット

バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、データを分析および強化するためにアクセラレータルールで使用する参照データセットが更新されました。

詳細については、『*Informatica Data Quality 9.6.1 HotFix 2 アクセラレータガイド*』を参照してください。

Informatica Developer

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Informatica Developer 機能について説明します。

Microsoft SQL Server 日時 2 データ型

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Informatica Developer は Microsoft SQL Server 日時 2 データ型をサポートします。日時 2 データ型は「Jan 1, 0001 A.D. 00:00:00~Dec 31, 9999 A.D. 23:59:59.99999999」の範囲の値を格納できます。

Informatica ドメイン

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Informatica ドメイン機能について説明します。

Amazon EC2 の Informatica

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Informatica サービスを Amazon EC2 の複数のノードで設定し、起動できます。最大 4 つのノードを含む Informatica ドメインを起動できます。

Informatica DiscoveryIQ

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、製品の使用状況を診断するツールである Informatica DiscoveryIQ では、データの使用状況とシステムの統計値に関するレポートを Informatica に定期的に送信できるようになりました。データのコレクションおよびアップロードはデフォルトで有効になっています。使用統計値を Informatica に送信しないことを選択できます。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Informatica トランスフォーメーション機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 のアドレスバリデータトランスフォーメーションの新機能について説明します。

繁体北京語で台湾の住所をサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションを使用し、繁体北京語の台湾の住所を検証できます。[個別] または [複数行] グループのポートを使用し、入力住所を定義できます。

繁体北京語の住所を 1 行に入力するには、[フォーマットされたアドレス行 1] ポートを使用します。

米国のアドレス検証の拡張機能

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、住所に有効な郵便番号と市区町村が含まれるとき、アドレスバリデータトランスフォーメーションは国名を返します。住所の 1x 一致状況に関係なく、トランスフォーメーションは国名を追加できます。トランスフォーメーションは [都道府県] 出力ポートにこの名前を追加します。州の識別子が住所にない場合、トランスフォーメーションは [都道府県] ポートに州の識別子を追加します。

住居番号にハイフンが付く住所を検証するとき、トランスフォーメーションは住居番号の後半を [棟] ポートに移します。

要素記述子の構成可能出力フォーマット

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションを構成し、次の要素の出力フォーマットを指定できます。

- オーストラリアとニュージーランドの番地、建物、棟の記述子
- ドイツの住所の番地記述子

デフォルトでは、トランスフォーメーションは、参照データベースが住所に指定する記述子を返します。記述子の出力フォーマットを指定するには、トランスフォーメーションの [グローバル優先記述子] プロパティを構成します。

イギリスの住所の住所キーをサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、イギリスの住所の住所キーを返すことができます。住所キーとは、英国王立郵便局の郵便番号ファイルの住所を識別する 8 桁の数値です。住所キーを住所に追加するには、[住所キー] ポートを選択します。住所キーを返すために、トランスフォーメーションはイギリスの補足参照データを読み込みます。

日本の拡張データをサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションは、日本の住所で区画情報を意味する「番」を検証できます。アドレスバリデータトランスフォーメーションは、番地などの従属データを [町名 2] またはそれに等しいポートに書き込みます。

日本の住所では、住所要素が大きい順に、つまり、最も大きいまたは最も全般的な単位から最も小さいまたは最も限定的な単位の順に表示されます。住所において、「番」という要素は「丁目」という要素の後に位置し、「番」の次に「号」という要素が続きます。

日本のアドレス検証の拡張機能

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションを構成し、日本の住所に「街区」コードを追加できます。住所にこのコードを追加するには、[街区コード] ポートを選択します。

現在の「町名字」コードと「街区」コードを 1 つの文字列に結合し、コードが識別する住所を返すことができます。完全な住所を返すには、[日本の町名字と街区コード] ポートを選択し、住所コードのルックアップモードで実行するようにトランスフォーメーションを構成します。

日本の参照データには「街区」コード、現在の「町名字」コード、初期のバージョンの「町名字」コードが住所に含まれます。[拡張アーカイブのマッチング] プロパティを [オン] に設定した場合、トランスフォーメーションはすべてのコードを出力住所に書き込みます。

イスラエルの 7 桁郵便番号をサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションは、イスラエルの住所としてイスラエルの郵政事業が定義する 7 桁の郵便コードをサポートします。この 7 桁の郵便コードは、イスラエルの郵政事業が以前に定義していた 5 桁の郵便コードを置き換えます。たとえば、イスラエルのナザレスの 7 桁郵便コードは 1623726 です。以前、ナザレスの郵便コードは 16237 でした。

ドイツ、オーストリア、スイスのアドレス検証の拡張機能

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションは、ドイツ、オーストリア、スイスの住所にある *Zimmer* (部屋) や *App* (アパート) などのキーワードを認識します。アドレスバリデータトランスフォーメーションは出力住所の [棟] ポートにこのキーワードを書き込みます。

フランスの住所の IRIS コードをサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションを構成し、フランスの住所に IRIS コードを追加できます。住所にこのコードを追加するには、[INSEE-9 コード] 出力ポートを選択します。

IRIS コードは、フランスのコミュニンの統計単位を一意に識別します。このコードは INSEE (フランス国立統計経済研究所コード) により定義されています。フランスには約 16,000 の IRIS 単位があります。

イギリスのルーフトップジオコーディングをサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションを構成し、イギリスの住所のルーフトップ (屋根) レベルのジオコードを返すことができます。ルーフトップジオコードは、ある敷地または区画の主要な建物の中心を識別します。

ルーフトップジオコードを生成するには、トランスフォーメーションの [ジオコードデータ型] プロパティを [到着点] に設定します。イギリスの到着点参照データもインストールする必要があります。

スペインの住所参照データを改善

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Informatica はスペインの住所参照データを更新しました。アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、更新された住所参照データを使用し、スペインの住所の棟レベル情報を検証できます。

トルコのアドレス検証と住所参照を改善

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Informatica はトルコの住所参照を更新しました。

アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、トルコの住所を検証するとき、次の操作も実行できます。

- トランスフォーメーションは [送付先住所 1] ポートの建物名と町名を識別できます。

- トランスフォーメーションは、棟要素が番号のとき、建物要素と棟要素の間にスラッシュ記号 (/) を追加します。

ブラジルのアドレス検証を改善

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Informatica はブラジルの住所のアドレス検証に次の拡張機能を追加しました。

- アドレスバリデータトランスフォーメーションは、[送付先住所] ポートと [フォーマットされたアドレス行] ポートに 3 つ目のレベルの棟情報を追加できます。ブラジルの住所システムには 3 レベルの棟情報が含まれます。
- アドレスバリデータトランスフォーメーションは [町名の追加情報] ポートのキロメートル情報を検証します。

注: アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、ブラジルのキロメートル情報で小数点ではなくコンマが使われます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 アドレスバリデータポートリファレンス*』と『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

データプロセッサトランスフォーメーション

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 のデータプロセッサトランスフォーメーションの新機能について説明します。

RunMapplet

RunMapplet アクションを実行すると、データプロセッサトランスフォーメーションの一部としてマップレットが呼び出されて、実行されます。RunMapplet の出力は、RunMapplet アクションで指定されたデータホルダに読み込まれます。データマスキング、データ品質、データ検索、通常はリレーショナルトランスフォーメーションに関連するその他のアクティビティなどのタスクを実行するには、RunMapplet アクションを使用します。

検証ルールエディタ

検証ルールエディタを使用し、XML データを検証するユーザー定義ルールを作成できます。データがルールに違反すると、XML 検証レポートが生成されます。

Parquet の入力または出力

新しいトランスフォーメーションウィザードを使用し、Parquet の入力または出力でデータプロセッサトランスフォーメーションを作成できます。

XMap ソースまたはターゲットの XMap 変数の作成

XMap ソースまたはターゲットとして機能する XMap 変数を作成できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Data Transformation ユーザーガイド*』を参照してください。

Metadata Manager

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Metadata Manager 機能について説明します。

Cloudera ナビゲータリソース

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Cloudera ナビゲータリソースを作成し、Cloudera ナビゲータのメタデータコンポーネントからメタデータを抽出するように構成できます。Cloudera Manager が管理する Hadoop クラスタごとに Cloudera ナビゲータリソースを 1 つ作成できます。

Cloudera ナビゲータリソースの作成と構成に関する詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

サポートされているメタデータソースバージョンの詳細については、Informatica My Support ポータルの *PCAE Metadata Manager XConnect Support* 製品可用性マトリックスを参照してください：
<https://mysupport.informatica.com/community/my-support/product-availability-matrices>

Microsoft SQL Server 統合サービス (SSIS) リソース

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Microsoft SQL Server 統合サービスリソースを作成し、Microsoft SQL Server 統合サービスパッケージからメタデータを抽出するように構成できます。Metadata Manager は Microsoft SQL Server リポジトリのパッケージまたはパッケージ (.dtsx) ファイルのパッケージからメタデータを抽出できます。

Microsoft SQL Server 統合サービスリソースの作成と構成に関する詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

サポートされているメタデータソースバージョンの詳細については、Informatica My Support ポータルの *PCAE Metadata Manager XConnect Support* 製品可用性マトリックスを参照してください：
<https://mysupport.informatica.com/community/my-support/product-availability-matrices>

Embarcadero ERStudio リソース

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Embarcadero ERStudio からの添付ファイルのインポートを Metadata Manager に禁止できます。添付ファイルは UDP (ユーザー定義プロパティ) とも呼ばれています。Metadata Manager に UDP のインポートを禁止するには、リソースを構成するとき、**[UDP 抽出のスキップ]** プロパティを有効にします。

Embarcadero ERStudio リソースの構成に関する詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

PowerCenter リソース

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、PowerCenter リポジトリデータベースタイプが IBM DB2 for LUW であり、データベースユーザー名がスキーマ名と異なるとき、PowerCenter リソースを作成し、読み込むことができます。データベースユーザー名と異なるスキーマ名を指定するには、PowerCenter リソースを構成するとき、**[スキーマ名]** プロパティにスキーマ名を入力します。

PowerCenter リソースの構成の詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

影響のサマリの PowerCenter フラットファイル

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、影響のサマ리에 PowerCenter リソースで使用されるフラットファイルが一覧表示されるようになりました。

影響のサマリの表示に関する詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 Metadata Manager ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerCenter

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい PowerCenter 機能について説明します。

PowerCenter アップグレード

PowerCenter をホットフィックスまたは同じバージョンの基本リリースからバージョン 9.6.1 HotFix 2 にアップグレードした場合は、AD50.cfg ファイルが維持されます。このアップグレード処理では、server/bin ディレ

クトリ内の AD50.cfg ファイルは維持され、同じディレクトリ内に AD50.cfg.bak という名前の空の構成ファイルが作成されます。

以前の PowerCenter バージョンからアップグレードした場合は、server/bin ディレクトリに空の AD50.cfg ファイルが書き込まれます。このアップグレード処理では、検出されたすべての AD50.cfg ファイルのバックアップコピーがディレクトリ内に作成されます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 アップグレードガイド*』を参照してください。

PowerExchange

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい PowerExchange 機能について説明します。

PowerExchange infacmd pwx コマンド

一部の PowerExchange ロガーサービス infacmd pwx コマンドでは新しいパラメータを利用できます。

infacmd pwx CreateLoggerService コマンドと infacmd pwx UpdateLoggerService コマンドの「-StartParameters」オプションに次の任意の起動パラメータが追加されました。

`encryptpwd=encryption_password`

PowerExchange ロgger ログファイルの暗号化を有効にする暗号化形式のパスワードです。このパスワードが指定されると、PowerExchange ロgger はロgger ログファイル別に一意の暗号化キーを生成できます。パスワードは CDCT ファイルに暗号化形式で保存されます。このパスワードは CDCT バックアップファイルに格納されず、PowerExchange PWXUCDCT ユーティリティで生成した CDCT レポートに表示されません。この暗号化パスワードを使用するには、「-StartParameters」オプションに「coldstart=Y」を指定する必要もあります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 2 コマンドリファレンス*』を参照してください。

PowerExchange ロgger ログファイルの暗号化

PowerExchange ロgger サービスのログファイルを暗号化し、ログファイルに保存されている機密データへの無許可アクセスを防止できるようになりました。

PowerExchange ロgger サービスのログファイル暗号化を有効にするには、PowerExchange ロgger サービスのコールドスタートの起動パラメータで暗号化パスワードを指定します。暗号化パスワードは次のいずれかの方法で入力します。

- infacmd pwx CreateListenerService または infacmd pwx UpdateListenerService コマンドで、「-StartParameters」オプションに「encryptpwd」パスワードを追加します。
- Informatica Administrator で、[PowerExchange ロgger サービス構成] プロパティを編集します。**[開始パラメータ]** プロパティで、「encryptpwd」パスワードを追加します。

注: PowerExchange ロgger は AES 暗号化アルゴリズムを使用します。PowerExchange ロgger 設定ファイルの ENCRYPTOPT 文に AES アルゴリズムの種類を設定できます。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい PowerExchange アダプタ機能について説明します。

PowerExchange Adapters for Informatica

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Informatica アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for Cassandra

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Cassandra データベースとの間でデータを読み取ったり書き込んだりするときに一貫性レベルを微調整できます。一貫性レベルにより、すべてのレプリカにおけるデータの同期方法が決定されます。データの正確性や応答時間の要件に基づき、必要な一貫性レベルを設定できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Cassandra 9.6.1 HotFix 2 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for LinkedIn

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、PowerExchange for LinkedIn では、HTTPS URL を利用し、LinkedIn への API 呼び出しがすべて保護されます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for LinkedIn 9.6.1 HotFix 2 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for DataSift

バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、PowerExchange for DataSift に次の新機能および改良点が組み込まれています。

- DataSift バッファからデータを取得できます。
- 履歴クエリを一時停止し、再開できます。
- 接続に失敗した場合に DataSift との接続を再確立する試行回数の最大値を設定できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for DataSift 9.6.1 HotFix 2 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Hive

バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、PowerExchange for Hive に次の新機能および改良点が組み込まれています。

- Informatica のユーザー定義関数を利用し、Hive 環境でバイナリデータ型を変換できます。
- PowerExchange for Hive はタイムスタンプデータ型を含むソースおよびターゲットを処理します。タイムスタンプデータ型の形式は「YYYY-MM-DD HH:MM:SS.ffffff」です。タイムスタンプデータ型の精度は 29 であり、位取りは 9 です。
- PowerExchange for Hive は日付データ型を含むソースおよびターゲットを処理します。日付データ型の範囲は「0000-01-01~9999-12-31」です。形式は「YYYY-MM-DD」です。日付データ型の精度は 10 であり、位取りは 0 です。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Hive 9.6.1 HotFix 2 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for MongoDB

バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、MongoDB ODBC ドライバによって、配列およびネストされた配列を含むカラムごとに仮想テーブルが作成されます。MongoDB ODBC ドライバを使用すると、ネストされたカラムの読み取りを 5 段階まで、ネストされたカラムの書き込みを 3 段階まで行うことができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for MongoDB 9.6.1 HotFix 2 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Salesforce

バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、PowerExchange for Salesforce に次の新機能および改良点が組み込まれています。

- CreatedDate フィールドと SysModstamp フィールドを含む複製可能な Salesforce オブジェクトから変更されたデータをキャプチャするように、PowerExchange for Salesforce を構成することができます。
- PowerExchange for Salesforce を使用し、Salesforce API の v30 と v31 に接続できます。
- データ統合サービスはフィルタトランスフォーメーションロジックを Salesforce のソースにプッシュできます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Salesforce 9.6.1 HotFix 2 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange Adapters for PowerCenter

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい PowerCenter アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for Cassandra

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Cassandra データベースとの間でデータを読み取ったり書き込んだりするときの一貫性レベルを微調整できます。一貫性レベルにより、すべてのレプリカにおけるデータの同期方法が決定されます。データの正確性や応答時間の要件に基づき、必要な一貫性レベルを設定できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Cassandra 9.6.1 HotFix 2 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for MongoDB

バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、MongoDB ODBC ドライバによって、配列およびネストされた配列を含むカラムごとに仮想テーブルが作成されます。MongoDB ODBC ドライバを使用すると、ネストされたカラムの読み取りを 5 段階まで、ネストされたカラムの書き込みを 3 段階まで行うことができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for MongoDB 9.6.1 HotFix 2 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Salesforce Analytics

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、PowerExchange for Salesforce Analytics を使用し、Salesforce Analytics にデータを書き込むことができます。その後、Salesforce Analytics データベースでクエリを実行し、データを分析できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Salesforce Analytics 9.6.1 HotFix 2 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Vertica

バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、PowerExchange for Vertica で次のタスクを実行できます。

- Target Designer で Vertica ターゲットを作成できます。
- リレーショナルモードを使用し、Vertica ソースから大量のデータを読み取ることができます。リレーショナルモードでデータを読み取るには、Vertica リレーショナル接続を作成し、リレーショナルリーダーを使用するセッションを構成する必要があります。
- リレーショナルモードを使用し、Vertica ターゲットのデータを更新または削除できます。リレーショナルモードでデータを書き込むには、Vertica リレーショナル接続を作成し、リレーショナルライターを使用するセッションを構成する必要があります。
- バルクモードを使用して大量のデータを Vertica ターゲットに書き込むとき、ステージングファイルを作成するようにセッションを構成することができます。UNIX オペレーティングシステムで、ファイルステージ

ングを有効にするとき、GZIP 形式でデータを圧縮することもできます。データを圧縮することで、ネットワークで転送するデータのサイズを減らし、セッションのパフォーマンスを上げることができます。

- グリッドでセッションを実行し、セッションパフォーマンスを上げることができます。
- PowerCenter 統合サービスでは、ネイティブドライバを使用する Vertica ソースとターゲットにトランスフォーメーションロジックをプッシュできます。詳細については、『*Informatica PowerCenter 9.6.1 HotFix 2 上級ワークフローガイド*』を参照してください。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Vertica 9.6.1 HotFix 2 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

ワークフロー

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しいワークフロー機能について説明します。

Amazon Redshift のプッシュダウンの最適化

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、PowerCenter 統合サービスでは、接続タイプが ODBC のとき、Amazon Redshift のソースとターゲットにトランスフォーメーションロジックをプッシュできます。

詳細については、『*Informatica PowerCenter 9.6.1 HotFix 2 上級ワークフローガイド*』を参照してください。

Teradata 配列挿入をサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、ODBC 接続を使用して Teradata ターゲットに接続するとき、行ごとにデータを挿入するのではなく、Teradata ターゲットにデータの配列を挿入できます。データの配列を挿入することで、セッションのパフォーマンスが上がります。

ODBC 接続で Teradata ターゲットにデータの配列を挿入するには、セッションレベルまたは PowerCenter 統合サービスレベルで [OptimizeTeradataWrite] カスタムプロパティを構成し、その値を「1」に設定します。

詳細については、『*Informatica PowerCenter 9.6.1 HotFix 2 ワークフロー基本ガイド*』を参照してください。

変更内容（9.6.1 HotFix 2）

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の変更内容について説明します。

接続性

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 で変更された接続性について説明します。

Sybase IQ 外部ローダーの接続属性

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、PowerCenter はデフォルトで Sybase IQ データベースバージョン 16.0 に接続できます。Informatica は次の Sybase IQ 外部ローダー接続属性のサポートを終了しました。Sybase IQ がバージョン 16.0 からこれらの接続属性を利用していないことによります。

- ブロック要素
- ブロックサイズ

バージョン 9.6.1 HotFix 2 にアップグレードした後、16.0 より前の Sybase IQ データベースバージョンに接続しているときに接続属性の「ブロック要素」と「ブロックサイズ」を利用する場合、
[SybaseIQPre16VersionSupport] カスタムプロパティを構成し、その値を [はい] に設定します。

Informatica Analyst

次の変更は Informatica Analyst に適用されます。

- 9.6.1 HotFix 2 より、Analyst ツールは、モデルリポジトリオブジェクトを所有する、または最近更新したユーザーの氏名を表示します。氏名はユーザーを識別する場所に表示されます。たとえば、ライブラリワークスペースのアセット詳細です。

以前は、Analyst ツールでは、ユーザーのログイン名はライブラリワークスペースとその他の場所に表示されました。

ユーザーに保存されている氏名、ログイン名、電子メールアドレスを表示するには、氏名にカーソルを合わせます。

- 9.6.1 HotFix 2 より、Analyst ツールのフィルタ操作でユーザーの氏名を選択できます。

以前は、Analyst ツールのフィルタ操作でユーザーのログイン名を選択しました。

Informatica トランスフォーメーション

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 における Informatica トランスフォーメーションの変更点について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

次の変更はアドレスバリデータトランスフォーメーションに適用されます。

- バージョン 9.6.1 HotFix 2 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションでバージョン 5.6.0 の Informatica Address Doctor ソフトウェアエンジンを使用します。このエンジンで有効になる新機能は、バージョン 9.6.1 HotFix 2 のアドレスバリデータトランスフォーメーションで使用することができます。

以前は、トランスフォーメーションで Informatica Address Doctor ソフトウェアエンジンのバージョン 5.5.0 を使用していました。

- バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、アドレスバリデータトランスフォーメーションは、提案リストモードで米国の住所データを検証するとき、国情報と棟情報を返すことができます。トランスフォーメーションは [都道府県 2] ポートで国情報を返します。トランスフォーメーションは [棟] ポートで建物以降の情報を返します。

トランスフォーメーションは、バッチモード、認証モード、対話モードで住所データを検証するとき、引き続き国情報と建物以降の情報を返します。

以前は、トランスフォーメーションは提案リストモードでは米国住所データの情報を返しませんでした。

- バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、[フランス国立統計経済研究所コード] ポート名が *INSEE 9-Code* に変わります。[フランス国立統計経済研究所コード] ポートを使用するアドレスバリデータトランスフォーメーションの構成を更新する必要はありません。
- バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、すべての [市区町村の正式表記] ポート、[市区町村名] ポート、[市区町村優先名] ポートの精度が 100 になります。

以前、ポートの精度は 50 でした。

データプロセッサトランスフォーメーション

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、階層入力をリレーショナル出力に変換するデータプロセッサトランスフォーメーションのパフォーマンスが大幅に改善されました。

XML 入力のパフォーマンスをさらに上げるには、XML 入力が入力済み正規化されているとき、[設定] タブの [XML 入力の正規化] 設定を消去します。

ディシジョントランスフォーメーション

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、ディシジョントランスフォーメーションの REPLACESTR()関数で 1024 の最大精度を設定できます。

以前は、この関数に設定できる最大精度は 512 でした。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の Metadata Manager への変更内容について説明します。

Business Glossary リソース

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、ビジネス用語集リソースが次の点で変更されました。

- ビジネス用語集リソースを読み込むとき、Metadata Manager は、非公開カテゴリの公開ビジネス用語を抽出します。以前は、Metadata Manager は、用語が属するカテゴリが非公開の場合、公開ビジネス用語を抽出しませんでした。
- Metadata Manager にはビジネス用語とカテゴリの監査証跡情報が表示されなくなりました。ビジネス用語とカテゴリの監査証跡情報を表示するには、Analyst ツールでオブジェクト履歴を表示します。

Metadata Manager コマンドラインプログラム

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Metadata Manager リポジトリコマンドの動作とオプションが変更されました。また、一部のコマンドが mmcmd コマンドラインプログラムから mmRepoCmd コマンドラインプログラムに移されました。

次の mmRepoCmd コマンドの動作が変更されました。

restoreRepository

Metadata Manager リポジトリコンテンツをバックアップファイルからリストアします。リポジトリコンテンツを空のリポジトリにリストアできます。以前は、このコマンドを実行する前にリポジトリコンテンツを作成する必要がありました。このコマンドのオプションは変更されていません。

次のコマンドは mmcmd から mmRepoCmd に移されました。

createRepository

Metadata Manager ウェアハウステーブルを作成し、メタデータソースのモデルを Metadata Manager リポジトリにインポートします。このコマンドを実行する前に Metadata Manager サービスを有効にする必要があります。

Informatica サービス、Informatica クライアント、Informatica ユーティリティでインストールされた mmRepoCmd インスタンスからこのコマンドを実行できます。以前は、Informatica サービスでインストールされた mmRepoCmd インスタンスからこのコマンドを実行できました。

このコマンドのオプションは変更されました。ドメインユーザーではなく、Metadata Manager ユーザーに対してコマンドオプションを入力します。また、PowerCenter リポジトリにコマンドオプションを入力する必要はなくなりました。Metadata Manager サービスプロセスにより、Metadata Manager サービスを起動すると、PowerCenter リポジトリコンテンツがリストアされます。

以下の表に新しいコマンドのオプションを示します。

オプション	説明
-url	Metadata Manager アプリケーションを実行する Metadata Manager サービスのホスト名とポート番号。
--user	Metadata Manager ユーザ名。
--encryptedPassword	Metadata Manager ユーザーパスワードの暗号化されたパスワードのフラグ
--password	Metadata Manager ユーザのパスワード。
--namespace	Metadata Manager ユーザーが属しているセキュリティドメインの名前。

次の表は、削除されたコマンドオプションをまとめたものです。

オプション	説明
--securityDomain	Informatica ドメインユーザーが属するセキュリティドメインの名前。
--domainUser	Informatica ドメインへの接続に使用するユーザー名。
--domainPassword	Informatica ドメインユーザーのパスワード。
-pcRepositoryName	メタデータを Metadata Manager ウェアハウスにロードする際に使用されるメタデータオブジェクトを含む PowerCenter リポジトリの名前。
-pcRepositoryUser	PowerCenter リポジトリのユーザアカウント。Repository Service 用に設定したリポジトリユーザアカウントを使用します。
-pcRepositoryNamespace	PowerCenter リポジトリユーザーが属しているセキュリティドメインの名前。
-pcRepositoryPassword	PowerCenter リポジトリユーザのパスワード。
-restorePCRepository	PowerCenter リポジトリのリポジトリバックアップファイルをリストアし、PowerCenter リポジトリデータベースで Metadata Manager が使用するオブジェクトを作成します。

以下の表に、変更されたコマンドオプションを示します。

オプション	説明
--keyTab	このオプションは、ドメインユーザーではなく、Metadata Manager ユーザーのキータブファイルのパスとファイル名を指定します。

deleteRepository

すべてのメタデータおよびリポジトリデータベーステーブルを含む Metadata Manager リポジトリコンテンツを削除します。

Informatica サービス、Informatica クライアント、Informatica ユーティリティでインストールされた mmRepoCmd インスタンスからこのコマンドを実行できます。以前は、Informatica サービスでインストールされた mmRepoCmd インスタンスからこのコマンドを実行できました。

このコマンドのオプションは変更されました。ドメインユーザーではなく、Metadata Manager ユーザーに対してコマンドオプションを入力します。

以下の表に新しいコマンドのオプションを示します。

オプション	説明
-url	Metadata Manager アプリケーションを実行する Metadata Manager サービスのホスト名とポート番号。
--user	Metadata Manager ユーザー名。
--encryptedPassword	Metadata Manager ユーザーパスワードの暗号化されたパスワードのフラグ
--password	Metadata Manager ユーザーのパスワード。
--namespace	Metadata Manager ユーザーが属しているセキュリティドメインの名前。

次の表は、削除されたコマンドオプションをまとめたものです。

オプション	説明
--securityDomain	Informatica ドメインユーザーが属するセキュリティドメインの名前。
--domainUser	Informatica ドメインへの接続に使用するユーザー名。
--domainPassword	Informatica ドメインユーザーのパスワード。

以下の表に、変更されたコマンドオプションを示します。

オプション	説明
--keyTab	このオプションは、ドメインユーザーではなく、Metadata Manager ユーザーのキータブファイルのパスとファイル名を指定します。

restorePCRepository

Metadata Manager オブジェクトを含む PowerCenter リポジトリバックアップファイルを PowerCenter リポジトリデータベースにリストアします。このコマンドは、Informatica サービスでインストールされた mmRepoCmd インスタンスから実行する必要があります。このコマンドのオプションは変更されていません。

Metadata Manager 特権

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Metadata Manager リポジトリを作成またはリストアするために必要な特権が変更されました。

Metadata Manager リポジトリを作成またはリストアするには、デフォルトの管理者グループに属する必要があります。以前は、Metadata Manager サービスの権限を持つ Metadata Manager サービス特権が必要でした。

Metadata Manager 製品名

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Metadata Manager Web アプリケーションに表示される製品名が Metadata Manager に変更されました。以前は、製品名は「Metadata Manager & Business Glossary」でした。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の PowerExchange アダプタの変更内容について説明します。

PowerExchange for Vertica

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、PowerExchange for Vertica によるプッシュダウンの最適化に次の変更が適用されます。

- DATE_DIFF 関数を Vertica にプッシュするとき、Vertica は日付の差異値を最も近い整数に丸めます。ただし、PowerCenter 統合サービスは浮動小数点値を返します。Vertica データベースで日付の差異を浮動小数点値として処理する場合、プッシュダウンの最適化を無効にできます。
- 形式を「Y」として指定し、DATE_DIFF 関数を Vertica にプッシュするとき、Vertica は日数の形式で日付の差異を計算します。ただし、PowerCenter 統合サービスは差異を年数の形式で計算します。差異値を年数の形式で処理する場合、プッシュダウンの最適化を無効にできます。

リリースタスク (9.6.1 HotFix 2)

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 のリリースタスクについて説明します。

Metadata Manager

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の Metadata Manager のリリースタスクについて説明します。

Informatica プラットフォームリソースの HDFS データオブジェクト

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Metadata Manager は Informatica プラットフォームリソースで HDFS データオブジェクトのクラスを追加します。Metadata Manager には、このクラスのオブジェクトの新しいアイコンが表示されます。この新しいクラスとアイコンにより、HDFS データオブジェクトとフラットファイルデータオブジェクトが区別されます。

新しいクラスとアイコンを表示するには、HDFS データオブジェクトを含む Informatica プラットフォームリソースを再度読み込みます。

第 6 章

新機能、変更、およびリリースタスク (9.6.1 HotFix 1)

この章では、以下の項目について説明します。

- [新機能 \(9.6.1 HotFix 1\)](#) , 128 ページ
- [変更内容 \(9.6.1 HotFix 1\)](#) , 136 ページ
- [リリースタスク \(9.6.1 HotFix 1\)](#) , 139 ページ

新機能 (9.6.1 HotFix 1)

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい機能について説明します。

Big Data

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい Big Data 機能について説明します。

データウェアハウジング

Big Data Edition にはデータウェアハウジングの新機能と改良点があります。

バイナリデータ型

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、Hive 環境でのマッピングでは、マッピングでポートを通過するときにバイナリデータを処理できます。ただし、マッピングではバイナリデータを使用する式関数は処理できません。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

Hive ターゲットでのパーティションの切り詰め

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、データ統合サービスは Hive ターゲットのパーティションを切り詰めることができます。Hive ターゲットのパーティションの切り詰めとターゲットテーブルの切り詰めの両方を選択する必要があります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

Hadoop 分布

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、Big Data Edition では、次の Hadoop ディストリビューションのサポートが追加されました。

- Cloudera CDH 5.1

- Hortonworks HDP 2.1

Big Data Edition では、Hortonworks HDP 2.0 のサポートが廃止されました。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Big Data Edition インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

Hadoop エコシステム

Big Data Edition には Hadoop エコシステムの新機能と改良点があります。

Cloudera Manager

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、Cloudera Manager を利用し、Big Data Edition インストールを Cloudera CDH 5.1 の Hadoop クラスターノード全体にパーセルとして配信できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Big Data Edition インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

高可用性

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、データ統合サービスと Developer ツールの、可用性の高い Hadoop クラスターに対する読み出しおよび書き込みを有効にすることができます。可用性の高い Hadoop クラスターはクラスターの JobTracker、NameNode、ResourceManager に中断のないアクセスを提供できます。Hadoop ディストリビューションの可用性の高い Hadoop クラスターと通信できるように Developer ツールを構成する必要があります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Big Data Edition インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

Kerberos 認証

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、Kerberos 認証を使用する Informatica ドメインを、同じく Kerberos 認証を使用する Hadoop クラスターでマッピングを実行するように設定できます。Hadoop クラスターが Informatica ドメインと通信できるようにするには、一方向の信頼を領域全体に設定する必要があります。

以前は、Informatica ドメインが Kerberos 認証を使用しない場合、Kerberos 認証を使用する Hadoop クラスターでマッピングを実行できました。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

スケジューラ

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、Hadoop ディストリビューションで次のスケジューラが有効になります。

- キャパシティースケジューラ
- フェアスケジューラ

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Big Data Edition インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

Business Glossary

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい Business Glossary 機能について説明します。

リレーションビュー図のエクスポート

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、リレーションビュー図を開いた後でエクスポートできます。Analyst ツールにログインしていない場合、または Business Glossary にアクセスできないユーザーと図を共有するには、図にアクセスするためにリレーションビュー図をエクスポートします。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

Business Glossary デスクトップの複数値属性

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Business Glossary デスクトップで複数値属性を表示できます。以前は、単一値属性しか表示できませんでした。[含む] および [関連事項] などのプロパティが複数値属性の例です。

コマンドラインプログラム

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Informatica コマンドラインプログラムの新規および更新されたコマンドとオプションについて説明します。

pmrep コマンド

次の表はバージョン 9.6.1 HotFix 1 で更新された pmrep コマンドの説明をまとめたものです。

コマンド	説明
PurgeVersion	以下の新しいオプションが含まれます。 -k (log objects not purged)。オプション。パージ基準に一致してもパージされないオブジェクト名およびバージョンをすべてリストします。-k オプションでは、オブジェクトバージョンがパージされない理由もリストします。例えば、オブジェクトをパージするために必要な特権がない場合は、オブジェクトバージョンはパージされません。

isp コマンド

次の表はバージョン 9.6.1 HotFix 1 で新しく追加された isp コマンドの説明をまとめたものです。

コマンド	説明
convertUserActivityLog	ユーザーアクティビティログをテキストまたは XML 形式に変換します。
getUserActivityLog	バイナリ、テキストまたは XML 形式のユーザーアクティビティログを取得します。
migrateUsers	ネイティブセキュリティドメインのユーザーのグループ、ロール、特権、および権限を、1 つ以上の LDAP セキュリティドメインのユーザーに移行します。ユーザー移行ファイルが必要です。

接続性

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい機能について説明します。

Netezza の接続

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、ODBC を使用して Netezza データベースとの間でデータの読み取りおよび書き込みを行うことができます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Developer ツールガイド*』を参照してください。

Data Quality アクセラレータ

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい Data Quality アクセラレータについて説明します。

データクレンジングルール

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、コアアクセラレータをモデルリポジトリプロジェクトに追加するときに、次のルールを選択できます。

rule_GTIN_Validation

Global Trade Item Number (GTIN) を検証します。このルールでは、8 桁、12 桁、13 桁、および 14 桁の数値を検証します。このルールでは、チェックデジットが数値に対して正しい場合は「Valid」を返し、正しくない場合は「Invalid」を返します。

モデルリポジトリのアクセラレータプロジェクトの General_Data_Cleansing フォルダでルールを検索します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 アクセラレータガイド*』を参照してください。

マッチングルール

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、一致分析を実行するすべての Data Quality アクセラレータルールには、パススルー入力ポートおよびパススルー出力ポートが含まれます。ポートを使用して、ルールを介して一意の識別子を渡します。

モデルリポジトリのアクセラレータプロジェクトの Matching_Deduplication フォルダでルールを検索します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 アクセラレータガイド*』を参照してください。

マニュアル

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Informatica のマニュアルで追加された新しいガイドまたは更新されたガイドについて説明します。

Informatica のマニュアルでは次のガイドが変更されています。

Informatica Business Glossary **バージョン 2.0 API リファレンスガイド**

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、新しいバージョンのガイドには、クライアントアプリケーションの開発に使用される Business Glossary REST API の URL とパラメータが含まれています。

Informatica Developer

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい Informatica Developer 機能について説明します。

カスタマイズデータオブジェクトの書き込みプロパティ

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、[Hive ターゲットパーティションを切り詰めます] プロパティがカスタマイズデータオブジェクトの書き込みプロパティに追加されます。このプロパティはデータが挿入されている Hive ターゲットのパーティションを上書きします。このオプションを有効にするには、ターゲットテーブルを切り詰めるオプションも選択する必要があります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Developer ツールガイド*』を参照してください。

Netezza プッシュダウンの最適化

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、データ統合サービスがトランスフォーメーションロジックを、ネイティブドライバを使用する Netezza ソースにプッシュできます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 マッピングガイド*』を参照してください。

SAP HANA の安全な通信

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、SAP HANA データベースの安全な通信を SSL プロトコルで構成できます。

Informatica ドメイン

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 2 の新しい Informatica ドメイン機能について説明します。

Amazon EC2 の Informatica

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、Informatica サービスを Amazon EC2 の複数のノードで設定し、起動できます。最大 4 つのノードを含む Informatica ドメインを起動できます。

Informatica DiscoveryIQ

バージョン 9.6.1 HotFix 2 より、製品の使用状況を診断するツールである Informatica DiscoveryIQ では、データの使用状況とシステムの統計値に関するレポートを Informatica に定期的に送信できるようになりました。データのコレクションおよびアップロードはデフォルトで有効になっています。使用統計値を Informatica に送信しないことを選択できます。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい Informatica トランスフォーメーション機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

バージョン 9.6.1 HotFix 1 から、アドレスバリデータトランスフォーメーションで次のポートを選択できます。

入力

構造化された XML 形式で入力アドレスレコードのデータ要素を含む出力ポート。

結果

構造化された XML 形式で出力アドレスのデータを表現するデータ要素を含む出力ポート。

トランスフォーメーションの XML ポートグループの [入力データ] ポートおよび [結果] ポートを検索します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 アドレスバリデータポート参照*』を参照してください。

マッピング

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しいマッピング機能について説明します。

Informatica マッピング

ブランチの刈り込みの最適化方法

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、データ統合サービスはブランチの刈り込みの最適化方法を適用できます。データ統合サービスがブランチの刈り込みの最適化方法を適用する場合、マッピングで行をターゲットへ渡さないトランスフォーメーションを削除します。

ブランチの刈り込みの最適化方式は、最適化レベルをノーマルまたは完全に設定した場合に Developer ツールでデフォルトで有効になります。パフォーマンスが向上しない場合、最適化レベルを最小またはなしに設定することにより、ブランチの刈り込みを無効にできます。

詳細については、『*Informatica Data Services 9.6.1 HotFix 1 パフォーマンスのチューニングの概要*』を参照してください。

制約

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、データ統合サービスはリレーショナルソース、論理データオブジェクト、物理データオブジェクト、仮想テーブルから制約を読み取れます。制約は、データ行上の値が合致する必要がある条件式です。制約を読み取るときにデータ統合サービスは、適用されている最適化方式に基づき、データ行に関して TRUE に評価されない行を削除することがあります。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 マッピングガイド*』を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい Metadata Manager 機能について説明します。

ブラウザサポート

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Metadata Manager アプリケーションは次の Web ブラウザで実行できます。

- Internet Explorer 11.0
- Google Chrome 35

製品の要件およびサポートされているプラットフォームの詳細については、Informatica マイサポートポータルの Product Availability Matrix を参照してください。

<https://mysupport.informatica.com/community/my-support/product-availability-matrices>

Microsoft SQL Server および Oracle Exadata Versions

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Metadata Manager は以下のデータベースバージョンをサポートします。

- Microsoft SQL Server 2014
- Oracle Exadata 11g

したがって、以下のアクションを実行できます。

- これらのデータベースバージョンからメタデータを抽出する Microsoft SQL Server または Oracle リソースの作成。
- モデルリポジトリまたは PowerCenter リポジトリがこれらのいずれかのデータベースバージョンである場合の、Business Glossary、Informatica Platform、または PowerCenter リソースの作成。
- これらのいずれかのデータベースバージョンの Metadata Manager リポジトリの作成。

リソースの作成の詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。Metadata Manager リポジトリの作成の詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 インストール&環境設定ガイド*』を参照してください。

セキュリティの改善点

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerCenter リソースを作成または編集するときに、Metadata Manager により、PowerCenter リポジトリデータベースの JDBC URL の一部であるセキュア JDBC パラメータを表示しないようにすることができます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

PowerCenter

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい PowerCenter 機能について説明します。

SAP HANA の安全な通信

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、SAP HANA データベースの安全な通信を SSL プロトコルで構成できます。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい PowerExchange アダプタ機能について説明します。

PowerExchange Adapters for Informatica

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい Informatica アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for Cassandra

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerExchange for Cassandra を使用して、Cassandra データベースとの間でデータの読み取りおよび書き込みを行うことができます。Cassandra データオブジェクトをマッピングのソースまたはターゲットとして追加し、マッピングを実行して、データを読み取りまたは書き込むことができます。マッピングの Cassandra コレクションを使用する仮想テーブルを作成できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Cassandra 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Greenplum

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、SSL プロトコルを使用して Greenplum データベースへの安全な通信を設定できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Greenplum 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for HBase

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerExchange for HBase を使用して、Kerberos 認証を使用する HBase データストアに接続できます。Kerberos 認証を有効にし、HBase 接続プロパティが Kerberos 認証を使用する HBase データストアにアクセスできるように設定します。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for HBase 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for HDFS

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、複雑なファイルを読み取る際に、`com.informatica.adapter.hdfs.hadoop.io.InfaBatchTextInputFormat` 入力形式を使用して、バッチ内のテキストファイルを読み取り、パフォーマンスを向上させることができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for HDFS 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Hive

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerExchange for Hive は Hive 環境でバイナリデータ型をサポートします。バイナリデータ型の範囲は、1 から 104,857,600 バイトです。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Hive 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Salesforce

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Cloud 接続カテゴリの下にリストされている PowerExchange for Salesforce 接続を使用して、Salesforce との間でデータの読み取りおよび書き込みを行うことができます。Salesforce データオブジェクトをマッピングのソースまたはターゲットとして追加し、マッピングを実行してデータを読み取りまたは書き込むことができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Salesforce 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for SAS

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerExchange for SAS を使用して、SAS との間でデータの読み取りおよび書き込みを行うことができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for SAS 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Tableau

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerExchange for Tableau を使用して、フラットファイルおよび SAP アプリケーションなどの複数のソースからデータを読み取るにより、Tableau データ抽出ファイルを生成できます。ビジネスユーザーは Tableau デスクトップで抽出ファイルを開き、データを視覚化し、パターンや傾向を識別できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Tableau 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange Adapters for PowerCenter

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい PowerCenter アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for Cassandra

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerExchange for Cassandra を使用して、Cassandra データベースからデータを抽出し、データをロードすることができます。マッピングの Cassandra コレクションを使用する仮想テーブルを作成できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Cassandra 9.6.1 HotFix 1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Greenplum

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、SSL プロトコルを使用して Greenplum データベースへの安全な通信を設定できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Greenplum 9.6.1 HotFix 1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Vertica

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、PowerExchange for Vertica を使用して、Vertica データベースに大量のデータを書き込むことができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Vertica 9.6.1 HotFix 1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

参照データ

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しい参照データ機能について説明します。

確率モデル

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、確率モデルのラベルに割り当てた参照データ値の合計数を表示できます。

ワイルドカード文字を使用して確率モデルのデータ値を検索できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 参照データガイド*』を参照してください。

ルール仕様

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の新しいルール仕様について説明します。

日付と時刻の操作

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、以下の日付と時刻データに対する操作を実行するようにルール文を設定できます。

- データ統合サービスがルール文を含むマッピングを実行する日付と時刻を返します。
- データ統合サービスがルール文を含むマッピングを実行する前または後の時点をタイムスタンプが参照するかどうかを決定します。
- 日付と時刻のデータの文字列を日時データ型に変換します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 ルール仕様ガイド*』を参照してください。

参照テーブル操作

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、入力値が参照テーブル値に一致するとき、指定した値を返すルール文を構成できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 HotFix 1 ルール仕様ガイド*』を参照してください。

変更内容（9.6.1 HotFix 1）

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の変更内容について説明します。

アプリケーションサービス

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 のアプリケーションサービスへの変更内容について説明します。

コンテンツ管理サービス

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、コンテンツ管理サービスは次のアドレス検証プロセスのプロパティにデフォルト値を設定します。

- 事前にロードしない国
- 地理的コーディングを事前にロードしない国
- 提案リストを事前にロードしない国
- アドレスコードを事前にロードしない国

コンテンツ管理サービスは各プロパティのデフォルト値に ALL を設定します。

以前は、コンテンツ管理サービスはプロパティのデフォルト値を設定していませんでした。

注: デフォルトプロパティは、以前の製品バージョンで作成したアドレス検証マッピングからのデータ出力に影響を与えません。

Business Glossary

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Business Glossary への変更内容について説明します。

Business Glossary API の変更

クライアントアプリケーションの開発に使用する Business Glossary REST API の URL とパラメータが変更されました。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Informatica トランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

次の変更がバージョン 9.6.1 HotFix 1 でアドレスバリデータトランスフォーメーションに適用されます。

- バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションにより Software Evaluation and Recognition Program (SERP) レポートの追加フィールドに入力が行われます。SERP レポートには次のフィールドがあります。

- 処理日

- CPC アドレスデータファイルの日付

以前は、トランスフォーメーションによるフィールドへの入力が行われませんでした。

- バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、拡張要素のステータスポート名は拡張要素の結果ステータスです。

データプロセッサトランスフォーメーション

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、XMap オブジェクトを持つデータプロセッサトランスフォーメーションをエクスポートし、XMap オブジェクトを持つトランスフォーメーションとして Developer ツールに再度インポートできます。

以前は、XMap オブジェクトを持つデータプロセッサトランスフォーメーションをエクスポートしたときは、スクリプトオブジェクトを持つトランスフォーメーションとして Developer ツールに再度インポートしました。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Metadata Manager への変更内容について説明します。

Microsoft Analysis および Reporting Services メタデータソースバージョン

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Microsoft Analysis および Reporting Services リソースを使用して、Microsoft Analysis および Reporting Services バージョン 10.5 (2008 R2) からメタデータを抽出できます。

以前は、Microsoft Analysis および Reporting Services バージョン 9.0 (2005) からメタデータを抽出できました。

検索

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、検索で無視される単語のリストのカスタマイズの動作が変更されました。

動作は以下のように変更されました。

- stopwords.txt ファイルを手動で作成する必要がなくなりました。代わりに、Informatica サービスインストーラによりデフォルトの stopwords.txt ファイルが次のディレクトリに作成されます。

- <Informatica installation directory>\services\shared\jars\pc\classes

- imm.properties ファイルの UseCustomStopWords プロパティを true に設定する必要があります。

インストーラにより作成される stopwords.txt には、検索で無視される英単語のデフォルトのリストが含まれています。その単語リストをカスタマイズするには、stopwords.txt ファイルを更新し、UseCustomStopWords プロパティを有効にして、Metadata Manager サービスを無効にしてから有効にし、すべてのリソースに対する検索インデックスを手動で更新します。

以前は、単語リストをカスタマイズするには、stopwords.txt ファイルを手動で作成し、Metadata Manager サービスを無効にしてから有効にし、すべてのリソースに対する検索インデックスを手動で更新する必要がありました。

PowerCenter トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の PowerCenter トランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

データマスキングトランスフォーメーション

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、トランザクション環境プロパティに、置換ディクショナリのオーナー名およびストレージのオーナー名を設定します。

以前は、セッションプロパティの [マッピング] タブのトランスフォーメーションビューに、置換ディクショナリのオーナー名およびストレージのオーナー名を設定していました。

PowerExchange

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Informatica ドメインの PowerExchange 機能への変更内容について説明します。

infacmd pwx displayStatsListener コマンド

9.6.1 HotFix 1 より、infacmd pwx displayStatsListener コマンドで、Linux、zLinux、UNIX 上の PowerExchange リスナプロセスの監視統計を生成できます。以前は、このコマンドで、Windows 上の PowerExchange リスナプロセスの統計のみが生成されました。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の PowerExchange アダプタへの変更内容について説明します。

PowerExchange Adapters for Informatica

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Informatica アダプタの変更内容について説明します。

PowerExchange for Salesforce

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Enterprise 接続カテゴリの下にリストされている PowerExchange for Salesforce 接続が非推奨となりました。Informatica は次のメジャーリリースでサポートを停止する予定です。Cloud 接続カテゴリの下にリストされている新しい PowerExchange for Salesforce 接続を使用して、Salesforce に対してデータの読み取りおよび書き込みを行うことをお勧めします。

PowerExchange for Mongo DB

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、Informatica PowerExchange for Mongo DB ODBC ドライバファイルの名前が libinformaticamongodbodbc64.so になりました。

以前は、Informatica PowerExchange for Mongo DB ODBC ドライバファイルの名前は libsimbamongodbodbc64.so でした。

PowerExchange Adapters for PowerCenter

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の PowerCenter アダプタの変更内容について説明します。

PowerExchange for Mongo DB

バージョン 9.6.1 HotFix 1 より、Informatica PowerExchange for Mongo DB ODBC ドライバファイルの名前が `libinformaticamongodbodbc64.so` になりました。

以前は、Informatica PowerExchange for Mongo DB ODBC ドライバファイルの名前は `libsimbamongodbodbc64.so` でした。

参照データ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の参照データ機能への変更内容について説明します。

確率モデル

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Developer ツールにより、Stanford Named Entity Recognition API のバージョン 3.4 を使用して、確率モデルをコンパイルできます。

以前は、Developer ツールでは、API のバージョン 1.2.6 を使用して確率モデルをコンパイルしていました。

リリースタスク (9.6.1 HotFix 1)

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 のリリースタスクについて説明します。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の PowerExchange アダプタのリリースタスクについて説明します。

PowerExchange Adapters for Informatica

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の Informatica アダプタのリリースタスクについて説明します。

PowerExchange for Salesforce

バージョン 9.6.1 HotFix 1 では、Enterprise 接続カテゴリの下にリストされている PowerExchange for Salesforce 接続が非推奨となりました。Informatica は次のメジャーリリースでサポートを停止する予定です。Cloud 接続カテゴリの下にリストされている新しい PowerExchange for Salesforce 接続を使用して、Salesforce に対してデータの読み取りおよび書き込みを行うことをお勧めします。

既存のマッピングを非推奨となった PowerExchange for Salesforce アダプタとともに使用できます。しかし、Cloud 接続カテゴリの下にリストされている PowerExchange for Salesforce 接続を使用するように、既存のマッピングまたは接続を更新することはできません。新しい PowerExchange for Salesforce アダプタを使用する、新しいマッピングおよび接続を作成する必要があります。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Salesforce 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Mongo DB

Informatica 9.6.1 から Informatica 9.6.1 HotFix 1 にアップグレードする前に、`odbc.ini` ファイルをバックアップする必要があります。

Informatica 9.6.1 HotFix 1 にアップグレードしたら、odbc.ini ファイルを odbc.ini ファイルのバックアップコピーと置換し、odbc.ini ファイルの MongoDB ドライバ名を libinformaticamongodbodbc64.so に変更します。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for MongoDB 9.6.1 HotFix 1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange Adapters for PowerCenter

このセクションでは、バージョン 9.6.1 HotFix 1 の PowerCenter アダプタのリリースタスクについて説明します。

PowerExchange for Mongo DB

Informatica 9.6.1 から Informatica 9.6.1 HotFix 1 にアップグレードする前に、odbc.ini ファイルをバックアップする必要があります。

Informatica 9.6.1 HotFix 1 にアップグレードしたら、odbc.ini ファイルを odbc.ini ファイルのバックアップコピーと置換し、odbc.ini ファイルの MongoDB ドライバ名を libinformaticamongodbodbc64.so に変更します。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for MongoDB 9.6.1 HotFix 1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

Informatica Web クライアントアプリケーション

アップグレード後、Informatica Web クライアントアプリケーションにアクセスする前に Web ブラウザのキャッシュを消去する必要があります。

Informatica は Google Chrome ブラウザと Microsoft Internet Explorer ブラウザをサポートします。アップグレード後、Informatica Web クライアントアプリケーションにアクセスするマシンでブラウザキャッシュを消去します。Informatica Web クライアントアプリケーションには、Administrator ツール、Analyst ツール、レポートサービス、レポートおよびダッシュボードサービス、Metadata Manager が含まれています。

第 7 章

新機能（9.6.1）

この章では、以下の項目について説明します。

- [アプリケーションサービス, 141](#) ページ
- [Big Data, 142](#) ページ
- [Business Glossary, 143](#) ページ
- [コマンドラインプログラム, 144](#) ページ
- [マニュアル, 147](#) ページ
- [Informatica Administrator, 148](#) ページ
- [Informatica Development Platform, 148](#) ページ
- [Informatica トランスフォーメーション, 149](#) ページ
- [インストーラ, 152](#) ページ
- [マッピング, 152](#) ページ
- [Metadata Manager, 153](#) ページ
- [PowerExchange, 155](#) ページ
- [PowerExchange アダプタ, 155](#) ページ
- [プロファイルおよびスコアカード, 157](#) ページ
- [参照データ, 158](#) ページ
- [ルール仕様, 158](#) ページ
- [ソースおよびターゲット, 158](#) ページ
- [トランスフォーメーション言語関数, 159](#) ページ

アプリケーションサービス

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいアプリケーションサービスについて説明します。

コンテンツ管理サービス

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいコンテンツ管理サービス機能について説明します。

コンテンツ管理サービスは、アドレスコードルックアップ参照データおよび対話型参照データのプリロード動作を決定します。アドレス検証プロセスのプロパティを使用して、プリロード動作を設定します。

以下の表に、アドレスコードルックアップデータのプリロードプロパティの説明を示します。

プロパティ	説明
アドレスコード全体を事前にロードする国	アドレス検証の開始前にデータ統合サービスがすべての参照データをメモリにロードする国を一覧表示します。
アドレスコードの一部を事前にロードする国	アドレス検証の開始前にデータ統合サービスがすべての参照データをメモリにロードする国を一覧表示します。
アドレスコードを事前にロードしない国	アドレス検証の開始前にデータ統合サービスがアドレス参照データをメモリにロードしない国を一覧表示します。

以下の表に、バッチおよび認証参照データ、さらに対話型参照データのプリロードプロパティの説明を示します。

プロパティ	説明
事前に全体をロードする国	アドレス検証の開始前にデータ統合サービスがすべてのバッチ、認証、および対話型参照データをメモリにロードする国を一覧表示します。
事前に一部をロードする国	アドレス検証の開始前にデータ統合サービスがバッチ、認証、および対話型メタデータおよびインデックス構造をメモリにロードする国を一覧表示します。
事前にロードしない国	アドレス検証の開始前にデータ統合サービスがバッチ、認証、または対話型参照データをメモリにロードしない国を一覧表示します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。

Big Data

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい Big Data 機能について説明します。

Hive 環境のデータタイプ

Hive 0.11 以上を使用する Hive 環境に高精度の Decimal データタイプをプッシュすることができます。

高精度のマッピングが無効な場合、データ統合サービスはすべての Decimal 値を Double 値に変換します。

高精度のマッピングが有効な場合、データ統合サービスは精度が 28 を超える Decimal 値を Double 値に変換します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

Hive 接続プロパティ

Hive 接続では次のプロパティを指定します。

- Hive または Hadoop の詳細プロパティを入力して、データ統合サービスが実行されているマシン上の hive-site.xml 内にある Hive または Hadoop クラスタプロパティを設定またはオーバーライドする。
- Hadoop クラスタでマッピングを実行するためにデータ統合サービスが偽装するユーザーのユーザー名を入力する。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

ユーザー認証

データ統合サービスでは、Kerberos 認証を使用する Hadoop クラスタでマッピングやワークフローのジョブを実行できます。Hadoop クラスタはデータ統合サービスユーザーアカウントの SPN を認証することにより、Hadoop クラスタでマッピングおよびワークフローのジョブを実行します。Hadoop クラスタで別のユーザーにジョブの実行を許可するには、別のユーザーアカウントを偽装するようにデータ統合サービスの SPN を設定します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

Hadoop ディストリビューションのマッピング

マッピングは次の Hadoop ディストリビューションで実行することができます。

- Cloudera CDH 5.0
- Hortonworks HDP 2.0
- MapR 3.1
- Pivotal HD 1.1

詳細については、『*Informatica 9.6.1 Big Data Edition インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

Business Glossary

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい Business Glossary 機能について説明します。

ビジネスイニシアティブ

ビジネスイニシアティブは、ビジネス用語集でまとめて承認および公開する必要がある用語集アセットのコンテナです。複数のビジネス用語、カテゴリ、およびポリシーを同時に公開するには、ビジネスイニシアティブを使用します。ビジネスイニシアティブは他のすべての用語集アセットと同じ承認プロセスを経由します。

カテゴリおよびビジネスイニシアティブテンプレートのカスタマイズ

カテゴリおよびビジネスイニシアティブのテンプレートはカスタマイズできます。

カスタムプロパティのデフォルト値

用語集アセットテンプレートをカスタマイズするときに作成するカスタムプロパティのデフォルト値を追加できます。

アセットリレーションの視覚化

ビジネス用語およびポリシーとビジネス用語集内の他のアセットとの間のリレーションを視覚的に表現できます。このアセットリレーションを視覚化した図は、動的かつ対話的です。この図のコンテキストを配置し直し、図に表示されるアセットをフィルタして、レベル数を変更することができます。

シノニムの廃止

ビジネス用語集内のシノニムの廃止日を設定できます。廃止日を過ぎると、シノニムの状態は変更されます。ビジネス用語集コンシューマはこの状態を確認して、シノニムの有効性を識別します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

コマンドラインプログラム

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいコマンドについて説明します。

環境変数

以下の表に、コマンドラインプログラムで使える新しい環境変数の説明を示します。

環境変数	説明
INFA_DEFAULT_DB_TRUSTSTORE_PASSWORD	infasetup コマンドのデータベーストラストストアパスワードを格納します。
INFA_NODE_KEYSTORE_PASSWORD	infasetup コマンドの infa_keystore.jks ファイルのパスワードを格納します。
INFA_NODE_TRUSTSTORE_PASSWORD	infasetup コマンドの infa_truststore.jks ファイルのパスワードを格納します。

infacmd dis コマンド

以下の表に、新しい infacmd dis コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
ListSequenceObjectProperties	シーケンスデータオブジェクトのプロパティを一覧表示します。
ListSequenceObjects	アプリケーションにデプロイされたシーケンスデータオブジェクトを一覧表示します。
SetSequenceState	シーケンスデータオブジェクトの現在の値を更新します。

infacmd isp コマンド

以下の表に、新しい infacmd isp コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
printSPNAndKeytabNames	ドメイン内のノードおよびサービスの SPN およびキータブファイルの名前の一覧を生成します。

以下の表に、更新された infacmd isp コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
switchToGatewayNode	このコマンドには、データベースのトラストストアファイルのオプション (-dbtl) が含まれています。セキュアなドメイン環境設定リポジトリデータベースのトラストストアファイルのパスおよびファイル名を入力します。ドメイン環境設定リポジトリにセキュアデータベースを使用する場合は、このオプションを指定する必要があります。

infacmd mrs コマンド

以下の表に、新しい infacmd mrs コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
rebuildDependencyGraph	アップグレード後にオブジェクトの依存関係を確認できるようにオブジェクト依存関係のグラフを再作成します。

infacmd rds コマンド

バージョン 9.6.1 では、infacmd rds コマンドは廃止されました。infacmd rds コマンドを使用して Reporting and Dashboard Service を管理することはできなくなりました。Administrator ツールを使用する必要があります。

以下の表に、廃止された infacmd rds コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CreateService	ドメインにレポートおよびダッシュボードサービスを作成します。
ListServiceProcessOptions	レポートおよびダッシュボードサービスのオプションを一覧表示します。

infasetup コマンド

以下の表に、新しい infasetup コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
updateKerberosConfig	Informatica ドメインユーザーが属している領域名を変更するか、Informatica ドメインサービスが属しているサービス領域名を変更します。このコマンドは Kerberos 設定を変更しません。

以下の表に、更新された infasetup コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
<ul style="list-style-type: none">- BackupDomain- DefineDomain- DefineGatewayNode- DeleteDomain- RestoreDomain- updateGatewayNode- upgradeDomainMetadata	このコマンドには、データベースのトラストストアのオプション (-dbtl) が含まれています。セキュアなドメインリポジトリデータベースのトラストストアファイルのパスおよびファイル名を入力します。ドメイン用にセキュアなドメインリポジトリデータベースを設定する場合は、このオプションを指定する必要があります。

mmcmd

バージョン 9.6.1 では、以下の mmcmd コマンドが変更されています。

コマンド	説明
createRepository	--domainPassword オプションが必要なのは、ドメインで Kerberos 認証が使用されていて、ドメインユーザーに--keyTab オプションを指定しない場合のみです。以前は、このオプションは常に必須でした。
createResource	追加されたオプションは、以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">- --resourcePassword。リソースでパスワードが使用されていて、リソース構成ファイルにリソースパスワードが含まれていない場合は、このオプションを使用してパスワードを指定します。- --secureJDBCParameters。このオプションを使用すると、セキュア JDBC パラメータを指定して JDBC 接続 URL を追加することができます。Metadata Manager のリソース構成プロパティには、セキュアなパラメータまたはパラメータ値が表示されません。
deleteRepository	--domainPassword オプションが必要なのは、ドメインで Kerberos 認証が使用されていて、ドメインユーザーに--keyTab オプションを指定しない場合のみです。以前は、このオプションは常に必須でした。
getResource	-includePassword オプションが追加されました。リソース構成ファイルにリソースパスワードを含めるか除外するかを選択できます。以前は、このコマンドは常にパスワードを含めていました。
restorePCRepository	--domainPassword オプションが必要なのは、ドメインで Kerberos 認証が使用されていて、ドメインユーザーに--keyTab オプションを指定しない場合のみです。以前は、このオプションは常に必須でした。
updateResource	追加されたオプションは、以下のとおりです。 <ul style="list-style-type: none">- --resourcePassword。リソースでパスワードが使用されていて、リソース構成ファイルにリソースパスワードが含まれていない場合は、このオプションを使用してパスワードを指定します。- --secureJDBCParameters。このオプションを使用すると、セキュア JDBC パラメータを指定して JDBC 接続 URL を追加することができます。Metadata Manager のリソース構成プロパティには、セキュアなパラメータまたはパラメータ値が表示されません。

mmRepoCmd

バージョン 9.6.1 では、mmRepoCmd コマンドラインプログラムを使用して Metadata Manager リポジトリデータベースコンテンツのバックアップおよびリストアを行います。

mmRepoCmd には次の改良点が含まれています。

- リポジトリコンテンツをリストアする場合、mmRepoCmd はドメイン暗号化キーを使用して Metadata Manager リポジトリ内の機密データを暗号化する。
- mmRepoCmd は Metadata Manager サービスからリポジトリデータベース接続情報を取得する。コマンドを実行する場合、引数として接続パラメータを指定する必要はない。

mmRepoCmd には次のコマンドが含まれています。

コマンド	説明
backupRepository	Metadata Manager リポジトリをバックアップファイルにバックアップします。
restoreRepository	Metadata Manager リポジトリコンテンツをバックアップファイルからリストアします。

以前は、backupCmdLine コマンドラインプログラムを使用して Metadata Manager リポジトリデータベースコンテンツのバックアップおよびリストアを行っていました。 backupCmdLine は削除されました。

pmprep コマンド

以下の表に、更新された pmrep コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
createConnection	このコマンドには kerberized_connection (-K) オプションが含まれています。接続先のデータベースが Kerberos 認証を使用するネットワーク上で実行されることを指定します。

rcfmu

バージョン 9.6.1 では、rcfmu を使用して Metadata Manager 9.1.0、9.5.x、および 9.6.0 から最新バージョンへリソース構成ファイルを移行できます。 rcfmu には、元のリソース構成ファイルのバージョンを指定する新しいオプション-smv が含まれています。

以前は、rcfmu を使用して Metadata Manager 9.1.0 から 9.5.x または 9.6.0 にリソース構成ファイルを移行していました。

rmu

バージョン 9.6.1 では、rmu を使用して Metadata Manager 9.1.0、9.5.x、および 9.6.0 から最新バージョンへリソースを移行できます。 rmu は元のリソースバージョンを検出します。

以前は、rmu を使用して Metadata Manager 9.1.0 から 9.5.x または 9.6.0 にリソースを移行していました。

マニュアル

ここでは、バージョン 9.6.1 の Informatica のマニュアルに含まれる新しいガイドについて説明します。いくつかの新しいガイドは複数の製品で共有されている機能に基づいて構成されており、以前のガイドに代わるものとなっています。

Informatica のマニュアルには次の新しいガイドが付属しています。

Informatica Big Data Edition インストール&環境設定ガイド

Informatica Big Data Edition のインストール、および複数の Hadoop ディストリビューションで作業するためのマッピングの設定に関する情報が記載されています。以前は、インストール情報は『PowerCenter Big Data Edition ユーザーガイド』に記載されていました。

Informatica インストール&環境設定ガイド

すべての Informatica プラットフォーム製品のドメインの計画、データベースの準備、Informatica のサービスとクライアントのインストール、およびアプリケーションサービスの作成に関する情報が記載され

ています。以前は、インストール情報は Data Quality、Data Services、および PowerCenter の各製品に固有のガイドに記載されていました。

バージョン 9.6.0 からの Informatica のアップグレード

バージョン 9.6.0 からバージョン 9.6.1 にすべての Informatica プラットフォーム製品をアップグレードする手順が記載されています。以前は、アップグレード情報は Data Quality、Data Services、および PowerCenter の各製品に固有のガイドに記載されていました。

バージョン 9.5.1 からの Informatica のアップグレード

バージョン 9.5.1 からバージョン 9.6.1 にすべての Informatica プラットフォーム製品をアップグレードする手順が記載されています。以前は、アップグレード情報は Data Quality、Data Services、および PowerCenter の各製品に固有のガイドに記載されていました。

バージョン 9.5.0 からの Informatica のアップグレード

バージョン 9.5.0 からバージョン 9.6.1 にすべての Informatica プラットフォーム製品をアップグレードする手順が記載されています。以前は、アップグレード情報は Data Quality、Data Services、および PowerCenter の各製品に固有のガイドに記載されていました。

バージョン 9.1.0 からの Informatica のアップグレード

バージョン 9.1.0 からバージョン 9.6.1 にすべての Informatica プラットフォーム製品をアップグレードする手順が記載されています。以前は、アップグレード情報は Data Quality、Data Services、および PowerCenter の各製品に固有のガイドに記載されていました。

Informatica PowerExchange Adapters for Informatica リリースノート

PowerExchange Adapters for Informatica のインストール、実装された拡張、解消された問題、および既知の制限事項に関する重要情報が記載されています。以前は、この情報は『Informatica リリースノート』に記載されていました。

Informatica PowerExchange Adapters for PowerCenter リリースノート

PowerExchange Adapters for PowerCenter のインストール、実装された拡張、解消された問題、および既知の制限事項に関する重要情報が記載されています。以前は、この情報は『Informatica リリースノート』に記載されていました。

Informatica Administrator

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい Informatica Administrator 機能について説明します。

Informatica Cloud の管理

Administrator ツールを使用すると、Informatica Cloud 組織を表示できます。セキュアエージェントのステータスを監視して、組織で使用されているクラウドの接続を表示することができます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 管理者ガイド*』を参照してください。

Informatica Development Platform

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい Informatica Development Platform 機能について説明します。

Informatica コネクタツールキット

アダプタのランタイムコンポーネントを定義すると、[テストリード] および [テストライト] ウィザードを使用して、アダプタの読み取り機能と書き込み機能をテストできるようになります。これらのテストウィザードでは、テストの統計、エラーメッセージ、およびログファイルが表示されます。アダプタを Informatica ドメインにデプロイする前に、問題をデバッグして修正することができます。

詳細については、『*Informatica Development Platform 9.6.1 Informatica コネクタツールキット Developer ガイド*』を参照してください。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいトランスフォーメーション機能について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

ここでは、Developer ツールで作成するアドレスバリデータトランスフォーメーションの新機能について説明します。

モード

次のモードで実行されるようにアドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。

アドレスコードルックアップモード

アドレスコードルックアップモードを選択すると、データ統合サービスは識別コードを読み取り、参照データから対応するアドレス要素を返します。識別コードは市区町村、番地、またはメールボックスを表すことがあります。例えば、日本の住所の町名字コードを入力し、出力として完全な住所を取得することができます。

対話モード

対話モードを選択すると、アドレス検証によって部分的なアドレスが読み取られ、参照データから入力要素と一致する住所がすべて返されます。不完全な住所にデータを追加する場合は、対話モードを選択します。部分的なアドレスは単一入力ポートで入力できます。

提案リストモードで実行されるようにトランスフォーメーションを設定する場合、単一入力ポートで部分的なアドレスを入力することもできます。

ポート

アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、以下のポートを選択できます。

カウント

入力アドレス内のデータと一致するアドレス参照データセット内のアドレス数を示す出力ポート。

カウントオーバーフロー

参照データ内にアドレス検証がトランスフォーメーションに返さないアドレスが含まれているかどうかを示す出力ポート。

Gmin コード PL

ポーランドの住所が属する地方自治体またはコミューンの識別コードを返す出力ポート。

地理統計院コード

ブラジルの住所が属する都市や州を示す 7 桁の識別コードを含む出力ポート。

市区町村の識別子 DE

ドイツの市区町村の識別コードを含む入力および出力ポート。

全国住所データベース識別子 ZA

南アフリカの住所の番地を示す 7 桁の識別コードを含む入力および出力ポート。

フランス国立統計経済研究所コード

フランスの住所が属する行政区を識別する入力および出力ポート。フランス国立統計経済研究所コードは INSEE (National Institute of Statistics and Economic Studies) コードともいいます。

新町名字コード JP

日本のメールボックスを示す一意の配布ポイントコードを返す出力ポート。

市区町村の公的なキー DE

ドイツの地方自治体の識別コードを含む入力および出力ポート。

郵便アドレスコード AT

オーストリアの住所における建物レベルの郵便番号データを含む出力ポート。

郵便アドレスコード RS

セルビアの住所における番地レベルの郵便番号を返す出力ポート。

郵便番号拡張

スイスの住所の郵便番号の 2 桁のサフィックスを含む出力ポート。

番地の識別子 DE

ドイツの住所の番地レベルの識別コードを含む入力および出力ポート。

補足ステータスポート

アドレス検証が住所の補足データを返すことができるかどうかを示す出力ポート。

トランスフォーメーションにはオーストリア、ブラジル、フランス、ドイツ、ポーランド、南アフリカ、およびスイスの補足ステータスポートが含まれます。

TERYT 市区町村の識別子 PL

ポーランドの住所が属する市区町村の識別コードを含む出力ポート。

TERYT 番地の識別子 PL

ポーランドの住所の番地を示す識別コードを含む出力ポート。

一意の配布ポイント参照番号 GB

英国のメールボックスを示す一意の配布ポイントコードを返す出力ポート。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 アドレスバリデータポートリファレンス*』および『*Informatica 9.6.1 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

プロパティ

アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、以下の詳細なプロパティを設定できます。

エイリアスの市区町村

このプロパティは、アドレス検証が有効な場所のエイリアスを公式な場所名に置き換えるかどうかを決定します。

拡張アーカイブのマッチング

このプロパティは、アドレス検証が古い日本の住所に対応する一意の配布ポイントコードを返すかどうかを決定します。

データプロセッサトランスフォーメーション

ここでは、Developer ツールで作成するデータプロセッサトランスフォーメーションの新機能について説明します。

ストリーマのファイル入力

データプロセッサトランスフォーメーションストリーマは、ファイルを入力として使用できます。以前は、バッファのみが入力としてストリーマによって使用されていました。

詳細については、『*Informatica Data Transformation 9.6.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

AVRO または XML による Data Transformation の生成

新しいトランスフォーメーションウィザードでは、AVRO 入力と任意の形式の出力、または AVRO 出力と任意の形式の入力を使用して、データプロセッサトランスフォーメーションを自動生成できます。Avro スキーマファイルまたはサンプルファイルを使用して、AVRO ファイル仕様を定義します。Avro 入力形式と出力型式を両方使用してトランスフォーメーションを生成することもできます。この場合、Avro スキーマファイルまたはサンプルファイルを個別に使用して、入力と出力を両方定義します。

Avro 入力を読み込むデータプロセッサトランスフォーメーションをマッピングに追加した場合は、Avro 入力を渡す複合ファイルリーダーもトランスフォーメーションに追加します。Avro 出力を生成するデータプロセッサトランスフォーメーションがマッピングに含まれる場合は、出力を複合ファイルライターに渡します。

新しいトランスフォーメーションウィザードでは、XML 入力、出力、または両方を使用してデータプロセッサトランスフォーメーションを自動生成することもできます。.xsd スキーマファイルまたはサンプルファイルを使用して、予測される XML 階層を定義します。

詳細については、『*Informatica Data Transformation 9.6.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

サンプルファイルからのスキーマの生成

新しいトランスフォーメーションウィザードまたはスキーマウィザードで階層を定義するためのサンプルファイルを追加すると、階層を定義するための.xsd スキーマファイルが作成されます。ウィザードにより、モデルリポジトリにスキーマが作成されます。このスキーマは他のトランスフォーメーションで使用できます。

詳細については、『*Informatica Data Transformation 9.6.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

リレーショナルマッピングキー

リレーショナルマッピング内のキーには、xs:string および xs:integer 型を指定できます。

詳細については、『*Informatica Data Transformation 9.6.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

読み取られていない XMap 要素

出力要素にマッピングしない XMap 入力要素を追跡するように選択できます。トランスフォーメーションはマッピングされていない要素を、**XMap_Unread_Input_Values** というデフォルトハンドラ出力ポートに報告します。

詳細については、『*Informatica Data Transformation 9.6.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

一致トランスフォーメーション

ここでは、Developer ツールで作成する一致トランスフォーメーションの新機能について説明します。

トランスフォーメーションがマッピングデータソース内のインデックスデータを使用して現在の ID インデックスデータストアを更新するかどうかを指定できます。[持続メソッド] オプションを使用して更新ポリシーを設定します。データストアに含まれていないデータソース内のインデックスデータを使用してデータストアを更新するようにポリシーを設定します。あるいは、インデックスデータを使用してデータストアを更新しないポリシーを設定します。デフォルトでは、トランスフォーメーションはデータストアを更新します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

SQL トランスフォーメーション

ここでは、Developer ツールで作成する SQL トランスフォーメーションの新機能について説明します。

SQL トランスフォーメーションを使用すると、Sybase データベースからストアードプロシージャを起動できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

インストーラ

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい Informatica プラットフォームインストーラ機能について説明します。

Informatica Kerberos の SPN フォーマットジェネレータ

Informatica インストーラに関係なく、Informatica Kerberos の SPN フォーマットジェネレータを実行できます。このユーティリティはコマンドラインから、あるいは Informatica インストーラから起動できます。

Informatica Kerberos の SPN フォーマットジェネレータは Informatica サービスと一緒にインストールされます。インストール後は、Informatica ディレクトリからユーティリティを起動できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

サービスプリンシパルレベル

Kerberos 認証を使用して Informatica サービスをインストールした場合は、サービスプリンシパルレベルオプションを設定して、ノードとサービスでサービスプリンシパル名およびキータブファイルを共有できるかどうかを指定することができます。ドメインに高度なセキュリティが不要な場合は、ノード、およびそのノード上のすべてのサービスプロセスで 1 つの SPN およびキータブファイルを使用できます。ドメインに高度なセキュリティが必要な場合は、ノードごと、およびノード上のプロセスごとに、一意の SPN およびキータブファイルを作成します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 インストール & 環境設定ガイド*』を参照してください。

マッピング

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいマッピング機能について説明します。

Informatica マッピング

ここでは、Developer ツールで作成するマッピングの新機能について説明します。

IBM DB2 のパーティション化

データ統合サービスでは、IBM DB2 ターゲットに書き込む際に複数のパーティションを使用できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 Big Data Edition ユーザーガイド*』を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい Metadata Manager 機能について説明します。

用語解説ビュー

【用語解説】 ビューでカテゴリまたはビジネス用語を表示する場合は、[Informatica Analyst のビュー] ツールバーアイコンをクリックして、Analyst ツールでカテゴリまたは用語を開くことができます。

詳細については、『Informatica 9.6.1 Metadata Manager ユーザーガイド』を参照してください。

リソースのプロパティ

バージョン 9.6.1 では、データベース管理、JDBC、および Microstrategy リソースに新しいリソース構成プロパティが含まれています。

データベース管理リソース

以下の表に、データベース管理リソースの新しいリソース構成プロパティの説明を示します。

プロパティ	説明
セキュア JDBC パラメータ	JDBC 接続 URL に追加できるセキュア JDBC パラメータ。

JDBC リソース

以下の表に、JDBC 管理リソースの新しいリソース構成プロパティの説明を示します。

プロパティ	説明
大文字小文字の区別	メタデータソースデータベースの大文字小文字の区別に関する設定を指定します。デフォルトでは、Metadata Manager エージェントは JDBC ドライバを使用して、データベースが大文字と小文字を区別するかどうかを判別します。

Microstrategy のリソース

以下の表に、Microstrategy 7.0～9.x リソースの新しいリソース構成プロパティの説明を示します。

プロパティ	説明
スキーマのみインポート	選択したプロジェクトのスキーマを、レポートとドキュメントを含めないでインポートします。デフォルトでは、Metadata Manager はスキーマ、レポート、およびドキュメントをインポートします。

詳細については、『Informatica 9.6.1 Metadata Manager 管理者ガイド』を参照してください。

リソースのバージョン

次のバージョンのリソースを作成できます。

- Business Objects 14.1 (XI 4.1 SP2)。以前は、バージョン 14 (XI R4) SP6 までの Business Objects リソースを作成できました。
- Microstrategy 9.4.1。以前は、バージョン 9.3.1 までの Microstrategy リソースを作成できました。
- Oracle 12c。以前は、バージョン 11g リリース 2 までの Oracle リソースを作成できました。

リソースの作成について詳しくは、『Informatica 9.6.1 Metadata Manager 管理者ガイド』を参照してください。

検索

キーワードおよび詳細検索で無視する単語や句のカスタムリストを作成できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

セキュリティ

Metadata Manager には次のセキュリティに関する改善点があります。

暗号化キーのサポート

Metadata Manager は Informatica ドメインの暗号化キーを使用して、Metadata Manager リポジトリ内のパスワードなどの機密データを暗号化します。

Informatica ドメインの暗号化キーの詳細については、『*Informatica 9.6.1 セキュリティガイド*』を参照してください。

セキュア JDBC パラメータ

Administrator ツールに、Metadata Manager リポジトリデータベースの URL に含まれるセキュア JDBC パラメータが表示されないようにすることができます。Metadata Manager でも、一部のデータベース管理リソースのデータベース接続 URL に含まれるセキュア JDBC パラメータが表示されないようにすることができます。

Metadata Manager にセキュア JDBC パラメータが表示されないようにすることができるのは、次のデータベース管理リソースです。

- IBM DB2 for LUW
- IBM Informix
- Microsoft SQL Server
- Netezza
- Oracle
- Sybase ASE
- Teradata

Metadata Manager リポジトリデータベース URL におけるセキュア JDBC パラメータの指定の詳細については、『*Informatica 9.6.1 アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。データベース管理リソースのデータベース接続 URL におけるセキュア JDBC パラメータの指定の詳細については、『*Informatica 9.6.1 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

Custom Metadata Configurator

PowerCenter リポジトリのセキュリティを強化するために、Custom Metadata Configurator では、カスタムメタデータファイルからメタデータを抽出するマッピングを生成する場合、PowerCenter リポジトリのユーザー名およびパスワードを入力するよう要求します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 Metadata Manager カスタムメタデータ統合ガイド*』を参照してください。

PowerExchange

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい PowerExchange 機能について説明します。

リスナサービス

Kerberos 認証を使用するようにドメインを設定した場合は、ドメイン内の PowerExchange リスナサービスを特定するように Informatica クライアント、データ統合サービス、および PowerCenter 統合サービスを設定できます。

そのためには、クライアント、データ統合サービス、または PowerCenter 統合サービスマシンにある DBMOVER 構成ファイルの NODE 文にオプションの *service_name* パラメータを含めます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。

リスナサービス

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいリスナサービス機能について説明します。

Kerberos 認証を使用するようにドメインを設定した場合は、ドメイン内の PowerExchange リスナサービスを特定するように Informatica クライアント、データ統合サービス、および PowerCenter 統合サービスを設定できます。

そのためには、クライアント、データ統合サービス、または PowerCenter 統合サービスマシンにある DBMOVER 構成ファイルの NODE 文にオプションの *service_name* パラメータを含めます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。

infacmd pwx コマンド

以下の表に、新しい infacmd pwx コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
displayStatsListener	Windows または z/OS での PowerExchange リスナの監視統計を表示します。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい PowerExchange アダプタ機能について説明します。

Informatica アダプタ

ここでは、新しい Informatica アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for DataSift

DataSift から履歴データを抽出して Twitter のソースに使用することができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for DataSift 9.6.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Greenplum

- PowerExchange for Greenplum を使用すると、大量のデータを Greenplum テーブルにロードできます。Developer ツールで開発されたマッピングを実行できます。このマッピングはネイティブまたは Hive ランタイム環境で実行できます。
- PowerExchange for Greenplum を使用すると、データを HAWQ データベースに一括でロードできます。

詳細については『*Informatica PowerExchange for Greenplum 9.6.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for LinkedIn

LinkedIn からグループの情報、グループの投稿に関する情報、グループ投稿に関するコメント、特定の投稿に関するコメントを抽出できます。LinkedIn からユーザーに推奨されているグループのリストや、ユーザーが属しているグループのリストも抽出できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for LinkedIn 9.6.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for HBase

PowerExchange for HBase を使用すると、HBase からデータを並列に読み取ることができます。データ統合サービスは複数のマッピングジョブを作成して、データを並列に読み取ります。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for HBase 9.6.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Hive

HiveServer または HiveServer2 に接続する Hive 接続を作成できます。以前は、HiveServer に接続する Hive 接続を作成できました。HiveServer2 は Kerberos 認証および同時接続をサポートしています。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Hive 9.6.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for MongoDB

スキーマエディタを使用すると、MongoDB コレクションのスキーマを変更できます。また、ネストされたカラムを持つ MongoDB コレクションの仮想テーブルを使用することもできます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for MongoDB 9.6.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API

Hive ランタイム環境で Teradata テーブルにデータをロードする場合は、Teradata Connector for Hadoop (TDCH) を使用してパフォーマンスを高めることができます。TDCH を使用してデータをロードするには、データ統合サービスレベルで EnableTdch カスタムプロパティを追加し、値を true に設定します。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API 9.6.1 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerCenter アダプタ

ここでは、新しい PowerCenter アダプタ機能について説明します。

PowerExchange for LDAP

セッションのプロパティでは、LDAP エントリのクエリを行うためのフィルタ条件を複数含むファイルのパスおよび名前を指定できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for LDAP 9.6.1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for MongoDB

スキーマエディタを使用すると、MongoDB コレクションのスキーマを変更できます。また、ネストされたカラムを持つ MongoDB コレクションの仮想テーブルを使用することもできます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for MongoDB 9.6.1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Netezza

バルクモードを使用して Netezza に対してデータを読み書きする場合は、セッションプロパティのテーブル名およびスキーマ名をオーバーライドできます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Netezza 9.6.1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Salesforce

- Salesforce Bulk API を使用して Salesforce ソースからデータを一括で読み取るようにセッションを設定できます。
- カスタムの子オブジェクトを標準の親オブジェクトから分離できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Salesforce 9.6.1.0.1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for SAP NetWeaver

- ABAP を通じて SAP からデータを読み取るようにファイルモードセッションを実行する場合は、FileCompressEnable カスタムプロパティを設定して圧縮データ転送を有効にすることができます。データを圧縮すると、セッションのパフォーマンスを向上させ、一時ファイルが必要とするディスクストレージを減らすことができます。
- Informatica から出荷された BCI リスナマッピング内の Source_For_BCI リレーショナルターゲットには、DataSourceName という新しいカラムが含まれています。このフィールドを使用して、Source_For_BCI リレーショナルターゲットが SAP から受け取るデータをパーティション化することができます。
- BCI_Mappings.xml ファイルには、アクティベーションマッピングが付属しています。このアクティベーションマッピングを使用すると、SAP 内で複数の DataSources を同時にアクティブにできます。
- 数値の差分ポインタを使用してビジネスコンテンツデータを抽出する場合は、データ全体を完全に転送せずに、変更されたデータのみを抽出できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for SAP NetWeaver 9.6.1 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

プロファイルおよびスコアカード

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいプロファイルおよびスコアカード機能について説明します。

カラムプロファイル結果

Analyst ツールでカラムプロファイルを実行する場合は、カラムプロファイル結果で次の視覚的なグラフを表示できます。

- カラムの値の頻度およびカラムパターンを表す円グラフ。
- カラム内における NULL 値、一意の値、および一意でない値を含む行の割合を表す棒グラフ。

ドリルダウンフィルタ

Analyst ツールでは、ドリルダウン結果内のカラム値を右クリックして、フィルタ条件としてカラム値を追加できます。

データ品質の値

Analyst ツールのスコアカードを使用してデータ品質の値を測定できます。スコアカードメトリックのコスト単位を定義し、可変または固定コストを割り当てて、スコアの傾向グラフと共にコストの傾向グラフを表示することができます。さらに、選択したデータの値をメトリックやスコアカードのレベルで監視できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 プロファイルガイド*』を参照してください。

参照データ

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しい参照データ機能について説明します。

確率モデル

Developer ツールで確率モデルを作成または編集する場合は、次のタスクを実行できます。

- 確率モデルに追加する各ラベルに色を割り当てる。
- 行のデータ値に割り当てるラベルの総数を表示する。
- 確率モデルがラベルに関連付けるデータ値の総数を表示する。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 参照データガイド*』を参照してください。

ルール仕様

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいルール仕様機能について説明します。

Analyst ツールでルール仕様を操作する場合は、次のタスクを実行できます。

- ルールセット内のルール文の順序を変更する。
- 単一ルールセットの動作をテストする。
- ルールセットまたはルール仕様のテストに使用するデータを保存したり、データを削除したりする。
- 条件内で NULL 値を指定する、またはルール文でアクションを指定する。
- Microsoft Excel からコピーしたデータを使用して、ルールセットまたはルール仕様をテストする。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 ルール仕様ガイド*』を参照してください。

ソースおよびターゲット

ここでは、バージョン 9.6.1 の新しいソースおよびターゲット機能について説明します。

Informatica ソースおよびターゲット

ここでは、Informatica のソースおよびターゲットの新しい機能について説明します。

HAWQ 接続

ODBC を使用すると、HAWQ データベースに対してデータを読み書きできます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 Developer ツールガイド*』を参照してください。

データタイプ

Microsoft SQL Server Uniqueidentifier **データタイプ**

Informatica Developer は Microsoft SQL Server uniqueidentifier データタイプをサポートします。uniqueidentifier データタイプの精度は 38 で、位取りは 0 です。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 Developer ツールガイド*』を参照してください。

Oracle float **データタイプ**

Informatica Developer は Oracle float データタイプをサポートします。float データタイプの精度は 1～15 で、位取りは 0 です。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 Developer ツールガイド*』を参照してください。

PowerCenter のソースとターゲット

ここでは、PowerCenter のソースおよびターゲットの新しい機能について説明します。

Oracle ソースおよびターゲット

基本圧縮および OLTP 圧縮を使用する Oracle ソースおよびターゲットをインポートできます。また、基本圧縮および OLTP 圧縮を使用する Oracle テーブルのソースおよびターゲット定義を手動で作成することもできます。

詳細については、『*PowerCenter 9.6.1 デザイナガイド*』を参照してください。

トランスフォーメーション言語関数

ここでは、バージョン 9.6.1 のトランスフォーメーション言語関数の新機能について説明します。

Informatica 関数

ここでは、Informatica 関数の新しい機能について説明します。

ANY 関数

ANY 関数を使用すると、選択したポート内の任意の行を返すことができます。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 トランスフォーメーション言語リファレンス*』を参照してください。

第 8 章

変更内容（9.6.1）

この章では、以下の項目について説明します。

- [Big Data, 160](#) ページ
- [ドメイン, 160](#) ページ
- [Informatica トランスフォーメーション, 161](#) ページ
- [マッピング, 162](#) ページ
- [Metadata Manager, 162](#) ページ
- [PowerCenter トランスフォーメーション, 163](#) ページ
- [PowerExchange アダプタ, 164](#) ページ
- [プロファイルおよびスコアカード, 165](#) ページ
- [ルール仕様, 165](#) ページ
- [セキュリティ, 165](#) ページ

Big Data

ここでは、バージョン 9.6.1 の Big Data への変更内容について説明します。

バージョン 9.6.1 では、Hive 環境で実行されるようにマッピングを設定した場合、検証環境で Hive バージョンを指定する必要はありません。

データ統合サービスは Hadoop クラスタに対して有効な Hive バージョンを評価し、マッピングを検証します。

以前は、検証環境での Hive バージョンを指定する必要がありました。

ドメイン

ここでは、バージョン 9.6.1 の Informatica ドメインへの変更内容について説明します。

バージョン 9.6.1 では、SUSE Linux Enterprise Server 10 のサポートは廃止されました。ドメイン内のいずれかのノードが SUSE Linux Enterprise Server 10 上にある場合は、そのノードをサポート対象のオペレーティングシステムに移行してから、ノードを 9.6.1 にアップグレードする必要があります。詳細については、『Informatica アップグレードガイド』を参照してください。

Informatica トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 の Informatica トランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

アドレスバリデータトランスフォーメーション

ここでは、Developer ツールで作成するアドレスバリデータトランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

バージョン 9.6.1 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションで、バージョン 5.5.0 の Address Doctor ソフトウェアエンジンを使用します。

以前は、トランスフォーメーションで Address Doctor ソフトウェアエンジンのバージョン 5.4.1 を使用していました。

バージョン 9.6.1 では、トランスフォーメーションによって以下のポート名に 2 文字の国コードが追加されます。

- 町名字コード JP
以前は、ポート名は町名字コードでした。
- 新町名字コード JP
以前は、ポート名は新町名字コードでした。
- 郵便アドレスコード RS
以前は、ポート名は郵便アドレスコードでした。
- 一意の配布ポイント参照番号 GB
以前は、ポート名は一意の配布ポイント参照番号でした。

バージョン 9.6.1 では、トランスフォーメーションの「エイリアス番地」プロパティを無効にできました。このプロパティは、アドレス検証が通りのエイリアスを通りの公式名に置き換えるかどうかを決定します。

以前は、すべての通りのエイリアスを置き換えるか、有効な通りのエイリアス以外の用語をすべて置き換えるようにプロパティを設定していました。

データマスキングトランスフォーメーション

ここでは、Developer ツールで作成するデータマスキングトランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

キーマスキング方法

バージョン 9.6.1 では、キーマスキングアルゴリズムが変更されました。9.6.1 にアップグレードすると、キーマスキング方法を使用する以前のバージョンで作成されたマッピングによって、異なるマスク済み出力が作成されることがあります。

以前は、アップグレード後も、キーマスキング方法を使用していたマッピングで同じマスク済み出力が作成されていました。

データプロセッサトランスフォーメーション

ここでは、Developer ツールで作成するデータプロセッサトランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

バージョン 9.6.1 では、パススルーポートまたはリレーショナルから階層への変換を使用して、データプロセッサトランスフォーメーションを PowerCenter にエクスポートできます。以前は、データプロセッサトラン

スフォーメーションがリレーショナル入力または出力でない場合のみ、PowerCenter にエクスポートできました。

マッピング

ここでは、バージョン 9.6.1 のマッピングへの変更内容について説明します。

Informatica マッピング

ここでは、Developer ツールで作成するマッピングへの変更内容について説明します。

ネイティブ環境でのパーティションマッピング

バージョン 9.6.1 では、ネイティブ環境内のパーティション化されたマッピングに以下の変更点があります。

IBM DB2 for LUW のリレーショナルターゲット

データ統合サービスでは、データベースパーティションの数が並行処理値よりも多い DB2 for LUW ターゲットをマッピングするときに、マッピング用のパーティションを作成できます。DB2 for LUW ターゲットのデータベースパーティション数が並行処理値よりも多い場合、データ統合サービスは並行処理値によって定義されたすべての writer スレッドを使用します。データ統合サービスは複数のデータベースパーティションを一部の writer スレッドに分散します。

以前は、DB2 for LUW ターゲットのデータベースパーティション数が並行処理値よりも多い場合、データ統合サービスはマッピング全体に対してパーティションを作成しませんでした。データ統合サービスは 1 スレッドを使用して各マッピングパイプラインステージを処理していました。

マッピングの最大並行処理

マッピングの最大並行処理が自動になっている場合、実際の並行処理値は次の値の中で最小のものと同じです。

- データ統合サービスプロセスに設定された最大並行処理値
- マッピング内のすべてのフラットファイル、IBM DB2 for LUW、および Oracle ソースの最大パーティション数 データ統合サービスは、ソースタイプに基づいてパーティションの数を決定します。フラットファイルソースのパーティション数は、データ統合サービスプロセスに設定された最大並行処理値と同じです。DB2 for LUW または Oracle リレーショナルソースのパーティション数は、リレーショナルソース内のデータベースパーティション数と同じです。

以前は、マッピングの最大並行処理が自動になっていた場合、実際の並行処理値はデータ統合サービスプロセスに設定された最大並行処理値と同じでした。

Metadata Manager

ここでは、バージョン 9.6.1 の Metadata Manager への変更内容について説明します。

リソース構成のインポートおよびエクスポート

バージョン 9.6.1 より、リソース構成のインポートとエクスポートに関連付けられている動作が変更されました。

パスワードのインポートおよびエクスポート

バージョン 9.6.1 では、Metadata Manager または mmcmd を使用してリソース構成をエクスポートする場合、リソース構成ファイルに暗号化されたリソースパスワードを含めるか除外するかを選択できます。リソースでパスワードが使用されるのに、パスワードを除外した場合は、リソース構成をインポートするときにパスワードを入力する必要があります。

以前は、Metadata Manager では常にリソース構成ファイルに暗号化されたリソースパスワードを含めていました。

特権の変更

バージョン 9.6.1 では、リソースの表示特権を持っているユーザーはリソース構成をエクスポートできません。リソースのロード特権を持つユーザーはリソース構成をインポートできます。

以前は、リソース構成をエクスポートするには、リソースのロード特権が必要でした。

リソースプロパティの変更

バージョン 9.6.1 では、Microstrategy 7.0～9.x のリソースのリソースプロパティが変更されています。

以下の表に、Microstrategy 7.0～9.x リソースから削除されたリソース構成プロパティの説明を示します。

プロパティ	説明
データモデルのリバースエンジニアリング結合	必要に応じて、モデルの SQL 結合を外部キーリレーションに変換します。
次元モデルのリバースエンジニアリング	次元オブジェクトとリレーショナルオブジェクトの間に直接一致が存在する場合は、必要に応じて次の次元オブジェクトをリレーショナルオブジェクトにリバースエンジニアリングします。 <ul style="list-style-type: none">- 次元の名前、説明、およびロールを基本テーブルへ- 属性名または測定名、説明、およびデータ型を基本カラムへ

PowerCenter トランスフォーメーション

ここでは、バージョン 9.6.1 の PowerCenter トランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

データマスキングトランスフォーメーション

ここでは、PowerCenter Client で作成するデータマスキングトランスフォーメーションへの変更内容について説明します。

キーマスキング方法

バージョン 9.6.1 では、キーマスキングアルゴリズムが変更されました。9.6.1 にアップグレードすると、キーマスキング方法を使用する以前のバージョンで作成されたマッピングによって、異なるマスク済み出力が作成されることがあります。

以前は、アップグレード後も、キーマスキング方法を使用していたマッピングで同じマスク済み出力が作成されていました。

PowerExchange アダプタ

ここでは、バージョン 9.6.1 の PowerExchange アダプタの変更内容について説明します。

PowerExchange Adapters for PowerCenter

ここでは、バージョン 9.6.1 の PowerCenter アダプタへの変更内容について説明します。

PowerExchange for Salesforce

バージョン 9.6.1.0.1 では、PowerExchange for Salesforce に以下の変更があります。

Salesforce API バージョンのサポート終了

PowerExchange for Salesforce では、以下の Salesforce API バージョンをサポートしていません。

- 7.0
- 8.0
- 16.0

以前は、PowerExchange for Salesforce はこれらの Salesforce API バージョンをサポートしていました。

エラーのロギング

PowerCenter 統合サービスはセッションのエラーログにエラーメッセージを書き込みます。

以前は、PowerCenter 統合サービスはエラーメッセージをエラーログとセッションログの両方に書き込みました。

一括 API ターゲットセッションの Java 要件

一括 API ターゲットセッションの場合は、PowerCenter 統合サービスマシンの Java 一時ディレクトリ用に少なくとも 10~50 MB の領域を設定します。

以前は、一括 API では Java 一時ディレクトリを使用せずに Salesforce ターゲットへの書き込みを行っていました。

インポートに使用できなくなった関連オブジェクトフィールド

以下の Salesforce オブジェクトに関連するオブジェクトからフィールドをインポートできなくなりました。

- ActivityHistory
- EmailStatus
- Name
- OpenActivity
- OwnedContentDocument

以前は、これらのオブジェクトに関連するオブジェクトからフィールドをインポートできました。

Salesforce API のバージョン

PowerExchange for Salesforce はバージョン 31.0 の Salesforce API を使用します。

Salesforce への接続を設定するには、Salesforce のサービス URL を使用してください。最新バージョンの Salesforce API を使用するには、アプリケーション接続を作成するか、または既存のアプリケーション接続内のサービス URL を更新します。

以下のバージョンの Salesforce サービスの URL を使用します。

<https://www.salesforce.com/services/Soap/u/31.0>

Salesforce の新しいバージョンのオブジェクトと、以前のバージョンのオブジェクトとの構造が異なる場合は、Salesforce オブジェクトを再インポートします。Salesforce オブジェクトを再インポートした後、関連するマッピングを分析して、マッピングを更新する必要があるかどうかを判断します。

以前は、PowerExchange for Salesforce はバージョン 27.0 の Salesforce API を使用していました。

SOAP リクエストのロギング

標準 API を使用して Salesforce から読み取るセッションの場合、PowerCenter 統合サービスはセッションログに SOAP リクエストを含めなくなりました。

以前は、詳細トレースのセッションを設定するときにセッションログ内の SOAP リクエストを表示できました。

プロフィールおよびスコアカード

ここでは、バージョン 9.6.1 のプロフィールおよびスコアカードへの変更内容について説明します。

バージョン 9.6.1 では、カラムプロフィール結果内の一意の値の総数に NULL のカラム値は含まれません。

以前は、一意の値の総数に NULL のカラム値が含まれていました。

ルール仕様

ここでは、バージョン 9.6.1 のルール仕様への変更内容について説明します。

バージョン 9.6.1 では、ルール文オプションを使用して、条件またはアクションにデータ値または NULL 値を指定できます。

以前は、ルール文内で構成ダイアログボックスを開き、データ値または NULL 値を指定していました。

バージョン 9.6.1 では、以下の操作を実行するのに、Informatica ドメインのアクセス権限は必要ありません。

- ルールセットまたはルール仕様のテスト。
- ルール仕様のコンパイル。

以前は、ルールセットまたはルール仕様のテスト、およびルール仕様のコンパイルに Informatica ドメインのアクセス権限が必要でした。

セキュリティ

ここでは、バージョン 9.6.1 のセキュリティへの変更内容について説明します。

暗号化キーディレクトリ

バージョン 9.6.1 では、ドメイン暗号化キーを格納するディレクトリが変更されました。暗号化キーの新しいディレクトリは<INFA_HOME>/isp/config/keys です。

以前は、暗号化キーのディレクトリは<INFA_HOME>/isp/config/secret でした。

Kerberos 認証のサービスプリンシパル要件

9.6.1 では、Kerberos 認証を使用するようにドメインを設定した場合、ノードおよびサービスでサービスプリンシパル名 (SPN) とキータブファイルを共有するかどうかを指定できました。

次のサービスプリンシパルレベルの中から 1 つを選択できます。

ノードレベル

ドメインがテストまたは開発に使用されていて、高度なセキュリティが不要な場合は、サービスプリンシパルをノードレベルで設定できます。ノードとそのノードのすべてのサービスプロセスで 1 つの SPN とキータブファイルを使用できます。ノード上に追加サービスを作成する場合、追加のキータブファイルを作成する必要はありません。

プロセスレベル

ドメインが本番環境で使用されていて、高度なセキュリティが必要な場合は、サービスプリンシパルをプロセスレベルで設定できます。ノードごとに、およびノードのプロセスごとに、一意の SPN およびキータブファイルを作成します。ノードごとに必要になる SPN とキータブファイルの数は、ノードで実行されるサービスプロセスの数により変わります。

以前は、Informatica ドメイン内のノードごとに、およびノードのプロセスごとに、一意の SPN およびキータブファイルが必要でした。

パート III: バージョン 9.6.0

この部には、以下の章があります。

- [新機能と改良点 \(9.6.0\) , 168 ページ](#)
- [Informatica Data Explorer \(9.6.0\) の変更内容, 196 ページ](#)
- [Informatica Data Quality \(9.6.0\) の変更内容, 198 ページ](#)
- [Informatica Data Services \(9.6.0\) の変更内容, 202 ページ](#)
- [Informatica Data Transformation \(9.6.0\) の変更内容, 204 ページ](#)
- [Informatica ドメイン \(9.6.0\) の変更内容, 205 ページ](#)
- [PowerCenter \(9.6.0\) の変更内容, 209 ページ](#)
- [PowerCenter Big Data Edition \(9.6.0\) の変更内容, 211 ページ](#)
- [Metadata Manager \(9.6.0\) の変更内容, 212 ページ](#)
- [Adapters for PowerCenter \(9.6.0\) の変更内容, 216 ページ](#)
- [Adapters for Informatica \(9.6.0\) の変更内容, 220 ページ](#)

第 9 章

新機能と改良点 (9.6.0)

- [バージョン 9.6.0, 168 ページ](#)

バージョン 9.6.0

ここでは、バージョン 9.6.0 の新機能および改良点について説明します。

Informatica Analyst

ここでは、Informatica Analyst の新機能および改良点について説明します。

Informatica Analyst インタフェース

Analyst ツールのインタフェースには新しいヘッダとワークスペースがあります。ワークスペースは、ライセンス供与された機能に基づくタスクを実行するための Web ページで、これらのタスクは Analyst ツールの各タブからアクセスします。

Analyst ツールには以下のワークスペースがあります。

- 起動ワークスペース上のアクセスパネルを使用して、アクセスするライセンスがある他のワークスペースにアクセスします。例外管理を実行するライセンスがある場合には、このワークスペースにタスクが表示されます。
- 用語集。組織にとって重要なビジネスコンセプトを定義して説明します。
- 検出。ソースシステムのデータとメタデータの品質を分析します。
- 設計。アナリストと開発者の連携を支援するビジネスロジックを設計します。
- スコアカード。プロファイル結果から作成したスコアカードを開き、編集して実行します。
- ライブラリ。モデルリポジトリ内のアセットを検索します。[ライブラリ] ワークスペース内のメタデータを表示することもできます。
- 例外。タスクの例外レコードデータの表示と管理を行います。処理中のタスクのタイプに基づいて、重複レコードクラスタまたは例外レコードを表示します。タスクでレコードに加える変更の監査証跡を表示します。
- 接続。リレーショナルデータオブジェクトのインポート、データのプレビュー、プロファイルの実行、マッピング仕様の実行などのために、接続を作成して管理します。
- データドメイン。データドメインとデータドメイングループの作成、管理、削除を行います。
- ジョブステータス。すべてのオブジェクトのデータプレビューやプロファイルに対するドリルダウン操作などの Analyst ツールジョブのステータスを監視します。

- プロジェクト。フォルダーとプロジェクトの作成と管理や、プロジェクトに対する権限の割り当てなどを行います。
- 用語集のセキュリティ。権限、特権、ビジネス用語集ユーザーのロールなどを管理します。

Informatica Analyst のタスク

Analyst ツールは複数の Informatica 製品で使用でき、ビジネスユーザーが社内のプロジェクトで連携するために使用されています。

Analyst ツールで実施できるタスクは、Informatica 製品のライセンスとタスクを実行するための特権によって異なります。組織が所有しているライセンスに基づき、Analyst ツールを使用して以下のタスクを実行できます。

- ビジネス用語集、用語、ポリシーを定義することにより、組織内のデータアセットを標準化して保持する。
- データ検出を実施することで、コンテンツ、品質、データソース構造などを確認するとともにデータ品質傾向を監視する。
- データ統合ロジックを定義してプロジェクトを共同で進めることにより、プロジェクトの納入を早める。
- ルールを定義して管理することにより、データがビジネスポリシーに従っていることを確認する。
- データ品質問題を確認して解決することにより、組織内のデータ品質問題を見つけて解決する。

フラットファイルの区切り文字

区切られたフラットファイルをインポートする場合は、次の印字されないマルチバイト文字を区切り文字として入力できます。/01、/01、および/001。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Analyst ツールガイド*』を参照してください。

Informatica インストーラ

ここでは、Informatica プラットフォームインストーラの新機能および改良点について説明します。

アクセシビリティと第 508 条への準拠

Informatica プラットフォームインストーラはリハビリテーション法第 508 条に準拠しており、障害を持つ方でも利用可能です。

認証

Kerberos 認証を利用するように Informatica ドメインを設定できます。Informatica サービスをインストールするとドメインの Kerberos 認証を有効にすることができます。「**ドメイン - ネットワーク認証プロトコル**」というタイトルのページが Informatica サービスインストーラに表示されます。Kerberos 認証のドメインをインストールするには、Kerberos 認証を有効にするオプションを選択し、必要なパラメータを入力します。

暗号化キー

Informatica はデータをドメインに保存するときにパスワードなどの機密データを暗号化します。Informatica は、ドメインに格納された機密データの暗号化に使用する一意の暗号化キーを生成するために、キーワードを使用しています。

「**ドメイン - 暗号化キー**」というタイトルのページが Informatica サービスインストーラに表示されます。インストール中にノードとドメインを作成する場合は、Informatica がノードとドメインの一意の暗号化キーを生成する際に使用するキーワードを指定する必要があります。ノードを作成してドメインに参加する場合、Informatica は新しいノードに対して同じ暗号化キーを使用します。

安全な通信

SSL 証明書を提供することにより、またはデフォルトの Informatica SSL 証明書を使用することによりドメイン内のサービス間で通信を安全に保つことができます。SSL 証明書を使用するには、インストール時にキーストアおよびトラストストアファイル、ならびにパスワードを指定します。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 インストール&アップグレードガイド*』を参照してください。

Informatica Data Explorer

ここでは、Informatica Data Explorer の新機能および改良点について説明します。

カラムプロファイル結果

カラムプロファイル結果には数値データ型のカラム内にあるすべての値の合計が含まれます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューの TOTAL_SUM カラムを使用して、数値カラムの値の合計に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_COL_PROFILE_RESULTS
- IDPV_PROFILE_RESULTS_TRENDING

詳細については、『*Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス*』を参照してください。

キュレーション

Analyst ツールおよび Developer ツールのどちらでも推測されたプロファイル結果をキュレーションできます。キュレーションとは、データソースで検出されたメタデータを検証し管理することで、使用とレポートに適したメタデータにするプロセスです。データ型を承認、却下、およびリストアすることができます。また、データドメイン、プライマリキー、および外部キーを承認、却下、およびリストアすることができます。却下されたデータ型またはデータドメインを含む行を表示または非表示にすることができます。プロファイルを再度実行するときに、カラムプロファイル推測およびデータドメイン検出推測から承認されたデータ型、データドメイン、およびプライマリキーを除外することができます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューを使用して、キュレーションされたプロファイル結果に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_CURATED_DATATYPES
- IDPV_CURATED_DATADOMAINS
- IDPV_CURATED_PRIMARYKEYS
- IDPV_CURATED_FOREIGNKEYS

詳細については、『*Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス*』を参照してください。

データドメイン検出

ソースデータのすべての行に対してデータドメイン検出を実行し、複数のカラムの推測結果を同時に確認することができます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

データ型の推測

カラムプロファイルを実行するときに推測条件に一致する複数のデータ型を推測することができます。カラムプロファイル結果のカラムデータ型に基づいてドリルダウンすることができます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューを使用して、推測されたデータ型に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_DATATYPES_INF_RESULTS

- IDPV_DATATYPE_FREQ_TRENDING

詳細については、『*Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス*』を参照してください。

検出検索

検出検索はアセットを検索し、エンタープライズ内のデータベースおよびスキーマにある他のアセットとのリレーションを識別します。検出検索を使用してエンタープライズ内のどこにデータおよびメタデータが存在するのかを探することができます。物理データソースおよびデータオブジェクトリレーションを検索する、または文書化されたデータオブジェクトリレーションの欠落を識別することができます。検出検索の結果から直接一致、間接一致、および関連するアセットを表示することができます。

グローバル検索を実行すると、Analyst ツールはデータオブジェクト、データ型、およびフォルダーに対してテキストベースの検索を行います。テキスト照合に加えて検出検索を実行すると、検索結果には検索条件に一致するオブジェクトへのリレーションを持つオブジェクトが含まれます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

エンタープライズ検出

Informatica Analyst ではエンタープライズ検出を実行することができます。エンタープライズ検出にはコラムプロファイルとデータドメイン検出が含まれます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

プロファイル結果の確認

Developer ツールでは、1 つのデータオブジェクトの複数の推測プライマリキーと機能依存性の結果を確認できます。プロファイルの結果を検証すると、ソースデータのすべての行に対してプロファイルが実行されます。また、エンタープライズ検出結果で、複数のデータオブジェクトのリレーションとデータドメインも確認できます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

スコアカード

スコアカードの結果は Microsoft Excel ファイルにエクスポートできます。エクスポートされたファイルにはスコアカードのサマリ、傾向グラフ、無効な行、およびスコアカードのプロパティが含まれます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

bigint データタイプのサポート

何十億行のように、大量の行を持つデータソースに対してプロファイルを実行することができます。プロファイルリングウェアハウスは大量のソースデータを扱う際に bigint カラムを使用します。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

Informatica Data Quality

ここでは、Informatica Data Quality の新機能および改良点について説明します。

アクセラレータ

Informatica アクセラレータのセットに次が追加されました。

- スペイン向け Informatica Data Quality アクセラレータ スペインのデータにおける一般的なデータ品質の問題を解決するためのルール、参照テーブル、デモンストレーション用マッピング、およびデモンストレーション用データオブジェクトが含まれます。
- データ検出向け Informatica Data Quality アクセラレータ。データ検出操作を実行するのに使用できるルール、参照テーブル、デモンストレーション用マッピング、およびデモンストレーション用データオブジェクトが含まれます。

詳細については、『*Informatica Data Quality 9.6.0 アクセラレータガイド*』を参照してください。

アドレス検証

アドレスバリデータトランスフォーメーションでは、以下の詳細なプロパティを設定できます。

住所重複時の優先順位

検証するアドレスの種類を決定します。入力アドレスレコードに複数の種類の有効なアドレスデータが含まれるときにこのプロパティを設定します。

フレキシブル範囲拡大

1 つの通りに複数の有効な住所がある場合にトランスフォーメーションが返す住所の数に実際の制限を与えます。このプロパティは「拡大する範囲」プロパティを設定するときに設定します。

Geocode データ型

トランスフォーメーションが住所のジオコードデータを計算する方法を決定します。ジオコードは緯度と経度の座標です。次のタイプのジオコードデータを返すようにプロパティを設定します。

- 建物または区画の入り口の緯度と経度の座標。
- 区画の地理的中心の緯度と経度の座標。

また、トランスフォーメーションは特定の住所の緯度座標と経度座標を推定することもできます。推定されたジオコードは挿入ジオコードと呼ばれます。

グローバル最大フィールド長

アドレスの行の最大文字数を決定します。このプロパティを設定して住所の行の長さが地元の郵便事業者の定める最大文字数を超えていないか確認します。

拡大する範囲

住居番号が指定されていない番地に対してトランスフォーメーションがどのように提案住所を返すかを決定します。このプロパティを設定して通りに対する提案住所の範囲を増減します。

無効なアドレスの標準化

トランスフォーメーションで配送不可能な住所のデータ値を標準化するかどうかを決定します。このプロパティを設定してアドレスレコードの用語を簡単にし、後続の処理がより効率的に実行できるようにします。

次のアドレス検証プロセスプロパティを Administrator ツールで設定できます。

SendRight レポートの場所

アドレス検証によって SendRight レポートとレポートの作成に関連するログファイルが書き込まれる場所。SendRight レポートを生成して、一連のニュージーランドのアドレスレコードがニュージーランド郵政公社の認証基準を満たすことを確認します。

注: SendRight レポートファイルを作成するようアドレスバリデータトランスフォーメーションを設定できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

自動ワークフローリカバリ

データ統合サービスプロセスが予期せずにシャットダウンしたために強制終了されたワークフローインスタンスの自動リカバリを設定することができます。自動リカバリを設定すると、データ統合サービスプロセスでは、サービスプロセスの再開時に、サービスプロセスのシャットダウンにより強制終了されたワークフローインスタンスがリカバリされます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer ワークフローガイド*』を参照してください。

Business Glossary

Business Glossary は、ビジネス用語のオンライン用語集および組織内の重要な概念を定義するポリシーで構成されます。データスチュワードは、説明、他の用語との関係、関連カテゴリなどの情報を含む用語を作成および公開します。用語集は、エンドユーザーが検索しやすいように、一元的な場所に保存されます。

Business Glossary は、用語集、ビジネス用語、ポリシー、およびカテゴリで構成されます。用語集は、他の用語集のコンテンツを格納する上位コンテナです。ビジネス用語は、組織にとって重要な概念を定義し、ポリシーは、用語に関連付けられたビジネスプロセスを決定するビジネス目的を定義します。ビジネス用語とポリシーは、わかりやすい分類であるカテゴリに関連付けることができます。Business Glossary には、Informatica Analyst (Analyst ツール) からアクセスできます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

コラムプロファイル結果

コラムプロファイル結果には数値データ型のコラム内にあるすべての値の合計が含まれます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューの TOTAL_SUM コラムを使用して、数値コラムの値の合計に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_COL_PROFILE_RESULTS
- IDPV_PROFILE_RESULTS_TRENDING

詳細については、『*Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス*』を参照してください。

キュレーション

Analyst ツールおよび Developer ツールのどちらでも推測されたプロファイル結果をキュレーションできます。キュレーションとは、データソースで検出されたメタデータを検証し管理することで、使用とレポートに適したメタデータにするプロセスです。データ型を承認、却下、およびリストアすることができます。また、データドメイン、プライマリキー、および外部キーを承認、却下、およびリストアすることができます。却下されたデータ型またはデータドメインを含む行を表示または非表示にすることができます。プロファイルを再度実行するときに、コラムプロファイル推測およびデータドメイン検出推測から承認されたデータ型、データドメイン、およびプライマリキーを除外することができます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューを使用して、キュレーションされたプロファイル結果に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_CURATED_DATATYPES
- IDPV_CURATED_DATADOMAINS
- IDPV_CURATED_PRIMARYKEYS
- IDPV_CURATED_FOREIGNKEYS

詳細については、『*Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス*』を参照してください。

データ型の推測

コラムプロファイルを実行するときに推測条件に一致する複数のデータ型を推測することができます。コラムプロファイル結果のコラムデータ型に基づいてドリルダウンすることができます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューを使用して、推測されたデータ型に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_DATATYPES_INF_RESULTS
- IDPV_DATATYPE_FREQ_TRENDING

詳細については、『*Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス*』を参照してください。

ID インデックスデータの維持

データソースに対する ID インデックスデータをデータベーステーブルに書き込むよう一致トランスフォーメーションを設定することができます。データソースをデータベーステーブル内の ID インデックスデータと比較するよう一致トランスフォーメーションを設定することができます。2 つあるデータソースのうちの 1 つに対するインデックスデータが保存されているということは、ID 照合マッピングがより短い時間で実行できることを意味します。

インデックステーブルを読み込むよう一致トランスフォーメーションを設定する場合は、トランスフォーメーションが分析するレコードの種類およびトランスフォーメーションが生成する出力の種類を設定します。データソース内のすべてのレコードを分析するように、またはレコードのサブセットの 1 つを分析するようにトランスフォーメーションを設定できます。出力としてすべてのレコードを書き込むように、またはレコードのサブセットの 1 つを書き込むようにトランスフォーメーションを設定できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

Java トランスフォーメーション

Java トランスフォーメーションでは、入力ポートをパーティションキーおよびソートキーとして設定し、ソート方向を割り当てることができます。パーティションキーおよびソートキーは、Hive 環境で実行されるマッピングにおいてトランスフォーメーションを処理するときに有効になります。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

ルックアップトランスフォーメーション

ルックアップトランスフォーメーションのルックアップソースをキャッシュする場合は、動的キャッシュを使用して、ターゲットへの変更に応じてルックアップキャッシュを更新できます。データ統合サービスは各行をターゲットに渡す前にキャッシュを更新します。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

ノーマライザトランスフォーメーション

ノーマライザトランスフォーメーションは 1 つのソース行を複数の出力行に変換するアクティブなトランスフォーメーションです。ノーマライザトランスフォーメーションは、反復したフィールドを含む行を受け取ると、反復したデータのインスタンスごとに出力行を生成します。

データをターゲットにロードする前にリレーショナルまたはフラットファイルソースの反復したデータを整理する場合にノーマライザトランスフォーメーションを使用します。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

パフォーマンス

Developer ツールでは、次の最適化を実行するマッピングを有効にできます。

- 共有体トランスフォーメーションをリレーショナルデータオブジェクトにプッシュします。
- フィルタ、式、ソータ、アグリゲータの各トランスフォーメーションを Hive リレーショナルオブジェクトにプッシュします。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 マッピングガイド*』を参照してください。

プロファイル結果の確認

Depeloper ツールでは、1 つのデータオブジェクトの複数の推測プライマリキーと機能依存性の結果を確認できます。プロファイルの結果を検証すると、ソースデータのすべての行に対してプロファイルが実行されます。また、エンタープライズ検出結果で、複数のデータオブジェクトのリレーションとデータドメインも確認できます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

プッシュダウンの最適化

接続タイプが ODBC である場合、データ統合サービスは、式、アグリゲータ、演算子、共有体、ソータ、およびフィルタの機能を Greenplum ソースにプッシュできます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 マッピングガイド*』を参照してください。

ルールビルダ

ルールビルダは、ビジネスルールの要件をトランスフォーメーションロジックに変換する Informatica Analyst の機能です。ビジネスルールの要件は、ルール仕様に保存します。ルール仕様をコンパイルする際、Analyst ツールは定義した要件に従ってビジネスデータを分析できるトランスフォーメーションを作成します。Analyst ツールで、モデルリポジトリの 1 つ以上のマップレットへのトランスフォーメーションを保存します。

ルール仕様には、1 つ以上の IF-THEN ステートメントが含まれます。IF-THEN ステートメントは論理演算子を使用して、入力データが指定した条件を満たすかどうかを判断します。AND 演算子を使用して IF ステートメントをリンクし、データ値が複数の条件を同時に満たしていることを検証できます。さまざまな入力からのデータを比較し、さまざまな数学的条件下で入力をテストするステートメントを定義できます。ステートメントをリンクして、1 つのステートメントの出力が他への入力になるようにすることもできます。

ルールビルダはビジネスユーザーと Informatica 開発環境の接点です。ビジネスユーザーは Analyst ツールにログインしてマップレットを作成できます。Developer ツールユーザーはマップレットをマッピングに追加し、ビジネスデータがビジネスルールと一致することを確認します。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 ルールビルダガイド*』を参照してください。

スコアカード

スコアカードの結果は Microsoft Excel ファイルにエクスポートできます。エクスポートされたファイルにはスコアカードのサマリ、傾向グラフ、無効な行、およびスコアカードのプロパティが含まれます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

Sequence Generator トランスフォーメーション

9.6.0 では、Sequence Generator トランスフォーメーションを使用して連続する値をマッピングに追加することができます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

Informatica Data Services

ここでは、Informatica Data Services の新機能および改良点について説明します。

カラムプロファイル結果

カラムプロファイル結果には数値データ型のカラム内にあるすべての値の合計が含まれます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューの TOTAL_SUM カラムを使用して、数値カラムの値の合計に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_COL_PROFILE_RESULTS
- IDPV_PROFILE_RESULTS_TRENDING

詳細については、『*Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス*』を参照してください。

キュレーション

Analyst ツールおよび Developer tool のどちらでも推測されたプロファイル結果をキュレーションできます。キュレーションとは、データソースで検出されたメタデータを検証し管理することで、使用とレポートに適したメタデータにするプロセスです。データ型を承認、拒否、およびリストアすることができます。また、データドメイン、プライマリキー、および外部キーを承認、拒否、およびリストアすることができます。却下されたデータ型またはデータドメインを含む行を表示または非表示にすることができます。プロファイルを再度実行するときに、カラムプロファイル推測およびデータドメイン検出推測から承認されたデータ型、データドメイン、およびプライマリキーを除外することができます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューを使用して、キュレーションされたプロファイル結果に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_CURATED_DATATYPES
- IDPV_CURATED_DATADOMAINS
- IDPV_CURATED_PRIMARYKEYS
- IDPV_CURATED_FOREIGNKEYS

詳細については、『*Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス*』を参照してください。

データ型の推測

カラムプロファイルを実行するときに推測条件に一致する複数のデータ型を推測することができます。カラムプロファイル結果のカラムデータ型に基づいてドリルダウンすることができます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

次のリレーショナルデータベースビューを使用して、推測されたデータ型に関する情報のプロファイリングウェアハウスにアクセスします。

- IDPV_DATATYPES_INF_RESULTS
- IDPV_DATATYPE_FREQ_TRENDING

詳細については、『*Informatica 9.6.0 データベースビューリファレンス*』を参照してください。

データマスキングトランスフォーメーション

このリリースではデータマスキングトランスフォーメーションに次の新機能が追加されました。

- データマスキングトランスフォーメーションは Hadoop クラスタでサポートされています。トランスフォーメーションを Hive 環境で実行できます。
- トークン化とは、文字列データをマスキングする独自のアルゴリズムまたはロジックを JAR ファイルに含めることができるマスキング方法です。
- Phone マスキング方法を使用して整数値および bigint データ型数値を含むフィールドをマスクすることができます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

Java トランスフォーメーション

Java トランスフォーメーションでは、入力ポートをパーティションキーおよびソートキーとして設定し、ソート方向を割り当てることができます。パーティションキーおよびソートキーは、Hive 環境で実行されるマッピングにおいてトランスフォーメーションを処理するときに有効になります。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

ノーマライゼイトランスフォーメーション

ノーマライゼイトランスフォーメーションは1つのソース行を複数の出力行に変換するアクティブなトランスフォーメーションです。ノーマライゼイトランスフォーメーションは、反復したフィールドを含む行を受け取ると、反復したデータのインスタンスごとに出力行を生成します。

データをターゲットにロードする前にリレーショナルまたはフラットファイルソースの反復したデータを整理する場合にノーマライゼイトランスフォーメーションを使用します。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

パフォーマンス

Developer tool では、次の最適化を実行するマッピングを有効にできます。

- カスタム SQL クエリをリレーショナルデータオブジェクトにプッシュします。
- Union、Union All、Intersect、Intersect All、Minus、Minus All、および Distinct などの操作をリレーショナルデータオブジェクトにプッシュします。
- 初期選択を実行し、SQL キーワード「LIMIT」を含むクエリをリレーショナルデータオブジェクトにプッシュします。
- 共有体トランスフォーメーションをリレーショナルデータオブジェクトにプッシュします。
- フィルタ、式、ソータ、アグリゲータの各トランスフォーメーションを Hive リレーショナルオブジェクトにプッシュします。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer ユーザーガイド*』、『*Informatica 9.6.0 SQL データサービスガイド*』、および『*Informatica 9.6.0 マッピングガイド*』を参照してください。

プロファイル結果の確認

Developer ツールでは、1つのデータオブジェクトの複数の推測プライマリキーと機能依存性の結果を確認できます。プロファイルの結果を検証すると、ソースデータのすべての行に対してプロファイルが実行されます。また、エンタープライズ検出結果で、複数のデータオブジェクトのリレーションとデータドメインも確認できます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

Greenplum のプッシュダウンの最適化

接続タイプが ODBC である場合、データ統合サービスは、式、アグリゲータ、演算子、共有体、ソータ、およびフィルタの機能を Greenplum ソースにプッシュできます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 マッピングガイド*』を参照してください。

SAP HANA に対するプッシュダウンの最適化

データ統合サービスは接続タイプが ODBC の時、SAP HANA ソースにトランスフォーメーションロジックをプッシュすることができます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 マッピングガイド*』を参照してください。

Teradata のプッシュダウンの最適化

データ統合サービスは接続タイプが ODBC の時、Teradata ソースにトランスフォーメーションロジックをプッシュすることができます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 マッピングガイド*』を参照してください。

REST Web サービスコンシューマトランスフォーメーション

REST Web サービスコンシューマトランスフォーメーションは、マッピングで REST Web サービスを消費します。トランスフォーメーションでは、GET、PUT、POST、および DELETE HTTP の操作を使用できます。

REST Web サービスコンシューマトランスフォーメーションをスキーマオブジェクトから作成するか、空のトランスフォーメーションに要素を追加できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

スコアカード

スコアカードの結果は Microsoft Excel ファイルにエクスポートできます。エクスポートされたファイルにはスコアカードのサマリ、傾向グラフ、無効な行、およびスコアカードのプロパティが含まれます。

詳細については、『*Informatica Data Explorer 9.6.0 データ検出ガイド*』を参照してください。

シーケンスジェネレータトランスフォーメーション

今後は Sequence Generator トランスフォーメーションを使用して連続する値をマッピングに追加することができます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

ストアードプロシージャ

SQL トランスフォーメーションを使用すると、リレーショナルデータベースからストアードプロシージャを起動できます。ストアードプロシージャをインポートすることにより Developer tool で SQL トランスフォーメーションを作成できます。Developer tool はポートおよびストアードプロシージャの呼び出しを追加します。SQL トランスフォーメーションに手動でストアードプロシージャの呼び出しをさらに追加することができます。ストアードプロシージャから 0 行、1 行、または一連の結果を返します。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

Tableau

Informatica Data Services ODBC ドライバを介して Tableau でデブroy済みの SQL データサービスをクエリできます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Data Services ガイド*』を参照してください。

Web サービスコンシューマトランスフォーメーション

このリリースの Web サービスコンシューマトランスフォーメーションには以下の新機能があります。

- 外部 Web サービスプロバイダは、NTLMv2 を使用して統合サービスを認証できます。
- Web サービスコンシューマトランスフォーメーションでは、一方向メッセージパターンの WSDL を使用できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

Informatica Data Transformation

ここでは、Informatica Data Transformation の新機能および改良点について説明します。

データプロセッサトランスフォーメーションウィザード

COBOL、ASN.1、リレーショナル、JSON 入力または出力のある Developer でこのウィザードを使用してデータプロセッサトランスフォーメーションを作成できます。

このウィザードの詳細については、『*Informatica 9.6.0 Data Transformation ユーザーガイド*』を参照してください。

リレーショナル入力

データプリプロセッサトランスフォーメーションでリレーショナル入力を階層出力に変換することができます。

リレーショナル入力の詳細については、『*Informatica 9.6.0 Data Transformation ユーザーガイド*』を参照してください。

XMap と JSON

JSON に対して直接読み取りまたは書き込みを行う XMap を作成できます。

XMap または JSON の詳細については、『*Informatica 9.6.0 Data Transformation ユーザーガイド*』を参照してください。

XMap とトランスフォーマ

XMap のマッピング文では、dp:transform 関数を使用してユーザー定義のトランスフォーマを含めることができます。XPath エディタを使用して、入力、出力または条件フィールドに dp:transform 関数を追加します。

XPath および XPath エディタの詳細については、『*Informatica 9.6.0 Data Transformation ユーザーガイド*』を参照してください。

Informatica Developer

ここでは、Informatica Developer の新機能および改良点について説明します。

アラート

Developer ツールの【アラート】ビューで、接続ステータスのアラートを表示できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer ツールガイド*』を参照してください。

関数

Developer ツールでは、トランスフォーメーション言語で次の関数を使用できます。

- UUID4()。ランダムに生成された 16 バイトのバイナリ値を返します。
- UUID_UNPARSE(バイナリ)。16 バイトのバイナリ引数を取り込んで、36 字の文字列を返します。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer トランスフォーメーション言語リファレンス*』を参照してください。

JDBC の接続

データ統合サービスを使用すると、JDBC を介してリレーショナルデータベースソースから読み取りを行って、リレーショナルデータベースターゲットに書き込むことが可能になります。JDBC ドライバは、Informatica サービスおよび Informatica クライアントと共にインストールされます。また、サードパーティベンダーの Web サイトから、JDBC 3.0 準拠の JDBC ドライバをダウンロードすることもできます。JDBC ドライバを使用すると、ビューやテーブルなどのデータベースオブジェクトをインポートしたり、トランスフォーメーションのデータをプレビューしたり、マッピングを実行したりすることができます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer ツールガイド*』を参照してください。

キーボードアクセシビリティ

Developer ツールでは、キーボードショートカットを使用してエディタ内のオブジェクトやポートで作業ができます。また、【トランスフォーメーション】パレットとワークベンチに移動することもできます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer ツールガイド*』を参照してください。

モデルリポジトリサービスの更新

Developer ツールでは、モデルリポジトリサービスを更新して、新しいオブジェクトと更新済みオブジェクトをモデルリポジトリ内で表示できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer ツールガイド*』を参照してください。

オブジェクトの依存関係

オブジェクトの変更や削除を行う前に、Developer ツールの【オブジェクトの依存関係】ビューでオブジェクトの依存関係を表示して、影響を受けるオブジェクトについて影響分析を実行できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer ツールガイド*』を参照してください。

パズフレーズ

次の接続タイプの場合、Developer ツールではパスワードの代わりにパズフレーズを入力できます。

- Adabas
- DB2 for i5/OS
- DB2 for z/OS
- IMS
- シーケンシャル
- VSAM

z/OS 上のデータベースやデータセットへのアクセスに使用する有効なパズフレーズの文字は、最長 128 文字まで設定できます。i5/OS へのアクセスに使用する有効なパズフレーズの文字は、最長 31 文字です。パズフレーズには次の文字を含めることができます。

- 大文字および小文字
- 0～9 の数字
- スペース
- 次に示す特殊文字。
' - ; # \ , . / ! % & * () _ + { } : @ | < > ?

注: 最初の文字はアポストロフィです。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer ツールガイド*』を参照してください。

Informatica Development Platform

ここでは、Informatica Development Platform の新機能および改良点について説明します。

デザイン API

バージョン 9.6.0 ではデザイン API に次の改良点が加えられています。

- デザイン API を使用して PowerCenter リポジトリから XML ソースまたは XML ターゲットを取得することができます。
- デザイン API を使用して PowerExchange を経由し、階層 VSAM データソースまたはターゲットに接続することができます。
- デザイン API を使用して Kerberos 認証を使用するドメインでリポジトリ関数を実行することができます。Kerberos 認証は `pcconfig.properties` ファイルを通して有効にする、またはリポジトリオブジェクトを作成するときに有効化することができます。

詳細については、『*Informatica Development Platform 9.6.0 Developer ガイド*』を参照してください。

Informatica コネクタツールキット

Informatica コネクタツールキットを使用してデータソースと Informatica プラットフォーム間の接続を提供するアダプタを構築することができます。Informatica コネクタツールキットはライブラリ、プラグイン、および Eclipse 環境でアダプタを開発するためのサンプルコードで構成されています。

詳細については、『*Informatica Development Platform 9.6.0 Informatica コネクタツールキット Developer ガイド*』を参照してください。

Informatica ドメイン

ここでは、Informatica ドメインの新機能および改良点について説明します。

アナリストサービス

バージョン 9.6.0 では、アナリストサービスに次の拡張機能が追加されています。

- ヒューマンタスクを実行するように設定されたデータ統合サービスを選択できます。アナリストサービスに関連付けられたデータ統合サービスがヒューマンタスクを実行するように設定されていない場合は、別のデータ統合サービスを選択します。
- 検索サービスを選択すると、Analyst ツールで検索を有効にできます。
- ビジネス用語集をエクスポートするためのエクスポートファイルディレクトリの場所を設定できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。

コンテンツ管理サービス

コンテンツ管理サービス上に SendRight レポートファイルの場所を設定できます。ニュージーランドの住所レコードに対してアドレス検証マッピングを認証モードで実行するときに、SendRight レポートを生成します。レポートによって、住所レコードがニュージーランド郵便公社の認証基準を満たしていることが検証されます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。

コンテンツ管理サービスはルール仕様をマップレットにコンパイルする作業を管理します。ルール仕様を Analyst ツールにコンパイルする場合、アナリストサービスはマップレットを生成するコンテンツ管理サービスを選択します。Analyst ツールはモデルリポジトリサービス構成を使用して、コンテンツ管理サービスを選択します。

詳細については、『*Informatica 9.6.1 アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。

高可用性

バージョン 9.6.0 では、サービスの高可用性に次の拡張機能が追加されています。

- モデルリポジトリサービスが利用できなくなると、サービスマネージャによって、同じノードまたはバックアップノード上のサービスが再起動されます。1 つ以上のバックアップノードで実行するようにモデルリポジトリサービスを設定できます。
- データ統合サービスが利用できなくなると、サービスマネージャによって、同じノードまたはバックアップノード上のサービスが再起動されます。データ統合サービスを 1 つ以上のバックアップノードで実行するように設定することができます。
- データ統合サービスが予期せずフェイルオーバーするか再起動した場合は、強制終了したワークフローの自動リカバリを有効にできます。
- PowerCenter 統合サービスを有効にすると、高可用性維持の情報をデータベーステーブル内に保存できます。PowerCenter 統合サービスは、関連付けられたリポジトリデータベース内にこの情報を保存します。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 管理者ガイド*』を参照してください。

ログ管理

Administrator ツールでのシナリオに応じて、ログをドメインレベルまたはサービスレベルで集計できます。集計するログファイルを圧縮してディスク容量を節約することもできます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 管理者ガイド*』を参照してください。

パスフレーズ

次の場所では、パスワードの代わりにパスフレーズを入力できます。

- ADABAS、DB2I、DB2Z、IMS、SEQ、または VSAM の各接続に対する infacmd isp CreateConnection コマンドと UpdateConnection コマンドの -ConnectionPassword オプション内。
- IMS、SEQ、および VSAM の各データソースに対する infacmd pwx createdatamaps コマンドの -pwxPassword オプション内。
- DB2 for i5/OS 接続と DB2 for z/OS 接続に対する Administrator ツール内。

z/OS 上のデータベースやデータセットへのアクセスに使用する有効なパスフレーズの文字は、最長 128 文字まで設定できます。i5/OS へのアクセスに使用する有効なパスフレーズの文字は、最長 31 文字です。パスフレーズには次の文字を含めることができます。

- 大文字および小文字
 - 0～9 の数字
 - スペース
 - 次に示す特殊文字。
' - ; # \ , . / ! % & * () _ + { } : @ | < > ?
- 注: 最初の文字はアポストロフィです。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 管理者ガイド*』と *Informatica 9.6.0 コマンドリファレンス*』を参照してください。

検索サービス

検索サービスを作成することで、Analyst ツールと Business Glossary Desktop での検索を有効にします。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 アプリケーションサービスガイド*』を参照してください。

ワークフローのグラフ

Administrator ツールで実行するワークフローをグラフィカルに表示できます。ワークフローおよび障害ポイント内のタスクの詳細を表示できます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 管理者ガイド*』を参照してください。

Informatica ドメインのセキュリティ

ここでは、Informatica ドメインのセキュリティの改良点について説明します。

認証

Informatica を Kerberos 認証および Microsoft Active Directory (AD) ディレクトリサービスを使用して実行することができます。Kerberos 認証はシングルサインオン機能を Informatica ドメインクライアントアプリケーションに提供します。Informatica ドメインは Active Directory 2008 R2 をサポートします。

2 要素認証

Informatica クライアントを 2 要素認証を使用する Windows ネットワーク上で実行することができます。

暗号化キー

ドメインに保存されたパスワードなどの機密データを暗号化するのに使用する一意の暗号化キーを生成するためのキーワードを指定することができます。

ワークフローのセキュリティ

PowerCenter ワークフローを安全に実行できるよう PowerCenter 統合サービスを設定することができます。
【データの暗号化を有効にする】オプションは PowerCenter 統合サービスと Data Transformation マネージャ (DTM) プロセス間および DTM の処理間の安全な通信を有効にします。

管理者グループ

Informatica ドメインにはデフォルト管理者特権を持つ管理者グループが含まれています。管理者グループに対してユーザーを追加または削除できます。管理者グループは削除できません。

管理者アカウントロックアウト

Administrator ツールでアカウントロックアウトを設定すると、管理者ユーザーアカウントに対してアカウントロックアウトを適用することができます。【管理者アカウントロックアウト】オプションは管理者ユーザーアカウントに対するロックアウトを有効にします。【アカウントロックアウト】オプションを有効にすると、【管理者アカウントロックアウト】も有効にすることができます。

安全なリレーショナルデータベースへの接続

Informatica リレーショナルデータベースドライバを使用して安全な Oracle、Microsoft SQL Server、または IBM DB2 データベースに接続することができます。SSL 証明書で保護されたデータベースにリポジトリ、ソース、およびターゲットを作成することができます。

監査レポート

Administrator ツールでは、監査レポートを生成して Informatica ドメインのユーザーおよびグループに関する情報を得ることができます。たとえば、ユーザーに割り当てられた特権および権限、およびユーザーと関連付けられたグループなどのユーザーアカウントについての情報を得ることができます。

アナリストサービスの特権

以下の表に、アナリストサービスの新しい特権を示します。

特権	説明
グロッサリの管理	ユーザーはビジネス用語集を管理できます。
ワークスペースアクセス	ユーザーは Analyst ツールの次のワークスペースにアクセスできます。 <ul style="list-style-type: none">- 設計ワークスペース。- 検出ワークスペース。- 用語集ワークスペース。- スコアカードワークスペース。
設計ワークスペース	ユーザーは設計ワークスペースにアクセスできます。
検出ワークスペース	ユーザーは検出ワークスペースにアクセスできます。
用語集ワークスペース	ユーザーは用語集ワークスペースにアクセスできます。
スコアカードワークスペース	ユーザーはスコアカードワークスペースにアクセスできます。

モデルリポジトリサービス特権

以下の表に、モデルリポジトリサービスの新しい特権を示します。

特権	説明
Analyst アクセス	ユーザーは、Analyst ツールからモデルリポジトリにアクセスできます。
Developer アクセス	ユーザーは、Developer ツールからモデルリポジトリにアクセスできます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 セキュリティガイド*』を参照してください。

コマンドラインプログラム

ここでは、Informatica コマンドラインプログラムの新規および更新されたコマンドとオプションについて説明します。

infacmd as コマンド

以下の表に、更新された infacmd as コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CreateService	<p>以下の新しいオプションが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none">-HumanTaskDataIntegrationService(-htds)。オプション。ヒューマンタスクを実行するデータ統合サービスの名前。-BusinessGlossaryExportFileDirectory(-bgefd)。オプション。ビジネス用語集ファイルをエクスポートするディレクトリの場所。 <p>以下の廃止されたオプションが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none">-StagingDatabase(-sd)。必須。ステージングデータベース用のデータベース接続名
UpdateServiceOptions	<p>アナリストサービスオプションを更新します。バージョン 9.6.0 では、このコマンドを実行して、ヒューマンタスクを実行するためのデータ統合サービスを指定できます。</p> <p>例えば、次のコマンドを実行すると、アナリストサービスは、データ統合サービス名として DIS_ID_100 を指定するよう設定されます。</p> <pre>infacmd as UpdateServiceOptions -dn Infadomain -sn AS_ID_100 -un Username -pd Password HumanTaskDataIntegrationService.humanTaskDsServiceName=DS_ID_100</pre>

以下の表に、廃止された infacmd as コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CreateAuditTables	ステージングデータベースの不良レコードテーブルおよび重複テーブルの監査証跡ログイベントを含む監査テーブルを作成します。 infacmd as CreateAuditTables を使用するスクリプトを更新します。
DeleteAuditTables	ステージングデータベースの不良レコードテーブルおよび重複テーブルの監査証跡ログイベントを含む監査テーブルを作成します。 infacmd as DeleteAuditTables を使用するスクリプトを更新します。

infacmd dis コマンド

以下の表に、更新された infacmd dis コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CreateService	以下の新しいオプションが含まれます。 - -BackupNodes(-bn)。オプション。バックアップノードの名前。
UpdateService	以下の新しいオプションが含まれます。 - -BackupNodes(-bn)。オプション。バックアップノードの名前。

infacmd idd コマンド

infacmd idd コマンドは廃止されました。 infacmd idd コマンドを参照するスクリプトを更新します。

以下の表に、廃止された infacmd idd コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CreateService	データディレクタサービスを作成します。
ListServiceOptions	データディレクタサービスオプションの一覧を表示します。
ListServiceProcessOptions	データディレクタサービスオプションプロセスの一覧を表示します。
RemoveService	データディレクタサービスを削除します。
UpdateServiceOptions	データディレクタサービスオプションを更新します。
UpdateServiceProcessOptions	データディレクタサービスプロセスのオプションを更新します。

infacmd isp コマンド

以下の表に、更新された infacmd isp コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
AssignISToMMService	以下の新しいオプションが含まれます。 - -RepositoryUserSecurityDomain(-rsdn)。オプション。PowerCenter リポジトリユーザーが属しているセキュリティドメインの名前。
createconnection	以下の更新されたオプションが含まれます。 - -ConnectionPassword。ADABAS、DB2I、DB2Z、IMS、SEQ、または VSAM 接続のパスワードを入力できます。パスワードは、z/OS 接続では 128 文字まで、DB2 for i5/OS 接続では 31 文字まで設定できます。パスワードには英字、数字、スペース、およびいくつかの特殊文字を含めることができます。
CreateIntegrationService	以下のサービスのオプション(-so)が含まれます。 - StoreHAPersistenceInDB。オプション。処理状態の情報を、関連する PowerCenter リポジトリデータベースの中の高可用性永続テーブル内に保存します。デフォルトは [いいえ] です。
EnableService	検索サービスを有効化できます。
GetLog	ServiceType オプションの引数 SEARCH が含まれます。この引数を使用すると、検索サービスのログイベントを取得できます。
ListServices	ServiceType オプションの引数 SEARCH が含まれます。この引数を使用すると、ドメインで実行中のすべての検索サービスのリストを取得できます。
updateConnection	以下の更新されたオプションが含まれます。 - -ConnectionPassword。ADABAS、DB2I、DB2Z、IMS、SEQ、または VSAM 接続のパスワードを入力できます。パスワードは、z/OS 接続では 128 文字まで、DB2 for i5/OS 接続では 31 文字まで設定できます。パスワードには英字、数字、スペース、およびいくつかの特殊文字を含めることができます。
UpdateDomainOptions	以下のドメインオプション (-do) が含まれます。 - ServiceResilTimeout。サービスが別のサービスへの接続の確立または再確立を試行する時間 (秒)。
UpdateGatewayInfo	以下の新しいオプションが含まれます。 - -Force(-f)。オプション。ドメインへの接続に失敗した場合でも、domains.infa ファイルが更新または作成されます。ドメインへの接続に失敗すると、-Force オプションによって、Kerberos と TLS が有効なオプションは false に設定されます。-Force オプションを指定しない場合、ドメインへの接続に失敗したときに、domains.infa ファイルは更新されません。以前は、指定した接続情報でゲートウェイノードを更新したときに、エラーメッセージがないかコマンドで確認できませんでした。
UpdateIntegrationService	以下のサービスのオプション(-so)が含まれます。 - StoreHAPersistenceInDB。オプション。処理状態の情報を、関連する PowerCenter リポジトリデータベースの中の高可用性永続テーブル内に保存します。デフォルトは [いいえ] です。

infacmd mrs コマンド

以下の表に、更新された infacmd mrs コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
CreateService	以下の新しいオプションが含まれます。 - -BackupNodes(-bn)。オプション。バックアップノードの名前。
UpdateService	以下の新しいオプションが含まれます。 - -PrimaryNode(-nn)。オプション。プライマリノードの名前です。 - -BackupNodes(-bn)。オプション。バックアップノードの名前。

infacmd ps コマンド

以下の表に、新しい infacmd ps コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
migrateProfileResults	カラムプロファイルの結果とデータドメイン検出の結果をバージョン 9.1.0、9.5.0、または 9.5.1 から移行します。
synchronizeProfile	特定のプロジェクト内のすべてのプロファイルにおける文書化されたキー、ユーザー定義のキー、コミットされたキー、プライマリキー、および外部キーをバージョン 9.1.0、9.5.0、または 9.5.1 から移行します。

infacmd pwx コマンド

以下の表に、新しい infacmd pwx コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
createdatamaps	バルクデータ移動のために、IMS、SEQ、または VSAM データソースの PowerExchange データマップを作成します。

infacmd search コマンド

以下の表に、新しい infacmd search コマンドの説明を示します。

コマンド	説明
createService	検索サービスを作成します。
listServiceOptions	検索サービスのプロパティを一覧表示します。
listServiceProcessOptions	検索サービスプロセスのプロパティを一覧表示します。
updateServiceOptions	検索サービスのプロパティを設定します。
updateServiceProcessOptions	検索サービスプロセスのプロパティを設定します。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 コマンドリファレンス*』を参照してください。

PowerCenter

ここでは、PowerCenter の新機能および改良点について説明します。

SAP HANA に対するプッシュダウンの最適化

PowerCenter 統合サービスは接続タイプが ODBC の時、SAP HANA ソースおよびターゲットにトランスフォーマーロジックをプッシュすることができます。

詳細については、『*Informatica PowerCenter 9.6.0 上級ワークフローガイド*』を参照してください。

データベースでの高可用性維持

PowerCenter 統合サービスを有効にすると、高可用性維持の情報をデータベーステーブル内に保存できます。PowerCenter 統合サービスは、関連付けられたリポジトリデータベース内にこの情報を保存します。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 管理者ガイド*』を参照してください。

トランスフォーメーション

パラメータファイルを使用すると、次のトランスフォーメーションでキャッシュサイズ値を指定できます。

- アグリゲータ
- ジョイナ
- ランク
- ソータ

詳細については、『*Informatica PowerCenter 9.6.1 トランスフォーメーションガイド*』を参照してください。

PowerCenter Big Data Edition

ここでは、PowerCenter Big Data Edition の新機能および改良点について説明します。

自動ワークフローリカバリ

データ統合サービスプロセスが予期せずにシャットダウンしたために強制終了されたワークフローインスタンスの自動リカバリを設定することができます。自動リカバリを設定すると、データ統合サービスプロセスでは、サービスプロセスの再開時に、サービスプロセスのシャットダウンにより強制終了されたワークフローインスタンスがリカバリされます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Developer ワークフローガイド*』を参照してください。

Hive 環境でのマッピング

- Cloudera 4.2、Hortonworks 1.3.2、MapR 2.1.3、および MapR 3.0.1 ディストリビューションでマッピングを実行できます。
- マッピングの検証環境として Hive を選択する場合に Hive のバージョンを選択できるようになりました。
- Hive バージョン 0.9 以降では Hive ターゲットテーブルに追加することができます。
- Java トランスフォーメーションでは、入力ポートをパーティションキーおよびソートキーとして設定し、ソート方向を割り当て、ソートされた出力データを取得することができます。
- Hadoop データノードおよびデータ統合サービスノードの Hadoop ディストリビューションディレクトリを変更するには、Hadoop リソースディスクリプタ設定ファイル `hadoopRes.properties` を使用します。

詳細については、『*Informatica PowerCenter Big Data Edition 9.6.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

ネイティブ環境でのパーティションマッピング

パーティション化オプションがある場合は、データ統合サービスプロセスを有効にして、ネイティブ環境におけるマッピング実行時の並列処理を最大化することができます。データ統合サービスプロセスはマルチ CPU

のノードで実行する必要があります。並列処理を最大化すると、データ統合サービスによって基になるデータが動的にパーティションに分割され、すべてのパーティションが同時に処理されます。データ統合サービスでパーティションが追加されると、処理スレッド数が増加し、これによりマッピングのパフォーマンスを高めることができます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 マッピングガイド*』を参照してください。

PowerCenter Advanced Edition

ここでは、PowerCenter Advanced Edition の新機能および改良点について説明します。

Business Glossary

Business Glossary は、ビジネス用語のオンライン用語集および組織内の重要な概念を定義するポリシーで構成されます。データスチュワードは、説明、他の用語との関係、関連カテゴリなどの情報を含む用語を作成および公開します。用語集は、エンドユーザーが検索しやすいように、一元的な場所に保存されます。

Business Glossary は、用語集、ビジネス用語、ポリシー、およびカテゴリで構成されます。用語集は、他の用語集のコンテンツを格納する上位コンテナです。ビジネス用語は、組織にとって重要な概念を定義し、ポリシーは、用語に関連付けられたビジネスプロセスを決定するビジネス目的を定義します。ビジネス用語とポリシーは、わかりやすい分類であるカテゴリに関連付けることができます。Business Glossary には、Informatica Analyst (Analyst ツール) からアクセスできます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 Business Glossary ガイド*』を参照してください。

Metadata Manager

ここでは、Metadata Manager の新機能および改良点について説明します。

セキュリティの改善点

Metadata Manager には次のセキュリティに関する改善点があります。

安全なリレーショナルデータベースへの接続

Metadata Manager は安全な IBM DB2、Microsoft SQL Server、および Oracle データベースと通信することができます。Metadata Manager は、これらが Metadata Manager リポジトリに使用されているとき、PowerCenter リポジトリに使用されているとき、またはメタデータソースとして使用されているときにこれらのデータベースと通信することができます。

詳細については、『*Informatica PowerCenter 9.6.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

Kerberos 認証

Metadata Manager は Kerberos 認証が設定されたドメインで実行できます。

ドメインで Kerberos 認証を使用するように設定する方法の詳細については、『*Informatica 9.6.0 セキュリティガイド*』を参照してください。ドメインが Kerberos 認証を使用しているときの Metadata Manager および mmcmd の実行について詳しくは、『*Informatica PowerCenter 9.6.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

2 要素認証

Metadata Manager を 2 要素認証を使用する Windows ネットワーク上で実行することができます。

詳細については、『*Informatica 9.6.0 セキュリティガイド*』を参照してください。

Business Glossary リソース

Informatica Analyst ビジネス用語集に基づいた Business Glossary リソースを作成できます。Business Glossary リソースを作成して Informatica Analyst ビジネス用語集からメタデータを抽出します。

リソースの作成について詳しくは、『*Informatica PowerCenter 9.6.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。リソースの表示について詳しくは、『*Informatica PowerCenter 9.6.0 Metadata Manager ユーザーガイド*』を参照してください。

リソースのバージョン

次のバージョンのリソースを作成できます。

- Microstrategy 9.3.1 および 9.4.1。以前は、バージョン 9.2.1 までの Microstrategy リソースを作成できました。
- Netezza 7.0。以前は、バージョン 6.0 までの Netezza リソースを作成できました。

リソースの作成について詳しくは、『*Informatica PowerCenter 9.6.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。

ブラウザサポート

Google Chrome ウェブブラウザで Metadata Manager アプリケーションを実行することができます。

PowerCenter 用 PowerExchange アダプタ

ここでは、PowerCenter 用 PowerExchange アダプタの新機能および改良点について説明します。

PowerExchange for Greenplum

Greenplum 接続オブジェクトで指定されているスキーマをオーバーライドするようにセッションを設定することができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Greenplum 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Hadoop

PowerExchange for Hadoop は、Hadoop のソースとターゲットへのアクセスに関して、次の更新されたバージョンの Hadoop ディストリビューションをサポートします。

- Cloudera CDH 4.2
- Hortonworks 1.3.2
- MapR 2.1.3 および 3.0.1
- Pivotal HD 1.1
- IBM BigInsights-2.1

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Hadoop 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM

- オンラインデプロイメントに Microsoft Dynamics CRM Online バージョン 2013 を使用することができます。
- Microsoft Dynamics CRM から取得する行数を設定できます。
- 1 対多または多対 1 のリレーションを持つ 2 つの関連するエンティティに参加することができます。
- Microsoft Dynamics CRM がインストールされている Internet Information Services (IIS) で HTTP 圧縮が有効になっている場合に、PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM は HTTP 圧縮を使用してデータを抽出します。
- バルクモードでレコードを書き込むように PowerCenter 統合サービスを設定することができます。
- ランタイム時に krb5.conf ファイルおよび login.conf ファイルの場所を変更することができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for SAP NetWeaver

- PowerExchange for SAP NetWeaver では、SAP NetWeaver RFC SDK 7.20 ライブラリを使用します。
- 7.x DataSource にデータをロードする SAP BW セッションのパーティショニングを有効にできます。パーティショニングを有効にすると、PowerCenter 統合サービスは各パーティションの抽出、変換、ロードを並列実行します。
- リモート関数コール通信プロトコルを使用し ABAP ストリームモードセッションを実行することができます。
- 安全なトランスポートをインストールして、ABAP を使用して SAP からデータを読み取るときにセキュリティ認証を適用することができます。
- SAP Business Suite アプリケーションからビジネスコンテンツデータを抽出する場合は、カスタム名前空間に属するデータソースを使用できます。
- タイムスタンプベースの差分ポインタを使用してビジネスコンテンツデータを抽出する場合は、データ全体を完全に転送せずに、変更されたデータのみを抽出できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for SAP PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for SAS

SAS データファイルからデータを直接読み取ることができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for SAS 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Siebel

Siebel ビジネスコンポーネントをインポートする時、複数の Siebel リポジトリが利用可能な場合に Siebel リポジトリの名前を指定することができます。connection.properties ファイルを作成して設定することにより **【リポジトリ名】** フィールドを PowerExchange for Siebel の **【Siebel メタデータのインポート】** ウィザードに追加することができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Siebel 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API

- Teradata PT API がいずれかのスプールモードを使用して Teradata からデータを抽出するようにセッションを設定できます。
- データをターゲットにロードするときに非対応の Teradata Unicode 文字の代わりに特定の文字を使用するようにセッションを設定できます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Teradata Parallel Transporter API 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Web Services

- PowerCenter 統合サービスでは、RPC/Encoded およびドキュメント/リテラルのエンコーディングスタイルを使用する SOAP 1.2 メッセージを処理できます。各 Web サービスには SOAP 1.2 バインディングを使用する操作を設定できます。Web サービスコンシューマトランスフォーメーションは SOAP 1.2 バインディングで作成できます。
- PowerExchange for Web Services をウェブサービスプロバイダとして SharePoint 2010 および 2013 とともに使用することができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Web Services 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

Informatica 用 PowerExchange アダプタ

ここでは、Informatica 用 PowerExchange アダプタの新機能および改良点について説明します。

PowerExchange for HBase

PowerExchange for HBase は HBase データストアへの接続を提供します。PowerExchange for HBase を使用して HBase カラムファミリーからデータを読み取り、HBase テーブルのカラムファミリーにデータを書き込みます。カラムファミリーまたは 1 つのバイナリカラムに対してデータを読み書きできます。

HBase データオブジェクト操作をソースとして、またはターゲットとしてマッピングに追加することができます、そのマッピングをネイティブまたは Hive 環境で実行することができます。

詳細については、『*PowerExchange for HBase 9.6.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for DataSift

設計時に HTTP プロキシサーバー認証設定を設定することができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for DataSift 9.6.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Facebook

- Facebook のグループ、グループのニュースフィード、グループのメンバー一覧、ページの基本情報、ページのニュースフィードを抽出することができます。
- 設計時に HTTP プロキシサーバー認証設定を設定することができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Facebook 9.6.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for HDFS

- PowerExchange for HDFS は、HDFS のソースとターゲットへのアクセスに関して、次の Hadoop ディストリビューションをサポートします。
 - CDH Version 4 Update 2
 - HortonWorks 1.3.2
 - MapR 2.1.3
 - MapR 3.0.1
- 複合型ファイルデータオブジェクトを持つ HDFS へ、テキストファイルおよびシーケンスファイルのようなバイナリファイル形式を書き込むことができます。
- 圧縮した複合ファイルの書き込み、圧縮形式の指定、ファイルの解凍ができます。
- データ統合サービスはパーティションを作成してシーケンスファイルからデータを読み込み、分割可能なカスタム入力フォーマットファイルを作成します。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for HDFS 9.6.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Hive

- PowerExchange for Hive は、Hive のソースとターゲットへのアクセスに関して、次の Hive ディストリビューションをサポートします。
 - Cloudera CDH Version 4 Update 2
 - HortonWorks 1.3.2
 - MapR 2.1.3
 - MapR 3.0.1
- Hive 環境でマッピングを実行するときに Hive パーティション化されたテーブルに書き込むことができます。

PowerExchange for LinkedIn

- LinkedIn で会社情報をルックアップするときに人物のフルネームを指定することができます。
- 設計時に HTTP プロキシサーバー認証設定を設定することができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for LinkedIn 9.6.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Salesforce

- Salesforce データオブジェクト読み込み操作のクエリプロパティのフィルタを使用することにより、Salesforce から特定のレコードを選択することができます。
- Salesforce データオブジェクト読み込み操作を使用して Salesforce オブジェクト内のデータをルックアップできます。
- 設計時に HTTP プロキシサーバー認証設定を設定することができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Salesforce 9.6.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for SAP NetWeaver

- PowerExchange for SAP NetWeaver では、SAP NetWeaver RFC SDK 7.20 ライブラリを使用します。
- 安全なトランスポートをインストールして、ABAP を使用して SAP からデータを読み取るときにセキュリティ認証を適用することができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for SAP 9.6.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Twitter

- ユーザー ID またはスクリーンネームの一覧を.txt または.csv 形式で指定して、ユーザーのプロファイルを抽出することができます。有効なユーザー ID またはスクリーンネームを指定してユーザーのプロファイルを抽出できます。
- 設計時に HTTP プロキシサーバー認証設定を設定することができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for Twitter 9.6.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst

設計時に HTTP プロキシサーバー認証設定を設定することができます。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for LinkedIn 9.6.0 ユーザーガイド*』を参照してください。

Informatica のマニュアル

ここでは、Informatica のマニュアルに含まれる新しいガイドについて説明します。いくつかの新しいガイドは複数の製品で共有されている機能に基づいて構成されており、以前のガイドに代わるものとなっています。

Informatica のマニュアルには次の新しいガイドが付属しています。

Informatica Analyst ツールガイド

Informatica Analyst (Analyst ツール) に関する全般的な情報が記載されています。Analyst ツールの情報は以前まで、『*Informatica Data Integration Analyst ユーザーガイド*』内に記載されていました。

Informatica アプリケーションサービスガイド

アプリケーションサービスに関する情報が記載されています。アプリケーションサービスの情報は以前まで、『*Informatica Administrator ガイド*』内に記載されていました。

Informatica コネクタツールキット Developer ガイド

Informatica コネクタツールキットに関する情報と Informatica プラットフォーム用アダプタの開発方法が記載されています。接続属性、タイプシステム、メタデータオブジェクト、ランタイムの動作など、アダプタを開発するときに定義するコンポーネントに関する情報を確認できます。

Informatica コネクタツールキット入門ガイド

Informatica コネクタツールキットを使用することで、Informatica プラットフォーム用の MySQL アダプタのサンプルを開発するためのチュートリアルを紹介しています。Informatica コネクタツールキットのインストール方法、Informatica コネクタツールキットで MySQL アダプタのサンプルを作成して公開する方法に関する情報があります。

Informatica Data Explorer データ検出ガイド

コンテンツと構造を含んだソースシステムのメタデータの検出に関する情報が記載されています。カラムプロファイル、データドメインの検出、プライマリキーおよび外部キーの検出、機能依存性の検出、結合分析、およびエンタープライズの検出に関する情報を確認できます。データ検出の情報は以前まで、『*Informatica Data Explorer ユーザーガイド*』内に記載されていました。

Informatica Business Glossary ガイド

Business Glossary に関する情報が記載されています。Analyst ツールで用語集のコンテンツを管理し、参照する方法についての情報があります。用語集のコンテンツには、用語、ポリシー、およびカテゴリが含まれています。Metadata Manager ビジネス用語集の情報は以前まで、『*Informatica PowerCenter Metadata Manager ビジネス用語集ガイド*』内に記載されていました。

Informatica Data Quality 例外管理ガイド

Data Quality の例外管理に関する情報が記載されています。Analyst ツールで例外レコードタスクを管理する方法についての情報を確認できます。例外管理の情報は以前まで、『*Informatica Data Director for Data Quality ガイド*』、『*Data Quality ユーザーガイド*』、および『*Data Services ユーザーガイド*』内に記載されていました。

Informatica データベースビューリファレンス

モデルリポジトリビュー、プロファイルウェアハウスビュー、および Business Glossary ビューに関する情報が記載されています。このマニュアルは以前まで『*Informatica Data Services モデルリポジトリビュー*』というタイトルで、プロファイルのビューに関する情報は H2L の記事に記載されていました。Business Glossary ビューは、このマニュアルに新たに追加された内容です。

Informatica Developer ツールガイド

Informatica Developer に関する情報が記載されています。Developer ツールの一般的な機能に関する情報を確認できます。Developer ツールの情報は以前まで、『*Informatica Developer ユーザーガイド*』内に記載されていました。

Informatica マッピングガイド

モデルリポジトリマッピングの設定に関する情報が記載されています。Developer ツールの情報は以前まで、『*Informatica Developer ユーザーガイド*』内に記載されていました。

Informatica マッピング仕様入門ガイド

マッピング仕様に関する入門情報が記載されています。

Informatica マッピング仕様ガイド

マッピング仕様に関する情報が記載されています。マッピング仕様の情報は以前まで、『*Informatica Data Integration Analyst ユーザーガイド*』内に記載されていました。

Informatica プロファイルガイド

プロファイルに関する情報が記載されています。このガイドには、カラムプロファイルの実行、ルールの作成、およびスコアカードの作成に関する基本情報が記載されています。プロファイリングの情報は以前

まで、『*Data Quality ユーザーガイド*』と『*Informatica Data Explorer ユーザーガイド*』に記載されていました。

Informatica **参照データガイド**

参照データオブジェクトに関する情報が記載されています。参照データオブジェクトには、ソースデータで検索操作を実行するのに使用できる一連のデータ値が含まれます。Developer ツールおよび Analyst ツールで参照データオブジェクトを作成できます。また、参照データオブジェクトをモデルリポジトリにインポートできます。参照データオブジェクトの情報は以前まで、『*Informatica Data Quality ユーザーガイド*』に記載されていました。

Informatica **ルールビルダガイド**

Analyst ツールのルールビルダ機能に関する情報が記載されています。ルールビルダを使用して、一連の論理文としてビジネスルールの要件を記述します。論理文はルール仕様にコンパイルします。Analyst ツールによって、ルール仕様のコピーがマップレットとしてモデルリポジトリ内に保存されます。

Informatica **セキュリティガイド**

Informatica ドメインのセキュリティに関する情報が記載されています。Informatica セキュリティの情報は以前まで、『*Informatica Administrator ガイド*』内に記載されていました。

Informatica SQL **データサービスガイド**

このマニュアルには、サードパーティ製ツールによる SQL データサービスの作成、仮想データの入力、および SQL データサービスへの接続に関する情報が記載されています。このマニュアルは以前まで、『*Informatica Data Services ユーザーガイド*』というタイトルでした。

第 10 章

Informatica Data Explorer (9.6.0) の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- [エンタープライズ検出, 196 ページ](#)
- [プロファイル結果の確認, 196 ページ](#)
- [ルール, 197 ページ](#)
- [スコアカード, 197 ページ](#)

エンタープライズ検出

バージョン 9.6.0 では、エンタープライズ検出に以下の変更点があります。

- モデルリポジトリサービスを更新して外部接続のデータソースに対するエンタープライズ検出結果を表示できます。
以前は、エンタープライズ検出プロファイルを実行した後でモデルリポジトリサービスに再接続する必要がありました。
- プロファイルウィザードの【**プロファイルモデル**】オプション（プロファイルウィザードは【**ファイル**】 > 【**新規**】 > 【**プロファイル**】と選択して開く）は【**エンタープライズ検出プロファイル**】に改名されました。
- エンタープライズ検出結果のグラフィカルビューには、グラフィカルビューに含めるために選択したデータドメインの重複が表示されます。

プロファイル結果の確認

バージョン 9.6.0 では、Developer ツールで複数のカラムに関するデータドメイン検出結果を確認できます。プロファイル結果を確認する際、Developer ツールによってデータソースのすべての行に対してプロファイルが実行されます。

以前は、1 つのカラムのデータドメイン検出結果を確認していました。

ルール

バージョン 9.6.0 では、Informatica Analyst でルールをプロファイルに適用するときに、複数の入力カラムを選択できます。

以前は、ルールを適用するときに 1 つの入力カラムを選択していました。

スコアカード

バージョン 9.6.0 では、スコアカードに以下の変更点があります。

- メトリックの有効な値を選択すると、選択した有効な値の割合と有効な値の合計カウントを表示できます。
以前は、カラムの有効な値の合計カウントを表示できました。
- メトリックのソースデータを表示すると、**【ドリルダウン】** セクションに無効なソースデータの行がデフォルトで表示されます。
以前は、デフォルトにより、有効な行が表示されていました。
- スコアカード結果では、スコアを選択し、傾向グラフの矢印をクリックして傾向グラフを表示できます。
以前は、スコアを右クリックして、**【傾向グラフの表示】** オプションを選択していました。

第 11 章

Informatica Data Quality (9.6.0) の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- [アドレスバリデータトランスフォーメーション, 198 ページ](#)
- [例外レコード管理, 198 ページ](#)
- [Informatica Data Director for Data Quality, 199 ページ](#)
- [Java トランスフォーメーション, 199 ページ](#)
- [マッピングパラメータ, 199 ページ](#)
- [一致トランスフォーメーション, 200 ページ](#)
- [Microsoft SQL Server へのネイティブ接続, 200 ページ](#)
- [ポート対ポートのデータ変換, 200 ページ](#)
- [プロファイル結果の確認, 200 ページ](#)
- [参照テーブル, 201 ページ](#)
- [ルール, 201 ページ](#)
- [スコアカード, 201 ページ](#)

アドレスバリデータトランスフォーメーション

バージョン 9.6.0 では、アドレスバリデータトランスフォーメーションで、バージョン 5.4.1 の Address Doctor ソフトウェアエンジンを使用します。

以前は、トランスフォーメーションで Address Doctor ソフトウェアエンジンのバージョン 5.3.1 を使用していました。

例外レコード管理

バージョン 9.6.0 において、Analyst ツールはヒューマンタスクが識別するデータベーステーブルから例外レコードを読み込みます。

以前は、Analyst ツールはアナリストサービスが識別したステージングデータベースから例外レコードを読み込んでいました。

アップグレード後もステージングデータベースのレコードを分析するには次の手順に従います:

1. ステージングデータベーステーブルを読み込むマッピングを作成します。
例外トランスフォーメーションを使用して例外レコードを識別します。
2. マッピングタスクとヒューマンタスクを使ったワークフローを設定します。
例外マッピングを実行するようにマッピングタスクを設定します。マッピングタスクの出力を読み込むようにヒューマンタスクを設定します。
3. ワークフローを実行します。
4. Analyst ツールにログインして例外レコードを確認し、更新します。

Informatica Data Director for Data Quality

バージョン 9.6.0 では、Informatica Data Director for Data Quality Web アプリケーションが廃止されました。バージョン 9.6.0 でヒューマンタスクデータを確認し、更新するには Analyst ツールにログインします。

以前は、ヒューマンタスクによって指定されたレコードを確認し、更新するために Informatica Data Director for Data Quality にログインしていました。

Java トランスフォーメーション

バージョン 9.6.0 では、Java トランスフォーメーションの**ステートレス**詳細プロパティはネイティブ環境および Hive 環境のどちらにおいても有効です。ネイティブ環境では、データ統合サービスが複数のパーティションを使用してマッピングを処理できるように、Java トランスフォーメーションの**ステートレス**プロパティが有効になっている必要があります。

以前は、**ステートレス**プロパティは、Hive 環境のみで有効でした。ネイティブ環境でマッピングが実行されたとき、データ統合サービスはステートレスプロパティを無視していました。

マッピングパラメータ

バージョン 9.6.0 では、長い値を表すユーザー定義のパラメータは Bigint に改名されました。以前は、このユーザー定義のパラメータは Long と呼ばれていました。

バージョン 9.6.0 では、リレーショナルデータオブジェクトにおける、読み込み操作時の SQL オーバーライド、フィルタ条件、結合条件および SQL 文、書き込み操作時の Update SQL オーバーライドおよび SQL 文でドル記号 (\$) をエスケープ処理する必要があります。以前は、ドル記号 (\$) はこれらすべてのプロパティでそのまま使用することができました。

バージョン 9.6.0 では、再利用可能なトランスフォーメーション、リレーショナル、PowerExchange およびフラットファイルデータオブジェクトで定義されたパラメータ名およびドル記号 (\$) で始まるパラメータ名はモデルリポジトリの一意の名前に変更されました。しかし、パラメータファイルのパラメータ名は変更されていません。以前は、マッピングパラメータ名の最初の文字にドル記号 (\$) を使用することができました。

一致トランスフォーメーション

バージョン 9.6.0 では、ID 照合分析を行う一致トランスフォーメーションは NULL データ値と空のデータフィールドを個別に扱います。バージョン 9.6.0 では、ID 照合分析およびフィールド一致解析で NULL データ値と空のデータフィールドを同様に扱います。

以前は、一致トランスフォーメーションで ID 照合分析における NULL データ値と空のデータフィールドを同一のデータ要素として扱っていました。

Microsoft SQL Server へのネイティブ接続

バージョン 9.6.0 では、Microsoft SQL Server データベースへの Windows マシンからのネイティブ接続を設定するために、Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。

以前は、Informatica ではネイティブ接続に Microsoft OLE DB Provider を使用していたため、SQL クライアントをインストールする必要はありませんでした。

以前のバージョンからアップグレードする場合、既存のマッピングが機能するためには Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。

ポート対ポートのデータ変換

バージョン 9.6.0 では、データ統合サービスはトランスフォーメーション間のポート対ポート変換を実行するため、トランスフォーメーション言語の変換機能を使用します。データ統合サービスはデータタイプの異なるポート間でデータを転送するときにポート対ポート変換を実行します。転送するデータが変換データタイプに対して有効でない場合、トランスフォーメーション行エラーが発生します。

以前は、データ統合サービスはポート対ポート変換にトランスフォーメーション機能を使用していませんでした。データ統合サービスは個別のアルゴリズムを使用していました。変換データタイプに対して有効でないデータを含むデータを転送した場合、データ統合サービスはその値を削除し、代替値を使用していました。

ポート対ポート変換を使用するアップグレードされたマッピングでは、異なる出力データが生成される場合があります。例えば、以前のバージョンのマッピングでは次の出力が生成されました:

```
"0.377777","0.527777","0.000000","0.250000","0.000000","0.377777","0.250000"
```

アップグレード後、一部のマッピングでは次の出力が生成される場合があります:

```
"0.377777","0.527777","0","0.25","0","0.377777","0.25"
```

プロファイル結果の確認

バージョン 9.6.0 では、Developer ツールで複数のカラムに関するデータドメイン検出結果を確認できます。プロファイル結果を確認する際、Developer ツールによってデータソースのすべての行に対してプロファイルが実行されます。

以前は、1 つのカラムのデータドメイン検出結果を確認していました。

参照テーブル

以下の変更がバージョン 9.6.0 の参照テーブルに適用されます。

- バージョン 9.6.0 では、Developer ツールで参照テーブルの中からデータ値を検索するときにワイルドカードを使用することができます。参照テーブルの中からデータ値を検索するとき、Developer ツールでは大文字小文字の区別はありません。

以前は、Analyst ツールでワイルドカード検索および大文字小文字の区別のない検索を行っていました。

- バージョン 9.6.0 では、1 つのプロセス内の複数のマッピングが参照テーブルを読み込むときに、データ統合サービスは 1 つの参照テーブルインスタンスをメモリに保存します。

以前は、データ統合サービスはマッピングごとに参照テーブルのインスタンスを保存していました。

ルール

バージョン 9.6.0 では、Informatica Analyst でルールをプロファイルに適用するときに、複数の入力カラムを選択できます。

以前は、ルールを適用するときに 1 つの入力カラムを選択していました。

スコアカード

バージョン 9.6.0 では、スコアカードに以下の変更点があります。

- メトリックの有効な値を選択すると、選択した有効な値の割合と有効な値の合計カウントを表示できます。以前は、カラムの有効な値の合計カウントを表示できました。
- メトリックのソースデータを表示すると、**【ドリルダウン】** セクションに無効なソースデータの行がデフォルトで表示されます。以前は、デフォルトにより、有効な行が表示されていました。
- スコアカード結果では、スコアを選択し、傾向グラフの矢印をクリックして傾向グラフを表示できます。以前は、スコアを右クリックして、**【傾向グラフの表示】** オプションを選択していました。

第 12 章

Informatica Data Services (9.6.0) の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- [Java トランスフォーメーション, 202 ページ](#)
- [Microsoft SQL Server へのネイティブ接続, 202 ページ](#)
- [ポート対ポートのデータ変換, 203 ページ](#)
- [プロファイル結果の確認, 203 ページ](#)
- [ルール, 203 ページ](#)
- [スコアカード, 203 ページ](#)

Java トランスフォーメーション

バージョン 9.6.0 では、Java トランスフォーメーションの**ステートレス**詳細プロパティはネイティブ環境および Hive 環境のどちらにおいても有効です。ネイティブ環境では、データ統合サービスが複数のパーティションを使用してマッピングを処理できるように、Java トランスフォーメーションの**ステートレス**プロパティが有効になっている必要があります。

以前は、**ステートレス**プロパティは、Hive 環境のみで有効でした。ネイティブ環境でマッピングが実行されたとき、データ統合サービスはステートレスプロパティを無視していました。

Microsoft SQL Server へのネイティブ接続

バージョン 9.6.0 では、Microsoft SQL Server データベースへの Windows マシンからのネイティブ接続を設定するために、Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。

以前は、Informatica ではネイティブ接続に Microsoft OLE DB Provider を使用していたため、SQL クライアントをインストールする必要はありませんでした。

以前のバージョンからアップグレードする場合、既存のマッピングが機能するためには Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。

ポート対ポートのデータ変換

バージョン 9.6.0 では、データ統合サービスはトランスフォーメーション間のポート対ポート変換を実行するため、トランスフォーメーション言語の変換機能を使用します。データ統合サービスはデータタイプの異なるポート間でデータを転送するときにポート対ポート変換を実行します。転送するデータが変換データタイプに対して有効でない場合、トランスフォーメーション行エラーが発生します。

以前は、データ統合サービスはポート対ポート変換にトランスフォーメーション機能を使用していませんでした。データ統合サービスは個別のアルゴリズムを使用していました。変換データタイプに対して有効でないデータを含むデータを転送した場合、データ統合サービスはその値を削除し、代替値を使用していました。

ポート対ポート変換を使用するアップグレードされたマッピングでは、異なる出力データが生成される場合があります。例えば、以前のバージョンのマッピングでは次の出力が生成されました:

```
"0.377777", "0.527777", "0.000000", "0.250000", "0.000000", "0.377777", "0.250000"
```

アップグレード後、一部のマッピングでは次の出力が生成される場合があります:

```
"0.377777", "0.527777", "0", "0.25", "0", "0.377777", "0.25"
```

プロファイル結果の確認

バージョン 9.6.0 では、Developer ツールで複数のカラムに関するデータドメイン検出結果を確認できます。プロファイル結果を確認する際、Developer ツールによってデータソースのすべての行に対してプロファイルが実行されます。

以前は、1 つのカラムのデータドメイン検出結果を確認していました。

ルール

バージョン 9.6.0 では、Informatica Analyst でルールをプロファイルに適用するときに、複数の入力カラムを選択できます。

以前は、ルールを適用するときに 1 つの入力カラムを選択していました。

スコアカード

バージョン 9.6.0 では、スコアカードに以下の変更点があります。

- メトリックの有効な値を選択すると、選択した有効な値の割合と有効な値の合計カウントを表示できます。以前は、カラムの有効な値の合計カウントを表示できました。
- メトリックのソースデータを表示すると、**【ドリルダウン】** セクションに無効なソースデータの行がデフォルトで表示されます。以前は、デフォルトにより、有効な行が表示されていました。
- スコアカード結果では、スコアを選択し、傾向グラフの矢印をクリックして傾向グラフを表示できます。以前は、スコアを右クリックして、**【傾向グラフの表示】** オプションを選択していました。

第 13 章

Informatica Data Transformation (9.6.0) の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- [PowerCenter へのマッピングのエクスポート, 204 ページ](#)
- [無効な CMConfig ファイル, 204 ページ](#)

PowerCenter へのマッピングのエクスポート

データプロセッサトランスフォーメーションでマッピングを PowerCenter にエクスポートできます。

無効な CMConfig ファイル

バージョン 9.6.0 では、CMConfig.xml ファイルが無効な XML ファイルであるときにデータプロセッサトランスフォーメーションを実行することはできません。

第 14 章

Informatica ドメイン (9.6.0) の 変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- [Informatica サービス, 205 ページ](#)
- [アナリストサービス, 206 ページ](#)
- [コンテンツ管理サービス, 206 ページ](#)
- [データ統合サービス, 206 ページ](#)
- [データディレクタサービス, 206 ページ](#)
- [Test Data Manager サービス, 207 ページ](#)
- [モデルリポジトリサービス特権, 207 ページ](#)
- [ドメインセキュリティ, 207 ページ](#)
- [サポートされているプラットフォームに変更, 208 ページ](#)

Informatica サービス

バージョン 9.6.0 では、Informatica サービスに以下の変更点があります。

- Windows の場合、コマンド `infaservice.bat startup` を実行して Informatica サービスを起動すると、**ISP** コンソールウィンドウがバックグラウンドで実行されます。
以前は、`infaservice.bat startup` を実行して Informatica サービスを起動すると、ウィンドウはフォアグラウンドで表示されていました。また、サービスマネージャの起動中にエラーメッセージが表示されると、エラーメッセージはインストーラによって `catalina.out` ログファイルと `node.log` ログファイルに保存されます。
- Windows の場合、コマンドラインおよび Windows スタートメニューから Informatica サービスを起動するには、管理者権限を持つユーザーである必要があります。
以前は、Informatica サービスの起動に管理者権限は不要でした。

アナリストサービス

バージョン 9.6.0 のアナリストサービスには、以下の変更が適用されます。

- バージョン 9.6.0 では、アナリストサービスがヒューマンタスクを実行するデータ統合サービスを識別します。
以前は、データディレクタサービスがヒューマンタスクを実行するデータ統合サービスを識別していました。
- バージョン 9.6.0 では、ステージングデータベースプロパティは削除されました。
以前は、アナリストサービスはステージングデータベースプロパティを使用して例外レコードテーブルを含むデータベースを識別していました。

コンテンツ管理サービス

バージョン 9.6.0 では、コンテンツ管理サービスおよびアドレスバリデータトランスフォーメーションの最大結果カウントプロパティを設定できるようになりました。このプロパティは1つのアドレスに対してアドレスバリデータトランスフォーメーションが生成する提案アドレスの最大数を決定します。

以前のバージョンでは、アドレスバリデータトランスフォーメーションの最大結果カウントを設定していました。

データ統合サービス

バージョン 9.6.0 では、データ統合サービスジョブを別のオペレーティングシステムプロセスで実行する場合、データ統合サービスは再利用可能な DTM プロセスのプールを維持します。各ジョブはプールから選択された DTM プロセスで実行されます。1つの DTM プロセスで関連ジョブの複数の DTM インスタンスを実行できません。接続プールを設定すると、各 DTM プロセスは同じ DTM プロセスで実行されている関連ジョブに再利用できる独自の接続プールライブラリを維持します。

これまでは、データ統合サービスジョブを別のオペレーティングシステムプロセスで実行する場合、各ジョブは個別の DTM プロセスで実行されていました。1つの DTM プロセスで1つの DTM インスタンスを実行していました。ジョブを別のオペレーティングシステムプロセスで実行する場合、データ統合サービスは接続プールプロパティを無視していました。

データディレクタサービス

バージョン 9.6.0 では、データディレクタサービスは削除されました。

以前は、ヒューマンタスクを実行するデータ統合サービスを識別するためにデータディレクタサービスを設定していました。バージョン 9.6.0 でヒューマンタスクを実行するデータ統合サービスを識別するには、アナリストサービスのヒューマンタスクプロパティを設定します。

Informatica 9.6.0 アップグレードプロセスによりデータディレクタサービスがアナリストサービスに移行されます。データディレクタサービスおよびアナリストサービスを含む Informatica ドメインをアップグレードする場合、アップグレードプロセスはそれぞれのサービスに対して個別のアナリストサービスを作成します。ア

アップグレード後はドメインのアナリストサービスを保持することができます。また、必要に応じてサービスをマージすることもできます。

Test Data Manager サービス

バージョン 9.6.0 では、Test Data Management (TDM) が Informatica ドメインのサービスとして使用できるようになりました。Administrator ツールで Informatica ドメインに Test Data Manager サービス (TDM サービス) を作成し、設定することができます。ロールと特権を定義して、Test Data Management タスクを TDM サービスのカスタムロールとして実行します。Test Data Management の Web ベースのユーザーインターフェースでは、TDM サービスに関連付けられたリポジトリのデータベースコンテンツが使用されます。TDM サービスを作成するには TDM がインストールされている必要があります。また、TDM サービスのセキュリティ設定も Administrator ツールから定義します。

以前は、TDM は Informatica ドメインから独立しており、ドメインのサービスではありませんでした。

モデルリポジトリサービス特権

バージョン 9.6.0 では、モデルリポジトリサービスのプロジェクト作成特権が、プロジェクトの作成、編集、削除特権に改名されました。Analyst ツールおよび Developer ツールで次のタスクを完了するにはプロジェクトの作成、編集、削除特権が必要です。

- プロジェクトの作成。
- プロジェクトの編集。また、プロジェクトに対する書き込み権限も必要です。
- ユーザーが作成したプロジェクトの削除。また、プロジェクトに対する書き込み権限も必要です。

以前は、モデルリポジトリサービスに対するプロジェクト作成特権がある場合にプロジェクトを作成することができました。プロジェクトに対する書き込み権限がある場合にプロジェクトを編集および削除することができました。

ドメインセキュリティ

バージョン 9.6.0 では、Administrator ツールの **【ドメインの Transport Layer Security (TLS) の有効化】** オプションが **【安全な通信を有効にする】** に改名されました。 **【安全な通信を有効にする】** オプションはサービスマネージャと Informatica ドメインのすべてのサービス間の通信を安全なものとし、SSL 証明書のキーストアおよびトラストストアファイルを指定することができます。

以前は、Administrator ツールの **【ドメインの Transport Layer Security (TLS) の有効化】** オプションは PowerCenter サービスに対する安全な通信を有効化していませんでした。このオプションではデフォルトの Informatica SSL 証明書を使用していました。

サポートされているプラットフォームに変更

バージョン 9.6.0 では、32 ビット Linux および x64 の Solaris に対する Informatica のサポートがなくなりました。サポートされた 64 ビットサーバー上で Informatica 9.6.0 にアップグレードする前に、インストールをバックアップしてその 64 ビットサーバーにリストアします。Informatica 製品のアップグレードを選択する場合は、リストアされたインストールへのパスを入力します。詳細については、『Informatica アップグレードガイド』を参照してください。

第 15 章

PowerCenter (9.6.0) の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- [Microsoft SQL Server へのネイティブ接続, 209 ページ](#)
- [ODBC のソースとターゲットに対するプッシュダウンの最適化, 209 ページ](#)
- [リポジトリ接続ファイルのデフォルトの場所, 209 ページ](#)
- [リポジトリ接続ファイル, 210 ページ](#)
- [オペレーティングシステムのプロファイル用の umask の設定, 210 ページ](#)

Microsoft SQL Server へのネイティブ接続

バージョン 9.6.0 では、Microsoft SQL Server データベースへの Windows マシンからのネイティブ接続を設定するために、Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。

以前は、Informatica ではネイティブ接続に Microsoft OLE DB Provider を使用していたため、SQL クライアントをインストールする必要はありませんでした。

以前のバージョンからアップグレードする場合、既存のマッピングが機能するためには Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。

ODBC のソースとターゲットに対するプッシュダウンの最適化

バージョン 9.6.0 では、ODBC のソースとターゲットに対するプッシュダウンの最適化はサポートされません。

リポジトリ接続ファイルのデフォルトの場所

バージョン 9.6.0 では、*pmrep* は接続情報をデフォルトでホームディレクトリの *pmrep.cnx* に保存します。*INFA_REPCNX_INFO* 環境変数を設定すれば、接続情報を別のディレクトリに保存できます。

以前は、*pmrep* は接続情報を *pmrep* が開始されたディレクトリの *pmrep.cnx* に保存していました。

リポジトリ接続ファイル

バージョン 9.6.0 では、*pmrep connect* を実行するごとに、コマンドにより *pmrep.cnx* ファイルが削除されます。pmrep 接続コマンドが成功すると、コマンドは *pmrep.cnx* ファイルをリポジトリ接続情報で置き換えます。

以前は、pmrep 接続コマンドは *pmrep connect* を実行するごとに *pmrep.cnx* ファイルを削除していませんでした。

オペレーティングシステムのプロファイル用の umask の設定

バージョン 9.6.0 では、オペレーティングシステムのプロファイルの設定時に、umask を 000 に設定する必要はありません。

以前は、DTM によって書き込まれるファイルにアクセスするには、umask を 000 に設定してオペレーティングシステムのプロファイルを有効にする必要がありました。

以前のバージョンからアップグレードする場合には、umask の設定は変更されません。umask の設定はアップグレードの前または後に変更できます。例えば、umask を 077 に変更するとセキュリティを最大化できます。アップグレード後に umask の設定を変更する場合、Informatica サービスを再起動する必要があります。

第 16 章

PowerCenter Big Data Edition (9.6.0) の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- [Hadoop 環境プロパティファイル, 211 ページ](#)
- [ネイティブ環境でのマッピング, 211 ページ](#)

Hadoop 環境プロパティファイル

バージョン 9.6.0 では、Hadoop 環境プロパティファイル `hadoopEnv.properties` は次のパスにあります。
`<InformaticaInstallationDir>/services/shared/hadoop/<Hadoop_distribution_name>/infaConf`

ネイティブ環境でのマッピング

バージョン 9.6.0 では、データ統合サービスを有効にして、ネイティブ環境でマッピング実行時の並列処理を最大化することができます。並列処理を最大化すると、データ統合サービスは複数のパーティションを使用してマッピングを処理できます。デフォルトでは、各マッピングの最大並列処理値は Auto になっています。そのため、各マッピングはデータ統合サービスプロセスに設定された最大並列処理値を使用します。

以前は、データ統合サービスを有効にして、ネイティブ環境で複数のパーティションを使用してマッピングを処理することはできませんでした。デフォルトでは、アップグレードされた各マッピングの最大並列処理値は 1 になっています。そのため、アップグレードされたマッピングのパーティショニングは無効になっています。

第 17 章

Metadata Manager (9.6.0) の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- [ブラウザサポート, 212 ページ](#)
- [Metadata Manager Agent, 212 ページ](#)
- [Metadata Manager ビジネス用語集, 213 ページ](#)
- [Metadata Manager ドキュメント, 213 ページ](#)
- [mmcmd の変更内容, 213 ページ](#)
- [Microsoft SQL Server へのネイティブ接続, 214 ページ](#)
- [リソースのパスワード変更, 215 ページ](#)

ブラウザサポート

バージョン 9.6.0 では、Metadata Manager アプリケーションは次の Web ブラウザで実行できます。

- Google Chrome
- Microsoft Internet Explorer

以前は、Metadata Manager アプリケーションは次の Web ブラウザで実行できました。

- Microsoft Internet Explorer
- Mozilla Firefox

Metadata Manager Agent

バージョン 9.6.0 では、次のメタデータソースタイプに対して個別に Metadata Manager Agent をインストールする必要がなくなりました。

- Cognos
- Oracle Business Intelligence Enterprise Edition
- Sybase PowerDesigner

以前は、これらのソースからメタデータを抽出するためには Metadata Manager Agent を個別にインストールする必要がありました。

Metadata Manager ビジネス用語集

バージョン 9.6.0 では、Metadata Manager ビジネス用語集は非推奨となり、Informatica Analyst ビジネス用語集に代わりました。

以前のバージョンの Metadata Manager で作成した Metadata Manager ビジネス用語集がある場合は、バージョン 9.6.0 にアップグレードする前に以前のバージョンの Metadata Manager から用語集をエクスポートする必要があります。アップグレードした後、用語集を Informatica Analyst にインポートすることができます。Informatica Analyst ビジネス用語集を Metadata Manager で見るには、Metadata Manager 9.6.0 で Business Glossary リソースを作成します。

Metadata Manager ドキュメント

バージョン 9.6.0 では、『*Informatica PowerCenter Metadata Manager ビジネス用語集ガイド*』は廃止されました。

Metadata Manager で Business Glossary リソースを作成し、設定する方法について詳しくは、『*Informatica PowerCenter 9.6.0 Metadata Manager 管理者ガイド*』を参照してください。Metadata Manager で Business Glossary リソースを表示する方法について詳しくは、『*Informatica PowerCenter 9.6.0 Metadata Manager ユーザーガイド*』を参照してください。

mmcmd の変更内容

ドメインセキュリティの変更

バージョン 9.6.0 では、mmcmd にドメインセキュリティに関する次の変更が加えられています。

環境変数

mmcmd コマンドを実行するには環境変数を設定しなければならない場合があります。ドメインで Kerberos 認証を使用する場合、システム上または mmcmd バッチファイル内に KRB5_CONFIG 環境変数を設定する必要があります。安全な通信をドメインで有効にしている場合は、INFA_TRUSTSTORE 環境変数と INFA_TRUSTSTORE_PASSWORD 環境変数を mmcmd バッチファイル内に設定する必要があります。

以前は、mmcmd の環境変数を設定する必要はありませんでした。

コマンドのオプション

ドメインで認証するすべての mmcmd コマンドには Kerberos 認証に関するオプションが含まれています。ドメインで Kerberos 認証を使用する場合は、オプションを指定する必要があります。

以下の表に、コマンドのオプションを示します。

オプション	説明
--domainName (-dn)	Kerberos 認証を使用し、--gateway オプションを指定しない場合に必要です。Informatica ドメインの名前。
--gateway (-hp)	Kerberos 認証を使用し、--domainName オプションを指定しない場合に必要です。ドメインのゲートウェイノードのホスト名およびポート番号。
--keyTab (-kt)	Kerberos 認証を使用し、パスワードを指定しない場合に必要です。Metadata Manager ユーザーのキータブファイルのパスとファイル名。
--mmServiceName (-mm)	Kerberos 認証を使用する場合に必要です。Metadata Manager サービスの名前。
--namespace (-n)	ドメインで LDAP 認証または Kerberos 認証を使用する場合に必要です。ドメインでネイティブ認証が使用されている場合は任意です。Metadata Manager ユーザーが属しているセキュリティドメインの名前。
--password (-pw)	Kerberos 認証を使用しない場合に必要です。Kerberos 認証を使用し、--keyTab オプションを指定しない場合にも必要です。Metadata Manager ユーザーのパスワード。
-pcRepositoryNamespace	ドメインで LDAP 認証または Kerberos 認証を使用する場合に必要です。ドメインでネイティブ認証が使用されている場合は任意です。PowerCenter リポジトリユーザーが属しているセキュリティドメインの名前。
--securityDomain (-sdn)	ドメインで LDAP 認証または Kerberos 認証を使用する場合に必要です。ドメインでネイティブ認証が使用されている場合は任意です。Informatica ドメインユーザーが属するセキュリティドメインの名前。

Business Glossary アップグレードの変更

バージョン 9.6.0 では、ビジネス用語集のアップグレードに関連する次のコマンドが mmcmd に含まれていません。

コマンド	説明
migrateBGLinks	バージョン 9.5.x からのアップグレード後、ビジネス用語集の関連カタログオブジェクトをリストアします。

Microsoft SQL Server へのネイティブ接続

バージョン 9.6.0 では、Microsoft SQL Server データベースへの Windows マシンからのネイティブ接続を設定するために、Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。

以前は、Informatica ではネイティブ接続に Microsoft OLE DB Provider を使用していたため、SQL クライアントをインストールする必要はありませんでした。

以前のバージョンからアップグレードする場合、Microsoft SQL Server 2012 Native Client をインストールする必要があります。このクライアントをインストールして、Metadata Manager サービスが Microsoft SQL Server のデータベースに接続できるようにします。

リソースのパスワード変更

バージョン 9.6.0 では、リソースのパスワードを変更するには、リソースを編集し、**【パスワードの変更】** オプションを有効化し、**【パスワード】** フィールドに新しいパスワードを入力します。この変更によりユーザーがパスワード暴露ツールを使用してパスワードを表示するのを防ぎます。

以前は、リソースを編集し、**【パスワード】** フィールドのドットからなる文字列を選択し、新しいパスワードを入力していました。

第 18 章

Adapters for PowerCenter (9.6.0) の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- [PowerExchange for Facebook, 216 ページ](#)
- [PowerExchange for Hadoop, 216 ページ](#)
- [PowerExchange for LinkedIn, 217 ページ](#)
- [PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM, 217 ページ](#)
- [PowerExchange for SAP NetWeaver, 217 ページ](#)
- [PowerExchange for Twitter, 218 ページ](#)
- [PowerExchange for Web Services, 219 ページ](#)

PowerExchange for Facebook

バージョン 9.6.0 では、Informatica は PowerExchange for Facebook for PowerCenter を提供しません。Informatica はバージョン 9.1.0、9.5.0、および 9.5.1 に対するサポートを終了しました。バージョン 9.1.0、9.5.0、9.5.1、および hotfix バージョンからのアップグレードはできません。セッションはバージョン 9.1.0、9.5.0、9.5.1、および hotfix バージョンで失敗します。

Developer ツールにある PowerExchange for Facebook は使用できます。

詳細については、次の場所にある生産/サポート終了（EOL）に関するドキュメントを参照してください：
<https://mysupport.informatica.com/docs/DOC-10512>。

PowerExchange for Hadoop

バージョン 9.6.0 では、NameNode URI プロパティを使用して HDFS 接続を再作成する必要があります。以前は、HDFS 接続を作成するために HDFS 接続プロパティ Host Name および HDFS ポートが使用されていました。以前のリリースからアップグレードする場合は、HDFS 接続を再作成する必要があります。

HDFS 接続を設定すると、デフォルトの Hadoop ディストリビューションは Cloudera ディストリビューションとなります。以前のデフォルトは Apache ディストリビューションでした。

PowerExchange for LinkedIn

バージョン 9.6.0 では、Informatica は PowerExchange for LinkedIn for PowerCenter を提供しません。Informatica はバージョン 9.1.0、9.5.0、および 9.5.1 に対するサポートを終了しました。バージョン 9.1.0、9.5.0、9.5.1、および hotfix バージョンからのアップグレードはできません。セッションはバージョン 9.1.0、9.5.0、9.5.1、および hotfix バージョンで失敗します。

Developer ツールにある PowerExchange for LinkedIn は使用できます。

詳細については、次の場所にある生産/サポート終了（EOL）に関するドキュメントを参照してください：
<https://mysupport.informatica.com/docs/DOC-10512>。

PowerExchange for Microsoft Dynamics CRM

バージョン 9.6.0 では、Java Cryptography Extension（JCE）Unlimited Strength Jurisdiction Policy File バージョン 7 をダウンロードして使用します。

以前は、Java Cryptography Extension（JCE）Unlimited Strength Jurisdiction Policy File バージョン 6 をダウンロードして使用する必要がありました。

PowerExchange for SAP NetWeaver

バージョン 9.6.0 では、PowerExchange for SAP NetWeaver に以下の変更があります。

SAP SDK ライブラリ

PowerExchange for SAP NetWeaver では、SAP NetWeaver RFC SDK 7.20 ライブラリを使用します。PowerExchange for SAP のセッションを実行するには、SAP NetWeaver RFC SDK 7.20 ライブラリをインストールする必要があります。

以前は、SAP RFC SDK クラシックライブラリをインストールしてセッションを実行していました。

SAP 設定ファイル

sapnwrfc.ini ファイルを使用して、RFC 固有のパラメータおよび接続情報を設定できます。

以前は、saprfc.ini ファイルを使用して、RFC 固有のパラメータおよび接続情報を設定していました。

以前のバージョンからアップグレードする場合、sapnwrfc.ini ファイルを作成して、PowerCenter と SAP との間の通信を有効にする必要があります。saprfc.ini ファイルを使用して、PowerCenter と SAP との間の通信を有効にすることはできません。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for SAP 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

SAP 接続タイプパラメータ

sapnwrfc.ini ファイルで SAP 接続パラメータ TYPE を使用して接続タイプを設定する必要はありません。PowerCenter Client および PowerCenter 統合サービスは、sapnwrfc.ini ファイルで定義する接続パラメータを使用して、接続タイプを推測します。

例えば、ASHOST パラメータを設定する場合、PowerCenter Client および PowerCenter 統合サービスは特定の SAP アプリケーションサーバーへの接続を作成します。MSHOST および GROUP パラメータを設

定する場合、PowerCenter Client および PowerCenter 統合サービスは、SAP 負荷分散の接続を作成します。PROGRAM_ID、GWHOST、および GWSERV パラメータを設定する場合、PowerCenter Client および PowerCenter 統合サービスは、SAP ゲートウェイで登録された RFC サーバプログラムへの接続を作成します。

以前は、接続タイプの設定にパラメータ TYPE を使用していました。例えば、TYPE=A を設定して特定のアプリケーションサーバへの接続を作成していました。また、TYPE=B を設定して SAP 負荷分散の接続を作成し、TYPE=R を設定して SAP ゲートウェイで登録された RFC サーバプログラムへの接続を作成していました。

以前のバージョンからアップグレードする場合には、新しい sapnwrfc.ini ファイルを作成し、作成する接続のタイプに基づいて接続パラメータを設定します。

詳細については、『*Informatica PowerExchange for SAP 9.6.0 PowerCenter 用ユーザーガイド*』を参照してください。

ABAP ストリームモードセッション

PowerExchange for SAP NetWeaver は RFC プロトコルを使用して、ABAP プログラムをストリームモードで生成およびインストールします。

以前まで、PowerExchange for SAP NetWeaver は CPI-C プロトコルを使用して、ABAP プログラムをストリームモードで生成およびインストールしていました。

バージョン 9.6.0 では CPI-C プロトコルが非推奨となりました。Informatica は今後のリリースでサポートを停止する予定です。CPI-C プロトコルを使用する既存の ABAP プログラムは実行できます。ただし、CPI-C プロトコルを使用する新しい ABAP プログラムを生成およびインストールすることはできません。

CPI-C プロトコルを使用する既存の ABAP プログラムをインストールすると、プログラムを上書きして RFC プロトコルを使用するようにメッセージ表示されます。Informatica では、プログラムを上書きして RFC プロトコルを使用することをお勧めします。

BAPI マッピングと IDoc マッピング

バージョン 9.6.0 では、8.5 以前のバージョンで作成済みの廃止された BAPI マッピング、および 7.1 以前のバージョンで作成済みの廃止された IDOC マッピングのサポートを終了しました。廃止されたマッピングをバージョン 9.6.0 にアップグレードした場合、セッションは失敗します。

PowerExchange for SAP NetWeaver をアップグレードし、カスタムトランスフォーメーションを使用して BAPI および IDoc マッピングを新規作成します。

PowerExchange for Twitter

バージョン 9.6.0 では、Informatica は PowerExchange for Twitter for PowerCenter を提供しません。Informatica はバージョン 9.1.0、9.5.0、および 9.5.1 に対するサポートを終了しました。バージョン 9.1.0、9.5.0、9.5.1、および hotfix バージョンからのアップグレードはできません。セッションはバージョン 9.1.0、9.5.0、9.5.1、および hotfix バージョンで失敗します。

Developer ツールにある PowerExchange for Twitter は使用できます。

詳細については、次の場所にある生産/サポート終了（EOL）に関するドキュメントを参照してください：
<https://mysupport.informatica.com/docs/DOC-10512>。

PowerExchange for Web Services

SOAP 1.2

バージョン 9.6.0 では、各 Web サービスに SOAP 1.1 バインディングもしくは SOAP 1.2 バインディングのどちらか一方、または SOAP 1.1 と SOAP 1.2 の両方のバインディングを使用する 1 つ以上の操作を組み込むことができます。Web サービスコンシューマトランスフォーメーションは SOAP 1.1 バインディングおよび SOAP 1.2 バインディングで作成できます。SOAP リクエストは、SOAP 1.1 または SOAP 1.2 形式にできます。

以前は、SOAP 1.1 バインディングを使用する操作しか作成できませんでした。Web サービスコンシューマトランスフォーメーションは SOAP 1.1 バインディングでしか作成できませんでした。

NTLMv2

バージョン 9.6.0 では、外部 Web サービスプロバイダが NTLM v1 または NTLM v2 を使用して PowerCenter 統合サービスを認証します。

以前は、外部 Web サービスプロバイダは NTLM v1 のみを使用して PowerCenter 統合サービスを認証していました。

第 19 章

Adapters for Informatica (9.6.0) の変更内容

この章では、以下の項目について説明します。

- [PowerExchange for DataSift, 220 ページ](#)
- [PowerExchange for Facebook, 220 ページ](#)
- [PowerExchange for LinkedIn, 221 ページ](#)
- [PowerExchange for Salesforce, 221 ページ](#)
- [PowerExchange for SAP NetWeaver, 221 ページ](#)
- [PowerExchange for Twitter, 221 ページ](#)
- [PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst, 221 ページ](#)

PowerExchange for DataSift

PowerExchange for DataSift のバージョン 9.6.0 は、Informatica 9.6.0 とともにインストールされます。

以前は、PowerExchange for DataSift に別のインストーラが使用されました。

PowerExchange for Facebook

- PowerExchange for Facebook のバージョン 9.6.0 は、Informatica 9.6.0 とともにインストールされます。以前は、PowerExchange for Facebook に別のインストーラが使用されました。
- バージョン 9.6.0 では、Self リソースを使用する場合、ユーザー名、およびユーザー ID またはユーザー名のリストを指定してユーザーのプロファイルを抽出することができます。以前は、Self リソースを使用する場合、ユーザー ID か Facebook の演算子 me を指定して現在のユーザーのプロファイルを抽出することしかできませんでした。
- バージョン 9.6.0 では、Profile Feed リソースを使用する場合、ユーザー名を指定してニュースフィードまたはユーザーの Facebook 投稿を抽出することができます。以前は、Profile Feed リソースを使用する場合、ユーザー ID か Facebook の演算子 me を指定して現在のユーザーのニュースフィードを抽出することしかできませんでした。

PowerExchange for LinkedIn

PowerExchange for LinkedIn のバージョン 9.6.0 は、Informatica 9.6.0 とともにインストールされます。
以前は、PowerExchange for LinkedIn に別のインストーラが使用されました。

PowerExchange for Salesforce

PowerExchange for Salesforce のバージョン 9.6.0 は、Informatica 9.6.0 とともにインストールされます。
以前は、PowerExchange for Salesforce に別のインストーラが使用されました。

PowerExchange for SAP NetWeaver

バージョン 9.6.0 では、PowerExchange for SAP NetWeaver で SAP NetWeaver RFC SDK 7.20 ライブラリが使用されます。PowerExchange for SAP のセッションを実行するには、SAP NetWeaver RFC SDK 7.20 ライブラリをインストールする必要があります。
以前は、SAP RFC SDK クラシックライブラリをインストールしてセッションを実行していました。

PowerExchange for Twitter

- バージョン 9.6.0 では、Twitter ストリーミング接続の作成中に基本認証を使用できません。
以前は、Twitter ストリーミング接続の作成中に基本認証を使用できました。
- PowerExchange for Twitter のバージョン 9.6.0 は、Informatica 9.6.0 とともにインストールされます。
以前は、PowerExchange for Twitter に別のインストーラが使用されました。

PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst

PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst のバージョン 9.6.0 は、Informatica 9.6.0 とともにインストールされます。
以前は、PowerExchange for Web Content-Kapow Katalyst に別のインストーラが使用されました。